

ISSN 2434-513X

東アジア日本学研究

第 3 号

Japanese Studies in East Asia

No.3

東アジア日本学研究学会

The Society of Japanese Studies in East Asia

2020 年 3 月 20 日発行

卷頭言

『東アジア日本学研究』第3号をお届けいたします。この春季号は、前年の学術大会での研究発表をもとに発表者から投稿いただいた論文集です。

昨年秋の学術大会は、崔光準会員（新羅大学教授）のご協力を得て、韓国釜山の新羅大学で開催いたしました。本学会の前身の学術シンポジウムも含めて、中国以外での開催は初めての試みだったので参加者の確保や事務連絡などがうまくいくかどうか心配な面もあったのですが、参加者は例年より多少少なかったものの、各部会ともそれぞれに活発な議論が行われ、成功裏に終えることができました。会員の皆さま方のご理解とご協力の賜物だと感謝しています。

今回の第3号も、若手研究者を中心として、多彩な視点と方法論をもって、日本の言語・文化・社会を分析した内容となっています。それぞれの論文をお読みいただき、国際日本学の多様性と可能性を味わっていただきたいと思います。

ところで最近、新型コロナウィルスが予期せぬ世界的広がりをみせています。とくに、日本・中国・韓国を中心とした東アジアにおける広がりは、社会・経済の活動に大きな支障をきたすほどの事態になっています。その背景には、今回のウイルスの、見えないよう感染するという特殊性もあると思われるのですが、一方では、グローバル化の負の側面が露呈したともいえるのではないでしょうか。

そのような事態を踏まえ、本学会においても今後、グローバル化とは何なのか、グローバル化が何をもたらすのかといった問題について、改めて考えてみる必要があるのではないかでしょうか。今後、そのような視点からの研究成果があらわれることを期待しています。

ともあれ、会員の皆さま方におかれましては、くれぐれも健康に気を付けられて研究生活を送っていただきたいと思います。

東アジア日本学研究学会

会長 安達義弘

目 次

卷頭言	安達義弘(東アジア日本学研究学会会長)	1
-----	---------------------	---

【寄稿論文】

杉村泰	日本語の文法を見るための二つの指標 —許容度と選択率—	5
趙大夏	韓国における日本語教育の現状と課題	19
李東哲	改革開放以降の中国高等教育における日本語教育の歩みと問題点 —延辺大学日本語学科を例として—	33

【論文】

橋本恵子	短期大学生による為政者の歴史的演説に対する印象評価	47
劉赫洋	日本語における一字漢語動詞に関する考察 —「音訓流通」漢字を中心として—	55
楊馳	近代二字漢語動詞の由来と定着 —「遺伝」を例として—	65
陳秀茵	ベトナム人日本語学習者への漢字教育に関する研究の現状と課題 —今後の研究の方向性と可能性—	75
杉村泰	〈起点〉を表す格助詞「を」と「から」の選択について —三種類のアンケート調査の結果から—	85
崔小萍	日本語の「～でも～でも」構文と「～も～も」構文の選択 —日本人母語話者と中国人学習者の比較—	95
楊明	疑似疑問表現文末型“是不是”構文の有標疑問用法について —その日本語訳との対照を兼ねて—	105
王雋	中国語を母語とする日本語学習者の多義的基本動詞の習得に関する実 証研究 —認知言語学の視点から—	113
李成愛	論文における主張をまとめる文末表現の使用実態について —日本語母語話者と中国人日本語学習者の比較—	121
楊昕	明治後期中国語教材に於ける受け身文について —『註釋日清語學金針』と『京話萃選』を中心として—	131
朴天弘・宋天鴻	日本語の「ハズダ」と中国語の「应该」の中心的機能からの対照研究	141
菅陽子	問う力を育む日本語教育の試みとその存立基盤に関する一考察 —国際会計政策大学院(東北大学)での実践を事例として—	151

良永朋実	複言語話者が持つ日本語を「話す」ことに対するビリーフ —日本で日本語を学ぶ4名を対象としたケーススタディー	161
王瀚瑩・李光赫	蓋然性を表すモダリティ表現の中国語訳の傾向について —カモシレナイを中心に—	171
李先瑞	与謝野晶子の女性解放思想の内核と意義	179
池孝民	玄相允の日本留学時代の創作活動について	189
陳曉芝	坂口安吾『夜長姫と耳男』論 —呪いの仕組みを中心に—	199
周堂波	近代中日庭園の交響 —後藤朝太郎と重森三玲—	207
金珽実	清末新政時期における河南の教育と日本語	215

【研究ノート】

飯嶋美知子	日本語能力試験の公式問題集の分析 —初級レベルの語彙、漢字を中心に—	225
末延麻子	中国語を母語とする日本語学習者の発音習得に関わる個人要因について	235
張琦	コーパスに見られる感謝表現の日中対照分析 —ストラテジーと機能を中心に—	245
李雄傑	コーパスの用例からみる日中同形二字漢語「人気」と“人气”的使用現状	255

学会役員	265
学会動向 李東哲(東アジア日本学研究学会副会長)	265
東アジア日本学研究学会会則	267
『東アジア日本学研究』投稿要領	270
『東アジア日本学研究』執筆要領	272
『東アジア日本学研究』査読要領	273
編集後記	275
後書き 安達義弘(東アジア日本学研究学会会長)	276

日本語の文法を見るための二つの指標 —許容度と選択率—

杉村 泰（名古屋大学）

要旨

文法研究において「許容度」と「選択率」の二つの指標を組み合わせると、「ええそうだけど言わない」のような詳細な文法記述が可能となる。本発表では①「～てならない」、「～てたまらない」、「～てしかたがない」の選択、②指示詞「こ」「そ」「あ」の選択、③自動詞、他動詞、受身の選択の3つの事例を取り上げ、その有効性について論じる。

キーワード： 許容度、選択率、「～てならない」、指示詞、自他動詞

はじめに

文法研究において「許容度」と「選択率」の二つの指標を組み合わせると、「自然に言える」、「ええそうだけど言わない」、「言いにくいけど言う」、「全く言えない」といった詳細な文法記述ができる。本稿では①「～てならない」、「～てたまらない」、「～てしかたがない」の選択、②指示詞「こ」「そ」「あ」の選択、③自動詞、他動詞、受身の選択の3つの事例を取り上げ、文法研究において「許容度」と「選択率」の二つの指標を組み合わせるのが有効であることを主張する。

I. 「～てならない」、「～てたまらない」、「～てしかたがない」の選択

本節では、動詞や形容詞に後接して当該事態の程度が甚だしく高いことを表す日本語の「～てならない」、「～てたまらない」、「～てしかたがない」の選択について論じる。

1. 先行研究

グループ・ジャマシイ（1998）では「～てならない」、「～てたまらない」、「～てしかたがない」について以下のように記述されている。しかし、これだけでは3語の違いは不明確で、具体的にどのような語が付くかを示すことが必要である。

「～てならない」

自然にある感情や感覚が起こってきて自分ではコントロールできない状態を表す。

押さえようとしても押さえられない状態で、そのためその感情の程度が非常に高いことを表す場合が多い。「…てならない」の前には感情や感覚や欲求を表す言葉が用いられ、ものの属性や評価についての言葉を用いると、不自然な文になる。（中略）「…てしかたがない」とほぼ同義だが、「…てしかたがない」とは違って、感情・感覚・欲求以外の言葉を用いるのは難しい。（p. 258）

「～てたまらない」

話し手の感情・感覚・欲求の程度が激しいことを表す。（中略）「てしかたがない」とだいたい同義。（p. 256）

「～てしかたがない」

自然に何らかの感情や感覚が起こってきて自分でコントロールできない状態を表す。押さえようとしても押さえられない状態で、そのためその感情の程度が非常に高いことを表す場合が多い。「…てしかたがない」の前には感情や感覚や欲求を表す言葉が用いられるのが普通で、ものの属性や評価についての言葉を用いると、不自然な文になる。（p. 254）

また、Makino and Tsutsui (1995) やグループ・ジャマシイ (1998) には次の例が「～てならない」の典型例として挙げられている。しかし、筆者の語感では例(1)は「暑くてたまらない」の方が言いやすく、例(2)と例(3)は「気になってしかたがない」の方が言いやすいと感じられる。

- (1) 東京の夏は暑くてならない。（Makino and Tsutsui 1995）
- (2) 一人住んでいる母親のことが気になってならない。（Makino and Tsutsui 1995）
- (3) きのうの英語の試験の結果が気になってならない。（グループ・ジャマシイ 1998）

そのため、単に「言える／言えない」の2分類ではなく、「どれくらい言いやすい／言いにくいくらい」のかを明らかにする必要がある。そこで本節では「許容度調査」と「選択率調査」を組み合わせることにより、「～てならない」、「～てたまらない」、「～てしかたがない」の選択がより明確に示せることを指摘する¹⁾。

2. 許容度調査（○×テスト）

まず許容度調査について見る。これは当該の表現が言おうと思えば言えるかどうかを見るもので、72語の動詞または形容詞と「～てならない」、「～てたまらない」、「～てしかたがない」それぞれとの結合について、言えると思う人の割合を調べたものである。

アンケート調査1 (○×式) = 許容度の調査 (各 72 間)

質問 次の表現が正しいと思う場合は○を、正しくないと思う場合は×を入れて下さい。

(例) () 諦めてならない

被験者：名古屋大学の日本人学生（2004.11.18～2005.7.13 実施）

「～てならない」58人、「～てたまらない」50人、「～てしかたがない」50人

アンケート調査の結果、表1～表3の許容度を得た。これにより、「～てならない」は「気がする」、「思える」など自然にある思いがこみ上げてくることを表す語での許容度が高く、「～てたまらない」は「寂しい」、「暑い」など精神的・身体的な刺激を表す語での許容度が高く、「～てしかたがない」は「気になる」、「腹が立つ」など自然に湧き起こる生理的な感情や感覚を表す語での許容度が高いことが分かる。ここで「暑くてならない」の許容度は67.2%、「気になってならない」は77.6%となっており、「暑くてたまらない」の98.0%や「気になって仕方がない」の100%よりは低いものの、文法的に間違いであるとも言えない。そこで次に選択率調査によって実際に使うかどうかを見る。

表1 「～てならない」の許容度上位10語 (%)

	な	た	し
気がして	91.4	86.0	80.0
思えて	89.7	66.0	88.0
寂しくて	84.5	98.0	90.0
残念で	84.5	76.0	86.0
喉が渴いて	81.0	96.0	94.0
嫌で	81.0	96.0	76.0
うるさくて	81.0	96.0	88.0
気になって	77.6	92.0	100.0
腹が立って	77.6	88.0	98.0
笑えて	77.6	74.0	80.0

表2 「～てたまらない」の許容度上位10語 (%)

	な	た	し
寂しくて	84.5	98.0	90.0
暑くて	67.2	98.0	84.0
寒くて	69.0	96.0	86.0
痛くて	65.5	96.0	84.0
うるさくて	81.0	96.0	88.0
喉が渴いて	81.0	96.0	94.0
嫌で	81.0	96.0	76.0
苦しくて	67.2	94.0	80.0
うれしくて	69.0	92.0	92.0
気になって	77.6	92.0	100.0

表3 「～てしかたがない」の許容度上位10語 (%)

	な	た	し
気になって	77.6	92.0	100.0
腹が立って	77.6	88.0	98.0
喉が渴いて	81.0	96.0	94.0
うれしくて	69.0	92.0	92.0
寂しくて	84.5	98.0	90.0
思えて	89.7	66.0	88.0
うるさくて	81.0	96.0	88.0
腹が減って	56.9	92.0	86.0
残念で	84.5	76.0	86.0
寒くて	69.0	96.0	86.0

3. 選択率調査（選択テスト）

次に選択率調査について見る。これは当該の表現のうちどれが一番適切かを見るもので、先の72語と「～てならない」、「～てたまらない」、「～てしかたがない」の結合について、当該の表現を選択した人の割合を調べたものである。

アンケート調査 2 (四者択一式) =選択率の調査 (72 問)

質問 次の括弧の中に「ならない」、「たまらない」、「しかたがない」のうち、最もふさわしいと思うもの一つを入れて下さい。

(口頭で「どれも当てはまらない場合は×を入れて下さい」と言った。)

(例) 諦めて ()

被験者：名古屋大学の日本人学生 50 人 (2006. 6. 22 実施)

アンケート調査の結果、表 4～表 7 の許容度を得た。これにより、「～てならない」、「～てたまらない」、「～てしかたがない」とも一つに集中しやすいものとそうでないものが明らかとなった。

表 4 「～てならない」の選択率上位 10 語 (%)

	な	た	し	×
思えて	88.0	4.0	6.0	2.0
気がして	88.0	10.0	10.0	0.0
思われて	66.0	10.0	20.0	4.0
考えられて	66.0	4.0	12.0	18.0
想像されて	64.0	14.0	18.0	4.0
案じられて	62.0	8.0	24.0	6.0
感じられて	62.0	12.0	22.0	4.0
残念で	62.0	14.0	24.0	0.0
聞こえて	52.0	16.0	16.0	16.0
見えて	52.0	12.0	26.0	10.0

表 5 「～てたまらない」の選択率上位 10 語 (%)

	な	た	し	×
辛(から)くて	6.0	72.0	16.0	6.0
寒くて	10.0	70.0	18.0	2.0
暑くて	10.0	68.0	22.0	0.0
痛くて	10.0	68.0	20.0	2.0
恐くて	18.0	68.0	14.0	0.0
まずくて	8.0	68.0	24.0	0.0
苦しくて	18.0	64.0	18.0	0.0
冷たくて	16.0	62.0	14.0	8.0
物価が高くて	2.0	60.0	24.0	14.0
寂しくて	16.0	58.0	26.0	0.0

表 6 「～てしかたがない」の選択率上位 10 語 (%)

	な	た	し	×
気になって	20.0	18.0	62.0	0.0
焦って	30.0	10.0	50.0	10.0
喉が渇いて	20.0	30.0	50.0	0.0
腹が立って	38.0	12.0	50.0	0.0
楽しくて	18.0	32.0	50.0	0.0
泣けて	26.0	26.0	42.0	6.0
腹が減って	16.0	42.0	42.0	0.0
間違われて	24.0	12.0	42.0	22.0
笑えて	42.0	16.0	42.0	0.0
におって	26.0	24.0	40.0	10.0

表 7 「×」の選択率上位 10 語 (%)

	な	た	し	×
寝て	4.0	6.0	10.0	80.0
食べて	4.0	10.0	10.0	76.0
見て	10.0	10.0	4.0	76.0
聞いて	6.0	16.0	4.0	74.0
赤くて	6.0	18.0	10.0	66.0
忘れて	18.0	0.0	20.0	62.0
起こって	4.0	4.0	34.0	58.0
諦めて	16.0	4.0	24.0	56.0
元気で	10.0	10.0	24.0	56.0
泣いて	2.0	6.0	38.0	54.0

4. 許容度と選択率の相関

以上の許容度調査と選択率調査の結果を組み合わせると、図 1 のように「文法的に正しく、実際に言う」、「文法的に正しいけど、あまり言わない」、「文法的に不自然で、実際に言わない」、「文法的に不自然だけど言う」という違いを示すことができる。

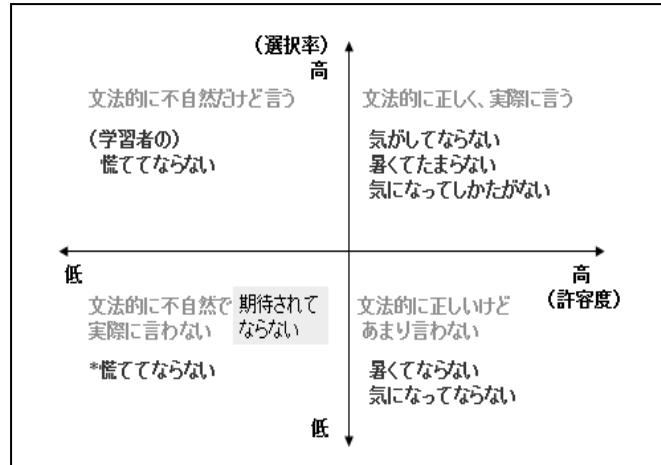


図1 許容度と選択率の相関図

II. 指示詞「こ」「そ」「あ」の選択

本節では日本語の現場指示を表す「こ」「そ」「あ」の選択について論じる。

1. 先行研究

李 (2010) は三者択一テストを利用して、日本語と韓国語の近称 (コ、〇丨)、中称 (ソ、ユ)、遠称 (ア、자) の選択傾向について論じている。その結果、テレビの中の人物を指す場合に日本語に比べ韓国語の方が遠称の選択率がかなり高いことなどを指摘している。これを受け、本稿では「許容度調査」と「選択率調査」を組み合わせることにより、日本語の「こ」「そ」「あ」における許容意識と実際の選択率の関係について見る²⁾。

2. 許容度調査 (〇×テスト)

まず許容度調査について見る。これは「こ」「そ」「あ」それぞれの許容意識を見るものである。調査の概要は次のとおりである。アンケートでは状況を示す図を付した。

アンケート調査1 (〇×式) = 許容度の調査 (各 32 問)

質問 AとBは隣同士並んで話をしています。次の各会話の「この」(その、あの)の使い方が正しいと思えば〇、不自然だと思えば×を()の中に記入してください。

(例) [友達の部屋で新品のテレビを見つけて]

() A: このテレビ、どこで買ったの?



被験者: 名古屋大学の日本人学生 (2017. 10. 3~10. 21 実施)

「この」120 人、「その」124 人、「あの」125 人

3. 選択率調査 (選択テスト)

次に選択率調査について見る。これは「こ」「そ」「あ」のうちどれが一番適切かを見る

ものである。調査の概要は次のとおりである。これもアンケートで状況を示す図を付した。

アンケート調査2 (三者択一式) =選択率の調査 (32問)

質問 AとBは隣同士並んで話をしています。次の各会話の「この」「その」「あの」のうち、最も適当なものを1つ選んで○で囲んでください。

(例) [友達の部屋で新品のテレビを見つけて]

A : (この、その、あの) テレビ、どこで買ったの?



(※このアンケートではAの場合のみ見て、Bに関しては見なかった。)

被験者：名古屋大学の日本人学生 121人 (2017.4.11～5.19 実施)

4. 許容度と選択率の相関

本稿では全32問のうち以下の5問について見ていく。

(1) テレビ本体を指す場合

下の絵のような6畳ほどの部屋でテレビ本体を指す場合、三者択一テストにおいて、第一話者(以下A)も第二話者(以下B)も「こ」の選択率は約70%、「そ」が約25%、「あ」が約5%となっている(図2-1)。一方、○×テストにおいて、Aは「こ」の許容度が約100%、「そ」が約70%、「あ」が約50%となっている(図2-2)。ここで注目したいのは、「あ」の選択率は約5%しかないのに、許容度は約50%もある点である。このことから、この場合に「あ」は「言おうと思えば言えなくもないが、実際には選択しにくい表現」であることが分かる。



図2-1. [友達の部屋で新品のテレビを見つけて]

A: (この、その、あの) テレビ、どこで買ったの?
B: (この、その、あの) テレビは秋葉原で買ったんだよ。

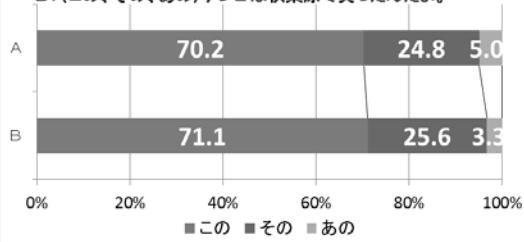
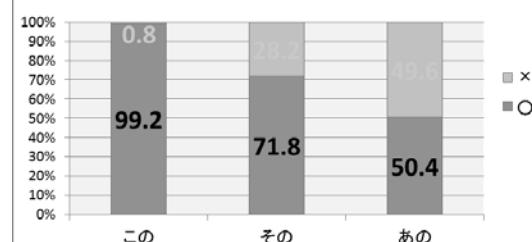


図2-2. [友達の部屋で新品のテレビを見つけて]

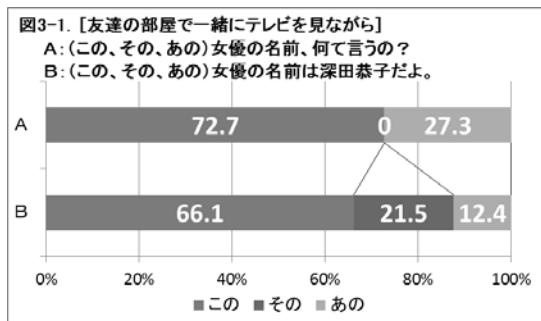
A: (この、その、あの) テレビ、どこで買ったの?



(2) テレビの中の人物を指す場合

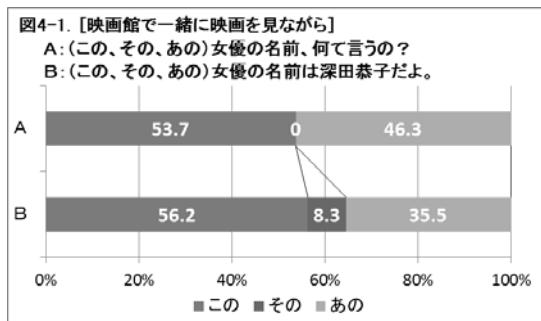
下の絵のようなテレビの中の人物を指す場合、物理的な距離はテレビ本体を指す場合と同じである。しかし、三者択一テストにおいて、Aの選択率は「こ」が72.7%、「あ」が27.3%であるのに対し、「そ」は0%である点で大きな違いがある(図3-1)。この場合、○×テストにおいて、Aの許容度は「こ」が95.8%、「あ」が76.8%であるのに対し、「そ」は13.7%しかない(図3-2)。これはテレビの中の人物を指す場合、テレビのストーリーの中に入り込んで登場人物を近くに感じれば「こ」を選択し、登場人物をテレビの

向こう側の世界にいるものとして遠く感じれば「あ」を選択するが、その中間の「そ」は意識されにくいことを示している。この場合の「こ」はストーリーの中で指示対象を指すため、現場指示と文脈指示の両方にまたがった表現となっており、日本語では³⁾「あ」よりも「こ」の方が許容度も選択率も高くなっている。一方、Bの選択率は「そ」も21.5%ある（図3-1）。これは「あなたの言うその女優」という意味の文脈指示で使われたものであると考えられる。



(3) 映画のスクリーンの中の人物を指す場合

次に下の絵のような映画館のスクリーン中の人物を指す場合について見る。この場合、テレビの中の人物を指す場合に比べて「あ」の選択率も許容度も高い（図4-1、図4-2）。このように話し手と指示対象との距離が遠くなれば「あ」のイメージが強くなるが、それでも日本語では「こ」のイメージもかなり強い。李（2010）でも指摘されているように、画面中の人物を指す場合、日本語では韓国語と違って遠くにある指示対象でも「こ」が選択されやすい。ただし、画面までの距離が遠くなると、相対的に「あ」のイメージが強くなることも指摘しておきたい。



(4) 通りの向かいのビルの大型スクリーンの中の人物を指す場合

次に下の絵のような通りの向かいのビルの大型スクリーンの中の人物を指す場合について見る。この場合、映画館の場合に比べて「あ」の選択率や許容度が高く、「こ」は低くなっている（図5-1、図5-2）。これは通りがけに画面を少し見るだけで、映画のようにはストーリーの中に入り込みにくいためであると考えられる。ただし、Aにおいて「こ」の

選択率は1.7%しかないものの許容度は39.2%もある点に注目したい。これは「こ」でも言おうと思えば全然言えないわけではないけど、「あ」の許容度の方が99.2%と圧倒的に高いため、それに引きずられて選択率も「あ」が98.3%と高くなっていると考えられる。



図5-1. [通りの向かいのビルの大型スクリーンを見て]

A: (この、その、あの)俳優の名前、何て言うの?
B: (この、その、あの)俳優の名前は櫻井翔だよ。

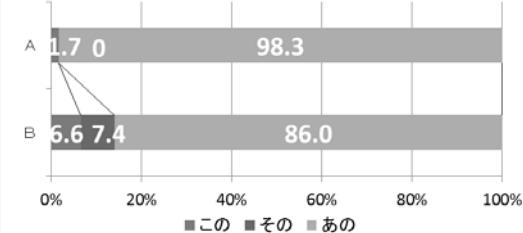
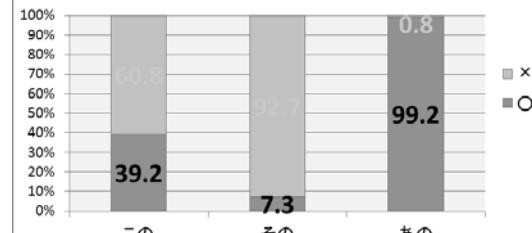


図5-2. [通りの向かいのビルの大型スクリーンを見て]

A: (この、その、あの)俳優の名前、何て言うの?



(5) ビルの窓から向かいのビルの大型スクリーンの中の人物を指す場合

最後に下の絵のようなビルの窓から見た向かいの大型スクリーンの中の人物を指す場合について見る。この場合、通りから見た場合と比べ、選択率はあまり変わらないが、Aの許容度は「こ」が18.3%と半分以下になっている点で特徴がある(図6-1、図6-2)。これはビルの窓から見た場合は臨時に見たというイメージが強く、ストーリーの中に入り込みにくいためであると考えられる。



図6-1. [ビルの窓から向かいのビルの大型スクリーンを見て]

A: (この、その、あの)俳優の名前、何て言うの?
B: (この、その、あの)俳優の名前は櫻井翔だよ。

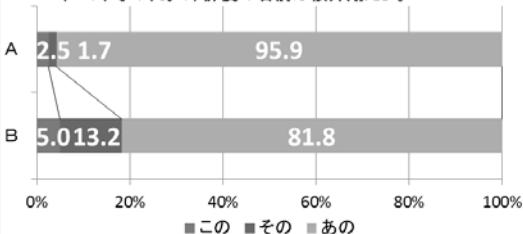
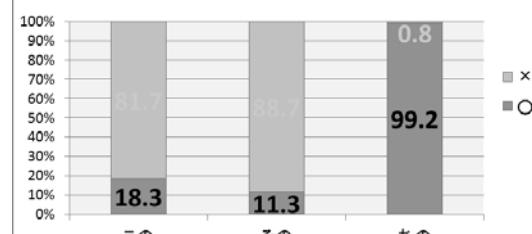


図6-2. [ビルの窓から向かいのビルの大型スクリーンを見て]

A: (この、その、あの)俳優の名前、何て言うの?



以上のことから、画面の中の人物を指す場合、物理的な距離だけでなくストーリーへの入り込み具合が「こ」の許容度や選択率の上昇に影響することが分かる。これは許容度だけ、選択率だけを見るのでは不十分で、両者を組み合わせて見ることにより明らかとなる。

III. 自動詞、他動詞、受身の選択

本節では日本語の「自動詞」、「他動詞」、「受身」の選択について論じる。

1. 先行研究

守屋（1994）は有対動詞の自動詞と他動詞の選択について考察し、日本語では人為的な事態でも自動詞を選択しやすいことを指摘している。これを受け、本稿では「許容度調査」

と「選択率調査」を組み合わせることにより、日本語の「自動詞」、「他動詞」、「受身」における許容意識と実際の選択率の関係について見る⁴⁾。

2. 許容度調査（○×テスト）

まず許容度調査について見る。これは「自動詞」、「他動詞」、「受身」それぞれの許容意識を見るものである。調査の概要は次のとおりである。

アンケート調査 1 (○×式) = 許容度の調査 (各 60 問)

質問 次の表現が正しいと思えば○を、不自然だと思えば×を（ ）の中に入れてください。

(例) () 電池が切れて時計が止まった。

被験者：名古屋大学の日本人学生 (2018. 10. 2～11. 20 実施)

「自動詞」115 人、「他動詞」116 人、「受身」115 人

(※これはまだ日本人学生のデータしかとっていない。)

3. 選択率調査（選択テスト）

次に選択率調査について見る。これは「自動詞」、「他動詞」、「受身」のうちどれが一番適切かを見るものである。調査の概要は次のとおりである。

アンケート調査 2 (三者選択式) = 選択率の調査 (60 問)

質問 括弧内の助詞と動詞のうち、最も適当なものを一つ選んで○を付けてください。

(例) 電池が切れて時計 (が止まった／を止めた／が止められた)。

被験者：名古屋大学の日本人学生 116 人 (2015. 10. 9～10. 29 実施)

韓国人日本語学習者 (N1 合格レベル) 66 人 (2015. 9. 14～9. 28 実施)

中国人日本語学習者 (N1 合格レベル) 212 人 (2015. 9. 22～12. 29 実施)

4. 許容度と選択率の相関

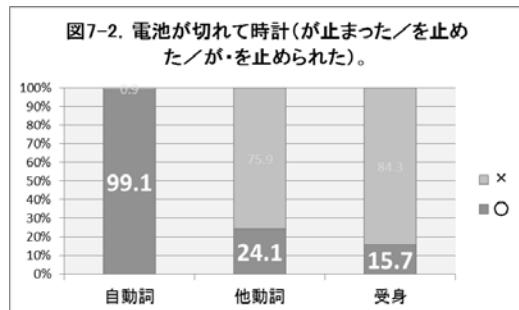
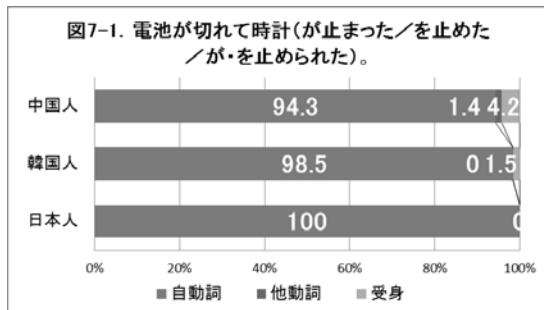
本稿では全 60 問のうち以下の 6 問について見ていく。

(1) 内発的変化の場合

内発的変化とは外力によらず時間的経過による対象の自発的変化のことである。この場合、時計が止まるのは電池切れという内的な自然現象によるため、日本人も韓国人も中国人もほぼ 100% 自動詞を選択している (図 7-1)。ここで日本人の許容度を見ると、自動詞がほぼ 100% あるだけでなく、他動詞も 24.1%、受身も 15.7% となっている (図 7-2)。このことから、この場合に他動詞や受身も全く許容できないわけではないが、自動詞の許容度の圧倒的な高さに引っ張られて、自動詞が選択されていることが分かる。

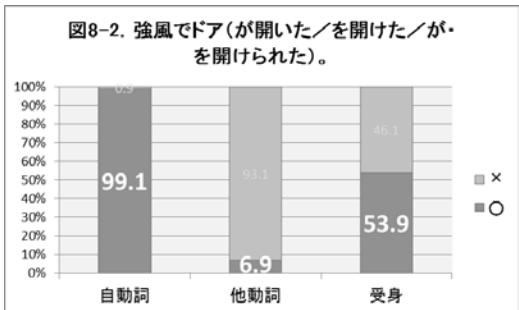
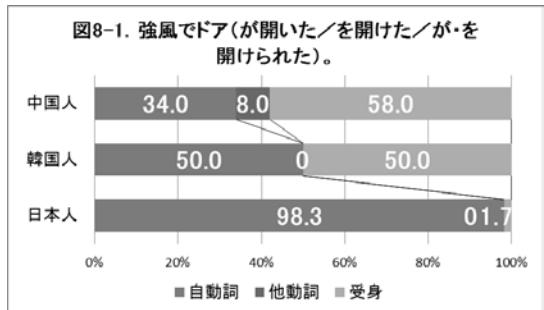
14 日本語の文法を見るための二つの指標（寄稿論文）

—許容度と選択率—



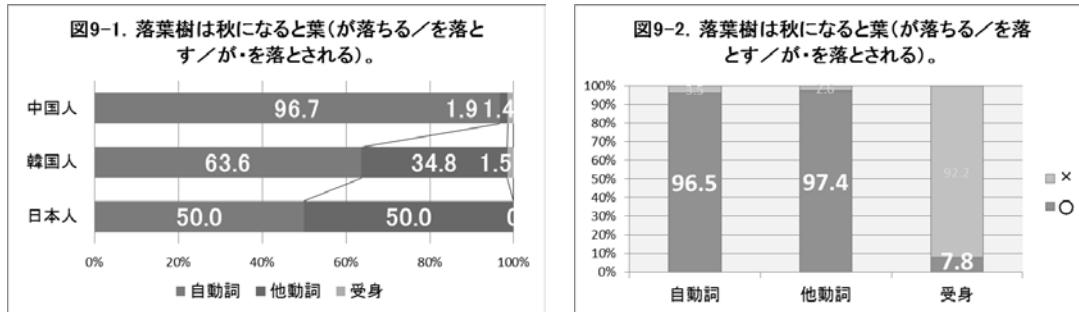
(2) 外力（自然）による作用の場合

次に同じ自然現象でも外力による作用の場合について見る。この場合、日本人は自動詞の選択率がほぼ100%であるのに対し、韓国人と中国人は自動詞だけでなく受身も選択している（図8-1）。このように日本人は(1)と同じ自然現象であることに反応してほぼ全員自動詞を選択するのに対し、韓国人と中国人は単に自然現象であると捉えて自動詞を選択する人もいれば、風による影響と捉えて受身を選択する人もいる。ここで日本人の許容度を見ると、自動詞の許容度がほぼ100%となっている点では(1)と同じであるが、受身の許容度も53.9%と(1)に比べてかなり高い点で注目される（図8-2）。これは日本人も外力による場合は受身で言えなくもないと捉えていることを示している。しかし、自動詞の許容度の高さに引っ張られて、自動詞選択に傾くのである。



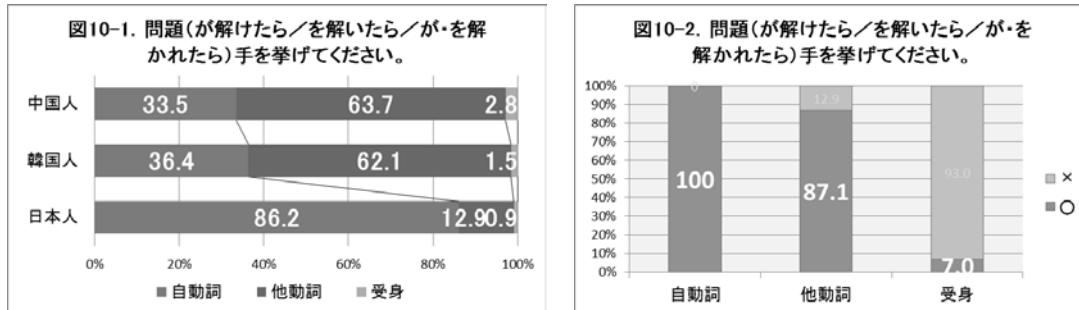
(3) 植物の自然変化の場合

次に同じ自然現象でも落葉の場合について見る。この場合、日本人は自動詞と他動詞の選択率がほぼ半々で、韓国人もほぼ2:1になるのに対し、中国人は自動詞のほぼ全員が他動詞を選択している（図9-1）。このように中国人は落葉を単なる自然現象として捉えるのに対し、日本人と韓国人は落葉を自然現象と捉えれば自動詞を選択するが、人が服を脱ぐように木が自分で葉を取り去ると捉えれば他動詞を選択する。後者の場合、擬人法として捉えられている。ここで日本人の許容度を見ると、自動詞も他動詞も許容度がほぼ100%となっている（図9-2）。自動詞も他動詞も同じぐらい許容されるため、両者の選択率が半々になっているのである。



(4) 人為的行為（対象の変化1・解答）の場合

次に人為的事態のうち対象の変化を表す場合（解答）について見る。この場合、人為的事態であるにもかかわらず日本人は自動詞の選択率が 86.2% と高い。これに対し、韓国人と中国人は自動詞と他動詞の選択率がほぼ 1:2 となっている（図 10-1）。これは韓国人と中国人は問題を解くのは人間なので、人為的行為に焦点を当てた他動詞を選択しやすいのに対し、日本人は問題を解くのは人間であっても、その思考の結果氷が溶けるように答えが流出すると捉えて自動詞を選好するためである。ここで日本人の許容度を見ると、自動詞が 100% であるものの他動詞も 87.1% と高い（図 10-2）。そのため、心の中では他動詞でも間違いではないと思っていることが分かる。しかし、日本人の場合は「考えに考えて問題を解く」のように動作主の意図性が強く表れる文脈でないと、他動詞を選択しにくいのである。

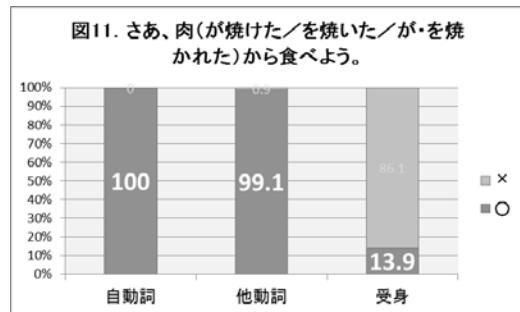
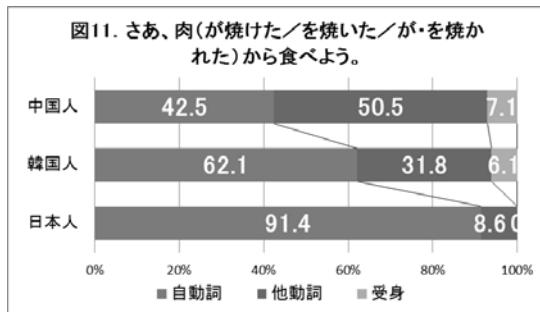


(5) 人為的行為（対象の変化2・焼肉）の場合

次に人為的事態のうち対象の変化を表す場合（焼肉）について見る。この場合も日本人は自動詞の選択率が 91.4% と高いのに対し、韓国人と中国人は自動詞も他動詞も選択している（図 11-1）。また、日本人の許容度を見ると、自動詞も他動詞もほぼ 100% となっている（図 11-2）。この場合も（4）と同様に、日本人は肉を焼くのは人間だけど、肉が火によって化学変化を起こすのは自然現象であると捉えて自動詞を選択するのである。しかし、心の中では他動詞でも間違いではないと思っており、「何か（誰か）のために肉を焼いた」という意図性が強く表れる文脈では他動詞が選択される。それに対し、韓国人や中国人はそのような文脈がなくても他動詞を選択する点で違いがある。

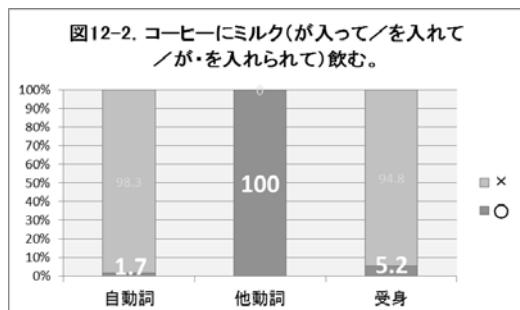
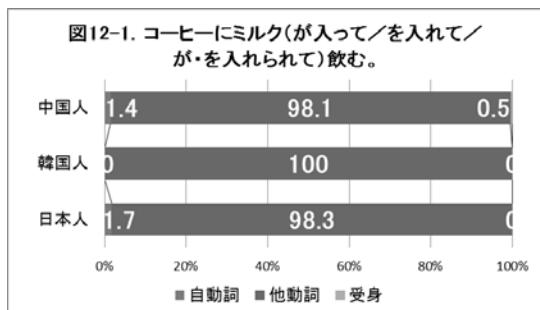
16 日本語の文法を見るための二つの指標（寄稿論文）

—許容度と選択率—



(6) 人為的行為（動作主の意図的行為）の場合

最後に動作主の意図的行為を表す場合について見る。この場合、コーヒーにミルクを入れるのは人間であり、自然作用の要素は感じられないため、日本人も韓国人も中国人もほぼ100%他動詞を選択している（図12-1）。ここで日本人の許容度を見ると、他動詞が100%で自動詞と受身はほぼ0%となっている（図12-2）。このことから、自然作用の要素が考えにくい場合には日本人も他動詞を選択し、自動詞を選択しないことが分かる。



おわりに

以上、本稿では①「～てならない」、「～てたまらない」、「～てしかたがない」の選択、②指示詞「こ」「そ」「あ」の選択、③自動詞、他動詞、受身の選択の3つの事例を取り上げ、許容度と選択率の二つの指標を組み合わせた研究が有効であることを見た。

注

- 1) 詳細は杉村（2007, 2018）参照。
- 2) 詳細は杉村（2007a-c, 2020）参照
- 3) 後者の方が許容度も選択率も高い。
- 4) 詳細は杉村（2013, 2015）参照。

参考文献

李賢淑（2010）、「現場指示使用に見られる認識の差に関する韓日対照研究—現場指示の融合型を中心に」

『日語日文學』45、大韓日語日文學會、177-196 頁。

グループ・ジャマシイ（1998）『日本語文型辞典』くろしお出版。

- 杉村泰(2007)、「～てならない」、「～てたまらない」、「～てしかたがない」の使い分け—日本語母語話者と日本語学習者の比較』『世界の日本語教育』第17号、国際交流基金、1-15頁。
- 杉村泰(2013)、「中国語話者における日本語の有対動詞の自動詞・他動詞・受身の選択について—人為的事態の場合』『日本語／日本語教育研究』4、日本語／日本語教育研究会、21-38頁。
- 杉村泰(2015)、「日・中・韓・ウズベク語話者における日本語の有対動詞の自動詞・他動詞・受身の選択』『東アジア日本語・日本文化研究』第19集 特別号、東アジア日本語日本文化研究会、pp. 1-18頁。
- 杉村泰(2017a)、「二者会話場面における日本語の「この」「その」「あの」の選択—日本語母語話者と中国人上級日本語学習者の比較—』『日本語／日本語教育研究』8、日本語／日本語教育研究会、21-36頁。
- 杉村泰(2017b)、「二者会話場面における日本語の「この」「その」「あの」の選択—日本語母語話者と中国人上級日本語学習者の比較』『日本語／日本語教育研究』[8] 2017、日本語／日本語教育研究会、ココ出版、21-36頁。
- 杉村泰(2017c)、「二者会話場面における日本語の「この」「その」「あの」の選択—日本語話者と韓国人上級日本語学習者の比較』『日本語教育』第82輯、韓国日本語教育学会、39-52頁。
- 杉村泰(2018)、「中国語話者における日本語の複合助辞「～てならない」、「～てたまらない」、「～てしかたがない」の前接語の選択』『中国語話者のための日本語教育研究』第9号、中国語話者のための日本語教育研究会、1-16頁。
- 杉村泰(2020)、「日本語の現場指示「この」「その」「あの」の選択(1) —許容度と選択率の観点から』『名古屋大学人文学研究論集』第3号、名古屋大学人文学研究科、印刷中。
- 守屋三千代(1994)、「日本語の自動詞・他動詞の選択条件—習得状況の分析を参考に」『講座日本語教育』29、早稲田大学日本語研究教育センター、151-165頁。
- Makino, Seiichi and Michio Tsutsui(1995), “A dictionary of Intermediate Japanese Grammar.” Tokyo: The Japan Times.

Two indicators used in Japanese grammar: Acceptability and Selection Rate

SUGIMURA, Yasushi

Abstract

In grammar research studies it is possible to describe grammar as “can be used, but rarely used” if two indicators, acceptability and selection rate, are combined. This presentation discusses the effectiveness of this type of description using three following cases: 1. Choice between *-te naranai*, *-te tamaranai*, *-te shikata ga nai*, 2. Choice between demonstratives *ko*, *so*, *a*, 3. Choice between intransitive, transitive, and passive voice.

Keywords : Acceptability, Selection Rate, *-te naranai*, demonstratives, (in)transitive

韓国における日本語教育の現状と課題

趙 大夏（ソウル女子大学）

要旨

韓国における日本語教育の歴史は長い。記録によると朝鮮時代に詞訳院を設置して、1414年には倭学の学習についての勅令を発したという。近代的な日本語教育は、戦後、1961年に韓国外国語大学に日本語学科が設置されてからである。1973年から正規教育課程に日本語が導入されて、高校で第2外国語として日本語を教えることになって、中学校では2001年から生活外国語として日本語を教えることになった。国際交流基金の「海外日本語教育機関調査」によると、韓国の日本語機関数・教師数・学習者数はいつも上位にランクされている。特に中等教育課程の学習者数が8割以上を占めていて、これらの学習者が成人になっても日本語学習を続けるよう取り組みが必要とされている。

最近、学習者のニーズの多様化と伴い、それぞれのニーズに応えるためには、学習者を中心の授業をデザインしなければならず、学習者の活動を優先にして、教師は学習者の活動をよく観察してから教授活動をする形が望ましい。また、情報通信技術の飛躍的発展によって、教室から離れてもモバイル機器で時空間を超越して授業が受けられる時代になり、ブレンデッドラーニングのようなオンラインとオフィラインを結合した教室環境が構築されるようになった。さらに、反転授業（Flipped Learning）によって教授-学習活動が完全に変わりつつあり、先生の役割も知識伝達の役割から授業コーディネートとしての役割に変わらなければならない時代になった。

キーワード： 日本語教育、韓国、中等教育、高等教育、教育課程

はじめに

韓国における日本語教育の歴史を辿ってみると、かつては韓国の三国時代、即ち日本の上代にあたる時期には、百濟と日本との活発な交流とともに日本語教育が行われていたと考えられる。高麗時代の忠烈王朝（1274～1298）に至ると、通訳官の養成機関である「トシムシングアン通文館」が設けられて外国語を教えていた記録がある。それが朝鮮時代には「サヨクカオン詞訳院」に継がれて、日本語を重要科目として教えていたということは、『捷解新語』（1627）、『隣語大方』（1790）、『和語類解』（1782）などの資料から裏付けられる。

これほど韓国における日本語教育の歴史は長く、日本語の教え方もどんどん発達してき

たと考えられる。

近代的な学校教育における日本語教育は、高等教育では 1961 年に韓国外国语大学校に日本語学科が設置されてからで、中等教育では 1973 年に高等学校のカリキュラムに第 2 外国語の一つとして日本語が採択されてからである。

21 世紀に入って、韓国政府は、文化交流政策の一環として、日本文化の全面的な開放政策を行った。それによって、日本語学習者数は飛躍的に増加して、2001 年度からは中学校でも第 2 外国語の選択科目として日本語を教えることになり、高等学校の第 2 外国語の 8 科目¹⁾の中で、日本語は最も学習者の多い科目になっている。

さらに、国際交流基金で実施されている「海外日本語教育機関調査」の結果によても、世界の日本語教育市場で、韓国の日本語機関数・教師数・学習者数は、いつも上位にランクされている。

本稿では、韓国における日本語教育の現状について教育段階別に考察し、それに基づいて今後の課題について述べることにする。

I. 世界における日本語教育実態

国際交流基金は、1974 年から 3 年毎に海外における日本語教育実態調査を実施している。2018 年度「日本語教育機関調査」（速報）によると、全世界の 142 の国・地域で日本語教育が実施されていて、1979 年調査からの比較では、学習者数は 30.2 倍、教師数は 18.8 倍、機関数は 16.2 倍となった。韓国を含め全世界の日本語教育機関数、教師数、学習者数の調査結果を見ると、次の〈表 1〉～〈表 5〉の通りである。²⁾

〈表 1〉 全世界の日本語教育機関数・教師数・学習者数

	2015 年	2018 年（暫定）	増減
機関数	16,179 機関	18,604 機関	+2,425 機関 (+15.0%)
教師数	64,108 人	77,128 人	+13,020 人 (+20.3%)
学習者数	3,655,024 人	3,846,773 人	+191,749 人 (+5.2%)

〈表 2〉 全世界の日本語教育機関数（上位 10 力国・地域）

2015 年度 順位	2018 年度 順位	国・地域名	2015 年度 機関数	2018 年度 機関数	増減数(人)	増減率(%)
1	1	韓国	2,862	2,998	+136	+4.8
2	2	インドネシア	2,496	2,842	+346	+13.9
3	3	中国	2,115	2,435	+320	+15.1
4	4	オーストリア	1,643	1,764	+121	+7.4
5	5	米国	1,462	1,445	-17	-1.2
6	6	台湾	851	846	-5	-0.6
12	7	ベトナム	219	818	+599	+273.5
7	8	タイ	606	659	+53	+8.7
18	9	ミャンマー	132	400	+268	+203.0
9	10	ブラジル	352	380	+28	+8.0

〈表 3〉 全世界の日本語教師数（上位 10 力国・地域）

2015 年度 順位	2018 年度 順位	国・地域名	2015 年度 機関数	2018 年度 機関数	増減数(人)	増減率(%)
1	1	中国	18,321	20,220	+1,908	+10.4
2	2	韓国	14,855	15,345	+490	+3.3
3	3	ベトナム	1,795	7,030	+5,235	+291.6
4	4	インドネシア	4,540	5,668	+1,128	+24.8
5	5	台湾	3,877	4,106	+229	+5.9
6	6	米国	3,894	4,018	+124	+3.2
12	7	オーストラリア	2,800	3,135	+335	+12.0
7	8	タイ	1,911	2,047	+136	+7.1
18	9	ミャンマー	524	1,542	+1,018	+194.3
9	10	フィリピン	721	1,298	+577	+80.0

〈表 4〉 全世界の日本語学習者数（上位 10 力国・地域）

2015 年度 順位	2018 年度 順位	国・地域名	2015 年度 機関数	2018 年度 機関数	増減数(人)	増減率(%)
1	1	中国	953,283	1,004,625	+51,342	+5.4
2	2	インドネシア	745,125	706,603	-38,522	-5.2
3	3	韓国	556,237	531,511	-24,726	-4.4
4	4	オーストラリア	357,348	405,175	+47,827	+13.4
5	5	タイ	173,817	184,962	+11,145	+6.4
6	6	ベトナム	64,863	174,461	+109,598	+169.0
12	7	台湾	220,045	170,159	-49,886	-22.7
7	8	米国	170,998	166,565	-4,433	-2.6
18	9	フィリピン	50,038	51,892	+1,854	+3.7
9	10	マレーシア	33,224	39,247	+6,023	+18.1

II. 韓国における日本語教育実態

1. 日本語学習者の現況

戦後、韓国における日本語教育が実施されはじめたのは、1961年に大学に日本語学科が設置されてからである。それが正規教育課程に日本語のカリキュラムが導入されて、高校で日本語を教えることになったのは1973年からである。まず、国際交流基金で調査した教育段階別、韓国の日本語学習者の現況を見ると、〈表5〉の通りである。

〈表5〉 韓国における教育段階別の日本語学習者数³⁾

教育段階	学習者数（人）	割合（%）
初等教育	1,160	0.2
中等教育	451,893	81.2
高等教育	51,963	9.3
その他 教育機関	51,221	9.2
合計	556,237	100.0

〈表2〉～〈表3〉における韓国の日本語教育実態によると、日本語教育機関数では1位、日本語教師数では2位、日本語学習者数では3位にランクされている。2015年度の調査に比べて、日本語教育機関数は4.8%増加し、日本語教師数は3.3%増加している。これは、第2外国語の中で、日本語学習についてのニーズが依然として高いからであると言えるであろう。

日本語学習者数だけは、2015年度に比べて4.4%減少しているが、これは韓国が少子化時代に入っていて、その影響で就学生徒の人数がどんどん減っていったためであると考えられる。特に、日本語学習者の場合は、〈表5〉に見られるように、正規教育、すなわち中等教育課程の第2外国語として日本語を学習する学習者が81.2%にも達しているので、これが日本語学習者減少の大きな原因の一つであると思われる。

高校の場合は、第2外国語は、教育課程では必須選択科目として、8外国語の中から一つを選択して教えることになっていて、その中で日本語を選択する学生が一番多い。このような日本語学習者の割合は、韓国における第2外国語政策に異変が起こらない限り、変動がないと思われる。

韓国では、毎年、大学入試に統一試験である「大学修学能力試験」が実施されていて、全ての受験生が受けることになっている。「大学修学能力試験」の問題は、高校で学ぶ科目を領域別に分けて出題する。その領域は「国語領域」「数学領域」「英語領域」「探求領域（社会・科学・職業）」「第2外国語/漢文領域」の5つに分けられていて、受験生は希望する大学の選考指針に合わせて、それぞれの領域の中から選択して試験を受ける。

2020 年度の大学修学能力試験は、2019 年 11 月 14 日に実施され、受験者は 548,734 人であった。この中で第 2 外国語を選択した受験者は、89,410 人で 16.3% である。第 2 外国語を選択した受験者の現況を見ると〈表 6〉の通りである。

〈表 6〉 2020 年度大学修学能力試験の
「第 2 外国語/漢文領域」における日本語受験者数⁴⁾

第 2 外国語 / 漢文領域	外国語区分	支援者数 (人)	比率 (%)
	ドイツ語	1,786	2.00
	フランス語	1,831	2.05
	スペイン語	2,012	2.25
	中国語	5,229	5.85
	日本語	7,858	8.79
	ロシア語	1,146	1.28
	アラビア語	63,271	70.77
	ベトナム語	2,270	2.54
漢文	4,007	4.48	
合計	89,410	100.00	

〈表 6〉を見ると、大学修学能力試験の「第 2 外国語/漢文領域」を受験した受験者数 89,410 人の中で、日本語を選択した人数は、7,858 人で 8.79% を占めている。ここで目立つのは、アラビア語を選択した受験者が 63,271 人で 70.77% にもなっていることである。現在、韓国ではアラビア語を教えている高校はほとんどない。すると、なぜこのような現象は起こるのであろうか。それは、大学修学能力試験の評価方式の問題点とも言われている。大学修学能力試験は「相対評価の等級制」で「5 脈選択の客観式テスト」になっている。アラビア語は、できる受験生がいない現状で、試験の点数を 100 点満点に換算すると、平均点数は非常に低いので、まぐれあたりに高い等級を得る可能性が高い。そこで受験生が集まっているのであると考えられる。

そのため、アラビア語を例外にすると、「第 2 外国語/漢文領域」では日本語を選択した受験生数が一番多く、この順位は、2001 年度の大学修学能力試験に第 2 外国語が導入されて以来変わっていない。

〈表 7〉は、大学修学能力試験にアラビア語が導入された 2005 年度の第 2 外国語の受験者現況である。これによると、第 2 外国語の受験者 123,193 人の中で、日本語を選択した人数は 52,682 人で 42.56% を占め、他の言語に比べてはるかに多い。

〈表 7〉 2005 年度大学修学能力試験の
「第2外国語/漢文領域」における日本語受験生数⁵⁾

第2 外国語 /漢文 領域	外国語区分	支援者数（人）	比率（%）
	ドイツ語	14,910	12.10
	フランス語	11,502	9.34
	スペイン語	1,598	1.30
	中国語	19,491	15.82
	日本語	52,682	42.56
	ロシア語	423	0.34
	アラビア語	531	0.43
	漢文	22,056	17.90
合計		123,193	100.00

2. 中等教育における日本語学習者のニーズ

中学生と高校生の日本語学習のニーズ調査⁶⁾によると、中高生は成人の学習者に比べて、統合的動機が強い傾向を表わしている。統合的動機が強いというのは、その動機が長く続く、さらに日本文化への関心が高まり、それが韓日交流にも寄与するとも言える。

〈表 8〉は、筆者が 2013 年に行われた韓国の中高生の日本語学習ニーズ調査結果の一部である。これによると、「日本語を勉強して何に活用したいのか」との質問に、「日本旅行のときに活用したい」と答えた学生は 56.6% に達していて、日本旅行へのニーズがすいぶん高いということが分かる。そこで、最近、日本に韓国人の観光客が急速に増加したこと、中・高校での日本語教育の影響が大きいと考えられる。一応、中学校と高校で日本語を習っただけで簡単な日本語会話ができるようになって、それが日本旅行に繋がっていると考えられる。

〈表 8〉 日本語学習についてのニーズ調査（学習した日本語の活用目的⁶⁾

区分	男子高生		女子高生		男子中学生		女子中学生		計	
	-人	-%	-人	-%	-人	-%	-人	-%	-人	-%
日本旅行	47	60.3	46	63.0	43	49.4	40	54.8	176	56.6
別になし	9	11.5	3	4.1	8	9.2	8	11.0	28	9.0
日本映像視聴・ゲーム	6	7.7	4	5.5	6	6.9	3	4.1	19	6.1
学校のテスト	4	5.1	3	4.1	8	9.2	3	4.1	18	5.8
日本人観光客との会話	2	2.6	5	6.8	11	12.6	12	16.4	30	9.6
授業時間	2	2.6		0.0	5	5.7	5	6.8	12	3.9
日本語の本を読む	1	1.3	3	4.1	0	0.0	1	1.4	5	1.6
インターネット検索	0	0.0	1	1.4	2	2.3	0	0.0	3	1.0
入試・就職面接	0	0.0	5	6.8	0	0.0	0	0.0	5	1.6
製品の説明書	0	0.0		0.0	0	0.0	1	1.4	1	0.3
その他	7	9.0	3	4.1	4	4.6	0	0.0	14	4.5
計	78	100	73	100	87	100	73	100	311	100

III. 韓国における教育段階別の日本語教育

中等教育課程における日本語が正規科目として導入されたのは、「第3次教育課程期(1973~1981)」である。

第7次教育課程からは、機能(function) 中心のシラバスが構成され、それまでの文型や文法中心の指導指針から意味中心やコミュニケーション中心の教育に変わってきた。

1. 中学校における日本語教育

中学校で日本語教育が実施されはじめたのは、第7次教育課程期の2001年度からで、国民共通基本教育課程の教科裁量活動として「生活外国語」が導入され、その中に「生活日本語」科目がある。2015改定教育課程には、共通教育科目の選択科目としての「生活外国語」の中に「生活日本語」科目がある。中学校における日本語教師数の現況は、〈表9〉の通りである。

〈表9〉 韓国中学校における日本語教師数⁷⁾

科目	ドイツ語	フランス語	スペイン語	中国語	日本語	ロシア語	アラビア語	ベトナム語	計
教員数(人)	44	29	5	840	506	3	0	0	1,427

中学校の「生活外国語」には、ドイツ語・フランス語・スペイン語・中国語・日本語・ロシア語・アラビア語・ベトナム語の8外国語があって、これは高等学校での第2外国語の科目数と一致している。

2018年の韓国教育部で実施された統計調査によると、中学校における第2外国語の教員数は総計1,427人で、この中で中国語の教師が840人で最も多く、次いで日本語の506人であった。ところが英語教師の12,435人に比べると十分の一しかないので、日本語だけでなく、第2外国語を担当している教員が互いに協力して、学習者を増やすことに取り組むべきであろう。

「2015改定教育課程」における『生活日本語』の内容体系は次の〈表10〉の通りである。

〈表 10〉「生活外国語」の内容体系⁸⁾

領域	核心要素	内容	技能
言語的内容	発音と文字	<ul style="list-style-type: none"> ・ひらがなとカタカナ、漢字表記 ・清・濁音、長・短音、拗音、促音、拍、抑揚 <p>*韓国語のかな表記法、外来語表記法の規定に従って表記する。</p>	
	語彙	<ul style="list-style-type: none"> ・語の基本的意味 ・語と語の結合関係 ・学習用漢字 <p>*高等学校普通教科日本語教育課程〔別表II〕に提示して基本語彙を中心に、250語内外の語彙を使う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・聞く ・聞いて分かる ・聞いて反応する ・対話する ・話す ・読む
	文法	<ul style="list-style-type: none"> ・現代日本語の文法 <p>*生活日本語に提示して意思疎通基本表現に用いられた文法内容と高等学校普通教科日本語教育課程〔別表II〕の基本語彙表に提示した文法要素内で扱う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・読んで分かる ・読んで意味を把握する ・書く ・かなど学習用の漢字を書く ・文法に合わせて書く
	意思疎通表現	<ul style="list-style-type: none"> ・挨拶、紹介、配慮および態度伝達、情報要求、行為要求、対話進行などの意思疎通機能を場面にあわせて使う。 <p>*生活日本語に提示した意思疎通基本表現を参考にする。</p>	
文化的内容	文化	<ul style="list-style-type: none"> ・日本の簡略な概観 ・言語文化 ・非言語文化 ・日常生活文化 ・大衆文化 	<ul style="list-style-type: none"> ・理解する ・表現する ・発表する ・討論する

2. 高等学校における日本語教育

前述した通りに、高校で日本語教育が始まったのは「第3次教育課程期」の1973年からである。

「2015 改定教育課程」には、選択中心の教育課程の一般進路選択科目としての「第2外国語」の中に「日本語I」と「日本語II」がある。

高等学校における日本語教師数の現況は〈表 11〉の通りである。

〈表 11〉 韓国における日本語教師数⁹⁾ (人)

区分	ドイツ語	フランス語	スペイン語	中国語	日本語	ロシア語	アラビア語	ベトナム語	計
一般高校	31	66	19	1078	1395	3	2	0	2594
自立高校	10	7	3	123	130	0	0	0	273
特殊高校	8	8	14	73	50	2	2	0	157
特化高校	1	1	0	150	291	0	0	0	443
計	50	82	36	1424	1866	5	4	0	3467

2018 年の韓国教育部で実施された統計調査によると、高等学校における第 2 外国語の教員数は総計 3,467 人で、このうち日本語教師は 1,886 人 (53.82%) で最も多く、次いで中國語で 1,424 人 (41.07%) であった。

「2015 改定教育課程」における『日本語 I』の内容体系は次の〈表 12〉の通りである。

〈表 12〉「日本語 I」の内容体系¹⁰⁾

領域	核心要素	内容	技能
言語的内容	発音と文字	<ul style="list-style-type: none"> ひらがなとカタカナ、漢字 清・濁音、長・短音、促音、拍、抑揚 <p>*韓国語のかな表記法、外来語表記法の規定に従って表記する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 聞く 聞いて分かる 聞いて反応する 話す 表現する 場面に合わせて話す 仮名と漢字を読む 読んで分かる
	語彙	<ul style="list-style-type: none"> 語の基本意味と派生意味 語と語の結合関係 慣用的表現 漢字の音読み・訓読み <p>*[別表]に提示した基本語彙を中心に、500語内外の語彙を使う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 読んで意味を把握する 書く かなと学習用の漢字を書く 文法に合わせて書く
	文法	<ul style="list-style-type: none"> 現代日本語の文法 <p>*[別表]に提示した意思疎通基本表現に用いられた文法内容と [別表]の 基本語意表に提示した文法要素内で扱う。</p>	
	意思疎通表現	<ul style="list-style-type: none"> 挨拶、紹介、配慮および態度伝達、情報要求、行為要求、対話進行など の意思疎通機能を場面にあわせて使う。 <p>*[別表]に提示した意思疎通基本表現を参考にする。</p>	
文化的な内容	文化	<ul style="list-style-type: none"> 日本の簡略な概観 言語文化 非言語文化 日常生活文化 大衆文化 <p>*上に提示した素材は、取捨選択して扱ってもいい。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 理解する 表現する 発表する 討論する

3. 大学における日本語教育

1961年に、韓国外国語大学に日本語科が設置されてから、1965年の韓日国交正常化をきっかけに、全国の大学に日本語文学科が設置されるようになり、2002年の日本文化の全面的な開放政策とともに、日本語教育は絶頂期を迎えた。社会的にも日本語の必要性が強調されて、日本語能力資格証を持っていると、社会進出に有利だという動機づけで日本語能力試験への関心も高くなり、民間教育機関での日本語学習者が増えた。

大学における日本語関連学科の数、教員数、学生者数の現況は〈表 13〉と〈表 14〉の通りである。

〈表 13〉 大学における日本語文学科数・学生数・専任教員数¹¹⁾

日本語文学科数	学生数	専任教員数
106科目	15,822人	339人

〈表 14〉 短期大学における日本語文学科数・学生数・専任教員数

日本語学科数	学生数	専任教員数
43科目	3,083人	60人

IV. 教育環境の変化と日本語教育の課題

1. 学習者中心教育と日本語教育

学習者のニーズ(needs)の多様化に伴い、単に日本語能力の向上を目標にする授業では、学習者それぞれのニーズを満たすことができない。そのため、日本語教育にも、PBL(Problem Based Learning, Project Based Learning)、TBL(Team Based Learning)などを導入して、学習者自ら日本語学習の問題点を見つけて、それを自分であるいは同僚との協業で解決していくような形の授業を運営することが要求される。

2. e-ラーニング環境と日本語教育

情報通信技術の発達とともに第4次産業革命の時代になって、教育現場にも変革の潮流が押しよせている。

情報通信技術の飛躍的発展によって、教室から離れてもパソコンやモバイル機械で時空間を超越して授業が受けられる時代になり、ブレンデッドラーニングのようなオンラインとオフィラインを結合した教室環境が構築されるようになった。さらに、反転授業(Flipped Learning)の登場は、今まで行われてきた、授業は教室、課題や活動は放課後という教授-学習活動が逆になって、授業は教室以外のサイバー空間で視聴し、教室では課題や活動を

する形に変わりつつある。いわゆる学習者主導型の教育が実践される時代になっている。先生の役割も変わって、知識伝達の役割から授業コーディネーターとしての役割に変わらなければならなくなつた。

デジタルメディアの発展は、我々の生活に大きな変革をもたらした。それから、そのデジタルメディアの発展は、言語教育にも大きな影響を与えつつある。例えば、YouTube のメディアにも膨大な日本語学習用のメディアコンテンツが載っている。さらに、日本文化、日本社会、日本旅行などについてのメディアコンテンツも数え切れないほど多い。いわゆる情報や知識が溢れている時代であって、今まで先生が苦労して制作してきた日本語教育用の教具や素材がデジタルコンテンツに変わってどんどん増えている。このような現状で日本語教師の役割も再定立する必要がある。

3. 日本語教師の役割の変化

日本語教師の役割について話すと、授業の管理、学習者の管理などが挙げられる。授業の管理の役割には、「ニーズ調査」、「コースデザイン」、「シラバス構築」、「教材と教具の紹介」などがある。この中で、コースデザインは、学習者の活動を優先に提示する形式にする必要がある。教師は学習者の活動をよく観察してから教授活動をしたほうがよい。いわゆる「反転授業(Flipped Learning)」が典型的な例である。

授業内容については、オンラインで簡単に説明して、オンライン教室では質疑応答や討論および活動を中心に行う授業が望ましい。オンライン講義では、日本語学習に役立つデジタルコンテンツなどを学習者に紹介するだけにして、学習者はそれに基づいて同僚と協力して結果を出すというような形の授業が要求されている。

第4次革命という時代の中で、教育環境の変化も激しくなってきて、日本語教育もその変化に合わせて、新しいパラダイムを構築しなければならないであろう。

注

- 1) 中等教育における第2外国語の8科目とは、「ドイツ語・フランス語・スペイン語・中国語・日本語・ロシア語・アラビア語・ベトナム語」の順である。
- 2) 国際交流基金(2018)「2018年度海外日本語教育機関調査結果」(速報値)、独立行政法人国際交流基金、4-17頁。
- 3) 国際交流基金(2017)「日本語教育国・地域別情報」韓国(2017年度)、<2019.8.20検索>
(<https://www.jpf.go.jp/project/japanese/survey/area/country/2017/korea.html>)
- 4) 韓国教育課程評価院(2019)「2020年度大学修学能力試験支援者現況」、<2019.10.10検索>
(<http://www.suneung.re.kr/main.do?s=suneung>)
- 5) 韓国教育課程評価院(2019)「2020年度大学修学能力試験支援者現況」、<2019.10.10検索>
(<http://www.suneung.re.kr/main.do?s=suneung>)

- 6) 趙大夏(2014)「韓国における日本語教育環境変化と対応方針考察」,『日語日文学研究』第88集-1号, 韓国日語日文学会, 195-200頁。
- 7) 教育部(2018)『教育統計年報』, 韓国教育開発院, 210頁。
- 8) 韓国教育課程評価員(2015)「第2外国語教育課程」教育部公示第2015-74号[別冊16], 教育部, 52頁。
- 9) 教育部(2018)『教育統計年報』, 韓国教育開発院, 319-320, 427-428, 541-542, 647-648頁。
- 10) 韓国教育課程評価員(2015)「第2外国語教育課程」教育部公示第2015-74号[別冊16], 教育部, 294-295頁。
- 11) 教育部(2018)『教育統計年報』, 韓国教育開発院, 891, 862頁。

参考文献

- 国際交流基金(2017)、『海外の日本語教育現状』(報告書), 独立行政法人国際交流基金, 7, 12-14頁。
- 教育部(2018)、『教育統計年報』, 韓国教育開発院, 210, 891, 862, 319-320, 427-428, 541-542, 647-648頁。
- 韓国教育課程評価員(2015)、『第2外国語教育課程』教育部公示第2015-74号[別冊16], 教育部, 52, 294-295。
- 韓国教育課程評価院(2019)、『2020年度大学修学能力試験支援者現況』, <2019.10.10検索>
<<http://www.suneung.re.kr/main.do?s=suneung>>
- 国際交流基金(2017)、『日本語教育国・地域別情報』韓国(2017年度), <2019.8.20検索>
<<https://www.jpf.go.jp/project/japanese/survey/area/country/2017/korea.html>>

Title Current states and assignments of Japanese education in Korea

CHO, Dai-Ha

Abstract

The history of Japanese education in Korea is long. According to historical records, in the Joseon Dynasty period, Sa-Yeok-Won was established and an imperial order about Japanese study was issued in 1414. Contemporary Japanese education began in 1961 after World War II when a Japanese language department was established at Hankuk University of Foreign Studies. In 1973, Japanese language was formally introduced into the education curriculum. Since then, Japanese has been taught in high schools. It has been taught in middle schools as an everyday foreign language since 2001. According to a survey conducted by the Overseas Japanese Language Education Institutions of Japan Foundation, the number of Japanese educating institutions, instructors, and

learners has always ranked high in Korea. 80% of those learners come from secondary education institutes; therefore, it is important to motivate them to keep studying as they advance in their education.

As learners' needs continue to diversify, classes should be learner-oriented in order to meet their requests. Learners' activities should take priority and it is desirable for instructors to observe learners' progress. Furthermore, with the rapid development of information and communication technology, students are not only able to have off-site classes by using mobile devices, but classrooms that combine online and off-line learning, such as Blended Learning, have also been established. In addition, Flipped Learning has completely changed teaching-learning activities and the roles of instructors must change from knowledge transfer to class coordinator.

Keywords : Japanese education, Korea, secondary education, higher education, curriculum

改革開放以降の中国高等教育¹⁾における日本語教育の歩みと問題点 —延辺大学日本語学科を例として—

李 東哲（新羅大学）

要旨

改革開放以降、中国における外国語教育はその規模と言い、質と言い、大きな変革と発展を成し遂げているが、日本語教育とて例外ではない。とりわけ、日本語学科が設置されている大学は改革開放前の14校から30年後の2008年には506校まで急増し、在校生は7万人を超えていているという。それに伴う教育施設、教師陣、教材開発、関連分野の研究なども以前とは比べようもなく整備されていることは言うまでもない。中国吉林省の国境地域に位している延辺大学も改革開放直後の1979年から日本語学科の学生を募集してから、日本語学科が設置されている他大学と肩を並べて40年間の歴史を刻みながら、今日に至っている。

ところが、その発展過程において内的または外的要因により、必ずしも正常な日本語教育が行われてきたとは言いにくい。とくに、学歴や学位に対する過度な重視、教師に対する不適切な評価、プロジェクトや研究についての画一の基準、学術研究への等級付けなどにより、るべきメカニズムが働かない。このような大学においてあってはならない不適切なやり方を至急改善すべきである。それで初めて健全な日本語教育が行われ得る。

キーワード： 改革開放以降、日本語教育、不正常な発展、延辺大学、日本語教師

はじめに

2018年は中国改革開放40周年、それにともなう大学入試制度回復40周年でもある。ここ40年もの間、中国の大学教育、とりわけ外国語教育は「改革」という旗印の下、紆余曲折を経ながら、その規模といい、質といい、文字通り「翻天覆地」（大変革）の変化を遂げ、今なお新たなる外国語教育方法が模索され、試みられている。

日本国際交流基金の調査によると、2015年現在世界の130か国、7地域における日本語学習者数はトータルで3,655,024人であるが、そのうち中国の日本語学習者数は953,283人でトップの地位を占めている²⁾。その中で、中国の高等教育において日本語学科が設置されている4年制大学だけでも506校、在校生数は17万人超で、中国の大学全体で400以上を数える学科別ランクで12位を占めている（宿久高2008：3）。また、日本語学科以

外に教養科目として日本語を学習している学生もかなりの数にのぼり、日本語学科の学生を含めて 625,125 人という膨大な数である（国際交流基金 2017）。この数は 2006 年現在、韓国の高等学校における日本語学習者数の 10 倍以上に達する³⁾。つまり、世界の日本語学習者全体の状況から言えば、中国日本語学習者の 6 割以上が大学の学生であるという大きな特徴をもつ。それだけに、一般民間人の日本語学習者もさることながら、学校教育、とくに大学における日本語教育は、学生募集、教師の力量、教授法、テキスト開発、日本語習得や日本語一般研究などますます重要な位置をしめるようになってきている。

半面、改革開放以来、政府主導（中国教育部）で進められている教育改革は量的にも質的にも飛躍的に発展し、目覚ましい成果を上げてはいるものの、相変わらぬ形式主義、成果主義、拝金主義の膨張、研究プロジェクトや学術誌などをはじめとする教育や教育とかかわりのあるすべての分野にわたって組織的に行われている過度のランク付けなど⁴⁾、まだまだ多くの問題をも抱えており、正常かつ健全な教育発展の妨げとなっているのは否めない事実である。

本稿では、改革開放以降の中国高等教育における日本語教育の歩みについて概観し、大学日本語学科の個別的な事例を主として、多層かつ包括的な側面から今日の中国日本語教育の問題点を取り上げて分析すると同時に今後日本語教育のあり方について考えてみたい。

I. 中国日本語教育の過去と現在

1. 改革開放前の日本語教育（前史）

中華人民共和国が成立したのは 1949 年 10 月 1 日であるが、同年に中国で日本語学科を設けていた高等教育機関は北京大学と洛陽外国語学院⁵⁾ の 2 校のみで、1954 年まで 4 年制大学日本語学科の学生を募集したのは北京大学 1 校だけである（伏泉 2013）。その後、北京外貿学院⁶⁾、外交学院などに相次いで日本語学科が設立され、文化大革命の始まる 1966 年までに日本語学科が設立された大学は 14 校にのぼっていた（伏泉 2013）。また、外国語教育機関として文化大革命前に「全国首批七所外国语学校」（全国で初めて批准された七校の外国语学校）が 1960 年代はじめに設立され⁷⁾、その一部で日本語教育が実施されたと推定されるが、確証はない。

しかし、1966 年 5 月文化大革命が始まると⁸⁾、同年学生募集が停止され、その後数年間は学生を募集しなくなり、大学はほとんど大学としての機能を喪失してしまったのである。その 4 年後の 1970 年から一部の大学でいわば「工農兵大学生」（2 年制または 3 年制）を募集し始め⁹⁾、文化大革命が終わる 1977 年まで合計 94 万人を募集したとされている。つまり、1966 年から 1976 年までの 11 年間、中国の高等教育機関の受験制度は停止されたか、厳格な試験制度がなかったので、その間あるべき高等教育機関における学校教育が行われたとは言い難い¹⁰⁾。言うまでもなく、その間 14 校に設けられた日本語学科でもおよそ 4

年間学生募集を停止したが、1970年から「工農兵学院」を募集しはじめ、1976年までの間、廣東外語外貿大学、復旦大学、山東大学、南開大学など18の大学で相次いで学生を募集した（伏泉2013）。

一方、1949年から文化大革命が始まる1966年までの間、1949年華南農業大学、蘇州蚕桑専科学校、1953年吉林大学、1956年大連水産学院、廣州中医院など全国で40校近い高等教育機関で教養科目として日本語教育が行われたが（伏泉2013）、その具体的な状況については不詳である。

ということは、中華人民共和国が成立した1949年から文化大革命が終了する1966年までのおよそ17年間、わずかながらも断続的に日本語教育は続けられたことは間違いない。

2. 改革開放以降の日本語教育

1976年四人組が倒れ¹¹⁾、文革が終焉した翌年の8月に大学入試制度回復が決定された¹²⁾。そこで、急遽1977年12月に全国各地で大学入試が実施されたが、これは試験制度回復が公布されてからおよそわずか40日後に受験するという異例な措置となり、実際入学したのも半年遅れての1978年3月となっていた¹³⁾。11年間停止されていた大学入試の回復がどれほど切迫していたかをものがたる1つのエピソードである。この入試制度回復の第1期生がふつう「77級」と呼ばれ、第2期生（78級）からは正常の9月入学に立ち戻ってきたのである。そこで、「77級」と「78級」は入学・卒業ともに半年しか離れていない。ちなみに、第1期は受験生570万人でそのうち合格者27.3人（4.8%）、第2期は受験生610万人でそのうち合格者約40万人（7%）という激しい競争の試験であった¹⁴⁾。

それからというもの、中央教育部の大学外国語専攻教学計画の立案、大学外国語専攻教科書編集委員会の設立など大学における外国語教育もとみに活性化し、日本語学科も次々に設立された。調査によれば、前掲の文化大革命前に設立された14校、北京師範大学、四川大学、廣西大学、東北師範大学など1970年から1976年までの文化大革命のさなかに設立された18校、南京大学、山西大学、延辺大学、中山大学など、大学入試制度回復の1977年から1984年までに設立された14校を合わせて、1984年まで合計46校に日本語学科が設立された。そして、1983年現在、大学日本語学科在籍者は3,591人、高等師範学院日本語科在籍者は588人にのぼり、日本語教師は873人（教授7人、副教授51人）であった（伏泉2013）。

他方、1981年から日本語専攻の修士課程も設けられ、当初は北京大学、吉林大学と上海外国语大学の3校のみだったが、2011年まで90校以上に増え、博士課程も1986年北京大学に設置されて以来、10校あまりに増えている。ちなみに、延辺大学の日本語学科では1995年から修士課程の学生を募集しはじめ¹⁵⁾、2015年から博士課程の学生を募集している。

中国の高等教育機関における日本語教育の発展とともに、もう1つ取り上げなければならないのは入試制度回復後間もない頃に刊行された日本語関係の専門誌である。いまはも

はやほとんど忘れ去られ、その存在さえも知る人が少ないが、当時湖南大学の周炎輝教授主編だったと記憶している『科技日語』¹⁶⁾、商務院書館発行の『日語學習』（1989年停刊）¹⁷⁾、そして1979年からいままで40年も続いている北京对外經濟貿易大学発行の『日語學習与研究』が発行され、当時の日本語學習や研究に少なからぬ力を發揮した。『日語學習与研究』はいまでも中国唯一の日本関係の専門誌として重要視されている。

3. 改革開放初期の日本語教育と「大平学校」

改革開放初期の中国日本語教育において特記すべきは通称「大平学校」と呼ばれている日本語研修センターである¹⁸⁾。

大学入試制度回復の1977年から1984年までに設立された14校を合わせて1984年までに合計46大学に日本語学科が設立されと述べたが、まず教師陣は大体年配の方が多く、戦前日本に留学して戦争のさなかに中国に戻ってきた人、小学校卒業まで日本語で教育を受けた人、戦前の大学や専門学校で外国語として日本語を習った人、ロシア語や他の専攻から日本語に鞍替えした人、軍隊でラジオなどで日本の情報収集をしていた退役軍人、日本人残留孤児（婦人）など、実に様々な人たちから構成され、正規の日本語や日本語教育を専門として習った教師はほとんどなく、まともな日本語または日本文化を教える力量は必ずしも十分に備わっているとは言えなかつた¹⁹⁾。

そのようななか、1978年8月12日、日中平和友好条約が北京の人民大会堂で調印され、それをきっかけに経済のみならず、両国の文化・教育・学術・スポーツなどの分野における交流の道が開かれ、その一環として「大平学校」が誕生したのである。大平内閣が誕生したのは1978年12月7日であるが、1979年12月大平首相が訪中した際に、「対中国日本語研修特別計画」の実施が正式に決まり、1980年8月11日大平学科が開校した（孫曉英2018）。大平学校は1980年8月から1985年7月まで5年間5期続いたが、毎年120名で4クラスに分けられ、北京語言学院²⁰⁾で約1年間研修、その間1か月間は訪日研修というプログラムだった。このおよそ600名の研修生の数は、1981年3月現在の中国の高等教育機関における日本語教師数から言えば、およそ3分の1に相当する。

一方、大平学校の教師は全員日本の各大学や研究機関から派遣してきた日本語教育専門やその他の分野の錚々たるメンバーであった。たとえば、大平学校の設立から終了するまでの5年間ずっと主任教授を務めた佐治圭三（大阪女子大学教授）先生をはじめ、金田一春彦（上智大学教授）、木村宗男（早稲田大学教授）、国松昭（東京外国語大学）、武部良明（早稲田大学教授）、林大（国立国語研究所所長）、宮地裕（大阪大学教授）、野元菊雄（国立国語研究所日本語教育センター長）、坂倉篤義（京都大学名誉教授）、坂田雪子（東京外国語大学）、奥津敬一郎（東京都立大学）など、5年間で合計91名（延べ120名）にのぼる（孫曉英2018）。

この大平学校の600名近い研修生たちはその後中国日本語教育の一線で大きな役割を果

たしてきただけでなく、日本の教育機関やその他の分野でも幅広く活躍し、中日文化交流や日本語教育において大きな貢献をしている。中国国内で「日本語教育界の黄埔軍校」と言われるゆえんである。

なお、5年間の「大平学校」のプロジェクト終了後も北京日本学研究センターの設立へとバトンタッチされ、小規模の日本語教師の研修、大学院修士課程と博士課程の設置という形でその命脈を保っている。

II. 延辺大学日本語学科の歩みと現状

1. 延辺大学外国語教育の概要

前述したように、改革開放以降、延辺大学の日本語学科は中国全体の日本語教育から見てもその設立がわりと早く、1989年現在ちょうど40年の節目の年に当たる²¹⁾。

延辺大学は中華人民共和国成立と同じ年の1949年創立されたが、創立当初は人的・物的諸条件が不完備だったうえに、中日友好関係が盛んに叫ばれた時代であったこともあり、大学における外国語教育としてはロシア語学科が設置され、文革始まる1966年までの十数年間、断続的ではあるが、ロシア語学科の学生を募集したり、教養科目としてその他の学科の学生たちにロシア語を課したりした（李東哲 2017）。したがって、実質的に1978年外語系が設立される以前は、日本語を専門とする日本語学科の日本語教育は言うまでもなく、教養科目としての日本語教育もしっかりしたカリキュラムに基づいて行われていなかったと思われる²²⁾。このようなもろもろの事情を考え併せてみた場合、実際延辺大学で教養科目としての日本語教育がスタートしたのは大学入試制度が回復され、第一期生の77級が入学した時点であると言える。

当時、延辺大学の学生募集の比率は朝鮮族が7割、その他の民族が3割という基準だったとされているが、とりわけ70年代から80年代にかけては、実質的に朝鮮族学生の割合がもっと多く、そのほとんどが外国語科目として日本語を選択していた。それはやはり、朝鮮族にとって日本語が比較的に習得しやすいことと、朝鮮族の場合中等学校で日本語を習った学生が多かったので、大学に入ってからもそのまま日本語を選ぶという傾向があつたからであろう。この点は延辺大学に外語系²³⁾が設立されてまもない頃、日本語教師が約3分の2を占めていたことからもわかる。

前出の注20)で延辺大学日本語学科は1979年から学生を募集したと叙述したが、実はそれに先立ち、1996年合併して延辺大学の一部となっている旧延辺師範学校では大学入試制度が回復した年の1977年に2年制の「大專」（短期大学に相当する）生を約30人募集し、1979年と1980年連続して2期を募集したという。3期生のインタビュー調査によれば、77級の第1期生の一部が卒業後学校に残り、第2期生と第3期生を教えたという。当時、どれくらい外国語教師が不足していたかがわかる²⁴⁾。旧延辺師範学校のこの合計3期の卒業

生は、主として延辺地域や東北三省の朝鮮族中学校（高校を含む）に教師として赴任し、その前後に卒業した延辺大学日本語学科の第1期生（1983年6月卒業）と第2期生の卒業生とともに80年代前半の延辺地域または東北三省の日本語教育に大きな貢献をしたことは決して無視できない。

2. 延辺大学日本語学科の歩み

ところで、延辺大学日本語学科は1979年に第1期生2クラス約30人を募集、翌年の1980年に第2期生23人を募集し、その後2年間学生募集を停止したが、その主な理由はやはり教師不足だったという²⁵⁾。その後、1983年から学生募集を再開し、1986年の1年を除き2001年まで1クラスずつ（ときには2クラスの学生を募集したこともある）募集していたが、その大半は朝鮮族の学生であった²⁶⁾。そして、2002年度から中高校またはどちらかで日本語を習った「教育班」または「文化班」と中高校で英語を習ったゼロスタートの「総合班」または「基礎班」を1クラスずつ募集したが、2007年度から起点クラスの学生募集を1クラス増やした。その理由は1990年代後半から中高校における日本語学習者が急減したために、質の高い（大学入試成績の高い）学生を募集することがもはや無理で、大学入試成績の高い学生を募集する必要があったからである。また、2006年までは学生募集が主として東北三省に限られていたが、2007年度からは学生募集範囲が全国までに拡大したことも起点クラスを増やした理由の1つである。それに、2008年度から2011年まで4期にわたって「経貿班」²⁷⁾を1クラスずつ募集していたので、その4年間は1学年の学生数は100人を上回っていた。さらに、2017年度から珲春に延辺大学の分校ができ、日本語専門の「専科生」（2年制）を募集しはじめ、2019年度からは本科生を募集している。

他方、日本語専攻の修士課程の学生募集もわりと早い段階の1995年からで、2006年までは「外語語言学及応用言語学」の学生を45人募集し、2007年度からは「日語語言文学」の修士課程の学生を募集し、現在に至っているが、修士課程の学生を指導できる資格をもつ教師も増えたので²⁸⁾、多いときは年間20人を募集したこともあった。その後、延辺大学外国語学院では、中国の高等教育機関では難関中の難関とされている博士課程も2010年度は英語専攻、2015年は日本語専攻学生募集の許可が下り、基本的に毎年1名ずつ募集するようになり、2017年からは新しく「翻訳碩士」課程も学生募集をしている。

要するに、延辺大学日本語学科では中国全体の大学における日本語教育の流れの中で、比較的早い時期に日本語学科のみでなく、教養科目としての日本語教育も実施し、数多くの日本語人材を輩出している。

III. 中国高等学校日本語教育における若干の問題

教える側の立場から言えば、大学における教育は大きく「教学」（授業）と「科研」という2つの柱からなり、教師の評価もこの2つの柱を基準に行われている。また、教師の能

力と力量は教育機関の外的環境（外因）と教師自身の内的環境（内因）によって具現されるが、内因としては教師自身が受けた「高等教育」の程度、教師自身の資質、教師の教育に対するスタンス、教師自身の人柄などに帰結されよう。

ところで、冒頭でも述べたように、改革開放以来の40年余り高等学校における日本語教育は社会発展とともに大きく様変わりしているが、その変化過程においていろいろな問題が生じており、ゆくゆくは中国の高等教育における外国語教育の正常な発展の妨げになる恐れさえある。以下、いくつかに簡約して述べることにした。

1. 実力より学位

周知のとおり、文革が終わったばかりの70年代後半から80年代初めまでは中国にももちろん修士学位の取得者があり得ず、前述したように大学の学部卒業生が高等教育機関に配属され、大学生の教育に携わることがごく普通のことであった。むろん、北京大学、吉林大学など数少ない日本語学科で1982年から修士課程の学生を募集したが、募集枠も非常に少なかったので、学部生が卒業して学部生を教えるという状態が90年代まで続いたと推定される。したがって、90年代までは修士学位の取得者は極めて珍しく、博士号の取得者はなおさら少数であった。ところが、2000年代に入ってから国内における博士号の取得者とともに、いわゆる「海帰」といわれる海外の博士の学位取得者が現われ始め、現在は博士号がなければ大学教師として務まらないという状態にまでなりつつある²⁹⁾。たとえば、延辺大学日本語学科の場合、2017年現在日本語教師が21名（教授2名、副教授9名、講師10名、外教2名）であるが、そのうち博士学位を持っている教師は9名で半数弱を占め、その他は全員修士号を有している。博士号所持者の内訳は、中国・日本・韓国それぞれ3人であるが、中国国内の博士号取得者はいずれも他専攻の学位を取得しており、韓国での取得者も2人は他専攻の学位である。これはおそらく中国国内では日本語専攻の博士課程の学生を募集する大学院はあまりにも少ないと想定され、専攻がどうであってもとにかく博士学位さえあれば「博士」として優遇されることが普通だからであろう。しかし、問題は博士号や修士号を持っていても、まともな論文さえ書けない教師があまりにも多い。つまり、学位の面では昔と比べようもなく向上しているが、教師の実質のレベルは必ずしも学位と正比例しているわけではないというのが現状である。もう1つ、珍奇なことは中央から地方に至るまで、行政をやっている人たちが学位のブームに乗って学位を取得することである。学位だけ強調しすぎる上からの間違った考え方による弊害である。

2. 教師に対する不適切な評価基準

前述したように、とりわけ高等教育の現場においては教えることと学術研究はいずれも必須不可欠である。しかし、一部の大学では「教学型」教師と「科研型」教師と分けて職階進級の評価基準にしているが、これはとんでもないことである。それは、高等学校にお

ける教師としては教えることと研究することは互いに緊密につながっていることで、離して考えることができないからである。もう1つは、一人の教師がよく教えるかどうかの判断基準はさまざまであって、一概に杓子定規で測れないので、結局は水掛け論に帰する危惧さえある。延辺大学では教師同士の評価と学生の教師に対する評価の二通りの評価があるが、まず教師同士の評価は一々その教師の講義を聴く時間的な余裕もなく、悪く評価すればボーナスやその他の面で不利なため、ほとんど客観的な評価ができない、結局は形式に流れてしまう。一方、学生の教師に対する評価も、実際の評価から考えたら、妥当な評価とは言い難い。にもかかわらず、このような評価を実施するのは、時間的な無駄遣いと言うしかない。

3. 「科研」と研究プロジェクトによる評価

中国高等教育機関では「職称」（職階）の基準がますます厳しく、教授までに昇進するのは大変難しくなっている。そこで、1つの学科に教授不在の現象も目立ってくる。

延辺大学日本語学科も現在副教授は少なくないが、教授の空席があっても厳しい基準がクリアできず、教授不在の状態が続いている。教授に進級できる条件として今は最低国家レベルの科研プロジェクト獲得、「核心刊物」³⁰⁾に「教学論文」³¹⁾を発表することなどであるが、これらをクリアすることは至難のわざである³²⁾。この基準には理科系を除き、外国で発表された論文などは一切認められていない。そこで、副教授の枠が満杯で、講師は副教授の空きができるまでずっと待たされるという悪循環を招いている。延辺大学の場合も前述したように、40代の講師が9人もいるのにいつ副教授に昇進できるのかわかる由もない。その結果、以下のような弊害が生じている。

- (1) スムーズな世代交代の講師陣が形成できない。
- (2) 教師の一部はこの基準をクリアするために、手段を選ばず不正行為を行っている。
- (3) スポーツ界と同様に有名教授の「売買」が平気で行われている。
- (4) ゴミ同然の価値のない論文や著作がやたらに発表・出版されている。

4. 学術研究における怪しい等級制度

中国では何に対しても等級を付けている³³⁾。前述した「核心刊物」の5つのランク付けもそうであるが、出版社さえランクを付け、一級出版社で著作を出せば「核心刊物」論文2本、または国家レベルのプロジェクトに相当するとかの規定が一部の大学で行われている。しかし、いわゆる一級出版社と決められた出版社であっても編集者がたいてい修士課程修了止まりで、とくに外国語からなる著作の編集などできるはずもない。その結果、出版社で要求する枚数を満たし³⁴⁾、とてつもない出版費用さえ支払えば簡単に出版してくれるというが、それでもコネがなければ難しいというから理解に苦しむ³⁵⁾。

おわりに

以上、おおむね中国日本語教育の過去と現在を振り返り、改革開放過程における問題点を中心に鳥瞰したつもりであるが、もちろん、中国はまだ「発展途上国」とされ、日本語教育とて発展過程において種々様々な問題が浮上してくるのもやむを得ないと見えなくもない。しかし、改革開放が始まってからもはや40年経っている。というのに、相も変わらず形式主義(習近平主席も「形式主義」を慎むよう呼びかけている)、拝金主義、権利主義などの因習にとらわれ、健全な外国語教育や教育のための研究を妨げている。

冒頭でも話したように、教育全般にわたって、教師の役割の比重は大変に大きい。外国語を専門に教える教師なら、もう少し自分が専門とする外国語のレベルアップに努め、社会の通俗的な観念にとらわれずに、自分が目標とする課題の論文を書くべきであろう。心血を注いでまじめに書いた論文であるなら、その価値はすぐには評価されなくても、ずっと後になって評価されることもままあることだからである。

注

- 1) 中国の高等教育にはふつう大学、専門学院、高等職業技術学院、高等専科学校などが含まれている。2019年6月15日現在、中国の高等学校は合計2,956校で、そのうち普通高等学校2,688校(独立学院257校を含む)、成人高等学校268校であるという。
- 2) 独立行政法人国際交流基金では1974年から世界の日本語教育機関について調べて公表しているが、1998年度から『海外日本語教育機関調査』という名で公表されている。2017年3月刊行の『海外日本語教育機関調査』によれば、2015年現在、日本語学習者は中国953,283人、インドネシア745,125人、韓国556,237人、オーストラリア357,348人、台湾220,045人という順である。その前の2012年度調査では全体の学習者は3,985,660人と400万人に迫り、中国における日本語学習者数は100万人を超えている。
- 3) 任栄哲(2011)によれば、2006年現在韓国高等学校における日本語学者数は58,727人であるというが、韓国の日本語学習者数は2009年度まで長い間ずっとトップの地位を占めていた。
- 4) 研究プロジェクトは大きく「国家レベル」、「省レベル」、「市レベル」、「学校レベル」に分けられ、学術刊行物も「A刊」(Aレベル刊行物)から「E刊」(Eレベル刊行物)まであり、その後に「省級」、「市級」などさらに細かく分類され、大学における職階の進級にはすべてこれらが適用されている。
- 5) 2017年、「中国人民解放军战略支援部队信息工程大学(Information Engineering University)」と改名。
- 6) 1984年、「对外经济贸易大学」と改名。
- 7) 1962年広州外国語学校、1963年長春外国語学校、重慶外国語学校、上海外国語大学付属外国语学校、1964年天津外国語学院付属外国语学校など。

42 改革開放以降の中国高等教育における日本語教育の歩みと問題点（寄稿論文）
—延辯大学日本語学科を例として—

- 8) 中央政治局拡大会議で 5 月 16 日可決された『中国共産党中央委員会通知』が文革の始まりとされている。
- 9) 大学ではないが、筆者も小学校 5 学年のときには何の理由もなく半年くらい休学させられ、1970 年年明けにいきなり中学校に行けと言われ、同年 2 月に登校通知をもって中学校に行ったことが記憶に残っている。ということは 1970 年から学校教育がある程度再開されたのではないかと推定される。
- 10) 「工農兵大学生」は労働者、農民、兵士（軍隊）の中から地元の「革命委員会」（当時実際権力を握っていた地方の行政組織）の推薦を受けて大学に入った 20 歳前後の若者たちであるが、中には試験を受けて入ったもの、地方政府から派遣されてきた人、コネで入ってきた人などであるが、学制が 2 年または 3 年で短かったことと、基礎的な知識等の欠乏により、大学教育において受けるべき十分な教育を受けることができなかつたと思われる。
- 11) 1973 年 8 月、党中央政治局委員であった江青、張春橋、姚文元、王洪文ら 4 人からなる反党グループであるが、一時期党中央で大きな権力を握って我が物顔で振る舞っていたものの、1976 年 10 月逮捕され、1977 年 7 月の第 10 期 3 中全会で、党籍を永久剥奪された。
- 12) 鄧小平が 2017 年 4 月、自ら人民大会堂で全国から集まった 33 人の著名な科学者、大学教授や教育部門の責任者たちと座談会を開き、その場で大学入試制度の回復を決定したという。それから間もない 10 月 21 日、『人民日報』などメディアで大学入試回復に関する社説が発表され、12 月から全国で大学入試がスタートした。
- 13) 中国では日本や韓国と違って、すべての学校教育において入学は 9 月初めである。
- 14) 「77 級」と「78 級」の試験問題はその準備が整っていなかったこともあって、各省の教育部門で出したという。筆者の記憶では、「77 級」は「外語」科目は一般科目の受験後、数日経ってから県所在地に集まって受験したのである。
- 15) 1995 年から 2006 年まで「外語語言学及応用言語学」の修士課程の学生 45 名を募集し、2007 年から「外国語言文学」の修士課程の学生を募集し、現在に至っている。
- 16) いつから発行され、いつまで続いたのか、いまはインターネットでも調べようがないので、不詳である。
- 17) この定期刊行物も発行年は不確かであるが、70 年代末期か 80 年代の初めに刊行されていたと推定される。ちなみに、筆者は 1986 年 3 月発行された第二期からこの刊行物に論文を載せ始め、1989 年 10 月まで断続的に掲載している。
- 18) 「大平学校」という名は日本での通称名で、正式名は「在中国日本語研究センター」、中国における通称は「大平班」、正式名は「日語教師培訓班」である。
- 19) 日本国際交流基金の「在中国日本語研修センター第 1 年次報告（要旨）」では「1978 年の中国教育の統計で 600 名だった日本語教師が、1981 年 3 月の時点では 1800 名に増加した。増加した講師の大部分が、転職してきた高齢者や文革期に大学を卒業した者で、専門の日本語講師とは言い難く、研修の必要性が非常に高まっていた」と指摘されていた（孫曉英 2018）

- から引用）ことからも、当時の日本語教師の状況がわかる。但し、1979年から日本語専科（2年制）を卒業した人たちが一部大学に配属され、後になって大学で教えるようになり、1882年からは4年制大学の卒業生たちが大学に分配され、教鞭を執り始めた。
- 20) 1996年6月「北京語言文化大学」に変更され、2002年から「北京語言大学」と簡約されていいる。
- 21) 延辺大学では1978年外語系（外国語学院）が設立され、教養科目としての外国語も教え、実際日語専業（日本語専攻）の学生を募集したのは年の1979年からで、その数年の1983年から英語専業（英語専攻）の学生も募集した。外国語学院において先に日本語学科が設けられるのは大連外国语大学など専科大学からスタートし、後になって大学に昇格した学校を除いては異例である。
- 22) 花井（2015）によれば、延辺大学草創期において、1期生を中心に日本人教師による理系の授業を日本語で受けたとされているが、これは教養科目としての日本語教育とは異なると見なされる。
- 23) 筆者は1982年2月、吉林大学を卒業して延辺大学に配属してきたが、当時外語系の教師は全部で18名だったが、そのうち日本語教師が12名、英語やロシア語教師が6名であった。日本語教師12名はすべて朝鮮族で、筆者を含めて4名以外はいずれも戦前に何らかの形で日本語を覚えている老教師たちであった。また、2019年8月現在、日本語科教師20名の中で一人の漢族を除いてはすべて朝鮮族であり、教養科目の19名の日本語教師も一人を除いて全員朝鮮族である。
- 24) 総合大学として延辺大学外国语学部に英語より先に日本語学科が設置されたのは珍しいと前述したが、とくに延辺地域は歴史的・地理的・民族的なこともあり、当時ある程度日本語のできる人はいたものの、英語のできる人は非常に少なかったということもその一因であると思われる。
- 25) 設立当初から外語系に唯一の若手教師として在籍していた林成虎（大学入試制度回復前の延辺大学漢語系の卒業生であるが、独学で日本語を習得。その後、外語系の副主任、人文社会科学院院長などを務める）教授の話による。その後、1979年に2年制「専科」の卒業生二人（一人は延辺師範学校の卒業生で、もう一人は長春外語学校の卒業生）が外語系の教師陣に加わり、その後に4年制大学卒業生として、筆者が初めて赴任した。
- 26) 学生募集範囲は主に東北三省に限られたが、東北三省の漢族中高校で日本語を教えている学校は非常に少なかった。
- 27) 「経済貿易班」の略称で、受験時に点数が合格ラインに達していない学生を集め、5年間日本語を学習するクラスである。
- 28) 当時、延辺大学の規定では副教授以上、講師であっても博士号をもつ者で、3年間正式な刊行物に2本以上の論文を発表していれば、修士指導教官としての資格が得られた。
- 29) 名門校とされる重点大学の日本語学科の教師はほとんど百パーセント何らかの博士号を有

している。

- 30) 国で決めた A レベルから E レベル 5 段階の学術誌であるが、その中でも C レベル以上の学術誌に論文を発表しないと認められない。
- 31) 必ず教育改革など教育に関する論文であって、一般の学術論文はこれに属さない。
- 32) 韓国には韓国研究財団 (National Research Foundation of Korea, 韓國研究財團) が毎年厳格な審査を経て評価・助成を行う「登載誌」と「登載誌候補」と言われる学術誌があるが、延辺大学では以前それぞれ「核心刊物」の D と E に認めたが、いまは認めないという。
- 33) 鄭永流 (2004) では大学等級、プロジェクト等級、学科等級、学位授与等級、人材等級など 10 項目の等級付けを取り上げ、中国の学術ランク付けを痛烈に批判している。
- 34) ある出版社は文字数 30 万字以上あればいいという基準を設けているという。
- 35) プライバシーのために明言できないが、筆者はある大学教授がいわゆる一級出版社でかなり高い出版費用を支払って出している日本語の著書を読んだことがある。

参考文献

- 国際交流基金 (2017) 『2015 年度 海外日本語教育機関調査』、くろしお出版。
- 宿久高 (2008) 「中国における日本語教育と課題」『日本語言文化研究』、清華大学出版社、3-8 頁。
- 孫曉英 (2018) 『「大平学校」と戦後日中教育文化交流』、日本僑報社。
- 鄭永流 (2004) 「学术自由及其敌人—审批学术、等级学术」、『学术界』一〇四期、178-186 頁。
- 任栄哲 (2011) 「韓国語における日本語の諸相」、『日本語言文化研究』、延辺大学出版社、3-22 頁。
- 花井みわ (2015) 「中国朝鮮族の日本留学の歴史的背景」、『朝鮮族研究学会誌』第 5 号、朝鮮族研究学会、15-22 頁。
- 伏泉 (2013) 『新中国日語高等教育歴史研究』、上海外国语大学博士論文。
- 李東哲 (2017) 「改革・開放以降の延辺地域の日本語教育について—延辺大学を中心に」、『東アジアの社会変動』、花書院、131-152 頁。
- 李東哲 (2011) 「誤用・誤用分析と日本語教育」、『日本文化論叢』、大连理工大学出版社、002-013 頁。
- 李東哲 (2015) 「中国日本語教育におけるもう一つの問題点—日本語教師の誤用をめぐって」、『東アジア日本語教育・日本文化研究』第十八輯、東アジア日本語教育・日本文化研究学会、45-62 頁。
- 李東哲 (2017) 「外国語教育における『2 次誤用』試論」、『日语文化论丛』第七輯、大連理工大学出版社、117-128 頁。

The pace and problems of Japanese education in Chinese higher education after the Reform and Opening up : Take Japanese major in Yanbian University as an example

LI, Dongzhe

Abstract

Since the reform and opening up, China's foreign language education has made great achievements, including Japanese education. In particular, universities with Japanese majors have grown from 14 before the reform and opening up to 506 thirty years later, with far more than 70 thousand students. The related educational facilities, faculties, textbook development, research in related fields, etc., have also been greatly improved. In 1979, Yanbian University, located in the border area of Jilin province, began to recruit students of Japanese major, along with other universities, working hard on Japanese higher education for 40 years till today.

However, there are inner and outer factors in the process of development, which lead to the sub-healthy development of Japanese education. In particular, the over emphasis on academic qualifications and degrees, the improper evaluation of faculties, the ambiguity of the relevant grades of academic research, and the different standards of project research are problems in the process of the development of contemporary Japanese higher education, which still need to be strengthened and improved.

Keywords : after the reform and opening up, the sub-healthy development of Japanese education, Yanbian University, Japanese teachers

短期大学生による為政者の歴史的演説に対する印象評価

橋本 恵子（福岡工業大学短期大学部）

要旨

筆者はこれまで、日本人弁論者に対する印象評定を行い、プレゼンテーションに対する評価の観点を明らかにすることを試みてきた。また、演説の神様とも称された人物である大隈重信の演説資料（音声データ）を分析することで、聴き手にとって好ましいスピーチの要素を抽出するための基礎資料を提示した。スピーチの質の向上を図る上で、スピーチに対する評価の議論は欠かせない。その際、スピーチのどの要素を聴衆がいかに評価するのかを明らかにする必要がある。

為政者によるパブリックスピーチの分析と評価は、政治的関心事の変化や、国家、政党、官僚等の隠された意図を再確認する手段ともなり得るため、様々な観点から継続していく価値のあるテーマであると考えられるが、本演説の言語学的分析はこれまでなされてこなかったものである。

本稿では、好ましいスピーチスタイルに関する参考資料の一つとして、為政者の歴史的演説に対する印象評定を行い、プレゼンテーションやスピーチコミュニケーション教育の際の評価尺度を構築するための一助とすることを試みる。

キーワード： 演説資料、スピーチコミュニケーション教育、印象評価、評価尺度

はじめに

本稿で分析した歴史的演説とは、大隈重信の「憲政ニ於ケル輿論ノ勢力」である。本演説は、1915（大正4）年3月に、帝国議会の解散総選挙に向けて行われたものである。時の内閣総理大臣大隈重信 77歳の時のもので、市島健吉¹⁾の勧めで3月2日に大隈邸において蓄音機に吹き込まれ、各地に回送されたとされる。

コロンビア・レコードが出版した録音ディスク3枚組（25cm）のSPレコードで、1枚両面に録音されており、箱入（27cm×27cm）である。付属資料として別冊1冊（20cm）がある。

このレコードは、日本の首相が直接政治を主題とした演説を吹き込んだ最初のものとされている。演説の神様とも呼ばれたという大隈の「憲政ニ於ケル輿論ノ勢力 演説」（17分58秒）の音声資料をもとに、社会言語学的観点から筆者が分析した結果、言語形成期を佐

賀で過ごした大隈の演説の特徴は、①佐賀方言が殆ど認められない事、②特徴的な文末表現（～であるんであります）、③謡曲調、詩吟、平板化、語尾上げ、語尾伸ばし、④漢文調単語の多用、⑤多彩な一人称、⑥濁音化、等が挙げられ、その出現箇所や出現回数等についても考察を加えた（橋本 2017、2018、2019）。

本稿では、本演説に対して、若者がどのような印象を持つのかを明らかにし、聴衆を魅了する演説やプレゼンテーション、スピーチをする際の評価の観点を明らかにすることを目的とした調査結果について論ずるものである。

I. 調査内容及び方法

調査内容及び方法は次の通りである。

実施日：2018年7月19日（木）

場 所：福岡工業大学短期大学部

科目名：日本語表現法（1年生選択必修科目）

評定者：福岡工業大学短期大学部ビジネス情報学科、日本人学生1年生58名

調査は、同じ評定者に2回実施した。1回目の調査では、大隈重信と第12回総選挙演説レコードについての簡単な説明を加えた上で、「憲政ニ於ケル輿論ノ勢力」を学生に聴かせ、印象評価アンケートを実施した。

演説内では難しい漢語も多用されていることから、内容理解が難しい場合もあると考え、2回目の調査では、筆者が文字起こしした資料を配付し、学生は内容を目で確認しながら、同演説を聴き、再度、同様の印象評価アンケートを実施した。1回目と2回目の調査は時間を使はず、続けて行った。なお、2回目の調査の際、筆者が配付資料の内容について説明は行わず、演説を聴く前に予め黙読する時間は取らなかった。

評定者である学生は、演説の音声データを聴いた直後に、その印象を対義語からなる形容詞20対（表1参照）を用いて、7段階で回答した。これらの評定語は、自発音声や会話等の印象評定を行っている籠宮他（2003）、鈴木他（2008）、森本他（2012）を参考に抽出した。

表1 評定語

嫌いなー好きなー不快なー心地よいー感じの悪いー感じの良いー親しみにくいー親しみやすい、たどたどしいー流暢な、話し慣れていないー話し慣れた、しどろもどろなーなめらかな、下手なー上手な、遅いー速い、ゆったりしたースピード感のある、のんきなーせわしげな、落ち着きのあるー落ち着きのない、声の小さいー声の大きい、弱々しいー力強い、元気のないー元気のある、消極的なー積極的な、無礼なー礼儀正しい、不真面目なー真面目な、ぞんざいなー丁寧な、下品なー上品な

II. 集計結果

集計結果は、表2、表3の通りである。表2の網掛け部分は、7段階評価の内、平均値5以上のものである。また表3の網掛け部分は、伸び率が1回目調査平均値と比較して2回目調査平均値が10%を超えたものを示している。

籠宮他（2003）の因子分析の結果、講演や会話等に影響を与える項目として、「好悪」「上手さ」「速さ感」「活動性」「スタイル」が抽出されている。

筆者のこれまでの調査で、短大生は、整然としたスタイルでなめらかで上手いプレゼンテーションよりも、「速さ感」や「活動性」のあるプレゼンテーションを好ましく感じる傾向が強いことが明らかとなった（橋本2012、2013、2014）。

今回の調査でも、「活動性」が他の評定語に比べ、高い値を示していることが分かる。1回目調査平均値と2回目調査平均値の差が統計的に優位か確認するため、優位水準5%で両側検定のt検定を行ったところ、 $p < .01$ であり、調査の前後の平均値の差が有意であることが示された。

表2 調査結果平均値

	評定語	1回目 調査平均値	2回目 調査平均値
好 悪	嫌いなー好きな	3.4	3.6
	不快なー心地よい	3.3	3.6
	感じの悪いー感じの良い	3.8	4.0
	親しみにくいー親しみやすい	3.0	3.3
上手さ	たどたどしいー流暢な	3.7	4.1
	話し慣れていないー話し慣れた	4.3	4.9
	しどろもどろなーなめらかな	3.7	4.2
	下手なー上手い	3.9	4.3
速さ感	遅いー速い	3.0	3.3
	ゆったりしたースピード感のある	3.0	3.3
	のんきなーせわしげな	4.0	4.0
	落ち着きのないー落ち着きのある	3.5	3.4
活動性	声の小さいー声の大きい	5.0	5.3
	弱々しいー力強い	5.1	5.4
	元気のないー元気のある	5.0	5.3
	消極的なー積極的な	5.1	5.2
スタイル	無礼なー礼儀正しい	4.3	4.7
	ふまじめなーまじめな	5.2	5.3
	ぞんざいなー丁寧な	4.3	4.8
	下品なー上品な	4.1	4.5

N=58 ** $p < 0.01$

図1は、1回目と2回目平均値のSDプロファイル²⁾である。対となる形容詞を両極に取り、その間をスケール化したもので、イメージ調査等に利用される。印象評価等における平均値の比較は、SDプロファイルの出力を見ると分かり易い。

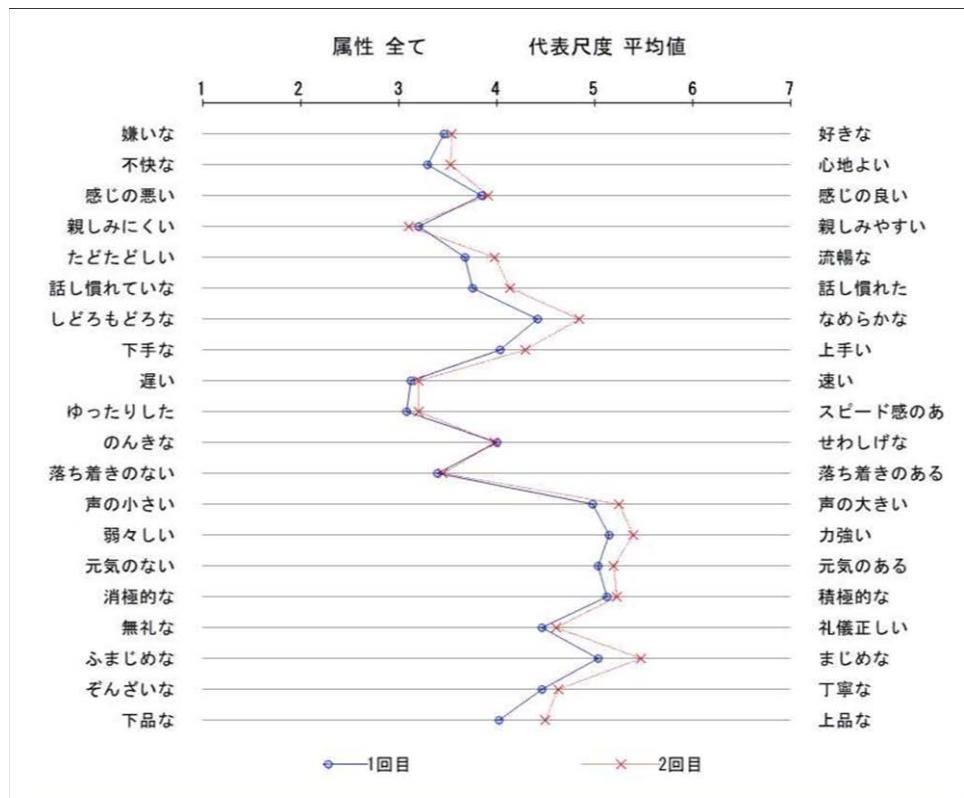


図1 1回目調査平均値と2回目調査平均値のSDプロファイル

次に、1回目調査と2回目調査平均値の伸び率を表3に示す。2回目の調査の方が、演説内容を目で追いながら演説を聴くことができることから、2回目の調査結果の方が1回目の調査結果よりも、良い印象示すのではないかと考え、伸び率を確認した。その結果、全20項目中、1項目を除き、2回目調査結果の平均値が高かったことが明らかとなった。特に、「上手さ」「スタイル」については、10%を超える伸び率を示した。一方で、「落ち着きのある—落ち着きのない」の項目だけが、伸び率がマイナスとなった。当初、演説スピードは「速い」が「落ち着きがある」との印象を持っていた学生が、2回目調査で、演説スピードが「速く」、「落ち着きがない」という印象に変わった理由は、さらに検討を加える必要がある。

表3 1回目調査と2回目調査の平均値伸び率

	評定語	伸び率
好 悪	嫌いなー好きな	5.4%
	不快なー心地よい	9.3%
	感じの悪いー感じの良い	5.0%
	親しみにくいー親しみやすい	11.4%
上手さ	たどたどしいー流暢な	10.9%
	話し慣れていないー話し慣れた	13.5%
	しどろもどろなーなめらかな	13.3%
	下手なー上手い	9.9%
速さ感	遅いー速い	11.8%
	ゆったりしたースピード感のある	9.4%
	のんきなーせわしげな	1.3%
	落ち着きのないー落ち着きのある	-2.5%
活動性	声の小さいー声の大きい	5.3%
	弱々しいー力強い	5.6%
	元気のないー元気のある	4.4%
	消極的なー積極的な	2.7%
スタイル	無礼なー礼儀正しい	9.3%
	ふまじめなーまじめな	3.1%
	ぞんざいなー丁寧な	10.8%
	下品なー上品な	10.4%

III. 考察

印象評定尺度として有効とされる（籠宮他 2003）の因子分析の結果を参考にした 20 項目を五つに分類した中で、今回の調査で「好悪」「上手さ」「速さ感」「活動性」「スタイル」の内、「活動性」が短大生にとって、弁論の印象を左右する高い要素であることが明らかとなった。また、1回目調査平均値と2回目調査平均値の集計結果の伸び率から、文字起こし資料を提供したことにより最も影響を受けた項目は「上手さ」であった。さらに、20 項目中 19 項目で、2回目調査結果の方が、評価が上がったのに対し、1項目「落ち着きのないー落ち着きのある」（速さ感）のみ、評価が下がった。これは、音声データだった際には聞き流していた言い淀みや言いさし、繰り返し等が、文字起こしした配付資料を見ると明らかとなるため、当初は「落ち着きがある」と感じたものが「落ち着きがない」という評価に変わったのではないかと推察される。この点については、さらなる検討が必要である。

おわりに

本稿では、短期大学生を評定者とした調査を実施したが、今後の課題としては、為政者に対する印象評価の中日比較、国による好ましい演説の在り方にどのような違いがあるのかの検証、日本語学習歴による印象評価結果の違い等について、さらに研究を進めていく

予定である。

注

- 1) 大隈重信後援会会长、早稲田大学初代図書館長。
- 2) SD 法 (Semantic Differential Method) とは、「良い」「悪い」「速い」「遅い」というように対となる形容詞を両極に取り、その間をスケール化したものである。イメージ調査等に利用される。言語による尺度を用い、ある概念の構造を定量的に明らかにするための実験手法として心理学や官能評価の分野等で用いられてきたが、現在では建築計画や商品開発、アンケート調査の分野においても、評価手法として広く用いられている。

参考文献

- 揚妻祐樹（2009）、「言語資料として見た大隈重信の演説 「憲政に於ける輿論の勢力」（1）--SP レコードと速記の紹介」『藤女子大学国文学雑誌』81、1-23 頁。
- 大隈重信（1915）、「憲政ニ於ケル輿論ノ勢力」、コロムビア・レコード
- 籠宮隆之・山住賢司・槇洋一・前川喜久雄（2003）、「講演音声に対する印象評定尺度の作成」『第 17 回日本音声学会全国大会予稿集』、135-140 頁。
- 島義高（2010）、「佐賀偉人伝-02 大隈重信」、46-49 頁
- 鈴木加奈・水上悦雄・森本育代・大塚裕子・柏岡秀紀（2008）、「相互行為としてのグループディスカッションを評価する--7 つの評価項目の提案」『人工知能学会 言語・音声理解と対話処理研究会』53、29-34 頁。
- 橋本恵子（2012）、「日本人弁論者に対する印象評価」『東アジア日本語教育・日本文化研究学会 2012 年度国際学術大会予稿集』、75 頁。
- 橋本恵子（2014）、「中国人留学生による「日本人弁論者」に対する印象評価」『中朝韓日文化比較研究叢書 日本語言文化研究第三輯（上）』、579-586 頁。
- 橋本恵子（2014）、「短大生による「日本人弁論者」に対する印象評定」『日本比較文化学会第 26 回九州支部大会』。
- 橋本恵子（2017）、「大隈重信の演説資料の分析--「憲政ニ於ケル輿論ノ勢力」」『「東アジアにおける日本学研究」国際フォーラム資料集』、26 頁。
- 橋本恵子（2018）、「肥前語話者のコード切り替え--大隈重信「憲政ニ於ケル輿論ノ勢力」の音声資料をもとに」『日本比較文化学会 2017 年度関西・中国史国・九州 3 支部合同研究会』。
- 橋本恵子（2018）、「大隈重信の演説資料に関する一考察」『東アジア日本学研究学会第 1 回国際シンポジウム予稿集』、71 頁。
- 橋本恵子（2019）、「大隈重信の演説資料の分析--「憲政ニ於ケル輿論ノ勢力」--」『言語の研究--言語学、日本語学、日本語教育学、言語コミュニケーション学からの視座』、157-166 頁、花書院。
- 森本育代・水上悦雄・舛田直美（2012）、「日本語学習者のグループディスカッションに対する評価とその

評価に影響を及ぼす会話行動—日本人大学生と留学生の印象評定の比較から』『社会言語科学会第 29 回大会発表論文集』、116-119 頁。
早稲田大学編 (2016)、『大隈重信演説談話集』、262-270 頁、岩波書店。

Junior College Students' Impression Evaluations on Politicians' Historic Speeches

HASHIMOTO, Keiko

Abstract

I have previously conducted impression evaluations of Japanese orators to clarify criteria used when evaluating presentations. Additionally, by analyzing audio data of speeches by Shigenobu Ohkuma, who was called the God of Speeches, I have also presented basic materials for identifying the elements of speech that are preferable to listeners. To improve the quality of speeches, discussion on how they are evaluated is indispensable. It is necessary to define which speech elements are evaluated and how the audience does this.

Analysis and evaluation of politicians' public speeches may re-verify changes in political interests and reveal the hidden intentions held by, for example, nations, political parties and bureaucrats, and as such are worth pursuing through various approaches. Nevertheless, the linguistic analysis of speeches described in this paper has not previously been attempted.

In this paper, I analyze junior college students' impression evaluations of politicians' historic speeches to establish reference material regarding preferable styles of speech, which will enable development of evaluation criteria that may be used in teaching presentations and speech communications.

Keywords : speech, speech communication education, impression evaluation, evaluation measure

日本語における一字漢語動詞に関する考察 —「音訓流通」漢字を中心として—

劉 赫洋（関西大学大学院生）

要旨

日本語漢語動詞に関する研究は、現在までは主に「発言する」などのような二字漢語動詞の内部構造に焦点を当てて考察されてきた。一方、「喫する」「煎げる」のような一字漢語動詞に関する研究は十分なされたとは言い難い。その最大の要因は、新しい事物が次々と登場することで、より精確に物事を描写し、分類しうる二字漢語が求められるようになるにつれて、主導的な立場であった一字漢語はその地位を徐々に失ってしまうことがある。

ところが、現代日本語において、一字漢語動詞は、日常会話（接する／関する）でももちろん、新聞、記事及び国会（喫する／体する）など多岐にわたって登場し、多用されている。そのうち、字音しか持たない、いわゆる「字音専用」語基に比べ、「音訓流通」語基からなる一字漢語動詞はより複雑な意味特徴を呈している。

本稿では、先行文献を踏まえて、まず日本語の動詞体系における一字漢語動詞の位置づけに触れ、次に「音訓流通」漢字を中心として、意味論的な観点から一字漢語動詞の使用を考察する。さらに、「和漢相通」という日本語の特徴に基づいて、「一字漢語動詞対応リスト」の構築を提案する。

キーワード： 一字漢語動詞、分布、音訓流通、和漢相通

はじめに

日本語漢語動詞に関する研究は、山田（1940）までに遡ることができ、その後、日向（1982・1985）をはじめ、野村（1988・1999）、沈（1990）、森田（1994）、沖森、肥爪（2017）などの研究が続出しており、枚挙にいとまがない。ところが、上記のものも含め、日本漢語動詞に関する研究は、「発言」「発明」などのような二字漢語動詞の内部構造に焦点を当てたものが大部分であるのに対して、一字漢語動詞に関する研究は盛んであるとは言いがたい。その最大の要因は、社会発展に伴う新しい事物の登場にあると考えられる。つまり、人類が自然を認識していく中で、より精確に物事を描写し、分類しうる二字漢語が求められるようになる一方、主導的な立場であった一字漢語はその地位を徐々に失ってしまうのである。したがって、イメージされやすい二字漢語に比べ、「それより小さい1字の漢語は、現

代日本語にはそれほど存在しないと感じるかもしれない」。（沖森、肥爪、2017）

現代日本語では、「する/げる」との結合が認められる一字漢語動詞の語基がどれくらい存在するかについて、筆者が『新日本語常用漢字表』に収録された2,136字を対象にして考察を行った結果、一字漢語動詞の語基となりうる漢字数は299字であった。（劉、2019）そのうち、字音しか持たない、いわゆる「字音専用」語基¹⁾に比べ、「音訓流通」語基からなる一字漢語動詞はより複雑な意味特徴が現れた。これが本稿で「音訓流通」語基を中心として、現代日本語における一字漢語動詞を考察しようとする主な理由である。

I. 現代日本語における一字漢語動詞の位置づけ

沖森、肥爪（2017）が述べたように、「意外なほど多くの1字の漢語が現代の日常語として存在することに驚かされる」。まずは、このような一字漢語動詞が、日本語母語話者の言葉にどう反映されているのか、日本語母語話者の一字漢語動詞への認知度²⁾はどのようなものであると言えるのか。それを明らかにするために、筆者は日本人大学生30名を対象に、文作りというシンプルな形で「解する」「動する」などを含める20語についてアンケート調査を行った。その結果、「接する」「得する」「絶する」「脱する」「転する」以外の15語は低い認知度を示した。もちろん個人差や使用環境などを考慮に入れるべきである。しかし、それ以上に、漢語や和語が混在するような複雑な環境において、とりわけ二字漢語が絶対的な地位を占める中で、一字漢語動詞はどのように位置づけられているかに注目すべきである。現代日本語における一字漢語動詞の位置づけを考察するために、ここでは、一字漢語動詞「脱する」「演じる」を例にして詳しく考察する。まず、「脱する」についてである。

漢字「脱-ダツ」は、<抜け出す>という意味の下で造語成分として、「脱出/脱退/脱却/逸脱/離脱」などの二字漢語を産出している。『新明解国語辞典』（第七版）に載っている上記の二字漢語の解釈から分かるように、漢字「脱」の意味及び使用環境が具体化するようになり、場面に応じてより精確に選出することができるようになる。

脱出：危険な（居たくない）場所から逃げ出すこと。

脱退：ある団体・組織の一員であることを自分の意志でやめること。

脱却：好ましくない態度や、古くから離れられないでいた思想や慣行からすっかり抜け出すこと。

逸脱：本筋や決まった範囲からそれること。

離脱：自分が本来属している所から脱退（脱却）すること。

例えば、下記の例1は、居たくない場所（借金生活）から逃げ出すことができたという事象に、二字漢語動詞の「脱出する」が最も適切である。しかし、例2のように、「危機」と一字漢語動詞の「脱する」との共起もよく耳にする。一見、意味<抜け出す>のもとで、

漢字「脱-ダツ」は無条件に一字漢語動詞形態と二字漢語動詞形態の間を行き来しているように見える。

例 1. 借金生活に陥る危機を脱出したのだ。 (YAHOOニュース)

例 2. 陥落危機を脱している。 (YAHOOニュース)

しかし、現代日本語書き言葉均衡コーパス（以下はBCCWJ）に収録された「脱する」と「脱出する」の用例を帰納的に見ていくと、一字漢語動詞「脱する」の共起成分として、「束縛/拘束/危機/主義/局面/迷路/不況」などのような、いわゆる話し手にとっての「好ましくない」抽象的な表現がほとんどである。他方、二字漢語動詞「脱出する」と共起しやすい表現には「鎌倉/牢獄/城/都市/街/日本/東京」など、いわゆる場所名詞の傾向がうかがえる。つまり、「好ましくない状態、境遇」などから抜け出す「抽象的」な場面では、一字漢語動詞である「脱する」のほうが許容度が一段と高く、二字漢語では置き換えがたい性質を持つと考えられる。

また、一字漢語動詞「演ずる」も同じような傾向が見られる。造語成分として、「演-エン」が産出した二字漢語は以下の通りである。

演一力演 熟演 競演 出演 公演 共演 実演 主演 助演 上演 開演 演出 演習 演奏

ところが、例 3 のような「ある役割を務める」といった意味では、上記の二字漢語のいずれも下線部に入れることができないのは明白である。

例 3. ミシェルさんが 2020 年大統領選に向けて重要な役割を_____のは必至だ。

(YAHOO ニュース)

BCCWJ に収録された「役割」と共起する動詞についての考察から分かるように、計 4,721 件のうち、半数以上を占める和語動詞の「果たす」以外、それに次ぐ和語動詞「担う」と一字漢語動詞「演ずる」はそれぞれ 225 件と 209 件を占めている。

以上のように、「脱する」と「演ずる」の二語を例にして一字漢語動詞の位置づけを考察した結果から、以下のことが言える。

一字漢語動詞は、二字漢語の増加にもかかわらず、二字漢語動詞では置き換えがたく、独特な性格を持っている。意味的特徴から見ると、一字漢語動詞は和語動詞と対応する傾向が見られる。

II. 「音訓流通」語基

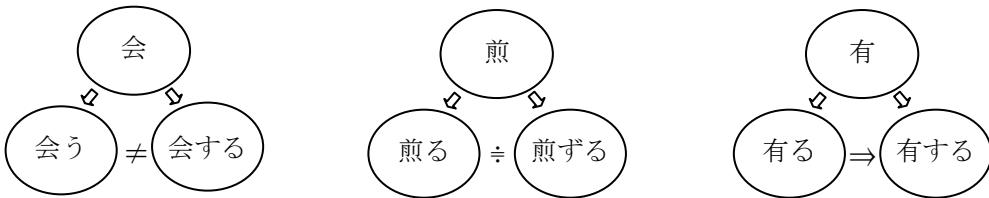
日本語母語話者は漢字、あるいは漢語の意味を理解するには、一般的に訓読みが優先され、字訓を仲介する傾向があると思われている。例えば、「音訓流通」の漢字「有」を見ると、まずは、二字漢語にある「有」はその字訓の「ある」によってはじめて字義が固定化され、ひいては複合語への意味獲得に至るのである。同じプロセスが一字漢語動詞「有する」にも見られる。

固有 私有 国有 希有 共有 Σ ユウ - 有 - ある \leftarrow 有る
有する

ところが、先述したように、一字漢語動詞となる語基においては、「字音専用」語基に比べ、「音訓流通」漢字からなる一字漢語動詞の方は、より複雑な意味特徴が現れる。その理由は、「音訓流通」語基である一字漢語動詞の意味は「字訓」の果たす機能から乖離することがあるからである。以下の一字漢語動詞「煎する」と「会する」の意味はそれぞれ字訓の「煎る」と「会う」から獲得できるだろうか。

煎げる — ? 字訓「煎る」 会げる — ? 字訓「会う」

つまり、「音訓流通」漢字が語基となる一字漢語動詞は、「する」との結合によって、意味、あるいは使用条件がある程度限定される。そして、「する」による限定の度合いによって、「音訓流通」からなる一字漢語動詞はさらに次のような三類に分けられる。



a. 「する」による限度強 b. 「する」による限度中 c. 「する」による限度弱

そのうち、a類では、語基は「する」との結合によって、一字漢語動詞の意味が高度に限定され、以下のように、イディオムや決まり文句のみに出現し、使用上における自由度が非常に低い。

拝する — 後塵を拝する

会する — 一堂に会する

絶する — 想像を絶する/言語を絶する

動^ムする — 動^ムじない

また、c 類に属する語基は「する」との結合で、意味が限定されることは a 類ほどではなく、一字漢語動詞の意味を獲得する上で、字訓が「正」の働きを果たしている。例えば、下記の一字漢語動詞「関する」、「辞する」が字訓の「関わる」、「辞める」との間において、使用範囲に多少の差はあるだろうが、その意味を字訓に求めることは差し支えないと言えるだろう。

關於する 一 關於する

辞する — 辞める

比する — 比べる

食する — 食べる

減する — 減らす

得する — 得る

次に、a類やc類とは異なり、b類に現れた漢字の異形態の間の微妙な違いを、漢字「煎」を例に挙げて説明する。まず、漢字「煎」のあらゆる形態を次のように取り上げる。

造語成分：煎茶 煎薬 煎餅 焙煎 字訓：煎る 一字漢語動詞：煎づる

上述したように、「字訓」が字義を固定化させる働きをしている。つまり、日本語母語

話者が「煎茶/煎薬/煎餅/焙煎」の「煎」の意味を問われたら、以下のように、字訓の「煎る」が返ってくるのが一般的である。

煎餅—餅を煎る 焙煎—焙って煎る * 煎薬—薬を煎る 煎茶—茶を煎る

ところが、「煎茶/煎薬」では、機能しているのは字訓の「煎る」ではなく、一字漢語動詞の「煎する」である。すなわち、「煎る」と「煎する」の間にずれが生じているのは、共通の要素となる「水（水分）」への処置のプロセスが異なるからである。つまり、「煎る」は、対象に含まれている「水（水分）」を蒸発させ、乾燥状態にする過程であるのに對し、「煎する」は、対象に含まれた成分を「水（水分）」に転移させる過程だと言える。言い換えれば、漢字「煎」に含まれる「につめて成分を出す」といった「隠」義は、このように「する（する）」との結合で、一字漢語動詞という形式を通じて維持されるのである。

煎薬—薬を煎する 煎茶—茶を煎する

以上のように、字訓の「煎る」と比較すると、一字漢語動詞の「煎する」に意味的に近いのは和語の「煮だす」だと考えられる。



図1 意味的遠近図

III. 一字漢語動詞の使用考察

1. 一字漢語動詞における「休眠」語基

筆者の行った一字漢語動詞への認知度調査では、「接する」「得する」などのような高認知度を示したものもあれば、「藏する」「崩する」「補する」のような低認知度のものもあつた。その原因は、個人差以外にどのような要素が考えられるかについて、『筑波ウェブコーパス』（以下「TWC」）、『聞蔵ビジュアル』朝日新聞 1985～週間朝日・AERA（以下「聞蔵」）及び『YAHOO ニュース』（以下「YAHOO」）の3種のデータを利用して、一字漢語動詞「藏する」「崩する」「補する」の使用状況を調査した。結果は以下の表1の通りである。

表1 各コーパスにおける収録例

見出し語	TWC	聞蔵	YAHOO
藏する	473	13	6
崩する	18	—	7
補する	409	3	—

一字漢語動詞の「藏する」には<おさめる、所藏する>と<中に含みもつ>の二つの意味項目がある。まずは下記の用例から、意味<おさめる、所藏する>の下で、お寺や神社

で仏像などを収蔵するのに多く使用されることが分かった。しかし、現代日本語では、一字漢語動詞の「蔵する」に比べ、二字漢語動詞「所蔵」の方は、使用範囲が広く、「書籍」や「文化財産」などの面においても多用されている。また、意味<中に含みもつ>では、『TWC』に現れた「蔵する」の473例は主に漢方医学に使用され、範囲が限られていることも明白である。

…鎌倉の覚園寺や、京都の相国寺に蔵される大権の像はまさにこの姿をしている『TWC』

…奈良を代表する古刹・唐招提寺は須田の遙か先人たちによって制作された、木彫としては最古級の仏像を多数蔵する。『聞蔵』

…又、腎は精を蔵しており、腎に蔵されている精を「腎精」といいました。『TWC』

…肝虚の場合、血を蔵したり、自律神経系の正常な働きが阻害されたりしている。『TWC』

「崩ずる」と「補する」はそれぞれ、下記のように、天皇の逝去と古典辞令のような制約された場面にしか使用されず、現代日本語においての使用頻度の低下がうかがえる。

…第4条 天皇が崩じたときは、皇嗣が、直ちに即位する。『YAHOO』

…曹操が崩ずると、許褚は号泣のあまり血を吐いた。『TWC』

…その十七年後に帝舜が崩ずると、禹は三年の…『TWC』

…明治29年4月高雄水雷長に捕せられる。『TWC』

…貞和6年(1350年)2月には伊予国守護職に補せられ、貞治2年…『TWC』

以上の分析から分かるように、一字漢語動詞には、一部分が古典などにしか使われず、何らかの原因により、現代日本語においてはほぼ「死語」になってしまったものがある。その代わりに、他の生命力の強い一字漢語に代替されるか（補する→命ずる）、単位の長い二字漢語で代替される（蔵する→所蔵する）。それが低認知度の結果に直結していると考えられる。

2. 「和漢相通」に基づいた「一字漢語動詞対応リスト」

前節で述べたように、一字漢語動詞では、「する」による限度度のb類に現れた漢字の異形態の間の微妙な差に最も注目されたい。その差を解消すべく、一字漢語動詞に対応できるようなリストを用意することは、日本語学習者は言うまでもなく、日本語母語話者にも役立つだろう。それを実現させることができになるのは、日本語の「和漢相通」という特徴に負うところが大きい。「和漢相通」について、沈（2017）では以下のようない記述がある。

（前略）与汉语的“单双互通”成为极好的对照，日语词汇体系的近代化是以“和汉相通”为标志的。即，一、新的概念主要用汉字词表示；二、以前的“和语”，即日本的固有词汇获得了与之相对应的汉字词形式。“和汉相通”的汉字词主要是二字词³⁾。ここから、下の用例を使って、「和漢相通」を一字漢語動詞「免ずる」から見ていきた。まず例4では、「プロジェクト」の実施可能と「許してほしい」の条件としては、そ

それぞれ「俺の顔」及び「その人柄」であることが分かる。つまり、格助詞「に」との共起によってはじめて、「免ずる」の<それを考慮して>といった意味が定着するようになる。一方、例5と例6では、「免ずる」との共起格は同じ「を」ではあるが、その意味は目的語に左右されることも分かる。「免ずる」は「大使/副大臣」のような<職業、立場>と、「取得税/責任」のような<金額、責任>と共に起することで、それぞれ<職を解く>、<負担・義務などを除く>といった意味合いが固定化され、さらに、例4、例5、例6にある「免ずる」と和語の「考え合わせる」、「やめさせる」及び「のぞく」をそれぞれ対応させることができ可能になる。これを基に、「一字漢語動詞対応リスト」の構築を考える際に、主に<共起格>、<同一格下の共起項目>の2点を基準にして、表2のようにまとめてみた。

例4. 俺の顔に免じてこのプロジェクトはぜひやろう。クラウドファンディングで資金…。

ヤマモトのやったことは悪いことだとは承知してるけど、その人柄に免じてそろそろ許してほしい『YAHOO』

例5. モーリシャス大使を免ずる（マダガスカル兼コモロ兼モーリシャス大使）小笠原一郎自民党の福田峰之・内閣府副大臣（衆院比例南関東、当選3回）は25日、離党届を出し、受理された。政府は同日、副大臣を免ずることを決定した。『YAHOO』

例6. 県によると、自動車税や自動車取得税の90%を免じるほか、低公害車購入に…それが事実だったとしても、トップの政治責任を免じるものではない。『YAHOO』

表2 一字漢語動詞対応リスト

番号	語基	字音	語尾	共起格	和語	限定類	具体例
13	会	カイ	する	に	集まる	イディオム	一堂に会する
15	解	カイ	する	を, に, と	分かる	—	—
20	帰	キ	する	に	終わらせる/ 負わせる	—	—
75	体	タイ	する	を	心に留める	イディオム	意を体する

おわりに

本稿は「音訓流通」漢字に焦点を当て、一字漢語動詞の位置づけから、一字漢語動詞の使用面までを考察した。さらに、一字漢語動詞対応リストの構築を提案した。「音訓流通」語基に比べ、「字音専用」漢字が語基となる一字漢語動詞は、字義を固定化させる「字訓」が喪失したため、「字訓流通」語基となる一字漢語動詞とは異なった性格を持っている。日本語母語話者が「字訓」のない漢字を意味獲得するうえで、何を頼りにするか、つまりどういったプロセスで「無訓字」を習得しているかを、今後「字音専用」漢字が語基となる一字漢語動詞に焦点を当て継続していきたい。

注

- 1) 森岡（2004）では、漢字をその音訓の有無によって大きく4つの群に分類している。「ひとり人ジン」のような字訓とも持つ漢字を「音訓流通」の漢字、「ヤク役」のような字音しか持たない漢字を「字音専用」の漢字と呼ぶ。
- 2) ここでいう認知度は、日本語母語話者が一字漢語動詞への意味獲得の正確度を指す。
- 3) 筆者訳：（前略）中国語の「单双相通」に呼応し、日本語の語彙体系は「和漢相通」が特徴的である。即ち、一、新しい概念は主に漢字語で表示される；二、これまでの「和語」、つまり日本固有的な語彙はそれに対応できる漢字語を獲得した。「和漢相通」の漢字語は主に二字漢語である。

参考文献

- 沖森卓也、肥爪周二（2017）、『漢語』朝倉書店。
- 沈国威（1990）、「「V+N」構造の二字漢語名詞について」『国語学』160号、124-134頁。
- 沈国威（2017）、「我们为什么需要二字词？—语言接触与汉语的近代演化：序说」『東アジア文化交渉研究』第10号、101-118頁。
- 日向敏彦（1982）、動詞性漢字の造語機能、『上智大学国文学論集』15。
- 日向敏彦（1985）、漢語サ変動詞の構造、『上智大学国文学論集』18。
- 野村雅昭（1988）、二字漢語の構造、『日本語学』7-5。
- 野村雅昭（1999）、「サ変動詞の構造」森田良行教授古稀記念論文集刊行会（編）『日本研究と日本語教育』明治書院。
- 森田良行（1994）、「漢語サ変動詞の自他に関する諸問題」『動詞の意味論的文法研究』明治書院。
- 森岡健二（2004）、『日本語と漢字』明治書院。
- 劉赫洋（2019）、「日语一字汉语动词的语义功能与分布」『汉日语言对比论文集』第10辑、113-126頁。
- 山田孝雄（1940）、国語の中に於ける漢語の研究、宝文館。

Consideration about Sino-Japanese One-Character Verbs in Japanese A case study on kanji with onkun

LIU, Heyang

Abstract

Up to now, the research on "Sino-Japanese Verbs" has mainly focuses on the internal structure of "Sino-Japanese Two-Character Verbs" such as 「発言する」. Nevertheless, the study of "Sino-Japanese One-Character Verbs" such as 「喫する」「煎げる」 is insufficient. The main reason

is that it is becoming prevail that people utilize two-character Chinese, which can describe and classify things more accurately, especially the emergence of new things. Thus, the one-character Chinese has been losing its dominant role. However, in modern Japanese, "Sino-Japanese One -Character Verbs" are not only used in daily conversation(接する/関する), but also widely applied in newspapers, news and Parliament (喫する/体する)。Among them, the "Sino-Japanese One -Character Verbs" that is composed of "onkun Kanji " show more complex semantic features than "Jion Kanji ".By referring the previous researches, firstly, this paper deals with the positioning of "Sino-Japanese One -Character Verbs" in the Japanese verb system. Secondly, the degree of application of verbs in "Sino-Japanese One -Character Verbs" is assessed from the perspective of semantics. Finally, based on the characteristics of "Wakan connecting" in Japanese, this paper proposes the establishment of "Sino-Japanese One -Character Verbs correspondence table".

Keywords : Sino-Japanese One-Character Verbs, distribution, onkun Kanji, Wakan connecting

近代二字漢語動詞の由来と定着 —「遺伝」を例として—

楊 駒（関西大学大学院生）

要旨

本稿は「遺伝」を例として、近代日中同形二字漢語動詞について考察を試みた。日中両国の国語辞書や新聞雑誌コーパス、及び英華・和英辞書を視野に入れ、文献調査を行った。現代の中国語と日本語において、「遺伝」は「生物の形質が親から子・孫に伝わること」などの意味である一方で、中国古典には、「遺伝」は「後まで残り伝わること」の意味で使われている。古典意味は漢籍から19世紀末の『申報』などの新聞雑誌まで使用され続け、20世紀初期に新義の使用例が観察できるようになった。一方、日本では、「遺伝」は早くも19世紀前半に成立している。幕末、ドイツ医師フーヘラントの医学書は緒方洪庵など蘭方医により翻訳され、その翻訳書から、「遺伝」はオランダ語の *erfenis/erfelijke ziekten* に対応し造られたと考えられる。その後、「遺伝」は古典意味と新義両方それぞれ用いられていたが、明治三十年前後からは、もっぱら生物学の意味として使われるようになった。日清戦争後、新義の「遺伝」もその時期に中国に逆流入し、中国語に定着した。

「遺伝」は中国古典語であるが、生物学の新義は日本で獲得し、定着した。さらに、中国語に逆流入し、現在まで使われるようになった。このことにより、日中間に新義の「遺伝」の環流があったことが判明した。

キーワード： 遺伝、語誌、日本語借義語、二字漢語動詞

はじめに

「親譲りの無鉄砲で子供の時から損ばかりしている」は夏目漱石の小説『坊っちゃん』の冒頭である。「親譲り」は言い換えれば「遺伝」のことを指す。子が親に似ること、つまり親の形質が子孫に伝えられることは古くから何となしに気づかれていたであろう。しかし、日本語と中国語において、これは医学上に据えて吟味し認識するようになり、「遺伝」の語が用いられるのは近代に入ってからのことかと思われる。

近代、日本や中国などアジアの国々に、欧米諸国との新しい概念が怒濤のように流入した。その新概念を表すために、学術名詞が大量に作り上げられ、漢字文化圏における近代知識の環流が沈（1994）などの先行研究により明らかになった。日中両国は古くから様々な交

流を行い、語彙交流により、同形漢字語が多数現れ、今でも使用され続けている。その中、名詞だけでなく、動詞や形容詞など叙述語も、知識体系の構築過程において編入され、多数増加した。

本論文は楊（2018）に挙げられた日中同形二字漢語動詞リストの中の一つである「遺伝」という言葉を例とし、その由来と日中両言語における定着過程について説明しようとするものである。

I. 先行研究

出自や意味変遷など、いわゆる語誌の視点から「遺伝」という言葉を検討する先行研究は多くない。『日本国語大辞典』第二版（2000-02）をひいて見ると、「遺伝」は以下のように2つの意味項目がある。一つ目は、「後までのこり伝わること。また、後世までのこし伝えること」。挙げられた日本の初出例は江戸後期の地誌『輿地誌略』（1826）、ドイツ人ヒュブナーの『一般地理学』を、青地林宗（1775-1883）が翻訳・抄出したものと、漢籍の『史記』である。二つ目は「（{英} heredity の訳語）生物の生殖によって親の形質が子孫に伝わる現象。生殖細胞に含まれる遺伝子によって伝えられる」。挙げられた初出例は司馬凌海（1839-1879）の著書『七新薬』（1862）の一文、「錢癬を患ふる者甚だ多し、其因由を熟察するに、半ば遺伝に係り、半ば風土に由る」である。

杉本（2004、2015）は『日国』には「遺伝」を明治以降の例という誤った解説と引用を示すのみと批判した。氏は幕末蘭方医の翻訳書『病学通論』、『扶氏経験遺訓』、『察病龜鑑』、『扶氏診断』などを調査し、「遺伝」はオランダ語の *erfenis/erfelijke ziekten* に対応して作られたと述べている。さらに、遺伝に先行しての訳語は「伝屍」（肺結核の古い言い方）と思われ、「伝屍」という語もやがて廃され、新しい「遺伝」の訳語が創られ、用いられたのである。また、「遺伝」は漢語体であるが、もとより、日本人により創作されたの漢字語であると主張している。

佐藤（2007）には、「遺伝」の意味と出自について、以下のように書かれている。一つ目の意味は「後世までのこり伝わる（こと）。また、後までのこし伝える（こと）」。挙げられた出典は『輿地誌略』と『史記』の一文であり、二つ目の意味は「親から子に体や性質の特色が伝わる（こと）。英語 *heredity, transmission* の訳語」である。挙げられた初出は『七新薬』である。例文はいずれも『日本国語大辞典』の用例と一致し、後者を参照したものと考えられる。

では、「遺伝」は果たして日本人による創作の漢字語なのか、また、現代中国語における生物学の「遺伝」はどこから出てきたものなのか、本稿は以上の疑問を解決するために、日中両国の古典、新聞雑誌コーパス、英華辞書などにおいて「遺伝」の使用状況について調査した。

II. 「遺伝」の語誌

1. 中国語における「遺伝」

考察に先立ち、まず「遺伝」が既存の辞書類でどのように記されているかを確認しておこう。『漢語大詞典』に「遺伝」は以下のように4つの意味が挙げられている。(第10卷 1213頁、一部抜粋)

- ① 猶留傳。(後の世に残し伝える)『史記 扁鵲倉公列傳』
- ② 指遺留下來的傳聞。(遺留された伝聞) 『水經注 易水』
- ③ 謂生物體的構造和生理機能由上一代傳給下一代。(生物体の構造や、生理機能などが親から子孫に伝わること) 艾思奇 (1910-1966) 『辯證唯物主義歴史唯物主義』(1961)
- ④ 謂人的氣質, 品德, 能力等後天的東西受上代的影響而在後代身上體現出來。(人の気質、品格、能力など後天的なものが親、祖先などの影響を受け、後世の人々に現れること) 郁達夫 (1896-1945) 『出奔』(1935)

本論文では①と②のような意味を「遺伝」の中国古典義と呼び、それと一線を画している、③と④のような近代入ってから現れた意味を「遺伝」の新義と呼ぶこととする。③と④の書証はいずれもかなり新しい作品であり、れっきとした古典からの伝承性が薄い。突如現れた新義の「遺伝」がどこから来たのかは、『漢語大詞典』の記述だけでははつきりしない。

また、『辞源』初版 (1915年版) には、「Heredity 身體及精神上之性質。由祖父傳遞而來也。凡性情體貌疾病。皆能遺傳」(体および精神上の性質は、祖先から伝わってきたもの。性格、体格、顔、病など遺伝することが可能である)、近代的な意味と考えられる。それに對し、『辞源』第三版には、「遺伝」は中国古典の書証のみ載せられている。『辞源』(2015)の語彙を収録する範囲は西暦 1840 年のアヘン戦争までである、中国古典語専用辞書と見られる。それに対して、『辞源』初版と 1931 年の続編には、当時の新語、新概念も大量に収録している¹⁾。

『辞源』初版の記述に英語の Heredity が入っており、宣教師の訳語かどうかを検討するために、当時の英華辞書類を調査する必要がある。台湾中央研究院近代研究所のデジタルデータベース「英華辞典資料庫」に「遺伝」の使用を調査した結果、1822年モリソンの英華字典に、遺伝は見出し語 ORAL の下に、「Oral tradition 口遺傳」というフレーズ形式として現れた。1842年メドハーストの英華字典、1872年ドゥリトル萃林韻府においても使用状況は同様であり、19世紀の英華字典には、「遺伝」はもっぱら古典義として使われていることが明らかになった。英華辞典における新義の遺伝の初登場は 20世紀に入ってから、1908年顔惠慶の英華大辞典に見られる。見出し語 Inheritance の下に、「(Biol.) Transmission and reception by animal or plant generation, (生物)世傳, 遺傳」訳語として使われている。括弧に「生物」と明記しており、生物学用語として、新義の遺伝の

現れと考えられる。

次に、近代中国の新聞雑誌を見てみると。『申報』において、遺伝の初出例は古典意味の使用例であり、新義の用例は1908年にある薬の広告に見られる。

- ⑤ 「徒留得芬名永教畫裏遺傳」（ただ名前を絵の中に伝わっている）1879年5月17日 第2169号 第4版 「鳳凰臺上憶吹簫」
- ⑥ 「遺傳病 父母傷於烟酒色致子女腦弱多病」（遺伝病 親がタバコやお酒に依存すると、そのこどもは病弱になる）1908年3月24日 第12624号 第7版

筆者は『申報』(1879-1915)において、「遺伝」の例文を集め、その意味は古典義なのか、新義なのかを分別し、毎年どのくらいの頻度で使用されたものかを調査した結果は図1のようになる。

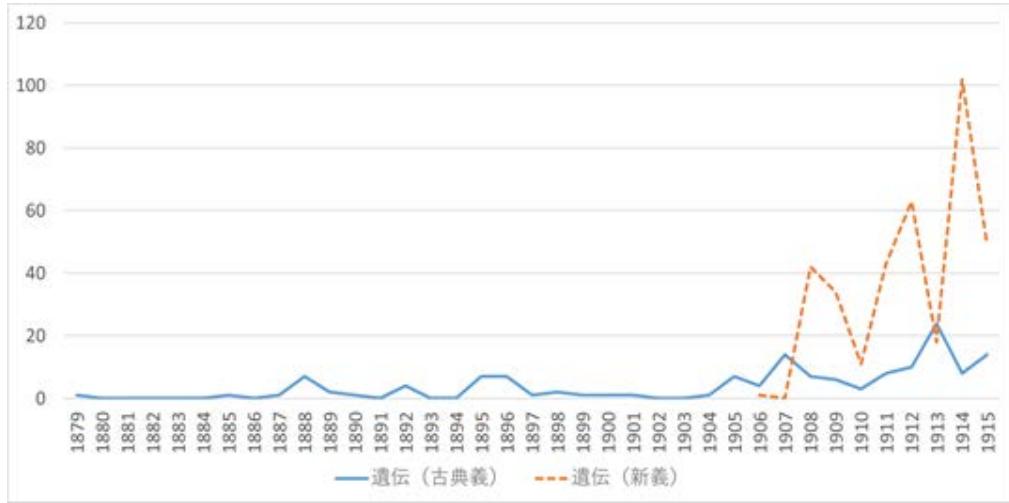


図1 『申報』(1879-1915)における「遺伝」の意味変化

申報は1872年に創刊したにも関わらず1906年まで、新義の「遺伝」は一度も見られなかつた、しかしながら、出現してから短期間で、古典義の使用頻度を上回り、激増したことが判明した。20世紀初頭に、古典義と新義両方とも使われていたが、新義がやがて古典義を抑え増加し、定着してきた。

新義の「遺伝」は20世紀初期に突如現れ、中国語内部の自然発生と考えにくい、外部の影響が大きいと思われる。また英華辞典類の調査結果に従い、宣教師の造語と考えにくいので、次に日本語に目を向ける。

2. 日本語における「遺伝」

(1) 新義「遺伝」の由来

日本近代最初の国語辞書と呼ばれている『言海』(1889-1891)に「遺伝」は収録され、他の見出し語「癩病」「腋臭」にも「遺伝」の姿が見られる。一方、高橋五郎の「いろいろ辞典」

シリーズをひいてみると、1888 年の『漢英対照いろは辞典』に、遺伝が既に記されている。

『和漢雅俗いろは辞典』(1889)には、意味解釈は同じで、英語部分を削除しただけであり、それ以降の増訂版も同様である。

ゐでん (名) ; 一する (自) 遺傳 (子孫に遺りつたはることをいふ) Hereditary transmission; to be hereditary, as a disease

国語辞書やいろは辞典に収録されていることから、生物学的意味の「遺伝」は当時の社会に受け入れていると考えられる。初出に関して、福沢諭吉や西周など有名な啓蒙者でありながら、数多くの新語を創り出す造語者の著書に新義の「遺伝」は見られるが、より早い時期の使用例を探し当てるに、蘭学資料に遡る。筆者の調べた限りでは、新義の「遺伝」の初出はやはり杉本 (2004) で述べられる 1857 年刊行の『察病龜鑑』である。この本はドイツ医師のフーフェランドが 1836 年に出版した医学書で、ハーゲマンという人がオランダ語に訳して、青木浩齋がさらにその蘭訳本を日本語に訳したものである。

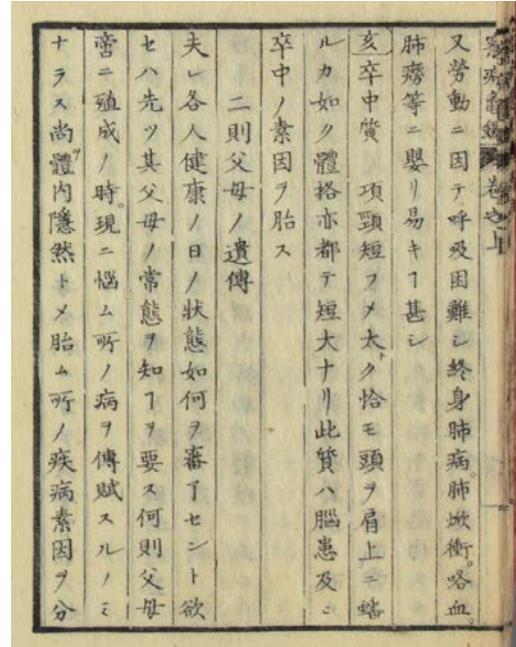
しかし、「遺伝」という言葉が訳語として選択されるのは、杉本氏いわく「伝屍」からなのか、それとも当時漢学の素養が高い蘭学者は漢籍の「遺伝」を借用し、新しい意味を与えたのか、まだ不確実であり、今後の課題としたい。

(2) 新義「遺伝」の定着

「日本語歴史コーパス」で「語彙素が『遺伝』」という条件で検索してみると、「明治・大正編」に用例が見られ、かつもっぱら新義の意味として使用されている。初出例は 1881 年『東洋学芸雑誌』の「人爲淘汰によりて人材を得るの術を論ず」という文章で、作者は加藤弘之 (1836-1916) である。

⑦ 而テ優者強者ハ其優ト強トヲ己レガ苗裔ニ遺傳スルヲ以テ苗裔ハ其生初ニ於テ既ニ優ト強トヲ固有スルヲ得ルナリ

そして、加藤弘之の「人爲淘汰によりて人才を得るの術を論ず」(一) と (二) に合わせて計 55 箇所「遺伝」を使用した。「日本語歴史コーパス」における「遺伝」の年次別・雑誌別出現頻度(粗頻度)を示すと表 1 のとおりである²⁾。



http://archive.wul.waseda.ac.jp/koshko/ya04/ya04_01432/ya04_01432_0001/ya04_01432_0001.html

表1 「日本語歴史コーパス」における「遺伝」の使用頻度（粗頻度）

雑誌・年代	文体・品詞	口語		文語		総計
		サ変動詞	名詞	サ変動詞	名詞	
東洋学芸雑誌	1881			10	45	55
	1882			5	15	20
国民之友	1887			3	1	4
	1888			4	4	8
女学雑誌	1894			1	4	5
	1895			9	4	13
太陽	1895		26	12	31	69
	1901		13	3	14	30
	1909	5	31	8	15	59
	1917	1	8			9
	1925	17	46			63
女学世界	1909		8			8
婦人俱楽部	1925	5	16			21
総計		28	148	55	133	364

「日本語歴史コーパス」に全体において、「語彙素が『遺伝』」で調べた結果、合計 364 件ヒットした。「遺伝病」「遺伝質」「遺伝性」など複合名詞の用例も含め、全体的に名詞の用法は優勢で、合計 281 件、サ変動詞の用法は合計 83 件である。『日本語歴史コーパス』は一定の年数ごとの刊行分しか収録していないため、「遺伝」の使用頻度を全面的に捉えることは難しいが、使用傾向はある程度見える。最初に出現したのは『東洋学芸雑誌』、1881 年と 1882 年二年分で総計 75 件、その内の 55 件は加藤弘之の作品からの用例である。『国民之友』と『女学雑誌』、『女学世界』、『婦人俱楽部』など女性誌に、「遺伝」の使用量は少なく、合わせて 59 件であった。生物学や医学などを言及する文章が少ないと考えられる。『太陽』雑誌はもとより文字総量が多い故に、230 件の用例も観察できた。また、文体別で分けて見ると、最初は文体語としてしか使われないが、1894 年から口語体としても使えるようになり、顕著に上昇した。1909 年から口語の使用量は文語を超えた。それは当時の言文一致運動の背景があると考えられる。

日本語における「遺伝」は蘭方医による翻訳で、医学・生物学上の新たな意味を獲得した。明治二十年頃からは新義の「遺伝」が一般化し、やがて国語辞書やいろは辞典にも収録されるようになった。

III. 中国語における新義の「遺伝」の伝来

前述したように、『申報』での新義の登場は1908年のある薬の広告である。より早い用例を得るために、「中国近代報刊庫」データベースに「遺伝」を検索すると、新義「遺伝」は最初に出現したのは以下の通りである。

- ⑧ 「夫論一人身心之現象、不可不徵其遺傳於父母、然則論人羣身心之現象、亦不可不徵其遺傳於遠祖之動物明矣」「加藤博士天則百話（一）」『新民叢報』 1902年 第21号

出自は『加藤博士天則百話』という文章で、その「加藤博士」は前文に述べた加藤弘之博士のことを指し、文章は1899年に出版した加藤弘之原作の『天則百話』の翻訳となる。しかし、『天則百話』に、上記の原文と見られる文章には「遺伝」という言葉は記されていない。

- ⑨ 「今吾人一個人の心身如何を研究せんと欲すれば必ず父母祖父母に遡て、研究の緒を開かざるべからざるが如く、人類の研究に就てと、必ず人類の遠祖たる動物に遡て、研究せざる何らざるは、固より論を俟たざるなり」『天則百話』「利己心の三種」二百八十三頁

ところが、同じページすぐ次の段落に「遺伝」が別の文章に見られる。

- ⑩ 「夫れより人間に至り、漸く發達して次第に遺傳に由て益進歩したるものなれば、利他心なるものは實に利己心の一變体とすべきものにして決して本來獨立固有のものにおらざるは明なり」

『新民叢報』での「遺伝」の出現場所は原文に完全に一致していないが、訳者なりの解釈が加えられ、アレンジを伴うことと思われる。また、周知のように、『新民叢報』は日本に亡命していた梁啓超が横浜で創刊した雑誌であり、その中の語彙は日本語の影響を受けてもなんの変哲もないことであろう。「遺伝」は『天則百話』から出てきた語彙がそのまま使われていると推測できる。

さらに、『湖北学生界』、『浙江潮』、『中国新報』など当時在日留学生によって創刊した雑誌に限らず、『東方雑誌』、『四川官報』、『官話報』、『衛生白話報』、『女子世界』など中国大陸で創刊した新聞雑誌にも、新義「遺伝」の用例が観察できるようになった。その後、新義の「遺伝」は中国語に定着し、『英華大辭典』(1908)、商務印書館の『英華新字典』(1913)など英華辞書に訳語として使用され、前述した国語辞書の『辞源』(1915)にも収録されるようになった。

おわりに

本論文では、日中同形二字漢語のひとつである「遺伝」について考察を試みた。「遺伝」は漢籍語で、中国では19世紀末まで「後代に残り伝わること」として使用されている。新義

の「遺伝」は日本の蘭学医らによる、オランダ語の *erfenis/erfelijke ziekten* に対応し造られたと考えられる。明治二十年頃から、新義は日本で定着し、また日本の新聞や雑誌での翻訳により中国語に逆流入し、広く使われるようになった。日中間に新義の「遺伝」の環流があったことが判明した。今後は楊（2018）に挙げられた他の二字漢語動詞も視野に入れ、近代における二字漢語動詞の形成と発達を系統的に考察していきたい。

注

- 1) 『辞源』は数回修訂したことがあるが。本文は商務印書館の判断基準に従うこととする。
商務印書館ホームページに参照。
<http://ciyuan.cp.com.cn/etymology/common/showHTML.jspx?url=/fulu/chubanshuoming.html>
- 2) 近代雑誌における使用頻度を考察しどうとするため、「国語教科書」の『小学校国語6期』『四 めぐりあい』（1947年）という例文1件を除いた。「兄と弟とのちがいは、いでん学上の能力のちがいは別として」（サンプルID：60T 小説 1947_66C04）

参考資料

- 大槻文彦（1889–1891）、『言海』 国立国会図書館デジタルコレクション 書誌ID 000000935271
- 何九盈・王寧等主編（2015）、『辞源』（第3版）商務印書館。
- 加藤弘之（1899）『天則百話』博文館 国立国会図書館デジタルコレクション 書誌ID 000000519509
- 漢語大詞典編輯部（2011）、『漢語大詞典』 上海辞書出版社。
- 北原保雄他（2000–2002）、『日本国語大辞典』（第2版）小学館。
- 佐藤亨（2007）、『現代に生きる幕末・明治初期漢語辞典』明治書院。
- 沈国威（1994）、『近代日中語彙交流史』笠間書院。
- 杉本つとむ（2004）、「近代訳語を検証する 12 遺伝/生理」『国文学解釈と鑑賞』至文堂 69–8、181–187頁。
- 杉本つとむ（2015）、『江戸時代翻訳語の世界—近代化を推進した訳語を検証する』八坂書房。
- 高橋五郎（1888）、『漢英対照いろは辞典』 国立国会図書館デジタルコレクション 書誌ID 000000523217
- 高橋五郎（1889）、『和漢雅俗いろは辞典』 国立国会図書館デジタルコレクション 書誌ID 000000547270
- 楊馳（2018）、「日中同形二字漢語動詞の語源調査」『或問』第33号、51–64頁。
- 陸爾奎主編（1915）、『辞源』（初版）商務印書館。

参考コ一パス

- 愛如生データベース、『中国基本国籍庫』、『申報』データベース、『中国近代報刊庫』 <http://er07.com/>
- 国立国語研究所『日本語歴史コ一パス』 <https://chunagon.ninjal.ac.jp/>
- 台湾中央研究院近代史研究所「英華字典資料庫」データベース
<http://mhdb.mh.sinica.edu.tw/dictionary/index.php>

The Etymology and Establishment of Sino-Japanese Two-Character Verbs:

Take Iden / Yi Chuan (遺伝) for Example

YANG, Chi

Abstract

This paper tried to consider modern Japanese-Chinese homomorphic two-Character verbs using "Iden" (遺伝) as an example. We used the literature retrieval survey was conducted with a view to the Japanese-language / Chinese-language dictionaries, English-Japanese / English-Chinese dictionaries and newspaper magazine corpus. In modern Chinese and Japanese, "Iden" means "The property of living organisms of transmitting their characteristics to their offspring". whereas in Chinese Classics, "Iden (Yi Chuan)" means "What will remain until later". Classical meanings continue to be used from Chinese Classics to newspaper magazines such as *Shen Bao* at the end of the 19th century, and in the early 20th century, the new meaning item became observable. On the other hand, in Japan, "Iden" was established as early as the first half of the 19th century. At the end of the Edo period, German doctors Christoph Wilhelm Hufeland (1762-1836)'s medical books were translated by Ranpoi such as Ogata Koan (1810-1863), and it is thought that "Iden" was created corresponding to Dutch erfenis / erfelijke ziekten. Later, "Iden" was used in both classical and new meanings, but from around the Meiji 30th year it began to be used exclusively as a biological meaning. After the Sino-Japanese War, "Iden" of the new meaning also flowed back into China at that time and settled in Chinese.

"Iden" is a classic Chinese word, but the new meaning of biology was acquired and established in Japan. In addition, it came back into Chinese and was used until now. This revealed that there was a reflux of the new meaning of "Iden" between Japan and China.

Keywords : Iden/Yi Chuan, Etymology, Japanese Loanwords , Sino-Japanese Two-Character Verbs

ベトナム人日本語学習者への漢字教育に関する研究の現状と課題 —今後の研究の方向性と可能性—

陳 秀茵（日本経済大学）

要旨

昨今、ベトナム人日本留学生の数が急増したため、ベトナム人日本語学習者の特性を把握し、彼らに対する効果的な指導法に関する研究が進められている。本稿では、日本語教育に資する形で、ベトナム人日本語学習者を対象にした漢字教育に関する研究の成果を整理し、課題を指摘した上で、今後の研究の方向性と可能性を示す。

現代ベトナム語において、表記としての漢字が使用されることはないが、漢語由来の語彙は語彙全体の7割程度を占めると思われている。それに基づいて、ベトナム人日本語学習者への漢字教育研究には、漢越語と漢越音に注目したものがほとんどである。それらの研究には、ベトナム人日本語学習者が漢字を学習する際に、漢越語と漢越音知識がどのように影響するかについて検証した研究や、漢字学習についてどのように考えて、どのように勉強するか等を調査した研究がある。しかし、調査規模が大きないこと、同じ仮説が異なる分野から検証されるのに留まることや、他の外国語母語話者との比較研究が極めて少ないと等が、課題として挙げられる。

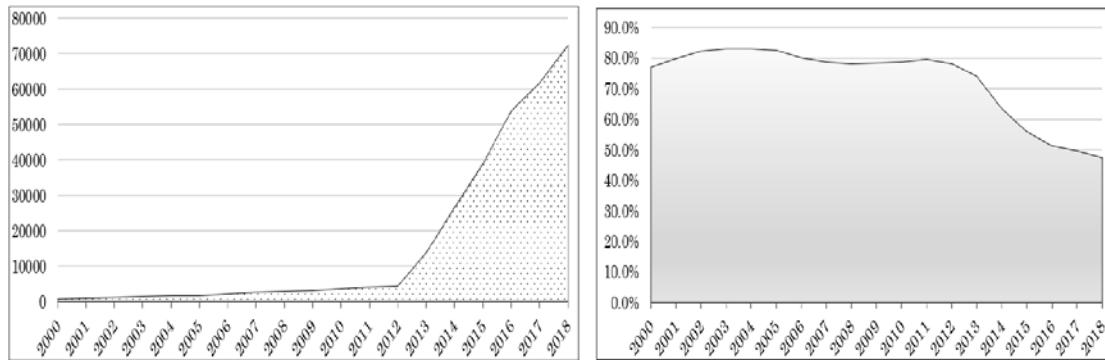
ベトナム人日本語学習者にとって効果的な漢字指導方法を得るために、数多く蓄積されている①日本語教育における中国語話者、韓国語話者を対象にした漢字教育研究の成果と、②中国語教育におけるベトナム語話者への漢字教育研究の成果を活用することを提案した。

キーワード：ベトナム人日本語学習者、日本語教育、漢字教育、漢越語、漢越音

I. ベトナム人日本語学習者を対象にした漢字教育研究の背景

日本学生支援機構（JASSO）の「外国人留学生在籍状況調査結果」によれば、ベトナム人日本留学生の数は、2000年から徐々に増え、2012年から毎年1万人以上増加している（【図1】）。さらに、2014年からは中国の次に多い出身国となつた¹⁾。

【図1】のようにベトナム人留学生数が急増したため、ベトナム人日本語学習者の特性を把握し、彼らに対する効果的な指導法が模索され、研究の発展が求められている。その中で特に漢字教育が注目されており、ベトナム人日本語学習者への漢字教育に関する研究が散見されるようになった。その背景としては、以下の2つが考えられる。



【図 1】ベトナム人日本留学生数の推移状況 【図 2】中国・韓国・台湾人留学生数が全体に占める割合の変化

一つは、日本に在籍する漢字圏・非漢字圏学習者の比率の変化である。【図 2】の通り、2013 年までに日本に在籍する外国人留学生の全体において、中国・韓国・台湾人留学生²⁾が約 80% を占めていた。日本語教育においては、中国・韓国・台湾人留学生は漢字圏学習者と見なされ、それ以外の母語話者はいわゆる非漢字圏学習者と認識されている傾向が強い。それゆえ、日本国内の日本語教育現場においては、ベトナム語を母語とする日本語学習者を、非漢字圏学習者と考えるのが一般的であった³⁾。なお、従来の研究においては、非漢字圏学習者に関する研究は英語母語話者を対象にしたもののがほとんどであった。

もう一つは、ベトナム語の特性である。現代ベトナム語は英語と同じようにアルファベット表記を用いており、漢字で表記することはほぼない。しかし、歴史を遡ると、ベトナムでは、20 世紀初頭まで公の文章で漢字表記が使用され、それらの漢字はベトナム独自の発音で読まれていた（王力 1948, 川本 2000）。そのため、現代ベトナム語の語彙では、個々の漢字に対応する発音—漢越音⁴⁾が残っており、日本語の音読みと近似する。さらに、漢字漢語起源の語彙が多く、日本語の熟語構成に似ており、意味用法が類似するものも少なくないと思われている（川本 1979, 岩月 2005, 村上・今井 2010 等）。つまり、現代ベトナム語は、漢字表記を用いていないものの、漢字漢語起源の語彙が多いため、英語のような非漢字圏言語とも異なる特性を持っていると言える。

以上を踏まえ、本稿では、日本語教育に資する形で、ベトナム人日本語学習者を対象にした漢字教育に関する研究を整理した上で、課題を指摘し、今後の研究の方向性を示す。

II. ベトナム人日本語学習者を対象にした漢字教育研究の現状

1. ベトナム人日本語学習者の漢字学習の特性

上述したように、ベトナム人日本語学習者は、他の非漢字圏の母語話者に比べて、日本語の語彙習得に優位性があると思われる。海保（2002）は【表 1】のよう、学習者の母語（L1）の性質から日本語学習者の漢字学習を 4 タイプに類型化し、ベトナム人日本語学習者を「類縁語彙使用者」として他の非漢字圏学習者と区別している。

【表 1】海保（2002）の漢字学習における日本語学習者の分類（筆者により一部改編）

タイプ		特徴
非漢字圏学習者	I. 表音文字使用者	表音文字の音節文字（クリー文字）と単音文字（アルファベット文字）を L1 として使用している学習者。
	II. 類縁語彙使用者	L1 がベトナム語の日本語学習者。ベトナム文字はローマ字アルファベットを使っており、タイプ I と同じだが、多くの語彙、とりわけ越語の発音が漢字の音読みに近似しており、意味や用法にも類縁性が見られるので語彙習得には有利である。
漢字圏学習者	III. 表意・表音併用使用者	ハングル文字と漢字を併用する、または最近まで漢字を併用していた韓国や北朝鮮の日本語学習者。韓国語における漢字語は、音読みの単語表記にのみ用いられ、語彙体系の中で重要な役割を果たす。
	IV. 表意文字習得者	表記手段として漢字のみを用いている日本語学習者。中国大陆・香港、台湾等の学習者。日本語における漢字形と類似しており、漢字語彙の意味上または音声上も類似している。

ベトナム人日本語学習者は、漢字表記を使用していない点においては非漢字圏学習者と言えるが、第 I 章で述べたように、現在、日本国内の日本語教育現場においては、英語母語話者や他の表音文字使用者と区別せずに扱われている場合が多く、ベトナム人日本語学習者のための漢字教育方法が定着していない状況が窺える。そのことから、現在、日本国内の多くの日本語教育現場における「非漢字圏」と「漢字圏」という 2 分類は、不十分なのではないだろうかと考えられる。

2. ベトナム人日本語学習者の漢越語知識と漢字語彙習得の関係

海保（2002）はベトナム人日本語学習者の漢字学習の特性に着眼しているが、実際、漢越語と漢越音が、ベトナム人日本語学習者の日本語学習にどの程度役に立つかという課題が残されている。その課題に注目し、調査や検証を行った先行研究は、以下で整理する。

（1）ベトナム語の漢越語と日本語の漢字語彙との異同調査

松田他（2008）、松田（2016）は日本語能力試験出題語彙（全約 8000 語）の中の二字漢字語（約 4000 語）における漢越語との意味の一致状況を調査した。【表 2】のように、漢字漢語起源の日本語とベトナム語に漢字字形と発音の類似性が見られた。

さらに、次のような結果が明らかになった。①二字漢字語（4000 語）において全体の 5 割が一致語や類似語である。②旧 1 級と 2 級の二字漢字語については日越漢語の一致や類似が 6 割近くに達している。③旧 4 級語彙については日越の漢字語彙の一致度は多くとも 2 割以下であり、旧 3 級も同様に一致度が低い。④和製漢語と漢越語の一致率は 6 割以上で、学術専門用語であれば更に一致する可能性がある。これらの結果から、漢越語知識はベトナム人日本語学習者の日本語学習に役に立つが、特に効果が発揮されるのは中級以降である可能性が高いと結論づけている。この点を検討した研究について、次節で詳しく紹介する。

【表 2】松田他（2008）での漢日語と漢越語の類似例 【表 3】中川・小林（2008）での正誤判断テスト

漢日語	漢越語	テスト例（調査票には振り仮名付け）	正誤判断結果
意見 (i ken)	ý kién (意見)	「反対」 phản đối	
過去 (ka ko)	gúa khú (過去)	① () 私はあなたの考えに <u>反対</u> です。	(日〇ベ〇)
結論 (ketsu ron)	kết luận (結論)	②() 前と後ろが <u>反対</u> ですよ。早く着替えてください。	(日〇ベ*)
注意 (chuu i)	chú ý (注意)		

（2）漢越語と日本語漢字語彙の意味の関連性による正負転移

中川・小林（2008）は、漢越語と使用漢字が一致する日本語漢字単語について、中級以上のベトナム人日本語学習者を対象にして、日本語単語の正誤判断テストを行った。具体的には、【表 3】のように例文を提示し、下線部の意味用法が、日本語とベトナム語でそれぞれ正しいかどうかを判断するように依頼している。例えば、日本語の「反対」は「意見や提案に同意しない」意味と「順序・方向等が逆である」意味があるが、ベトナム語（「phản đối」）では前者の意味用法のみある。正誤判断の結果は【表 3】の右欄のようになる。

この調査を通じて、ベトナム人日本語学習者が日本語の漢字単語を学習する際、一対一の語義対応がある場合は漢越語知識からの正の転移が見られるが、対応していない場合は負の転移か、漢越語知識を利用しない傾向が窺えた。以上の結果を日本語教育現場に活かす具体案として、中川・小林（2008）は次の 2 点を挙げている。①正の転移を活性化させるには教科書に出てくる意味、用法のみを教えるのではなく、初級段階から教科書以外の日越同形漢字を積極的に扱う。②一方、負の転移を避けるためには、日本語の漢字語彙と漢越語との違いを意識的に明示する等し、負の転移を起こさないように努める。

正負転移があることについて検証した点においては大変興味深い研究である。しかし、

(1) で明らかになったように、初中級段階（4 級、3 級）で日越両言語の語彙に一致語や類似語の割合が低いため、教科書以外の日越同形漢字を積極的に扱うことはかえって学習者の負担になる可能性が考えられる。そのため、日越同形漢字を積極的に扱う時期は、日本語学習の初期ではないほうが望ましいと指摘されている（松田 2016, 長野 2018）。この点について検討した先行研究を、(3) (4) で紹介する。

（3）漢越音と日本語の漢字音との音声上の類推・認識の調査

松田（2016）は日本語学習歴がないベトナム語母語話者と初級日本語学習終了程度（漢字 150 字以上既習）のベトナム語母語話者を対象に、旧日本語能力試験 1 級の語彙で構成された、一対一の意味と漢字の対応がある語リストを用いて調査した。具体的には、【表 4】のようなリスト（20 語）を事前に提示し、覚えさせた後に順番を並べ替えて対応するベトナム語を選ぶように指示している。

【表4】松田（2016）での旧1級の語彙で構成された一対一の意味と漢字の対応がある語リスト（一部）

旧日本語能力試験	日本語		漢字		ベトナム語	
1	ぼう	どう	暴	動	BAO	ĐÔNG
1	せん	とう	戦	鬪	CHIÉN	ĐÁU
1	こ	どく	孤	独	CÔ	ĐỘC

その結果、日本語学習歴がないベトナム語母語話者より、初級終了程度の学習者のほうが、成績の平均点が2倍以上高いことが判明した。そのことから、初級前半レベルではさほど活性化されないが、ある程度日本語と漢字の学習が進んだ段階で漢越音との対応の知識が得られれば、日本語の漢語の類推力や語彙習得が加速される可能性があると結論づけている。従って、日本語学習の初期では対応があるという事実だけを伝え、漢字の知識がある程度備わってくる初級後半から、一対一の対応がある語を覚え、漢字の組み合わせから母語訳を類推すれば、効果的な活用が可能になるであろう（松田, 2016:105）。

しかし、実際、漢越語知識がどのような認知的経路をたどって、ベトナム人日本語学習者の語彙習得を加速するかについての検証はされていない。それに焦点を当てたものとして、長野（2017a, b, c, 2018）が挙げられる。（4）で紹介する。

（4）ベトナム人日本語学習者の漢字単語の処理過程

長野（2018）は⁵⁾、日越2言語間の使用漢字の異同と音韻類似性を操作した実験によって、ベトナム人日本語学習者における日本語漢字単語の処理過程を検討している。

その結果、ベトナム人日本語学習は意味処理において、日越両言語間の音韻類似性による促進効果が見られた。音韻類似性が高い単語の場合には、日本語の音韻表象の活性化に伴ってベトナム語の音韻表象も活性化することによって、日本語単語の意味処理が促進される。それに対して、類似性に乏しい、異形で音韻類似性の低い単語の処理が遅れることがわかった。この結果から、ベトナム人日本語学習者にとって、ベトナム語の翻訳同義語と使用漢字が異なり、かつ音韻類似性が低い単語は、L1（ベトナム語）の情報を手掛かりとして使うことができないため、記憶と処理の両方がうまく進まない可能性がある。そして、長野（2018）は漢字指導の際に、特に注意を払う必要があると提案している。この結果は、松田他（2008）、松田（2016）の調査結果を裏付けたと言える。

3. ベトナム人日本語学習者の漢字認識と漢字学習ストラテジー

実際、ベトナム人日本語学習者が日本語の漢字漢語語彙を習得する際に、どのように認識し、どのような方法を用いているかについて調査した研究もある。

Thân（2010）はハノイの4つの大学に在籍している日本語学習者416人にアンケート調査を実施した。その結果、他の非漢字圏学習者と同じようなストラテジーが見られる一方、「漢越音を覚える」「漢越音から連想する」というベトナム人日本語学習者の特徴的なスト

ラテジーがよく使用されていることが明らかになった。

JSL環境のベトナム人日本語学習者の漢字学習意識について調査した研究には、加藤（2018）がある。加藤（2018）は愛知県にある日本語学校に在籍するベトナム人留学生61人に「漢字が好きかどうか及びその理由」についてアンケート調査を実施した。その結果、漢字が好きだと答えた学習者が63.9%を占め、その理由に漢字が「便利だ」「形が面白い」といった回答が多く見られた⁶⁾。また、「漢字が嫌い」な理由として、「覚えられない」「書き方が難しい」といった答えが、回答の全体で80%を占めていることがわかった。

III. ベトナム人日本語学習者を対象にした漢字教育研究の課題

上記の先行研究から考えると、全体において大きく3つの課題が考えられる。それぞれの課題と、その背景について、簡単に述べる。

まず、調査の規模が大きくないことである。それは、ベトナム語を母語とした日本語学習者の多様性が主な原因だと考えられる。ベトナム人日本語学習者には、留学生だけではなく、技能実習生やエンジニア等多様であり、様々な目的で日本語を学習している。学習目的が異なり、必要とする日本語（語彙）も異なるため、調査の困難度が高まるであろう。

二つ目は、同じ仮設が異なる分野から検証されるのに留まっている傾向が見られることである。日本国内ではベトナム語が堪能な日本語教師・日本語教育研究者が多くないことと、ベトナムでは日本語教師の日本語力と専門性が平均していないことから、より基礎的な研究が困難であるからだと考えられる。

三つ目は、他の外国語母語話者（例えば、中国語話者と韓国語話者）との比較研究が少ないことである。その種の研究は、日越中韓4言語の比較研究のサポートが必要だからだと思われる。

IV. 今後の研究の方向性と可能性

第II章と第III章で整理したように、ベトナム人日本語学習者への漢字教育研究は多いと言えず、課題も少なくない。以上を踏まえ、本稿では、たくさん蓄積されている隣接分野の先行研究の成果を活用することを提案したい。具体的には、（I）日本語教育における中国語話者、韓国語話者を対象にした漢字教育研究の成果を参考にする。（II）中国語教育におけるベトナム語話者への漢字教育研究の成果を活用する。次に、1つの可能性を示す。

日本語教育では、ベトナム人日本語学習者の習得度による漢字学習意識の変化に関する研究は見られない。それに対して、中国語教育では研究成果が数多く上げられている。例えば、杜淵天庄（2009）はベトナムで中国語を勉強している学生（150名）を対象に、漢字の習得状況についてアンケート調査を実施した。その結果、ベトナム人中国語学習者は中国語学習の上で、難しく感じる学習項目が習得度によって変化していく。初級学習者は文法が最も難しく感じており、次に漢字が続くのに対して、中級学習者は文法より漢字の

ほうが難しく感じている。上級学習者にとって最も難しく感じる学習項目は初級学習者と同じように文法であり、漢字がその次になることが明らかになった。このような相違には、以下の理由が考えられる。初級では基本的な文法項目の学習に集中し、必要漢字の数が限られているが、中級になると、大量な漢字・語彙の学習を要することになる。レベルアップにつれ、漢字知識をある程度身につけたら、独自の漢字学習ストラテジーが定着するようになるため、漢字学習の難しさが軽減される。このような傾向は、日本語教育においても考えられるという仮設を立てることができる。この仮設に基づいて、レベル別に異なる漢字の指導時間を設けることや、中級学習者へ漢字学習ストラテジーを指導すること等、より早く日本語教育現場に活用できる成果を上げることが可能になるだろう。

そのように、ベトナム人中国語学習者を対象にした漢字教育研究、同じ漢語文化圏である中国語・韓国語の母語話者を対象にした漢字教育研究がたくさん蓄積されているため、それらの研究の成果を活用し、日本語教育の研究を発展させることができると期待できる。さらに、この2つの研究方向に、より根本的に必要となるのは、日越中韓4言語における漢字漢語の体系化（義・音・形）ではないかと思われる。今後の課題として検討していきたい。

注

- 1) 2018年現在、日本に在籍する外国人留学生数が多い出身国の上位3位は、中国（114,950人）、ベトナム（72,354人）、韓国（17,012人）である。
- 2) 国・地域の分け方は日本学生支援機構の「外国人留学生在籍状況調査結果」に従う。
- 3) 中国語教育、漢字研究や漢語研究において、ベトナム語は「漢字文化圏」「漢語文化圏」と見なされる場合が多い。松田他（2008）でも漢字文化圏に属するとされている。
- 4) 王力（1948）は初めてベトナム語に中国語漢語由来の語彙が存在していることを明示し、ベトナム語語彙を「越語」と「漢越語」の2種に分けている。さらに、漢越語の発音を「漢越語音」、「古代漢越語音」、「漢語化越語音」の3種に分けている。その後、「漢越語」「漢越音」が徐々に国際的に知られ、研究が進められるようになったと思われている（劉、2012）。
- 5) 長野（2017a, b, c）の調査・研究結果は長野（2018）でまとめられているため、本稿では主に長野（2018）を引用する。
- 6) 小川・関（2019）はJFL環境のベトナム人日本語学習者を対象に調査しているが、似たような傾向が見られた。

参考文献

- 岩月純一（2005）、「近代ベトナムにおける「漢字」の問題」（村田雄二郎・C.ラマール 編『漢字圏の近代ことばと国家』東京大学出版会）、131-147頁。
- 小川早百合・関かおる（2019）、「ベトナム人日本語学習者の漢字習得プロセスの研究」『聖心女子大学論叢』第133号、144-109頁。

- 海保博之（2002）、「漢字の指導」（海保博之・柏崎秀子編『日本語教育のための心理学』第7章 新曜社、111-121頁）。
- 加藤豊二（2018）、「日本語学校でのベトナム人学習者への漢字教育：アンケートの結果をもとに」『日本語教育論集』第27号、1-8頁。
- 川本邦衛（1979）、「現代ベトナム語漢語・漢字語彙集」特定研究『言語生活を充実発展させるための教育に関する基礎的研究 文字と言語班』国立国語研究所。
- 川本邦衛（2000）、「ベトナムの漢字文化-伝統と現在」『国際交流』20巻(2)、26-32頁。
- Trần Thị Kim Tuyến（2010）、「非漢字圏日本語学習者の漢字学習ストラテジーに関する実証的研究—ベトナム人日本語学習者を対象として」『Ulis』（外国语大学の論集・ベトナム）、476-499頁。
<<http://data.ulis.vnu.edu.vn/jspui/handle/123456789/1320>> (2019/06/26閲覧)。
- 杜淵天庄（2009）、「越南的汉字教学与汉字习得调查研究（ベトナムにおける漢字教育と漢字習得調査研究）」北京言語大学修士論文。
- 中川康弘・小林学（2008）、「ベトナム人日本語学習者の漢越語知識と漢字語彙習得についての一考察—現地における正誤判断テストとインタビュー調査から」『桜美林言語教育論叢』第4号、75-91頁。
- 長野真澄（2017a）、「日本語漢字単語とベトナム語漢越音における音韻類似性調査」『広島大学日本語教育研究』第27号、35-41頁。
- 長野真澄（2017b）、「ベトナム人日本語学習者における日本語漢字単語の視覚的認知：越日2言語間の使用漢字の異同と音韻類似性を操作した実験的検討」『留学生教育』第22号、9-18頁。
- 長野真澄（2017c）、「ベトナム人日本語学習者における日本語漢字単語の処理過程：越日2言語間の使用漢字の異同と音韻類似性を操作した読み上げ課題による検討」『広島大学大学院教育学研究科紀要. 第二部, 文化教育開発関連領域』第66号、165-173頁。
- 長野真澄（2018）、「ベトナム人日本語学習者における日本語漢字単語の記憶と処理：越日2言語間の使用漢字の異同と音韻類似性を操作した実験的検討」広島大学大学院教育学研究科博士学位論文。
- 松田真希子・タンティキム・テュエンゴミントウイ・金村久美・中平勝子・三上喜貴（2008）、「ベトナム語母語話者にとって漢越語知識は日本語学習にどの程度有利に働くか—日越漢字語の一致度に基づく分析」『世界の日本語教育（日本語教育論集）』第18号、21-33頁。
- 松田真希子（2016）、「ベトナム語母語話者のための日本語教育」春風社。
- 村上雄太郎・今井昭夫（2010）、「現代ベトナム語における漢越語の研究(1)ベトナムへの和製漢語の伝播状況」『東京外大東南アジア学』第15号、19-32頁。
- 劉光創（2012）、「利用汉源语素提高对越汉字教学效率的研究（漢語語源要素を利用して漢越語指導の効率を高める研究）」華東師範大学博士学位論文。
- 王力（1948）、「汉越语研究（漢越語研究）」『嶺南學報』9巻(1)、1-96頁。
- 日本学生支援機構「外国人留学生在籍状況調査結果」（平成13年度-30年度）
<https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/index.html> (2019年7月31日閲覧)。

Current situations and issues of research on Kanji education for Vietnamese Japanese learners : Research directions and possibilities

CHEN, Xiuyin

Abstract

This paper summarizes the results of research on kanji education for Vietnamese Japanese learners, points out issues and shows research directions and possibilities.

We found the issues of research on kanji education for Vietnamese Japanese learners are that the survey size is not large, that the same hypothesis is only verified from different fields, and that there are very few comparative studies with other Japanese learners. We proposed to use the results of the following research to obtain an effective method of teaching kanji for Vietnamese Japanese learners. (1) The results of Kanji education research for Chinese Japanese learners and Korean Japanese learners, and (2) The results of Kanji education research for Vietnamese Chinese learners.

Keywords : Vietnamese Japanese learners, Japanese Language Education, Kanji education, Sino-Vietnamese vocabulary, Sino-Vietnamese pronunciation

〈起点〉を表す格助詞「を」と「から」の選択について —三種類のアンケート調査の結果から—

杉村 泰（名古屋大学）

要旨

本稿は日本語のいわゆる〈起点〉を表す格助詞「を」と「から」の選択について、二者択一テスト、○×テスト、複数選択テストの三種類のアンケート調査を利用して論じたものである。これにより、「言える—言えない」という許容度の観点と「言う—言わない」という選択率の観点から「えそうで言わない」など詳細な文法性判断が可能となる。

キーワード： 格助詞、「を」と「から」、二者択一テスト、○×テスト、複数選択テスト

はじめに

本稿は日本語のいわゆる¹⁾〈起点〉を表す格助詞「を」と「から」の選択について、二者択一テスト、○×テスト、複数選択テストの三種類のアンケート調査を利用して論じたものである。二者択一テストは選択率の観点から「言う—言わない」という指標を示し、○×テストは許容度の観点から「言える—言えない」という指標を示し、複数選択テストは選択率と許容度のミックスした指標を示す。これらを組み合わせて使うことにより、「えそうで言わない」など詳細な文法性判断ができる。

その結果、例(1)も例(2)も「を」の選択率が100%となるが、例(1)では「から」でも不自然ながら言えなくもないが、例(2)では「から」だとかなり言いにくいという違いがあることなどを指摘する。

- (1) 彼は7時に家（ ）出て、大学に行った。
- (2) 彼はアメリカの有名大学（ ）出た。

また、例(3)と例(4)を比べると、動作主視点にも観察者視点にもなる例(3)は「を」の許容度も「から」の許容度も高いのに対し、観察者視点にしかならない例(4)は「を」の許容度は低く「から」の許容度は高いという違いがある。このことから、「を」は動作主視点の解釈にならないと使いにくいことを主張する。

- (3) 彼は怒って部屋 {を/から} 出ていった。（動作主視点、観察者視点）
- (4) 彼は怒って部屋 {*を/から} 出てきた。（観察者視点）

I. 先行研究

日本語の〈起点〉を表す「を」と「から」の選択について、三宅（1995, 1996）は次の規則があることを指摘している。

- ・意志的にコントロールされない移動の場合は、ヲ格を使うことができない。

(5) 煙が煙突 {*を/から} 出た。 (無意志)

(6) 太郎が部屋 {を/から} 出た。 (意志)

その上で、三宅（1995）は例(6)のように意志的にコントロールされる場合について、「特に起点を強調したい場合に、カラ格が選択される (p. 71)」と述べている。三宅（1995）の論は基本的に正しいと思われるが、これだけでは例(7)のように意志的にコントロールされるのに「から」が不自然になる場合の説明ができない。

(7) 彼は7時に家 {を/?から} 出て、大学に行った。

これに対し、楠本（2002）は、「家を出る」、「大学を卒業する」、「席を立つ」等いわゆる動作の起点を標示する表現について、「これらの「を」格文は主体が属していたものからの離脱を表し、さらに「私ごと」の延長として離脱する目的が暗示される（例えば、「家を出て会社へ行く」等）というように学習者に教えるならば、「を」格の存在が理解出来、正しい使い方が出来るようになるであろう (p. 10)」と説明している。このように、どのような場合に「を」を使うかという説明をした方が、どのような場合に「から」を使うかという説明より分かりやすいと思われる。

これらの先行研究を受け、杉村（2005）では日本語を母語とする被験者に「私は毎日7時に家（ ）出る」など14問について「を」と「から」の二者択一テストを実施し、「から」が第一義的に〈起点〉を標示するのに対し、「を」は広い意味で〈働きかけの対象〉を標示するものであると主張している。すなわち、A地点からB地点への移動に重点がある場合は「から」が選択されるのに対し、そこでの活動に終止符を打ち、次へのステージに移ることに重点がある場合は「を」が選択される傾向があることを指摘している。

さらに杉村（2016a）では、杉村（2005）の14問の結果をコーパス調査、 χ^2 二乗検定、クラスター分析によって検証し、杉村（2016b）では同じ14問について二者択一テスト（再調査）と○×テストを実施し、許容度と選択率の関係について論じている²⁾。

これに対し、本稿では「二者択一テスト」（選択率調査）と「○×テスト」（許容度調査）に加え、「を」と「から」のうち言えるものを全て選ばせる「複数選択テスト」（選択率と許容度のミックスした調査）を使用することにより、話し手の心の中にある許容意識と実際の選択率との関係をより詳細に分析する。また、本稿では設問の数を先行研究の14問から33間に増やし、「を」は動作主視点の解釈にならないと使いにくいくことなど、先行研究より詳しい意味分析を行う。

II. アンケート調査の概要

本稿では全部で 33 の場面について、二者択一テスト、○×テスト、複数選択テストの三種類のアンケート調査を実施した。その概要を以下に示しておく。

・調査場面：IIIの表 1 に示す 33 場面

・三種類のアンケート調査

① 「二者択一テスト」(選択率)

被験者 70 人に(8)のような設問を提示し、括弧内に「を」と「から」のうちどちらか一つを入れてもらい、「を」と「から」それぞれの割合を出した。

(8) 彼は 7 時に家 () 出て、大学に行った。

② 「○×テスト」(許容度)

被験者 70 人に(9)のような「を」のみの設問、別の被験者 70 人に(10)のような「から」のみの設問を提示し、正しいと思えば括弧内に○を、間違っていると思えば×を記入してもらい、それぞれの○の割合を出した。

(9) 彼は 7 時に家を出で、大学に行った。 ()

(10) 彼は 7 時に家から出で、大学に行った。 ()

③ 「複数選択テスト」(選択率+許容度)

被験者 70 人に(11)のような設問を提示し、「を」と「から」のうち言えるもの全てに○を付けてもらい、「を」のみ、「から」のみ、両方のそれぞれの割合を出した。

(11) 彼は 7 時に家 (を/から) 出て、大学に行った。

・被験者：日本語母語話者（愛知淑徳大学・名古屋大学の学生）、各テストとも 70 人ずつ

・実施日：2019 年 5 月 28 日～10 月 10 日

上の①～③のうち、①は「を」と「から」のうち実際にどちらを選択するか（選択率）を見るテスト、②は「を」、「から」それぞれについて言おうと思えば言えるかどうか（許容度）を見るテスト、③は両者の混合したテストである。②も③も言おうと思えば言えるかどうかを判断基準にしている点では同じであるが、②は「を」と「から」のどちらか一つだけを見て可否判断をするのに対し、③は「を」と「から」の両方を見比べながら可否判断をするという違いがある。

III. 調査結果

三種類のテストの結果をまとめると表 1 のようになる。表 1 は二者択一テストで「を」の選択率が高かったものから順に並べてある。これを見ると、全体的に「家を出る→大学に行く」のように次のステージへの移動を表す場合に「を」の選択率や許容度が高く、「ビルから外に出る→？」のように外部への移動にのみ焦点がある場合は「から」の選択率や許容度が高いこ

88 〈起点〉を表す格助詞「を」と「から」の選択について（論文）

—三種類のアンケート調査の結果から—

とが分かる。

表1 「を」と「から」の調査結果 (二者択一の「を」の降順)	二者択一 選択率 (%)		○× 許容度 (%)		複数選択 選択率+許容度 (%)		
	を	から	を	から	を	両方	から
01. 彼は7時に家()出て、大学に行った。	100.0	0.0	98.6	60.0	58.6	40.0	1.4
02. 彼はアメリカの有名大学()出た。	100.0	0.0	98.6	21.4	97.1	2.9	0.0
13. 彼は一晩泊まった女の家()出た。	90.0	10.0	94.3	74.3	34.3	55.7	10.0
19. 彼は家()出で、一人暮らしを始めた。	88.6	11.4	97.1	42.9	55.7	32.9	11.4
24. 彼は大学()出で、まっすぐ家に帰った。	87.1	12.9	88.6	55.7	45.7	38.6	15.7
09. 彼は校門()出で、まっすぐ家に帰った。	85.7	14.3	95.7	78.6	45.7	45.7	8.6
14. 名古屋行き特急が始発駅()出た。	85.7	14.3	92.9	80.0	50.0	35.7	14.3
28. 彼は学長と喧嘩して、大学()出た。	80.0	20.0	80.0	22.9	64.3	22.9	12.9
31. 彼は買い物が終わって店()出た。	75.7	24.3	90.0	85.7	34.3	57.1	8.6
22. 彼はヤクザの○○組()出た。	74.3	25.7	80.0	37.1	61.4	18.6	20.0
05. 彼は家()出で、すぐに車にはねられた。	72.9	27.1	94.3	77.1	32.9	58.6	8.6
04. 彼は学歴詐称が見つかって、大学()出た。	70.0	30.0	48.6	34.3	58.6	25.7	15.7
11. 彼は刑務所()出で、すぐに万引きで捕まつた。	65.7	34.3	92.9	81.4	17.1	71.4	11.4
30. 彼は店()出で、すぐに万引きで捕まつた。	62.9	37.1	87.1	82.9	14.3	67.1	18.6
32. 彼は玄関()出た。	62.9	37.1	72.9	85.7	28.6	28.6	42.9
16. 淀滞でタクシー()下りて、歩いて帰った。 ³⁾	58.6	41.4	72.9	81.4	18.6	52.9	28.6
07. 淀滞でタクシー()下りて、たばこを吸つた。	57.1	42.9	72.9	87.1	14.3	67.1	18.6
17. 彼は家()出で、外の空気を吸つた。	57.1	42.9	81.4	88.6	21.4	55.7	22.9
03. 彼は怒って部屋()出でいった。	41.4	58.6	87.1	98.6	7.1	81.4	11.4
20. 彼はトイレ()出た。	40.0	60.0	68.6	92.9	7.1	45.7	47.1
29. 名古屋行き特急が3番線()出た。	38.6	61.4	77.1	92.9	8.6	37.1	54.3
18. 彼は地震でつぶれたビル()出た。	31.4	68.6	48.6	90.0	7.1	21.4	71.4
06. 彼はお風呂()出た。	28.6	71.4	72.9	100.0	4.3	54.3	41.4
27. 彼は布団()出た。	24.3	75.7	38.6	100.0	5.7	20.0	74.3
08. 台風の時は家()出るな。	17.1	82.9	62.9	100.0	1.4	55.7	42.9
15. 彼は逃げる時、裏口()出た。	10.0	90.0	25.7	100.0	0.0	11.4	88.6
21. 彼は怒って部屋()出でてきた。	10.0	90.0	38.6	94.3	7.1	34.3	58.6
25. 地震の時は家()出ろ。	10.0	90.0	41.4	94.3	1.4	24.3	74.3
33. 彼が知らない女の家()出でてきた。	5.7	94.3	27.1	100.0	1.4	12.9	85.7
10. 怪しい男がビル()出でてきた。	4.3	95.7	22.9	100.0	0.0	15.7	84.3
12. 警官が彼に、「このビル()出でいけ」と言った。	4.3	95.7	28.6	98.6	2.9	22.9	74.3
23. 怪しい男が校門()出でてきた。	4.3	95.7	25.7	100.0	0.0	10.0	90.0
26. 警官が彼に、「そのビル()出でこい」と言った。	2.9	97.1	22.9	98.6	1.4	10.0	88.6

IV. 調査結果の分析

1. 選択率と許容度

表1の上位2例（表2）は、いずれも「を」の選択率が100%、許容度が98.6%で差がないが、「から」の許容度は約3倍違う。ここで複数選択の結果を見ると、問01も問02も「から」の割合はほぼ0%となっている。しかし、問01では「両方」が40.0%であるため、話し手の心の中では「から」でも言えなくもないと捉えられているのに対し、問02では「を」が97.1%と高いため、話し手の心の中でも「から」は言いにくく捉えられていることが分かる。また、問02は○×テストでは「から」の許容度が21.4%となっているが、「を」と比べながら判断する複数選択テストでは2.9%（「両方」と「から」の合計）しかないため、問01に比べて「を」のイメージが強いことが分かる。

表2 表1の上位2例	二者択一		○×		複数選択		
	選択率 (%)		許容度 (%)		選択率+許容度 (%)		
	を	から	を	から	を	両方	から
01. 彼は7時に家()出て、大学に行った。	100.0	0.0	98.6	60.0	58.6	40.0	1.4
02. 彼はアメリカの有名大学()出た。	100.0	0.0	98.6	21.4	97.1	2.9	0.0

2. 複数選択の割合の高いものの特徴

次に複数選択の「を」「両方」「から」の割合が高いものの順にその特徴を見る。まず表3は複数選択の「を」の割合が高いものである。このうち問02、28、22、04はある組織からの離脱を表す点で共通している。中でも卒業の意味を表す問02は「を」のイメージがかなり強く、選択率も「を」が100%となっている。しかし、それ以外の3問は複数選択で「両方」の割合が約20~40%あり、○×テストや二者択一テストでも約20~40%あるため、話し手の心の中では「から」でも言えなくもないと捉えられていることが分かる。なお、問04の○×テストの結果は「を」も「から」もさほど許容度が高くなかった⁴⁾。この理由については今後考えていきたい。

表3 複数選択の「を」の降順 (上位5問)	二者択一		○×		複数選択		
	選択率 (%)		許容度 (%)		選択率+許容度 (%)		
	を	から	を	から	を	両方	から
02. 彼はアメリカの有名大学()出た。	100.0	0.0	98.6	21.4	97.1	2.9	0.0
28. 彼は学長と喧嘩して、大学()出た。	80.0	20.0	80.0	22.9	64.3	22.9	12.9
22. 彼はヤクザの○○組()出た。	74.3	25.7	80.0	37.1	61.4	18.6	20.0
01. 彼は7時に家()出て、大学に行った。	100.0	0.0	98.6	60.0	58.6	40.0	1.4
04. 彼は学歴詐称が見つかって、大学()出た。	70.0	30.0	48.6	34.3	58.6	25.7	15.7

次の表4は複数選択の「両方」の割合が高いものである。これらは「部屋で怒る→別の場所で頭を冷やす」、「刑務所生活→一般社会での生活」、「タクシー乗車→外での喫煙」、「店・家での活動→外での歩行」のような次のステージへの移動とも捉えれば「を」のイメージとなるし、単なる主体の外部移動とも捉えれば「から」のイメージとなる。そのため、これらは○×テストでも「を」と「から」の両方の許容度が高くなると考えられる。しかし、問03、07に比べ、問11、30、05は二者択一テストで「を」の選択率の方が「から」の選択率よりかなり高くなっている。特に問05は「を」の選択率が72.9%と高く、複数選択テストでも「を」が32.9%と他に比べて高くなっている。これはこの5つの文の中で問05が一番「次のステージへの移動」のイメージが強いためであると思われる。

表4 複数選択の「両方」の降順 (上位5問)	二者択一 選択率 (%)		○× 許容度 (%)		複数選択 選択率+許容度 (%)		
	を	から	を	から	を	両方	から
03. 彼は怒って部屋()出ていった。	41.4	58.6	87.1	98.6	7.1	81.4	11.4
11. 彼は刑務所()出て、すぐに万引きで捕まった。	65.7	34.3	92.9	81.4	17.1	71.4	11.4
07. 淀滯でタクシー()下りて、たばこを吸った。	57.1	42.9	72.9	87.1	14.3	67.1	18.6
30. 彼は店()出て、すぐに万引きで捕まった。	62.9	37.1	87.1	82.9	14.3	67.1	18.6
05. 彼は家()出て、すぐに車にはねられた。	72.9	27.1	94.3	77.1	32.9	58.6	8.6

次の表5は複数選択の「から」の割合が高いものである。これらの文はいずれも外部への移動にのみ焦点があり、次のステージのことはあまり意識されていない。この場合、○×テストでも「から」の許容度が高く、「を」は低くなってしまっており、二者択一テストでも「から」の選択率が90%以上と高くなっている。

表5 複数選択の「から」の降順 (上位5問)	二者択一 選択率 (%)		○× 許容度 (%)		複数選択 選択率+許容度 (%)		
	を	から	を	から	を	両方	から
23. 怪しい男が校門()出てきた。	4.3	95.7	25.7	100.0	0.0	10.0	90.0
15. 彼は逃げる時、裏口()出た。	10.0	90.0	25.7	100.0	0.0	11.4	88.6
26. 警官が彼に、「そのビル()出てこい」と言った。	2.9	97.1	22.9	98.6	1.4	10.0	88.6
33. 彼が知らない女の家の()出てきた。	5.7	94.3	27.1	100.0	1.4	12.9	85.7
10. 怪しい男がビル()出てきた。	4.3	95.7	22.9	100.0	0.0	15.7	84.3

3. 動作主視点と観察者視点

次に動作主視点と観察者視点の違いについて見る。たとえば、例(12a)は動作主である「彼」の視点から述べる場合にも、観察者である話し手の視点から述べる場合にも使われる。本稿では前者の場合を「動作主視点」、後者の場合を「観察者視点」と呼ぶことにす

る。一方、例(12b)のテイク文は視点が起点にあることを明示しているという点で違いはあるものの、例(12a)と同様に動作主視点でも観察者視点でも使われる。これに対し、例(12c)のテクル文は着点に視点があるため、着点側から「彼」の帰りを観察するという観察者視点で使われやすい⁵⁾。

- (12) a. 彼は会社から家に帰った。 (動作主視点、観察者視点)
 b. 彼は会社から家に帰っていった。 (動作主視点、観察者視点)
 c. 彼は会社から家に帰ってきた。 (観察者視点)

ここで表6の問13と問33はいずれも「彼が女の家から出たこと」を表しているが、問13は動作主視点とも観察者視点とも解釈できるのに対し、問33は観察者視点としてのみ解釈されやすいという違いがある。そのため、問13は動作主の視点から「女の家の生活→外での生活」という次のステージが意識されやすいが、問33は外部への移動にのみ焦点があり、その後ことはあまり意識されないという違いが出てくる。このことは○×テストと複数選択テストの結果にも示されており、問13は「を」だけでなく「から」もある程度許容される（「から」+「両方」で65.7%）が、問33は「から」の許容度は高いものの「を」の許容度は低くなっている（「を」+「両方」で14.3%）。

表6 動作主視点と観察者視点	二者択一 選択率 (%)		○× 許容度 (%)		複数選択 選択率+許容度 (%)		
	を	から	を	から	を	両方	から
	90.0	10.0	94.3	74.3	34.3	55.7	10.0
13. 彼は一晩泊まった女の家()出た。	5.7	94.3	27.1	100.0	1.4	12.9	85.7
33. 彼が知らない女の家()出てきた。	41.4	58.6	87.1	98.6	7.1	81.4	11.4
03. 彼は怒って部屋()出でいった。	10.0	90.0	38.6	94.3	7.1	34.3	58.6
21. 彼は怒って部屋()出てきた。	31.4	68.6	48.6	90.0	7.1	21.4	71.4
18. 彼は地震でつぶれたビル()出た。	4.3	95.7	22.9	100.0	0.0	15.7	84.3
10. 怪しい男がビル()出てきた。	4.3	95.7	28.6	98.6	2.9	22.9	74.3
12. 警官が彼に、「このビル()出でいけ」と言った。	2.9	97.1	22.9	98.6	1.4	10.0	88.6
26. 警官が彼に、「そのビル()出てこい」と言った。							

また、問03と問21を比較しても、動作主視点にも観察者視点にもなる問03の方が「を」を取りやすく、観察者視点の問21の方が「から」を取りやすいという結果になっている。なお、同じ動作主視点にも観察者視点にもなる場合でも、問03に比べて先の問13の方が「を」の選択率が高くなっている。これは問13の方が「女の家の生活→外での生活」という次のステージへの移動のイメージが強いためであると考えられる。

同様に問18と問10を比べると、動作主視点にも観察者視点にもなる問18の方が「を」を取りやすく、観察者視点の問10の方が「から」を取りやすいという結果になっている。問18もビルの外に出た後のこととはあまり想定されていないため「を」の選択率は31.4%

と低いが、単にビルからの離脱を観察したことを述べる問 10 に比べると、「ビルに閉じ込められている→外に開放される」という次のステージを読み込みやすいので、相対的に「を」の選択率や許容度が高くなっていると考えられる。

ところで、問 12 と問 26 は形式的に「出ていく」「出てくる」という対立になっているが、どちらも「から」の選択率や許容度が高くなっている。これはどちらもビルからの離脱に焦点があり、その後のことは話の焦点になっていないためであると考えられる。しかし、中国語を母語とする日本語学習者 (N1 合格レベル) 70 人に本稿と同じ二者択一テストを実施したところ、問 12 は「を」の選択率が 57.1%、「から」が 42.9% であったのに対し、問 26 は「を」の選択率が 11.4% で、「から」が 88.6% と大きな差があった。この点については今後考察するつもりである。

おわりに

以上、本稿では二者択一テスト、○×テスト、複数選択テストの三種類のアンケート調査を利用して、日本語のいわゆる 〈起点〉を表す格助詞「を」と「から」の選択について論じた。特に先行研究では使われていない複数選択テストを利用することにより、話し手の心の中にある「言えそうで言わない」のような許容意識と実際の選択率との関係をより詳細に分析した。また、設問の数を先行研究の 14 問から 33 問に増やし、「を」は動作主視点の解釈にならないと使いにくいことなどを明らかにした。紙幅の関係で一部の事象についてしか論じることができなかったが、今後さらに「を」と「から」の選択の要因について分析を進めていくつもりである。また、学習者のデータも分析し、日本語話者との違いを明らかにしていく予定である。

注

- 1) 本稿では「を」は第一義的には〈働きかけの対象〉を標示すると考えるため、「いわゆる」という表現を用いている。
- 2) 杉村 (2005) と杉村 (2016b) の被験者は異なっているが、「を」と「から」の選択率はよく似た数字となっている。
- 3) 設問 16 番と 7 番のみ「出る」ではなく「下りる」の例となっている。これは「タクシーを出る」より「下りる」のほうが自然なためである。
- 4) 杉村 (2016b) でも「彼は学歴詐称が見つかって、大学（ ）出ることになった」の○×テストによる許容度は、「を」が 51.7%、「から」が 40.0% となっている。
- 5) ただし、動作主が一人称の「私」の場合は、テクル文でも動作主視点になると思われる。今回は動作主を三人称に設定して調査したが、今後は一人称の場合と比較する必要があると思われる。

参考文献

- 楠本徹也 (2002) 「「を」格における他動性のスキーマ」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』28号, 東京外国語大学留学生日本語教育センター、1-12頁。
- 杉村泰 (2005) 「起点を示す格助詞「を」と「から」の使い分け」『ことばの科学』第18号、名古屋大学言語文化研究会、109-118頁。
- 杉村泰 (2016a) 「中国語話者における〈起点〉を表す格助詞「を」と「から」の選択について」『日語教育与日本学研究--大学日語教育研究国際研討会論文集 (2015)』、華東理工大学出版社、1-4頁。
- 杉村泰 (2016b) 「日・中語話者における起点を表す格助詞「を」と「から」の選択傾向の違いについて--二者択一テストと○×テストの比較」『日語偏誤与日語教学研究』第1輯、日語偏誤与日語教学研究会、浙江工商大学出版社、3-20頁。
- 三宅知宏 (1995) 「ヲとカラー起点の格標示」宮島達夫・仁田義雄 (編)『日本語類義表現の文法 (上) 単文編』くろしお出版、67-73頁。
- 三宅知宏 (1996) 「日本語の移動動詞の対格標示について」『言語研究』110号、日本言語学会、143-165頁。

Choice of case particles *o* and *kara* indicates starting point or origin:

According to Results of Three Types of Questionnaire Surveys

SUGIMURA, Yasushi

Abstract

This article discusses the choice of case particles *o* and *kara* that indicate starting point or origin, using three types of questionnaire surveys which are alternative test, true-false test, and multiple choice test. Analyzing this results from the perspective of acceptability ("can be used" – "cannot be used") and selection rate ("used" or "not used") enables the researcher to make a fine grammatical prediction of real-life usage ("not likely to be used" etc.).

Keywords : case particles, *o* and *kara*, alternative test, multiple choice test, multiple choice test

日本語の「～でも～でも」構文と「～も～も」構文の選択 —日本人母語話者と中国人学習者の比較—

崔 小萍（名古屋大学大学院生）

要旨

本稿では「～でも～でも」構文と「～も～も」構文の選択について、日本人母語話者と中国人学習者を対象に、二者択一アンケート調査によって考察した。その結果、日本人が「～でも～でも」を選択しやすい文には下記の四つの特徴があることを明らかにした。

I 仮定的なニュアンスが含意される場合

II-1 「でも」の「で」が「だ」の連用形や格助詞の働きを持つ場合

II-2 「A () WH ()」の形で、後項に疑問詞の「何」が使用される場合

II-3 「+ () - ()」の形で、前項と後項が反義・対義関係にある場合

しかし、学習者はこの四つの特徴を身に付けておらず、日本人のような感覚を持っていないため、日本人と開きがあることが分かった。一方、学習者は日本人の多くが「～も～も」を選択する課題文において、「その文に列挙されている要素以外にも並列できる同類項目が連想されやすいかどうか」という基準により、同類項目が連想されやすい場合は「～でも～でも」が選択されやすく、そうでない場合は「～も～も」が選択されやすい傾向のあることを指摘した。

キーワード：「～でも～でも」構文、「～も～も」構文、仮定的ニュアンス、部分列挙、全部列挙

はじめに

本稿は日本語の「～でも～でも」構文と「～も～も」構文の選択における日本人母語話者（以下「日本人」と呼ぶ）と中国人日本語学習者（以下「学習者」と呼ぶ）の違いについて考察するものである。例（1）のように、学習者は「～でも～でも」を使うべき時に誤って「～も～も」を使ってしまうことがある。

（1）日本人：週に三日でも大丈夫ですか。

学習者：三日^{*}も（でも）四日^{*}も（でも）全然大丈夫です。（I-JAS：CCM20-RP1/160/K¹⁾）

これを受けて、本稿では日本人と学習者を対象に、例（2）のような「～でも～でも」と「～

も～も」の二者択一アンケート調査を行った。

(2) 如果是这种程度的问题, 我和他都会。²⁾

これぐらいの問題なら私（ ）彼（ ）できます。

この問題で日本人は 100% 「～でも～でも」を選んだのに対し、学習者は 38.46% しか選択していなかった。このように、学習者にとって「～でも～でも」と「～も～も」の区別は必ずしも容易ではない。しかし、どのような場合に区別が困難になるかについて先行研究では論じられていない。そこで本稿では日本人の「～でも～でも」を選択しやすい文の特徴と学習者がどのような場合に「～でも～でも」と「～も～も」を混同しやすいかについてみていくことにする。

I. 先行研究

庵他 (2001:61) では「～でも～でも」構文について、部分例挙に使い、「どの例をとつてみてもその種類に属するものは」という仮定的なニュアンスを含んでいることを指摘している。これに対して、崔 (2020) では「～でも～でも」構文には部分例挙以外に、全部例挙と裏の意味を帶びやすい用法もあることを指摘している。また、崔 (2020) では、「～でも～でも」の訳語となる中国語の諸形式のうち、「都」は日本語の「AでもBでも」、「+でもーでも」、「WHでもWHでも」、「WHでもBでも」の四つ³⁾と関わることを指摘している。張 (2010) では、「～も～も」の訳語が“都”であることを指摘している。しかし、「～でも～でも」も「～も～も」も中国語の“都”と対応しているため、学習者に混同されやすいが、先行研究ではこの問題について触れていない。そこで本稿ではアンケート調査によって日本人と学習者の「～でも～でも」と「～も～も」の選択傾向を比較することにする。

II. 調査の概要

【調査実施時間】2019年7月15、16日に実施した。

【調査協力者】日本語能力試験 N1 に合格してから、継続 2 年間以上日本語を学習している中国語母語話者 39 名と日本語が母語である名古屋大学の理学部一年生 33 名である。

【調査課題】崔 (2020) の重複型でも構文の分類を基に 25 問設定し、先の例 (2) のように日本人には日本語のみ、学習者には中国語の訳も提示し、（ ）内に「～でも～でも」か「～も～も」のどちらかを一つ書いてもらった。答えの設定としては「～でも～でも」が 13 問、「～も～も」が 10 問、両方とも使えそうな問題が 2 問であった。

【実施方法】日本人には紙媒体によるアンケートを実施し、学習者には“问卷星”というアンケート調査専門サイト (<https://www.wjx.cn/>) を利用して実施した。

III. 調査の結果

上記の調査結果を日本人の「～でも～でも」の選択率の高い順に並べたものを表1に示す。表1の「番号」は課題文の番号を示し、「日中差」は日本人と学習者の選択率の差（日本人選択率－学習者選択率）を示す。

表1 日本人と学習者の「～でも～でも」の選択率の比較（日本人の降順）

番号	課題文	日本人 (%)	学習者 (%)	日中差 (ポイント)
14	スマホがあればいい()どこ()電話ができる。	100.00	94.87	5.13
7	私たちは良い意味()悪い意味()大人になった。	100.00	79.49	20.51
10	私は彼女のことが好き()何()ない。	100.00	76.92	23.08
5	この匂いは芳香剤()香水()ない香りだ。	100.00	66.67	33.33
12	同じ事件が東京()大阪()あった。	100.00	46.15	53.85
17	これぐらいの問題なら私()彼()できる。	100.00	38.46	61.54
20	そんなことはニュース()何()ない。	96.97	61.54	35.43
8	これは彼の長所()短所()ある。	93.94	61.54	32.40
21	私は北海道へ三回()四回()行きたい。	90.91	66.67	24.24
25	政治()金()ないおしゃべりをする。	87.88	66.67	21.21
24	どこの国()組織()強硬派は厄介である。	78.79	79.49	-0.70
13	今回のイベントは先生()学生()参加できる。	72.73	51.28	21.45
18	このコンセントは炊飯器()ラジオ()接続できる。	57.58	41.03	16.55
4	香川県の人はうどんが好きで、消費金額()消費量()全国で一番だ。	39.39	41.03	-1.64
23	明日の留学生バザーには、留学生()日本人学生()ぜひ来てください。	33.33	28.21	5.12
2	今回のイベントのことは先生()学生()知っている。	18.18	58.97	-40.79
3	私は北海道へ三回()四回()行った。	9.09	30.77	-21.68
22	部屋中、台所()廊下()鳥の羽だらけだ。	6.06	58.97	-52.91
15	この名前は読み方()性別()分かりやすい。	3.03	17.95	-14.92
6	何日()何ヶ月()かけて、馬を調教した。	3.03	43.59	-40.56
9	私は顔()体()シャンプーで洗う。	0.00	17.95	-17.95
19	彼がいなくなって、私は悲しさ()寂しさ()大きくなつた。	0.00	17.95	-17.95
11	ここは心()体()リラックスできる場所だ。	0.00	12.82	-12.82
1	引っ越しは時間()手間()かかる。	0.00	10.26	-10.26
16	広瀬姉妹は、姉()妹()美人だ。	0.00	10.26	-10.26

この選択率をグラフで示すと図1のようになる。これを見ると、日本人の「～でも～でも」の選択率が90%以上の場合（図1の課題文14～21番の9例）は、日中差が20ポイント以下のものは課題文14番の1例のみであった。一方、日本人の「～でも～でも」の選択率が10%以下の場合（＝「～も～も」の選択率が90%以上。図1の課題文3～16番の9例）は、日中差が20ポイント以下のものは課題文15・9・19・11・1・16番の6例であった。このことから、学習者は全体的に「～でも～でも」を選択すべき場合に「～でも～でも」を選択するのが難しいと考えられる。ただし、「～も～も」を選択すべき時に「～でも～でも」を選択してしまう場合もあるので、その特徴を明らかにすることが必要である。

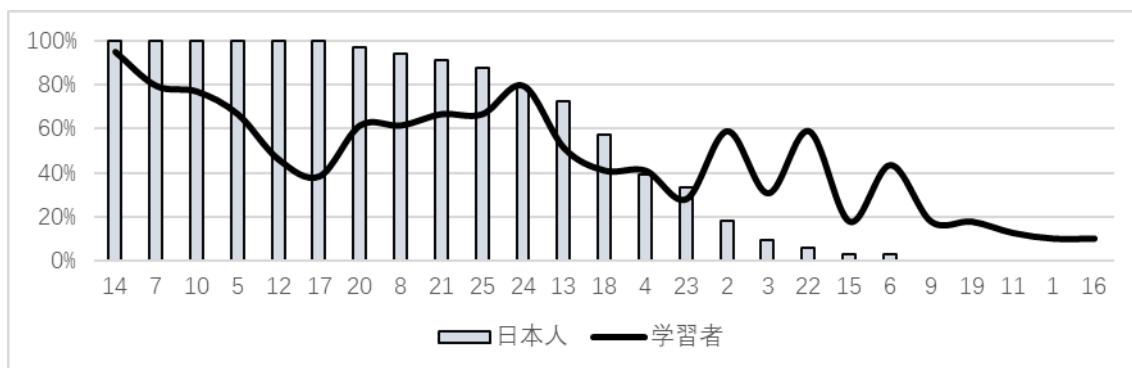


図1 日本人と学習者の「～でも～でも」の選択率の比較（選択率は表1参照）

IV. 日本人が「～でも～でも」を選択する場合の特徴

今回の調査において、日本人の「～でも～でも」の選択率が90%以上の場合に学習者の選択率は38.46%～94.87%の間に広く分布していることから、学習者にとって「～でも～でも」を選択しやすい課題文もあれば、そうでない課題文もあることが分かる。一方、日本人の「～でも～でも」の選択率が10%以下の場合は、学習者の選択率も全体的に低かった。しかし、課題文2・22・6番のように日中差が40ポイントを超え、「～も～も」を使用すべき文において「～でも～でも」を選択してしまう場合も見られた。

まず例(3)と例(4)、例(5)と(6)を比較すると、庵他(2001)でも指摘されているように、日本人は仮定的なニュアンスが含意される文の「～でも～でも」の選択率が高いことが分かる。（以下、スラッシュの左側は日本人、右側は学習者の「～でも～でも」の選択率を示す。）

- (3) 今回のイベントは先生（）学生（）参加できる。（13番）（72.73／51.28）
- (4) 今回のイベントのことは先生（）学生（）知っている。（2番）（18.18／58.79）
- (5) 私は北海道へ三回（）四回（）行きたい。（21番）（90.91／66.67）
- (6) 私は北海道へ三回（）四回（）行った。（3番）（9.09／30.77）

例(3)は「できる」が用いられ、「もし参加したければ」という仮定的なニュアンスを含意しやすいのに対し、例(4)はそのような仮定的なニュアンスを読み込みにくい。同様に例(5)は「もし行けるなら」という仮定的なニュアンスを含意しやすいのに対し、例(6)はそのような仮定的なニュアンスを読み込みにくい。今回の調査において仮定的なニュアンスが含まれる文は、他に14番（「ば」）、17番（「なら」）があり、いずれも日本人の「～でも～でも」の選択率は100%であった。これに対して、日本人の「～でも～でも」の選択率の低い文は単なる事実を表し、仮定的なニュアンスが読み込みにくいものである。

ここで注意したいのは、日本人が「～でも～でも」を選択しやすい場合には、必ずしも

仮定的なニュアンスが伴わない場合もあるという点である。これには以下の3つの場合がある。

第一に、「でも」の「で」が「だ」の連用形や格助詞の働きを持つ場合である。次の例(7)～(9)はいずれも単なる事実を表し、仮定的なニュアンスは感じられない。このうち例(7)と例(8)は「～である／～でない」という断定を表す表現が基盤にあり、それが並列して使用された表現である。ここで「だ」の連用形の「で」を削除すると「AもBもある／ない」という存在表現に変わってしまい、文意が通らなくなるため「～でも～でも」が選択されるのである。同様に例(9)も事件が「～であった」という場所を表す表現が基盤にあり、その場所が並列して使用された表現である。ここで格助詞の「で」を削除すると「AもBもある」という存在表現に変わってしまい、文意が通らなくなるため「～でも～でも」が選択されるのである。手段格、原因格などの場合も同様である。

- (7) この匂いは芳香剤（ ）香水（ ）ない香りだ。 (5番) (100.00/66.67)
- (8) これは彼の長所（ ）短所（ ）ある。 (8番) (93.94/61.54)
- (9) 同じ事件が東京（ ）大阪（ ）あった。 (12番) (100.00/46.15)

第二に、日本人は例(10)、例(11)のように「A（ ）WH（ ）」の形の文においても「～でも～でも」の選択率が高かった。今回の調査では否定文となっていたが、「ハンバーグでも何でも作ってやれ」のような肯定的な文でも同様である。

- (10) 私は彼女のことが好き（ ）何（ ）ない。 (10番) (100.00/76.92)
- (11) そんなことはニュース（ ）何（ ）ない。 (20番) (96.97/61.54)

第三に、日本人は例(12)のように「+（ ）-（ ）」の形の文においても「～でも～でも」の選択率が高かった。上記の例(8)の課題文も同様である。

- (12) 私たちは良い意味でも悪い意味でも大人になった。 (7番) (100.00/79.49)

以上のことから、日本人の「～でも～でも」の選択率が高い文には次のような四つの特徴があると考えられる。（一つの文に複数の特徴が重なる場合もある。）

I 仮定的なニュアンスが含意される場合

- II-1 「でも」の「で」が「だ」の連用形や格助詞の働きを持つ場合
- II-2 「A（ ）WH（ ）」の形で、後項に疑問詞の「何」が使用される場合
- II-3 「+（ ）-（ ）」の形で、前項と後項が反義・対義関係にある場合

V. 学習者の「～でも～でも」と「～も～も」の選択傾向

1. 日本人と学習者の選択率の差

III節の図1に示したように、「～でも～でも」の選択率は、全体的には日本人が高ければ学習者も高く、日本人が低ければ学習者も低くなっている。しかし、部分的に日本人と学習者の差が大きく開くところもある。そこで、本節では表1を「日中差」の降順に並べ替えた表2に基づき、20ポイント以上の差があるものとないものに分けて論じることにする。なお表2の網掛け部分は日中差が20ポイント以上あるものを示す。

表2 日本人と学習者の「～でも～でも」の選択率の比較（日中差の降順）

番号	課題文	日本人 (%)	学習者 (%)	日中差 (ポイント)
17	これぐらいの問題なら私()彼()できる。	100.00	38.46	61.54
12	同じ事件が東京()大阪()あった。	100.00	46.15	53.85
20	そんなことはニュース()何()ない。	96.97	61.54	35.43
5	この匂いは芳香剤()香水()ない香りだ。	100.00	66.67	33.33
8	これは彼の長所()短所()ある。	93.94	61.54	32.40
21	私は北海道へ三回()四回()行きたい。	90.91	66.67	24.24
10	私は彼女のことが好き()何()ない。	100.00	76.92	23.08
13	今回のイベントは先生()学生()参加できる。	72.73	51.28	21.45
25	政治()金()ないおしゃべりをする。	87.88	66.67	21.21
7	私たちは良い意味()悪い意味()大人になった。	100.00	79.49	20.51
18	このコンセントは炊飯器()ラジオ()接続できる。	57.58	41.03	16.55
14	スマホがあればいつ()どこ()電話ができる。	100.00	94.87	5.13
23	明日の留学生バザーには、留学生()日本人学生()ぜひ来てください。	33.33	28.21	5.12
24	どこの国()組織()強硬派は厄介である。	78.79	79.49	-0.70
4	香川県の人はうどんが好きで、消費金額()消費量()全国で一番だ。	39.39	41.03	-1.64
1	引っ越しは時間()手間()かかる。	0.00	10.26	-10.26
16	広瀬姉妹は、姉()妹()美人だ。	0.00	10.26	-10.26
11	ここは心()体()リラックスできる場所だ。	0.00	12.82	-12.82
15	この名前は読み方()性別()分かりやすい。	3.03	17.95	-14.92
9	私は顔()体()シャンプーで洗う。	0.00	17.95	-17.95
19	彼がいなくなって、私は悲しさ()寂しさ()大きくなつた。	0.00	17.95	-17.95
3	私は北海道へ三回()四回()行った。	9.09	30.77	-21.68
6	何日()何ヶ月()かけて、馬を調教した。	3.03	43.59	-40.56
2	今回のイベントのことは先生()学生()知っている。	18.18	58.97	-40.79
22	部屋中、台所()廊下()鳥の羽だらけだ。	6.06	58.97	-52.91

2. 学習者の方が「～でも～でも」の選択率が低い場合

日本人に比べ学習者の「～でも～でも」の選択率が20ポイント以上低かったものは25問中10問であった。これらはIV節で指摘した四つの特徴のうち、17・21・13番はI類（仮定的）、12・20・5・8・10・25番はII-1類（「で」+「も」）、20・10番はII-2類（「A

でも WH でも」)、8・7 番は II-3 類 (「+ でも - でも」) の特徴を示している。これらの課題文において日本人の「～でも～でも」の選択率が全体的に高いが、学習者は日本人のような感覚を持っていないため、「～でも～でも」の選択率が日本人より低くなると考えられる。

3. 学習者の方が「～でも～でも」の選択率が高い場合

一方、日本人に比べ学習者の「～でも～でも」の選択率が 20 ポイント以上高かったものは 25 問中 4 問であった。この場合、課題文に先の四つの特徴がなく、日本人は「～も～も」を選択しやすい。これに対し、学習者は日本人に比べて「～でも～でも」の選択率が高くなっている。ここでこれら 4 問 (3・6・2・22 番) と同様に日本人の「～でも～でも」の選択率が低い表現 (1・16・11・15・9・19 番) を比べると、前者は「A でも B でも」の A と B 以外の要素も推測されやすい (部分列挙) のに対し、後者は A と B 以外の要素を推測しにくい (全部列挙) という違いがある。すなわち、3 番は「五回、六回…」、6 番は「何年、何十年…」、2 番は「事務員、保護者…」、22 番は「トイレ、寝室…」なども推測されるのに対し、後者は選択肢が A と B で網羅的に示されている。このことから学習者は部分列挙の場合に「～でも～でも」の選択率が日本人より相対的に高くなると考えられる。

4. 日本人と学習者の選択率の差が小さい場合

日中の選択率の差が 20 ポイント未満のものは 25 問中 11 問であった。このうち「～でも～でも」の選択率が高いのは 14 番の「いつでもどこでも」や 24 番「どこの A でも B でも」のような固定化した表現である。この場合、学習者はそのままの形で覚えているため、日本人に近い選択率になったと考えられる。一方、日本人の「～でも～でも」の選択率が 30 ～60% の場合 (18・23・4 番) は、学習者も「～でも～でも」と「～も～も」のどちらも使えると捉えやすく、日本人に近い数字になったと思われる。また、日本人の「～でも～でも」の選択率が 5% 以下の場合は、課題文に先の四つの特徴がなく、学習者も「～でも～でも」の選択率が低くなる。その中でもこの 1・16・11・15・9・19 番は、「A でも B でも」において A と B 以外の要素が想像しにくく、網羅的に列挙されている。このように全部列挙のイメージの場合は、部分列挙のイメージの場合に比べて学習者の「～でも～でも」の選択率は相対的に低くなるようである。

おわりに

本稿では、「～でも～でも」構文と「～も～も」構文の選択について日本人と中国人学習者を対象に、二者択一アンケート調査によって考察した。その結果、日本人が「～でも～でも」を選択しやすい文には四つの特徴を持っているが、学習者はこの特徴を身に付けておらず、日本人と開きがあることが分かった。一方、学習者は日本人の多くが「～も～も」

を選択する課題文において、前項と後項以外の要素が連想しやすいかどうかという基準で「～でも～でも」と「～も～も」を区別する傾向を示していることを明らかにした。学習者が「～でも～でも」を選択しやすい文の特徴については今後さらなる調査によって検証したい。

注

- 1) 「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」(I-JAS) の例である。この記号は「サンプ ID/発話番号/話者」を示す。
- 2) 中国語は学習者のみに示し、日本人には日本語のみ示した。
- 3) 「A」と「B」は前項と後項を表す。両者が反義・対義関係にある場合に「+」、「-」と表記し、疑問詞の場合に「WH」と表記する。

参考文献

- 庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘(2001)、『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク。
- 崔小萍(2020)、「～反復構文の日中対照研究--「～デモ～デモ」構文を中心に」『人文学フォーラム』第3号、名古屋大学人文学研究科、刊行予定。
- 張麟声(2010)、「「同類」の「も」と対応する中国語の諸形式との対照研究」『中国語話者のための日本語教育研究』創刊号、1-14頁。

Choice of the Japanese Construction of "... demo ... demo" and "... mo ... mo" : Comparison between Japanese native speakers and Chinese learners

CUI, Xiaoping

Abstract

In this paper, we considered the choice of "... demo ... demo" and "... mo ... mo" construction by using an alternative questionnaire survey for Japanese native speakers and Chinese learners. As a result, it was clarified that the sentence which Japanese people tend to choose the "... demo ... demo" with the following four characteristics:

- I Hypothetical nuance is contained in the sentence.
- II-1 The "de" of the "demo" is conjunctive form or has the function of a case particle.
- II-2 The interrogative word "what" is used in the latter element when in the form of "A () WH ()".
- II-3 The preceding element and the latter element are in an antonymous relation when in the

form of "+ () — ()".

However, because of the unawareness of these characteristics, the learners do not have a Japanese-like sensation. Therefore, it turned out that there is a difference between Japanese native speakers and Chinese learners. Additionally, in the problem sentence that many Japanese choose " $\sim mo \sim mo$ ", learners tend to choose an answer based on the standard of whether it is easy to associate other similar items that can be put together besides the elements listed in the article. In the case where similar items are easy to associate, "... *demo ... demo*" is more likely to be used, otherwise it is "... *mo ... mo*".

Keywords : Constructions of "... *demo ... demo*", Constructions of "... *mo ... mo*", Hypothetical nuance, Partial enumeration, Full enumeration

疑似疑問表現文末型“是不是”構文の有標疑問用法について —その日本語訳との対照を兼ねて—

楊 明（九州大学大学院生）

要旨

本研究では、森山（1989）の「聞き手情報配慮」、「聞き手情報非配慮」の理論を援用し、コーパスにおける文末型“是不是”構文を対象とし、発話行為及び情報への心理的距離という視点からその有標疑問用法及び語用特徴について考察した。無標疑問用法である「命題質問」以外には「推量確認」「認識喚起」「認識要請」という三つの有標疑問用法があることが分かった。文末型“是不是”構文の有標疑問用法を「話し手が聞き手に聞き手領域にある情報に関する自分の推測の妥当性について確認する」「話し手が聞き手に自分と同様な認識を共有するように同感を求めて勧誘する」「話し手が聞き手に常識を形成するようにな要請する」と説明した。その中で、「認識喚起」用法の使用率が最も高く、文頭型、文中型と置き換えにくいことが分かった。

キーワード： 疑似疑問、有標疑問、推量確認、認識喚起、認識要請

はじめに

言語行為とは、口という器官を使ってある音を出すということだけではない。発話場面があり、話し手と聞き手があり、言語そのものの意味と含意があるため、話者が言葉を通してある情報及び態度を相手に伝達するというのが本質である。疑似疑問表現も、こうした言語行為のうちの一つである。仁田（1991:154）では、疑似疑問表現を「〈疑い〉が消滅化・希薄化しているということから相手に認識や追認や同意を求めるといった〈問い合わせ〉の文である」と定義した。日本語の場合では「だろう」などがそれに対応し、中国語の場合では文末型“是不是”構文がその一つに数えられる。

I. 先行研究の概観及び問題提起

従来の“是不是”に関する統語論的研究では、“是不是”構文の命名及び分類帰属に焦点をあてた議論がなされてきた（呂1944:240-259、香坂・宮田1958:137-139、高1986:545-557、守屋1995:219-230など）。しかし、文末型“是不是”的意味用法に対する指摘は極めて少ない。

その一方、語用論的な研究は盛んに行われている。杉村（1994:48-49）では、“是不是”を文末におくと、自分の意見を相手に押しつける厚かましい疑問文になると主張している。邵（1996:123-134）では、“X不X”付加疑問はSの内容について相手の意見を求める或いは確認を求めるに意義があると述べている。宇都（2003:18-19）では、追加型“是不是”的スコープは命題が真であるという話し手の判断に掛かっているとし、聞き手目当てのモダリティに属すると指摘している。関（2006:205）では、聞き手に答えを求めず、会話の参加者の注意を集め、自分の主張に同意し、聞き手や議論の流れを自分の思う方向へ誘導したいといった心的態度を表す場合に、正反タイプ（“是不是”等）の付加部分は平板調から上昇調を示す傾向があると論じている。李（2013:96-102）では、“是不是”が文末に置かれる場合では、疑いの機能があると同時に、話し手の質問意図は聞き手があることをさせるように要求するため、命令の機能もあると結論付けている。中田（2015:101-102）では、話し手は自分の判断は正しいだろうという認識の下で、文末型“是不是”によって聞き手に承認を要求すると主張している。曹（2018:344）では、ある事実について確認を行う場合、話し手の確信度が高い場合は“是不是”を文末に置くと述べている。

以上のように、多くの研究がなされてきたが、文末型“是不是”的有標疑問用法に関する議論が不十分であること、特に具体的な分類、各用法の特徴に関しては再検討する必要がある。

本研究ではコーパスから文末型“是不是”構文の用例を抽出し、その有標疑問用法及び語用機能を解明することを目的とする。

II. 理論的枠組み

言語行為理論によると「発話行為」というものは「命題内容」と「発話の力」からなる。「発語内行為」とは発話行為によってその意図が聞き手に伝わるということであり、提案、勧誘、感嘆など発語内効力があるとしている（J. L. Austin 1962:91-93, 101-107、John. R. Searle 1969:23-24）。また、森山（1989:100）の「聞き手情報配慮」、「聞き手情報非配慮」の理論によると、すべての文は聞き手情報配慮あるいは聞き手情報非配慮であるとしている。さらに、蓮沼（1995:389-399）では情報への心理的距離という観点から日本語における疑似疑問表現の用法を「共通認識の喚起」「認識形成の要請」「推量確認」「認識生成のアピール」「相互了解の形成確認」という五つの用法に分けている。

本論は以上の先行研究を踏まえ、言語理論を援用し、文末型“是不是”構文の意味用法を表1のように分類し定義する。更に、この分類を基準にして各用法の使用実態及び語用特徴を考察する。

表1 話し手・聞き手の情報保持関係による文末型“是不是”構文の用法分類

	話し手情報 確定	話し手情報 不確定
聞き手情報配慮	推量確認（有標）：話し手が聞き手に聞き手領域のある情報に関する自分の推測の妥当性について確認する	命題質問（無標）：話し手が聞き手に命題における不確定情報である事柄について質問する
聞き手情報非配慮	認識喚起（有標）：話し手が聞き手に自分と同様な認識を共有するように同感を求めて勧誘する	
	認識要請（有標）：話し手が聞き手に常識を形成するように要請する	

III. 調査結果と考察

1. “是不是”構文の実態

本研究では北京大学中国語言学研究中心が開発した『現代漢語語料庫』（以下略称 CCL）と北京日本学研究センターが開発した『中日対訳コーパス』（以下略称 CJCS）を利用する。資料選定の基準は、「現代中国語」「文学作品」「会話文」「重複用例除外」という四つのものである。CCL から用例を引用する場合、中国語原文と“是不是”的前後の文脈をより明瞭にするために、中国語原文の下に筆者訳を付けた。それに、例文の意味解釈に差し支えがないということを前提にし、議論を複雑にしないように文末型“是不是”構文は全て「ダロウ」系に訳す。CJCS から用例を引用する場合、中国語原文と日本語訳版をそのまま提示する。本文中では、以下のように原文、出典、日本語訳を記す。

例：——是不是——（CJCS書名/CCL書名）

日本語訳：——日本語訳——（CJCS 書名/CCL 筆者訳）

CCL から 1,258 例、CJCS から 322 例、合計 1,579 例を収集し調査した。その中で、平叙文は 291 例（18.0%）で、疑問文は 1,288 例（82.0%）あることが分かった。また、文のどこに位置するかにより、“是不是”疑問文を文頭型、文中型、文末型という三種類に分けた。それぞれ 198 例（15.0%）、625 例（49.0%）、465 例（36.0%）であることも明らかになった。

2. 文末型“是不是”構文の有標疑問用法

合計 465 例の文末型“是不是”構文の中で、無標疑問用法である命題質問 49 例（10.0%）

を除くと、有標疑問用法は合計 416 例で、疑問用法全体の 90% を占めることが分かった。更に、話し手・聞き手の情報保持関係により有標疑問用法を分類してみると、推量確認が 69 例 (15.0%)、認識喚起が 307 例 (66.0%)、認識要請が 40 例 (9.0%) あることが分かった。各用例数と割合を表 2 に示す。

表 2 文末型“是不是”構文の無標及び有標疑問用法の各用例数と割合

	命題質問	推量確認	認識喚起	認識要請
用例数	49 例	69 例	307 例	40 例
割合	10.0%	15.0%	66.0%	9.0%

また、各用法の代表例を以下に一例ずつあげる。

例(1) 高二林说：“我全想了，没错儿，你瞧好吧。”吕春河摇摇头说：“不一定。我听你这些话，总不象理直气壮，总显着没有根底儿。我断定你这会儿要分家，嘴巴上很硬，心里边打鼓，有点忽起忽落，摇摇晃晃，是不是？”高二林看了吕春河一眼，心头紧了一下，脸色白了一阵子，没说出来什么。（CJCS《金光大道》）

日本語訳：高二林「なにもかも考えた上での事だ。大丈夫、黙って見ていてくれよ」呂春河は首を振った。「そうだろうか。あんたの話を聞いていると、なにかこうスカッとしたところがなくて、危なっかしい気がするんだ。分家のことも口じや強いこと言っているけど、内心ドキドキして、迷いに迷ってるはずだ。違うかい？」呂春河をチラと見やった高二林の顔が一瞬こわばり蒼ざめた。が、なにも言い出せなかった。（CJCS《輝ける道》）

例(2) “君才，”王教授像孩子一样兴高采烈地说，“你知道我们北大的情况近来大不相同了么？不光是那些青年小伙子全活跃起来了，几乎人人口中都在谈论救亡问题；就连我们这些老头子、老教授们，也耐不住一腔热血，也都在一起座谈起国难问题啦！这就叫人心不死，人心不死是不是？”（CJCS《青春之歌》）

日本語訳：「君才、」かれは、子どものように上機嫌だった。「われわれの北大の情況が、最近すっかり変わったことを、知っているかね？若い連中がみんな活躍だし、ほとんどの者が、救国問題を論じはじめているだけでなく、わたしら老頭児教授までもが、みな湧きたぎる熱血をおさえきれず、一緒に国難問題を討論する座談会をもったのだよ！人心は死なずとはこのことだな、人心は死なないものなのだ、そうではないかね？」（CJCS《青春の歌》）

例(3) 他想着，大手攥着拳头，“嘭嘭嘭”地在桌子上猛捶几下子，那水碗跳着、响着，

放凉了的水，泼洒出来。他喊着：“周丽平，是你在背后把她们嘀咕齐了，来跟我闹别扭的是不是？”（CJCS《金光大道》）

日本語訳：朱鉄漢は大きなこぶしでドンドンと激しくテーブルをたたいた。茶碗がはねあがり、音をたて、さめた湯がこぼれた。「周麗平、おめえが陰でけしかけて、おれとひともんちゃく起そうつうんだな」（CJCS『輝ける道』）

例(1)は有標疑問推量確認の用法である。話し手（呂春河）が聞き手（高二林）の様子を見て相手に「あなたは分家のことも口じや強いこと言っているけど、内心ドキドキして、迷いに迷ってるはずだ」という自分の判断の妥当性について確認を求めている。

例(2)は有標疑問認識喚起の用法である。話し手（王教授）は「若い連中がみんな活躍しだし、ほとんどの者が、救国問題を論じはじめているだけでなく、わたしら老頭児教授までもが、みな湧きたぎる熱血をおさえきれず、一緒に国難問題を討論する座談会をもつたのだ」ということは「人心は死なず」ということに相当すると認識している。聞き手（君才）も自分と同じような認識を持っているだろうと考え、話し手がそれを共有するように、厳密に理由を述べたり相手を緩やかに勧誘したり、共鳴を求めたりするという用法である。

例(3)は有標疑問認識要請の用法である。話し手（“他”）は聞き手（周丽平）の「陰でけしかけて、おれとひともんちゃく起そう」という行為に怒った。常識をもっていれば認識できて当然であるが、常識を持ってないから聞き手（周丽平）がこんな行為を行なったのである。このような相手を非難する場面では、話者がイントネーションを上げて反問する形をとることが多い。

3. 文末型“是不是”構文の各用法の質疑度と確信度

(1) 質疑度（情報要求度）について

文末型“是不是”構文の疑問用法の中で、質疑度（情報要求度）が最も強いのは命題質問用法である。話し手が全く不確定な情報について聞き手にその情報を要求し相手の答えを求める為、疑問に無標性を持っている。

命題質問より質疑度（情報要求度）がやや弱いのは推量確認用法である。聞き手と関わる情報に妥当な推測と判断を持っているので、話者はその情報ではなく、自分の推測や判断について相手の確認を求める。

推量確認より質疑度（情報要求度）が弱いのは認識喚起用法である。話者が聞き手に同意や共鳴を求めたり、意見を出して勧誘したり、聞き手にほぼ情報を要求しないというのが特徴である。相手の答えを求める場合では、命題質問のようなその情報に関する答えや、推量確認のような話者の判断の妥当性に関する答えではなく、話者の意見や勧誘に「そうですね」「なるほど」「そうしよう」のような答えを求める。

質疑度（情報要求度）が最も弱いのは認識要請用法である。見た目は疑問文であるが、

実際は反問文あるいは感嘆文の役割を果たす。聞き手のマイナス的な行為に対して批判や勧告などを表す表現であるため、相手の沈黙や謝罪をしばしば求める。

（2）確信度（情報提供度）について

文末型“是不是”構文の疑問用法の中で、確信度（情報提供度）が最も弱いのは命題質問用法である。話し手不確定で聞き手配慮の情報について問う場合では情報提供度はゼロである。

命題質問より確信度（情報提供度）がやや強いのは推量確認用法である。聞き手の状況への観察に基づいて推測した情報は話し手が確信を持っているものである。即ち、妥当な話者の判断を持って聞き手に情報を提供する。

認識喚起用法の確信度（情報提供度）は強い。話者は、ある事柄について相手に自分と同様の認識を求める。しかし、そのまま伝えると相手のフェイスを傷つけたり、会話がうまく進行できなかつたりする可能性がある。そのため、柔らかい語気で文末疑似疑問表現を使って自分の意見を述べたり、勧誘したり自分と同じ様な認識を共有し、情報を提供する。

認識要請用法の確信度（情報提供度）は最も強い。話者は、常識を持っている相手なら誰でも認識できて当然だ、という考え方を持っている。常識を持っていない相手が話者の利益を妨害した場合、その行為を批判し勧告したり、正確な認識の形成を要請したりすることを相手に伝達する。

4. 文末型“是不是”構文の各用法と文頭型と文末型との互換状況

文末型“是不是”構文の各用法の文頭型と文末型の互換状況について以下に述べる。統語上、語用上のどちらでも問題がない場合は、各用法と文頭型の互換できる用例数は命題質問 27 例 (55.1%)、推量確認 15 例 (21.7%)、認識要請 16 例 (40.0%) である。最も少なかつた認識喚起はわずか 8 例のみで、全 307 例中 2.6% であった。また、各用法と文中型の互換できる用例数は命題質問 24 例 (49.0%)、推量確認 11 例 (15.9%)、認識要請 29 例 (72.5%) である。ここでも認識喚起の用例が最も少なく、わずか 9 例のみで、全体の 2.9% であった。統計データを表 3 に示す。この結果から、文末型“是不是”構文の認識喚起用法は、文頭型、文中型ともに互換されにくいことが分かった。認識喚起用法は文末型“是不是”構文の他の意味用法は異なり、最も顕著な特徴を持っている有標疑問用法であると言えよう。

表3 文末型“是不是”構文の各用法の文頭型と文中型と互換できる用例数及びその割合

	命題質問	推量確認	認識喚起	認識要請
文頭型と互換できる用例数	27例	15例	8例	16例
割合	55.1%	21.7%	2.6%	40.0%
文中型と互換できる用例数	24例	11例	9例	29例
割合	49.0%	15.9%	2.9%	72.5%

おわりに

本研究ではコーパスにおける文末型“是不是”構文を対象とし、発話行為及び情報への心理的距離という視点から、その有標疑問用法及び語用特徴を調査した。無標疑問用法である「命題質問」以外には「推量確認」「認識喚起」「認識要請」という三つの有標疑問用法があることが分かった。その中で、「認識喚起」用法の使用率が最も高く、文頭型、文中型と置き換えにくいことが分かった。今後、コーパス以外にテキスト（文学作品）からデータを収集し、実例を挙げながら以上の仮説を更に検証していきたい。

参考文献

【日本語文献】

宇都健夫（2003）、「“是不是”を用いた「確認性疑問形式」」『東京大学中国語中国文学研究室紀要』第6号、1-23頁。

香坂順一・宮田一郎（1958）、『中国標準文法』江南書院。

杉村博文（1994）、『中国語文法教室』大修館書店。

関光世（2006）、「中国語における文末付加型疑問文のイントネーションに関する観察—正反タイプを中心にして」『京都産業大学論集』人文科学系列第34号、187-208頁。

曹泰和（2018）、「“是不是 NP/VP?” 疑問文の意味的特徴及び語用的機能—モダリティ及び類型論の視点から」立命館法学別冊『島津幸子教授追悼論集 ことばとそのひろがり』6、323-346頁。

中田聰美（2015）、博士論文「中国語における“是”構文の意味と機能」大阪大学14401甲第18184号。

仁田義雄（1991）、『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房。

蓮沼昭子（1995）、「対話における確認行為—「だろう」「じゃないか」「よね」の確認用法」（仁田義雄『複文の研究（下）』くろしお出版）、389-419頁。

森山卓郎（1989）、「コミュニケーションにおける聞き手情報—聞き手情報配慮非配慮の理論」（仁田義雄・益岡隆志『日本語のモダリティ』くろしお出版）、95-120頁。

守屋行則（1995）、『やさしくくわしい中国語文法の基礎』東方書店。

【中国語文献】

高名凱（1986）、『漢語語法論』開明書店。

李晓琳（2013）、「“是不是”弱问句：从真问到反问的中间环节」『汉语学习』第3期、96-102頁。

吕叔湘（1944）、『中國文法要略 中卷』商务印书馆。

邵敬敏（1996）、『现代汉语疑问句研究』商务印书馆。

【英語文献】

J. L. Austin (1962), *How to Do Things with Words*, Harvard University Press.

John. R. Searle (1969), *Speech acts :an essay in the philosophy of language*, Cambridge University Press.

【用例出典】

『中日対訳コーパス』(CJCS) 北京日本学研究センター

『現代漢語語料庫』(CCL) 北京大学中国語言学研究中心

On the Marked Question Usage of Chinese Pseudo-question “Shi Bu Shi” : Sentence-final Construction

YANG, Ming

Abstract

To explore the marked question usage and the pragmatic features of Chinese pseudo-question “Shi Bu Shi” sentence-final construction in corpus, this paper used the viewpoint of the speech acts and the psychological distance to the information based on Moriyama(1989)’s theory of “listener’s information consideration and listener’s information unconsideration”. Through the investigation of all the examples, it was revealed that in addition to the “Questioning a proposition” which is an unmarked question, there were three marked question usages of Chinese “Shi Bu Shi” sentence-final construction. “Checking the results of estimation”, “Arousing recognition”, and “Requesting recognition”. Then this paper explained the following three usages: “The speaker confirms his own validity about the information in the listener’s area to the listener”, “The speaker talks solely to the listener to share the same recognition with him”, and “The speaker asks the listener to form common sense”. Among them, we also found that the usage of “Arousing recognition” is the most frequently used and it was difficult to be replaced by sentence- initial type and mid-sentence type.

Keywords : pseudo-question, marked question, checking the results of estimation, arousing recognition, requesting recognition

中国語を母語とする日本語学習者の多義的基本動詞の習得に関する実証研究 —認知言語学の視点から—

王 雋（九州大学）

要旨

認知言語学の視点から見ると、多義語の様々な語義は、メタファーなどといった関連付けによって、一つのネットワークを構築している。そのため、語義間の関連性を理解した上ででの学習は、多義語の習得を促進するということが提案された。本研究は中国語を母語とする日本語学習者によって効果的な多義語学習法を検証するという目的で、研究課題を「①認知学習は対訳学習より学習効果が高いか」、「②認知学習は記憶保持の面で効果的であるか」の二つに設定した。

研究方法として、学習者を認知群と対訳群の二グループに分け、各自の方法で学習させ、事前テストと事後テスト、遅延テストによる得点の差で学習効果を検討するという実験を設定した。その結果、課題①について、受容と産出の事後テストでは、認知群の得点が有意に高かったため、学習効果がより高いということが示唆された。また、課題②について、認知群は事前テストより、事後テストの得点が有意に伸びたが、遅延テストではまた下がったため、記憶保持の面からあまり効果的とは言えない。その理由として、本実験では一つの派生義による拡張関係を学習するだけでは限界があり、語義の意味ネットワークが形成されていない可能性が考えられる。今後はどのような認知学習活動が意味ネットワークの形成につながるかについて研究したい。

キーワード： 多義語、認知言語学、学習効果、記憶保持、多義語意味ネットワーク

はじめに

第二言語の語彙習得過程には、二つの段階がある（海保・柏崎 2002）。一つは、初級学習者が基本単語を独立した項目として、数百語から数千語程度覚えていく段階であり、もう一つは、中上級学習者が文章や談話の中で、未知の意味を推測しながら学習していく段階である。すなわち、語彙の「広さ」と「深さ」の二つの側面から第二言語学習者の語彙力が問われる。そのうち、「深さ」の側面から見る語彙力の一つに、多義語の複数の意味や用法を十分に使いこなす能力がある。しかし、Kellerman (1979) や杉村他 (1998) などの

研究によると、使用頻度が高く、意味範囲が広く、母語との対応関係を見つけにくいなどの理由で、学習者は上級になっても多義語の習得に大変困難を感じる。

多義語とは、国広（1982：97）の定義によると「同一の音形に、意味的に何らかの関連をもつたつ以上の意味が結びついている語」である。しかし、従来の辞書では、多義語の複数の語義が並べられているだけで、意味間の関連性に関する情報が含まれていない。学習者はただ羅列された意味項目を丸暗記していては、その効果は期待されない。それに對して、認知言語学は、意味間の関連性に着目し、多義語の意味ネットワークの構築を試み、有効な学習法を提案している。本研究の目的は、中国語を母語とする日本語学習者を対象に、認知言語学による多義語学習法の効果を検証することである。

I. 認知言語学における多義語研究

多義語の複数の語義を一つのカテゴリーとして見ると、それぞれの語義や用法の間に、典型度による差が感じられる。例えば、「切る」というと、最も想起しやすく、典型的な語義は「パンを切る」のような例文に示された＜物を分断する＞という意味である。この用法から、具体的なものではなく、＜関係を分断する＞という意味に拡張し、「親子の縁を切る」のような例文が作られる。このような類似性に基づく意味展開はメタファーと呼ばれる。また、＜物を分断する＞という典型的な意味から、＜分断して、開ける＞に拡張し、「手紙の封を切る」という例文が作られる。このような隣接性に基づく意味展開はメトニミーと呼ばれる。認知言語学によると、多義語は最も典型的な語義を中心に、メタファーやメトニミーなどの経路を通じて非典型的な語義へと拡張し、意味ネットワークを構築している。この最も典型的な語義は中心義と呼ばれ、他の派生義を理解する手がかりとなっている。Verspoor and Lowie（2003）は多義語習得における中心義の重要性を検証した研究である。オランダ人英語学習者を調査語¹⁾の中心義が提示される処置群と派生義が提示される対照群に分け、もう一つ別の派生義を推測するテストを実施した。その結果、処置群の推測成功率が有意に高かったため、中心義に関する知識から語義間の関連性を見出しいやすく、多義語習得が促進されるということが示唆された。

また、この意味ネットワークに基づき、語義間の関連性を重視した学習法が提案された。黒沢（1999）と麻生（2013）では、語義の派生関係を推測するという学習活動を通して、調査語確認の事後テストでは得点が伸びたという結果が見られた。派生関係の推測による学習効果を検証した上で、麻生（2013）はさらに、母語の訳語と対応しながら覚える「対訳学習」の効果と比較した。その結果、両学習法の間に有意差が見られなかった。これに對して、Csábi（2004）、張（2010）、蔣（2017）は派生関係を明示的に指導することによる効果を検討した研究である。この三つの研究では、学習者を派生関係が提示される処置群と母語訳語が提示される対照群に分け、学習効果を検討する事後テストと記憶保持を検討する遅延テストを行った。その結果、どちらの研究においても、処置群のテストの得点が

有意に高かったため、派生関係に関する知識は学習効果を高めると結論づけられている。

このように、語義の関連性を理解することは多義語の習得を促進するということが明らかになったが、対訳学習より効果が高いかどうかは更なる検討が必要である。また、上記の先行研究では、事前テスト、遅延テストのどちらかが行われていないため、記憶保持についての分析が足りないと思われる。そこで、本研究は語義の関連性を理解する学習法を「認知学習」と呼び、中国語を母語とする日本語学習者を対象に、課題①「認知学習は対訳学習より学習効果が高いか」、課題②「認知学習は記憶保持の面で効果的であるか」を設定した。

II. 実験概要

学習効果と記憶保持を検証するための実験を設定した。具体的には、学習者を認知群と対訳群に分け、順番に「事前テスト、学習活動、事後テスト、遅延テスト」を行い、テストによる得点で分析する。分析方法として、課題①の学習効果について、 t 検定で両群の得点を比較する。課題②の記憶保持について、一元分散分析で事前テスト、事後テスト、遅延テストの得点を比較する。

1. 実験の協力者

多義語を理解し、運用するには一定の日本語能力が必要とされるため、実験協力者は中級以上の学習者が望ましいと考え、中国のZ大学日本語専攻の二年生と三年生の学生に協力してもらった。それぞれの学年において、クラスが二つずつあるが、授業内容と指導教師は同じである。期末試験と担任教師の評価から、学習者の日本語レベルはクラスによる差がほとんどないと判断したため、学年ごとにクラス別で認知群と対訳群に分けた。最終的に有効計数76名において、認知群は39名で、対訳群は37名である。

2. 実験の資料

まず、調査語について、品詞を統一するため、構文において最も重要な基本動詞に絞ることにした。調査語を選択する際に、以下四つの条件を付けて、森山（2012）²⁾から、「当たる、迫る、付ける、直す、走る、引く、回る」の7語を選んだ。

- 1) (旧) 日本語能力試験出題基準4~2級の語である。
- 2) 中心義が学習者の母語である中国語と対応しない。
- 3) 日本語独自の派生義を持っている。
- 4) その派生義は中心義から拡張した語義である。

次に、テストの内容は、ネーション（2005）が設定したテスト項目に従い、受容では調査語を中国語に訳し、産出では調査語を日本語に訳すという形を採用した。本研究の「受容」とは、ネーション（2005）で述べられたようにリーディングによる言語インプットを

理解することであり、「产出」とはライティングによる言語形式を作り出すことである。具体的にテストで使う問題文は表1のように、受容と产出それぞれで、一つの調査語につき、中心義と派生義1を含む問題文1文ずつある。受容では、対象語に下線を付し、学習者に中国語訳を求めた。产出では、問題文を日本語に訳すように求めたが、学習者の負担を減らすため、調査語以外の語彙の一部を日本語で添えた。また、受容テストに派生義2を含む問題文も入れたが、学習活動で語義を与えず、学習者の推測を考察するものになる。本研究のこの後の分析では「推測文」と呼び、他の問題文と分けて分析する。

表1 テストで使う問題文の例

「回る」	受容	产出
中心義	扇風機が <u>回る</u> 。	地球围着太阳转。(地球、太陽)
派生義1	ちょうど5時を <u>回った</u> ところだ。	晚上过了12点就困。(夜、眠くなる)
派生義2	きつい仕事が <u>回ってきません</u> ように。	

そして、学習効果で使う資料について、表2のように、調査語の語義を中国語で提示し、テストで使う問題文と異なる例文を挙げた。

表2 学習効果で使う資料の例

調査語	語義		例文
回る	※ 	旋转、转动 ※(时钟、计量器的表针转动后) 超过某时间或数值	風で風車が回っている。 ちょうど5時を回ったところだ。

注：※は語義の関連性を示すイラストと中国語の説明であり、認知群のみに付記した。

3. 実験の流れ

実験では、まず事前テストを行い、その後テスト用紙を回収した。次に、両群の学習者にそれぞれの学習資料を配り、語義を覚えるよう指示した。ただし、認知群のみに対して、中心義と派生義の意味展開を理解してもらうため、調査語に入っていない動詞「切る」を例に簡単に説明した。学習活動が終って5分ほど休憩を挟んで、事後テストを行った。また、先行研究（張 2010、蔣 2017）に従って、事後テストから二週間後、遅延テストを実施した。三回のテストは内容が同じである³⁾。

III. 実験の結果と考察

受容テストでは、調査語の中国語訳が正しいかどうかにより1文1点の14点⁴⁾満点で採

点した。産出テストでは調査語が使われるかどうかにより 1 文 1 点の 14 点満点で採点した。各テストの平均点と標準偏差を表 3 に示した。

表 3 テストの結果

		認知群			対訳群		
		n	M	SD	n	M	SD
受容	事前	39	8.15	1.53	37	7.59	1.44
	事後	39	11.10	1.59	37	10.14	1.93
	遅延	39	10.49	1.37	37	9.43	1.41
産出	事前	39	6.95	1.99	37	7.00	2.03
	事後	39	11.36	1.86	37	10.32	1.96
	遅延	39	10.72	2.00	37	9.84	2.27

1. 課題①：学習効果の結果・考察

全てのテストにおける両群の得点を *t* 検定で比較した結果、受容の事後テスト (*t* (74) = -2.39, *p*=0.02) と遅延テスト (*t* (74) = -3.31, *p*=0.00) および産出の事後テスト (*t* (74) = -2.36, *p*=0.02) に有意差が見られた。いずれにおいても、認知群の得点は対訳群より有意に高かったため、認知学習の効果がより高いということが示唆された。具体的にどのような語義において差が出たかを考察するため、用例別で両群の有意差を検定した。

まず、受容の結果、特に「蜘蛛が糸を引く」という文は事後テストと遅延テストの両方において有意差が見られ、どちらのテストにおいても認知群の得点が高かった。誤った回答を見ると、「织网（網を作る）」と書いた人が多く、これは事前テストにおいても多く見られるが、両群の間に有意差がなかった。恐らく学習者は蜘蛛の特徴を連想しながら答えたと推測されたが、学習活動の後、認知群学習者の正答者数が多くなったということになる。学習活動で両群の学習者に同じ派生義文の「納豆が糸を引く（拉丝）」を挙げているが、その上に「伸ばして広げる」という意味展開の説明を受けた認知群学習者は、正確に「吐丝」と書いた人が増えた。それに対して、意味展開の説明を受けていない対訳群学習者は、事前テストの誤った答えを書き続けたのではないかと考えられる。

また、産出の結果、「夜、12 時を回ると眠くなる」と「この部分は辞書に当たってもう一度調べてください」という用例に有意差が見られた。認知群学習者は「回る」と「当たる」を使用しているのに対して、対訳群学習者は「過ぎる」と「確認する」と答える人が多かった。対訳群の回答は認知群の事前テストでも多く見られ、提示された中国語の意味とも合っているが、学習活動の後に認知群の正解が増えたのは、派生関係を理解することによって、深い処理が行われ、記憶痕跡が強められたからではないかと考えられる。

2. 課題②：記憶保持の結果・考察

三回のテスト得点を一元分散分析で検定した結果、認知群の受容 ($F (1.73, 65.83) = 79.75, p=0.00$) と産出 ($F (2, 76) = 165.36, p=0.00$) の両方において有意差が見られた。多重比較 (Bonferroni) の結果、いずれにおいても、事前 < 事後、事前 < 遅延、遅延 < 事後であった。対訳群も受容 ($F (2, 72) = 34.91, p=0.00$) と産出 ($F (1.69, 60.99) = 50.28, p=0.00$) の両方において有意差が見られたため、多重比較 (Bonferroni) で検定したところ、いずれにおいても事前 < 事後、事前 < 遅延という結果であった。

認知群と対訳群のどちらの学習者も事前テストと比べ、事後テストと遅延テストの得点に伸びが認められたため、両学習法は効果があったと言えよう。しかし、認知群学習者は遅延テストの得点が事後テストより有意に低かったため、記憶保持の面から考えるとあまり効果的とは言えない。これに対して、対訳群は事後テストと遅延テストの間に有意差がないのは、事後テストでは認知群ほど得点が伸びなかつたため、遅延テストで有意差が出るほど得点が下がらなかつたという理由が考えられる。

次に、認知群学習者の遅延テストにどのような例文において得点が下がったかを考察するため、用例別で比較した。その結果、受容において遅延 < 事後の例文は見られなかつたため、全体において得点が下がつたと考えられる。また、産出においては、「辞書に当たる」という文は事前 < 事後、遅延 < 事後という結果が見られた。学習者の回答を見ると、事前テストと遅延テストでは同様に「辞書を引く」、「辞書で調べる」と書く人が多かつた。学習者は学習活動の直後は調査語の「当たる」を産出する人が増えたが、時間が経つと記憶が薄くなり、定着している既存知識を使って回答したということが推測される。

3. 推測文の結果・考察

推測文も1文1点の7点満点で採点し、両学習群の推測文得点をt検定で比較した結果、有意差が見られなかつたため、推測成功率は学習活動による差がないということである。また、一元分散分析で三回のテスト得点を比較した結果、認知群学習者の事前テスト得点は事後テストよりも有意に高いということが分かつた。なぜ認知群学習者は学習活動の後、かえつて得点が下がつたのかを考察するため、用例別で比較した。その結果、「学生の指導に当たる（担任）」、「英語を日本語に直す（翻訳）」という文に有意差があつた。学習者の回答を見ると、事前テストで正解を書いた人が、事後テストで「確認」、「訂正」という回答をした。これは学習活動で提示した「当たる」と「直す」の派生義1の語義であり、学習者は学習活動で覚えた語義を事後テストで間違えて使つたということである。つまり、学習活動は認知群学習者の推測成功率を高めることができず、かえつて学習者を混乱させたということになる。恐らく学習者が語義の意味範囲と限界について明確に理解していなかつたためだと考えられる。今回の実験は中心義からの一つの派生関係のみを扱つてゐるが、学習者に語義の意味範囲と限界を理解してもらうには、より多くの派生関係を取り入

れ、意味ネットワークに気づかせる必要があるのではないかということが示唆された。

おわりに

結果をまとめると、課題①の学習効果について、事後テストでは受容と産出のいずれにおいても認知群の得点が対訳群より有意に高かったため、認知学習の効果はより高いということが示唆された。また、課題②の記憶保持について、認知群は事前テストより事後テストの得点が有意に伸びたが、遅延テストではまた下がったため、あまり効果的とは言えない。しかし、今回の実験において、産出テストでは調査語以外の語が使われた場合、意味が合っていても0点で採点したため、十分に考察することができなかった。今後は産出の採点基準とテストの型について再検討する必要があると思われる。また、今回の実験では一つの派生義によるワンパターンの意味展開を学習するだけでは限界があり、学習者は語義の意味範囲を明確に把握することができず、語の意味ネットワークが形成されにくいということが示唆された。そのため、実験手法を見直し、どのような認知学習により、意味ネットワークが形成されるかを今後の課題にしたいと考えている。

注

- 1) 調査の対象語彙を指す。
- 2) 森山(2012)は認知言語学による意味ネットワークに基づいて作られた多義語学習辞典であるため、参考にした。
- 3) 産出テストでは、受容テストの問題文による影響を抑えるため、受容テストが終わった後に用紙を回収してから、産出テストの用紙を配ることにした。
- 4) 「14点満点」とは推測文7文を除いた点数である。つまり推測文を除き、受容テストでは調査語1語ずつ二つの問題文がある。受容テストも産出テストも、1語に対し、点数配分は7分の1である。

参考文献

- 麻生迪子(2013)、『多義語派生義の学習法に関する考察：学習活動・習熟度・透明性の観点から韓国人日本語学習者を対象にして』九州大学大学院 比較社会文化学府 博士論文。
- 海保博之・柏崎秀子(2002)、『日本語教育のための心理学』新曜社。
- 国広哲弥(1982)、『意味論の方法』大修館書店。
- 黒沢学(1999)、「訳語間の派生関係について推論を求める教示が外国語語彙の獲得に及ぼす影響」『教育心理学研究』47(3)、364-373頁。
- 杉村和枝・赤堀侃司・楠見孝(1998)、「多義動詞のイメージスキーマ—日本語・英語間におけるイメージスキーマの共通性の分析—」『日本語教育』99、48-59頁。
- 瀬戸賢一(2007)、「メタファーと多義語の記述」(楠見孝『メタファー研究の最前線』ひつじ書房)、31-61

頁。

ネーション (2005)、『英語教師のためのボキャブラリーラーニング』(吉田晴世、三根浩訳、原著は 2001 年発行) 松柏社。

森山新 (2012)、『日本語多義語学習辞典動詞編』アルク。

蒋新桃 (2017)、「基于原型范畴理论的日语多义词习得实证研究」『日语学习与研究』192(5)、74-81 頁。

张绍全 (2010)、「英语专业学生多义词习得的认知语言学研究」『外国语文』26(4)、101-107 頁。

Csábi, S (2004), “A cognitive view of polysemy in English and its implications for teaching,” *Cognitive Linguistics, Second Language Acquisition, and Foreign Language Teaching*, pp. 233-256.

Kellerman, E. (1979), “Transfer and non-transfer: Where we are now,” *Studies in Second Language acquisition*, 2(1), pp. 37-57.

Verspoor, M. & Lowie, W. (2003), “Making Sense of Polysemous Words,” *Language Learning*, 53(3), pp. 547-586.

An Empirical Study on Acquiring Polysemous Basic Verbs by Chinese learners of Japanese: From the View of Cognitive Linguistics

WANG, Jun

Abstract

From the view of cognitive linguistics, the meanings of polysemous words form one network by association such as metaphor. Therefore, it was suggested that learning with understanding the relation between meanings promotes the acquisition of polysemous words. This study examines the effects of polysemy learning using cognitive linguistics in terms of learning effects and memory retention for Chinese learners of Japanese.

As a research method, learners are divided into two groups, a cognitive group and a translation group. Examining the learning effect by the difference between the scores of the pre-test, post-test, and delay test. As a result, in the post-test, it was suggested that the learning effect was higher because the score of the cognitive group was significantly higher. In the cognitive group, the score of the post-test was significantly higher than that of the pre-test, but the score of the delay test was decreased again, so that it is not very effective in terms of memory retention. The reason is that there is a limit to learning the extended relation by one derivative in this experiment, and it is possible that the semantic network of the meaning is not formed. Further studies are needed in order to find what cognitive learning activities lead to the formation of meaning networks.

Keywords : polysemous words, cognitive linguistics, learning effect, memory retention, meaning network

論文における主張をまとめる文末表現の使用実態について —日本語母語話者と中国人日本語学習者の比較—

李 成愛（山東科技大学）

要旨

本研究は論文で主張をまとめる際によく使われる表現「と思う」系と「と考える」系に焦点を当てて、日本語母語話者との比較を行い、卒業論文における中国人日本語学習者の主張をまとめる文末表現の使用実態を明らかにした。日本語母語話者の使用傾向をみると、「と考えられる」が一番よく使われており、その次が「と思われる」、「と考える」である。一方、中国人日本語学習者は「と思う」が一番よく使われており、その次が「と思われる」、「と考えている」であり、日本語母語話者が論文でよく用いられている「と考えられる」と「と考える」の使用が非常に困難であることが確認できた。また、「と思う」の使用例を5つの用法に分類した結果、「判断・意見」の用法で使われているのが5割以上占めており、このことから中国人日本語学習者は主張の提示のために主観的な語「と思う」を多用しており、客観性を重んじる論文において主観的な語は不向きであることに対する認識が薄いことが今回の調査で明らかになった。また、中国人日本語学習者の使用例について具体的に分析した結果、「と考える」、「と考えられる」、「と思われる」の使い分けができず、不自然な使用例も多数あり、今後の論文指導において、上記の表現の指導を強化し、また日本語母語話者の実際の使用例を提示すると同時にそれらの表現の使用を促すことも必要であろう。

キーワード： 卒業論文、主張をまとめる文末表現、「と思う」系、「と考える」系

I. 本研究の背景と目的

レポートや論文で書き手の主張をまとめる際、確実に断定できる場合は「である」を用いるが、そうでない場合は断定の程度の違いを表す文末表現の使い分けが必要になってくる。しかし、中国人日本語学習者の卒業論文をみると、上級者であっても適切な文末表現の使用が困難で、書き手の主張をまとめる際、「と思う」を多用する現象が非常に目立つのである。

近年、中国人日本語学習者の作文や意見文の文末表現を巡って様々な研究が行われてきた。野崎・岩崎(2014)は、日本語母語話者と中国人日本語学習者の意見文を対象にし、文

末に顕著に出現する「思う系」、「考える系」を主とする主張動詞を中心に母語と照らし合わせて比較検討した結果、中国人日本語学習者は「思う」のみ多用していると指摘しており、高(2015)は、日本語学習者の「と思う」の多用現象を指摘していると同時に、日本語学習者は推量を表す際に「だろう」を使わず、代わりに「と思う」を用いる傾向があるとしている。また、田中(2015)は、ICLEAJ 作文コーパスを用いて、日本語母語話者と中国人日本語学習者及び韓国人日本語学習者の使用実態を「思う」の活用形、前接語、用法、「と思う」の引用部分で使用されている文末表現の4つの点から比較を行い、それぞれの言語使用の特徴を明らかにした。

以上のように日本語学習者の作文や意見文を取り上げた研究は多数あるが、卒業論文を取り上げた研究はまだ数少ないのである。そこで、本研究は中国人日本語学習者(以下、学習者と称する)の卒業論文を取り上げ、論文で主張をまとめる際によく使われる「と思う」系と「と考える」系を中心に、日本語母語話者と学習者の比較を行い、それぞれの言語使用の特徴を明らかにし、論文指導時に学習者に必要だと考えられる指導点を探ることを目的とする。

II. 調査データ

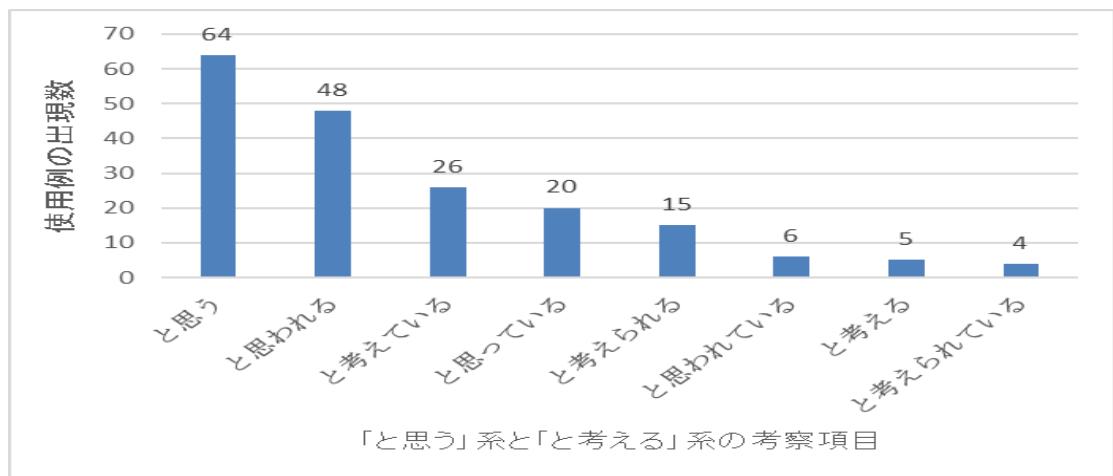
日本語母語話者のデータは『日本語の研究』に載せられた論文41部(文総数は7584)であり、学習者のデータは中国国内で日本語を専攻とする四年生の卒業論文41部(文総数は8261)である。本研究で『日本語の研究』を比較対象としたのは人文科学系の論文であり、論文一部あたりの平均文章数が学習者の卒業論文に近いからである。また、本研究は論文における主張をまとめる文末表現の使用実態を明らかにすることを目的としており、「思う」系(と思う／と思っている／と思われる／と思われている／と思える)と「と考える」系(と考える／と考えている／と考えられる／と考えられている)の合計9形式について考察を試みる。

III. 調査結果と考察

1. 全体の使用傾向

まず、考察対象である「と思う」系と「と考える」系の日本語母語話者と学習者の使用頻度を図1、図2に示す。日本語母語話者の場合、「と思う」系と「と考える」系の9形式のうち、6形式の使用が見られ、その中でも「と考えられる」の使用が一番目立っており、その次が「と思われる」と「と考える」である。

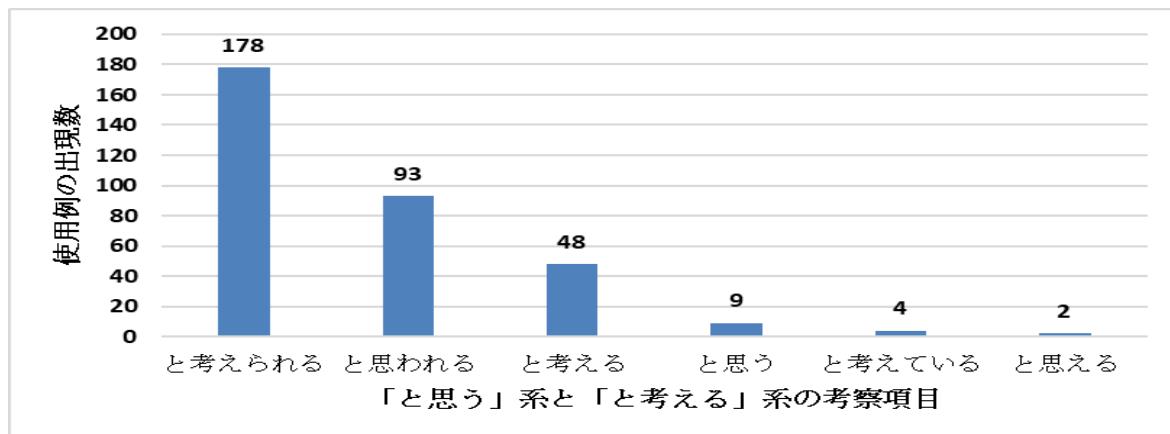
図1 日本語母語話者の論文における「と思う」系と「と考える」系の出現数



一方、図2のように学習者は9形式のうち、8形式の使用が見られ、その中でも「と思う」の使用頻度が一番高いのである。これは学習者の「と思う」の多用現象について指摘した野崎・岩崎(2014)、高(2015)の結果とも一致している。また、「と思う」の次に使用頻度が高かったのは「と思われる」と「と考えている」であり、日本語母語話者と比べ、「と考えられる」と「考える」の使用頻度が低いことがわかる。

以上のように、論文において両者の「と思う」系と「考える」系の使用傾向の違いが目立つのは「と思う」、「と考えられる」、「考える」の使用であることが明らかである。

図2 学習者の卒業論文における「と思う」系と「考える」系の出現数



これからは上記の結果をもとに日本語母語話者と学習者の使用頻度の差が大きかった「と思う」、「と考えられる」、「考える」及び両者とも使用頻度が高かった「と思われる」について詳しく見ていくこととする。

2. 「と思う」の使用傾向

ここでは「と思う」の使用例を用法ごとに分類し、日本語母語話者との比較を行い、学習者の「と思う」の使用傾向を明らかにすることとする。

日本語記述文法研究会(2009:184)は「と思う」は「話し手の判断や意見を聞き手に向けて表明する表現」であるとし、その用法を「話し手なりの判断を示す用法」、「話し手の記憶の中の不確かさを表す用法」、「判断・意見が話し手の個人的な主張であることを明示する用法」、「話し手の個人的な判断や意向を聞き手に表明する用法」、「情報が明確でないときや明確化を避ける用法」に分類している。本研究では上記の分類に従い、「と思う」の用法を「推量」、「判断・意見」、「回想」、「意向表明」、「断定回避」の5つに分類した。また、日本語母語話者と学習者の実際の使用例を5つの用法に分類し、その結果を表1に示す。

表1 「と思う」の用法の出現数と使用率

	日本語母語話者の論文	学習者の卒業論文
推量	1(11%)	12(19%)
判断・意見	2(22%)	34(53%)
回想	0(0%)	0(0%)
意向表明	0(0%)	16(25%)
断定回避	6(67%)	2(3%)
合計	9(100%)	64(100%)

今回の調査で日本語母語話者の場合、「と思う」の使用例は9例しかなく、その中の6例(67%)は「断定回避」のために用いられており、論文において、書き手の判断や意見を述べる際に「と思う」はあまり用いられないことがわかる。しかし、学習者の「と思う」の使用例は64例も確認され、非常に目立っている。さらに、表1のように「判断・意見」の用法が34例(53%)もあり、半分以上の使用例は書き手の個人的な主張を明示するために用いられていることがわかる。

3. 「と考えられる」の使用傾向

今回の調査で日本語母語話者の「と考えられる」の使用例は178例で、論文において主張をまとめる際に一番よく使われていることが確認された。小森・三井(2016:117)によると「と考えられる」は「調査資料などから導き出された考察を述べる時の表現」であり、二通・大島・佐藤・因・山本(2009:155)は「書き手が主観的にそう思うのではなく、誰が考えてもそう考えるのが当然・自然であるという意味を含むため、客観性を重んじる論文において頻繁に使われる」としている。

日本語母語話者の具体例(JPで表示)からみても、下記の(1)、(2)のように、論文の本論のところでよく使われ、「以上のように」、「ことから」等と併用し、データや調査結果について考察を述べる場合に用いられており、結果的に当然感、必然感を増すことによって客観性の高い文章になっている。

- (1)以上のように、ヤルは話題の人物が話し手と同等以下の人物の場合に使用される。これは、ヤルが話題の人物を〈ウチ〉、すなわち近しい存在として表現するという〈機能〉を持っており、同等以下の人物はそのような表現をしやすいからだと考えられる。(JP-1)
- (2)昭和3年の「綴方科教授細目」では、ほぼ全ての文例で現行の句読法が用いられてることから、大正期を通じ、現行の句読法を教えるように、次第に移行していくと考えられる。(JP-7)

一方、学習者の「と考えられる」の使用例(CNで表示)は15例であり、その中には(3)のようにデータに基づいて考察を行う際に用いられた使用例が5例見られたが、不自然な使用例の方がもっと多く、その数は10例に達している。(4)は本論の部分で段落の初めに用いられており、(5)は結論の部分で使われ、単に書き手の考えのまとめ、主張の提示のため用いられていることがわかる。しかし、日本語母語話者の場合、序論や結論で書き手の考えを明確に述べる場合は「と考える」を用いる傾向があり、(4)、(5)はどちらも不自然な使用例である。以上のことから、今後学習者の論文指導において「と考えられる」の使い方の指導が必要であるように思われる。

- (3)この点から言えば、中国は、日本の自然災害に対応する緊急組織体系に関する経験を参考にすべき、中央レベルで自然災害対応委員会を設立して、常設、権威、基礎的な災害緊急組織管理指揮体系を形成することができると考えられる。(CN-38)
- (4)言葉は社会の反映であると考えられる。(CN-15)
- (5)特に人材や資金の面では企業ブランドや商品ブランドの確立こそ業績の安定や売り上げの向上に直結すると考えられる。(CN-31)

4. 「と考える」の使用傾向

今回の調査で、日本語母語話者の「と考える」の使用例は48例確認され、「と考えられる」、「と思われる」の次に多く用いられている表現であることがわかる。小森・三井(2016:117)では、「と考える」は「序論で書き手の立場を明確にする場合、結論において書き手の考えを明確に述べる場合」に使われるとしており、二通・大島・佐藤・因・山本(2009:155)では、「誰もそう考えるのが当然な推量ではなく、書き手があえて一つの主張を行う際に用

いられる」としている。(6)、(7)は日本語母語話者の使用例であり、上記の説明のように書き手の考えを明確にしたり、主張を提示したりするために使われていることがわかる。

(6) ヤルは、上下や親疎といった実際の人間関係にだけ強く規定されるものではなく、話し手が対象をどのような関係として把握しているかに関わるものであると本稿では考える。(JP-1)

(7) 結論を先取りして述べれば、本稿は可能動詞の起源を「四段他動詞対下二段自動詞」という自他対応関係への類推により中世期に成立した「読ムル」に遡ることができると考える。(JP-26)

一方、学習者の使用例はわずか5例あり、(8)のように結論のところで書き手の考えを明確にするために用いられた使用例が2例見られた。しかし、(9)のようにデータに基づいた考察を述べるために用いられた不自然な例が3例もあり、学習者は「と考える」と「と考えられる」の使い分けが困難であることが窺える。

(8) したがって、中国のデザインは、より多くの中国の国内のデザインの開発を促進するように、製品の本土の特性に傾いている必要があると考える。(CN-9)

(9) 一方、中国では、最初の時に教育も貴族に独占されていた。知識を学ぶことができる者は貴族しかないのである。『周礼』第十四巻『地官』の中で記述した「昔、教育は政府が設し、国の貴族の子孫だけ勉強できる」という話はその点を説明できると考える。(CN-10)

5. 「と思われる」の使用傾向

今回の調査で日本語母語話者の「と思われる」の使用例は93例であり、学習者の使用例は48例で、どちらも多く使用されていることが確認された。「と思われる」について、小森・三井(2016:118)では「序論の背景説明で、状況を見ると自然とそのように感じると述べる場合や、レポート・論文の本論でデータや調査結果について書き手なりの考察を述べる場合など、やや主観的に意見を述べる際に使われる」としている。下記の(10)、(11)は日本語母語話者の実際の使用例であり、日本語母語話者は序論で背景説明から自然と導き出された考察を述べる場合やデータや調査結果について考察を述べる場合に「と思われる」をよく用いることがわかる。

(10) その理由は、ひとえに、日本語教育の必要性を動機として発展してきたはずの記述研究がいつの間にか目的を見失い自己目的化して記述のための記述をするようになったためではないかと思われる。(JP-6)

- (11) こういった事情から、撥音化終止形は動詞活用の分析ではなく、助動詞類で補足的に取り上げられてきたものと思われる。(JP-4)

しかし、学習者の使用例をみると、(12)のように本論で使われ、データに基づいて書き手の考察を述べるために用いられた例も見られたが、全体的にみると 48 例中 35 例は使用上不自然な感じを与えていることが確認された。日本語母語話者の場合は書き手の意向表明の際に「～(し)たい+と思う」の形式を取るのが普通であるが、学習者は(14)のように「と思われる」を用いて「たいと思われる」の形式を取っている。また、(13)のように書き手の考えを明確に主張するために「と思われる」を使用した例も多数見られた。このように、学習者の場合、「と思われる」の使用例は多いものの、その正しい使い方はまだ把握できず、特に「と考える」との使い分けが困難であるため、さらなる指導が必要であるように思われる。

- (12) 「理解表明」前置きは、話し手が聞き手の立場に立ち、自分も相手の気持ちを理解することを伝え、相手との距離感を縮め、そのあと話し手の意見を言い出すものである。コミュニケーションを円滑に進めることに役に立つと思われる。(CN-34)
- (13) 着物の源である中国の伝統的な服装は、国民から多くの関心を引き起こすべきだと思われる。(CN-8)
- (14) 今後は違った視点から、より多くの論文を書き、より深く考え、研究し、補足していきたいと思われる。(CN-5)

また、日本語母語話者の場合、「と思われる」の形式だけではなく「ように思われる」が 93 例中 15 例、「ではないかと思われる」が 93 例中 6 例、「かと思われる」が 93 例中 2 例あり、日本語母語話者は状況に応じて主張の強さを微妙に調節し、それに合わせて様々な表現を用いていることが窺える。それに対し、学習者は「と思われる」だけを使用しており、日本語母語話者と比較しバリエーションが少なく、「と思われる」の使用法が固定化されていることがわかる。

IV. まとめ

本研究では、先行研究を踏まえつつ、論文で主張をまとめる際、よく使われる「と思う」系と「と考える」系を取り上げ、日本語母語話者と学習者の比較を行い、それぞれの使用上の特徴を明らかにした。その結果を以下にまとめる。

日本語母語話者の全体の使用傾向をみると、「と考えられる」、「と思われる」、「と考える」がよく使われており、データや調査結果の考察を述べる際は「と考えられる」を使用し、データや調査結果について書き手なりの考察をやや主観的に述べる場合は「と思われる」

を使用する傾向が見られた。また、書き手があえて一つの主張を行う際は「と考える」を使用し、「と思う」は書き手の主観的な心の働きの結果を表すため、論文ではほとんど使われていないのである。

一方、学習者の場合、「と思う」が一番よく使われており、その次が「と思われる」、「と考えている」であり、日本語母語話者が論文でよく用いられている「と考えられる」と「と考える」の使用が非常に困難であることが確認できた。また、「と思う」を5つの用法に分類して分析した結果、「判断・意見」の用法が53%を占めており、学習者は論文で、自分の主張を行うため「と思う」を多用しており、上級者であっても主観的な語と客観的な語の区別がつかず、客観性を重んじる論文において主観的な語は不向きであることに対する認識が薄いことが今回の調査で明らかになった。さらに、学習者の使用例には不自然な例も多数あり、今後の論文指導の際は「と考える」、「と考えられる」、「と思われる」のそれぞれの用法及び使い分けについてしっかりと指導していく必要があるように思われる。

参考文献

- 高恩淑(2015)「上級日本語学習者の意見文における『と思う』系および『と考える』系の使用傾向について—日本語母語話者との比較を通じて」『人文・自然研究』9、67-83頁。
- 小森万里・三井久美子(2016)、『ここがポイント！レポート・論文を書くための日本語文法』くろしお出版。
- 田中舞(2015)、「ICLEAJ 作文コーパス β版における日本語母語話者と中国人・韓国人日本語学習者による『思う』の使用状況について」『同志社大学日本語・日本文化研究』13、133-147頁。
- 二通信子・大島弥生・佐藤勢紀子・因京子・山本富美子(2009)、『留学生と日本人のためのレポート・論文表現ハンドブック』東京大学出版会。
- 日本語記述文法研究会編(2009)、『現代日本語文法4 モダリティ』くろしお出版。
- 野崎まり・岩崎裕久美(2014)、「中国語母語話者の日本語意見文に用いられる文末表現—日本語話者・中国語話者の日本語意見文及び中国語意見文を比較して」『神奈川大学言語研究』36、45-67頁。

The Use of Sentence-Final Expressions to Summarize Arguments in Thesis: A Comparison between Japanese Native Speakers and Chinese Learners of Japanese

LI, Chengai

Abstract

This study focus on the *to omou* (I think that) and *to kangaeru* (I think that), which are often used to summarize arguments in thesis. By comparing with Japanese native speakers, this study

gives an analysis of Chinese learners' use of sentence-final expressions to summarize arguments in their graduation thesis. Results show that native speakers of Japanese are most inclined to use *to kangaerareru* (It is considered that), followed by *to omowareru* (It is considered that) and *to kangaeru*. On the other hand, *to omou* was the most frequently used by Chinese learners of Japanese, followed by *to omowareru* and *to kangae te iru*. It is confirmed that the use *to kangaerareru* and *to kangaeru*, which Japanese native speakers commonly use in their thesis, are quite difficult for Chinese learners. Furthermore, by classifying Chinese learners' use of *to omou* into 5 categories, it is found that more than 50% of them are used in the meaning of "judgment and opinion". These results show that Chinese learners of Japanese frequently use subjective words *to omou* to express their arguments and they lack of the awareness that using subjective words in academic thesis which value objectivity is not appropriate. In addition, By analyzing the examples of Chinese learners of Japanese, it is found that *to kangaeru*, *to kangaerareru* and *to omowareru* could not be used properly, and there are many unnatural examples. In the future guidance on thesis, it will be necessary to strengthen the guidance on the above expressions and to encourage the use of these expressions by presenting actual examples of native speakers of Japanese.

Keywords : Graduation thesis, Sentence-final expressions to summarize arguments, *to omou*, *to kangaeru*

明治後期中国語教材に於ける受け身文について —『註釋日清語學金針』と『京話萃選』を中心として—

楊 昕（関西大学大学院生）

要旨

1890年代後半から1910年代前半にかけて20年の間は、日中両国とも激変の時期である。中国では洋務運動の影響を受け、伝統的な科挙と異なる西洋新式教育が創立して発展した。これに対して、日本の近代教育も明治維新の影響を受けて建立した。そして、この時期に日中間の交流が盛んになり、日本での中国語教育も変化しつつある。とりわけ近代西洋から伝來した教育理念が当時の教科書の編纂への影響を見られる。

本研究は、日清戦争から日露戦争にかけて日本で使用されていた北京官話の教科書、会話書などを対象とし、特に『註釋日清語學金針』（1905年）と『京話萃選』（1906年）を中心に調査を行い、それらのテキストに用いられた受け身文、すなわち、「被」構文の変遷と扱い方を考察し、当時の中国語教材が書かれた中国語の受け身文の動詞、文構造および文型の種類を分析する。そして、当時の中国語の受け身文を考察することを通して、受け身文という文法概念は欧米人、日本人、中国人それぞれがどのように受け入れられ、どのように教えていたのか、現代中国語と比較すると相違点があるのかを明らかにしたいと考える。さらに、この考察を通じ、日本における中国語文法論の成立には日本語文法ないし西洋文法的要素から影響を解明したい。総じて、この時期の日本において使用された中国語教材の考察を通し、中国語の受け身文の変化を明らかにすると試みる。

キーワード： 受け身文、文型機能、明治後期、中国語教科書

はじめに

明治後期、中国の清王朝末から中華民国初期に当たる約十五年の間、日本の中国語教育の規模が拡大するにつれ、日本人、欧米人、中国人教師など異なる主体を中心に大量の中国語教科書や参考書を編集した。これら種類に富んだ中国語教科書や参考書は、当時の中国語や中国語教育の時代的特徴を表していると考えられる。一方、日本社会だけでなく、同時期の中国社会でも大きな変革が起きていた。中国は欧米文化を受容し、新たな物事が生まれ、言語教育、とりわけ外国語教育に反映していると思われる。

したがって、当時の教科書を整理し、明治時代前期と後期の教科書の内容を比較、分析

することにより、近代日本における中国語教育の内容、方式などの変化を把握することが期待でき、さらに、同時期の日本人が作成した教科書と来日中国人が作成した教科書と対照、分析することによって、その時期の中国語の受け身文の特徴を明らかにすることができる。

I. 先行研究

王力は『中国語語法理論』において、初めて中国語の受身文を論述があった。以降、現代中国語の受け身文における研究がますます盛んになった。王力（1955）は、中国語の「被動句」を「被動式」と命名した。そして、王氏は西洋言語の影響を受けた受身文と中国語の受け身文と比較し、中国語の受け身文の特徴を示唆している。後に、王力は中国語の受け身文の発生および発展について自説を踏まえ、さらに詳しく論述している。

王力（1980）によると、上代中国語は、「主動」を表す構造と「被動」を表す構造ははつきり区別されていない。「被動」を表す構造は少なくとも春秋時代から登場していた。当時の受け身文は概ね三種類に分けることができる。類型1：「於」構文、類型2：「為」構文、類型3：「見」構文。¹⁾ そして、王氏は、「被」という文字を用いた受け身を表す用法は戦国末期に芽生えていたと指摘している。また、王力は「被」という文字を用いて受け身を表す用法の成立経緯についても述べていた。詳しく言うと、「被」という文字は動詞として二つの意味が含まれ、一つは主動的に覆うことであるが、もう一つは、受動的に被ることを表している。受け身を表す「被」は、二つの意味から生み出した働きであることと主張している。他にも中国語の受け身文の構造についての研究が多くある。例えば、呂叔湘（1980）は中国語の受け身について、「被」という受け身マーカーの後に置く動詞は単音節動詞に限り、二音節動詞は一定の条件がなければ用いることができないと指摘した。

一方、近代日本における中国語教育は、欧米の言語教育の影響を受けて発達してきた経緯があるため、明治末期の中国語教科書を遡って分析すれば、中国語の受け身文における発展の軌跡を明らかにできるであろう。

六角（2001）の調査によると、明治期に日本で刊行された中国語学習書の種類は総計316点がある。そのうち、1898年から1911年にかけて中国語教科書として使用していたものは97点であるが、受け身文を収録した教科書は27点のみ。さらに、明治後期では17点だけである。

これまでの研究を見ると、近代中国語の受け身文について概ね歴史言語学の側面からの研究が多いが、受け身文を使う要因や、受け身文の表現機能などについてあまり注目されていないようと思われる。とりわけ明治後期に出版された中国語教科書における受け身文の変遷に対する調査は少ない。本稿は、これらの疑問を解決するために、明治後期の中国語教科書、新聞雑誌コーパスなどにおいて近代中国語の受け身文の変化状況について調査し、明らかにしたいと考える。

II. 『註釋日清語學金針』(1905) と『京話萃選』(1906) の受け身文の文型

まず、『註釋日清語學金針』(1905) と『京話萃選』(1906) の著者はそれぞれ日本人と中国人であるため、母語話者と非母語話者の視点から中国語受け身文をいかに取り入れているのかを比較、考察を考える。そして、同時期に発行された 17 冊の教科書のうち、この二冊の受け身文の数が一番多く、また、この二冊の教科書の使用範囲は日本だけではなく、中国や台湾でも使われていたため、影響が大きく、広範囲で使用されていた点では特徴として取り上げることができる。

1. 『註釋日清語學金針』(1905) と『京話萃選』(1906)

(1) 『註釋日清語學金針』(1905) の概要

『註釋日清語學金針』(この以下は『註釋』と略称する。) は 1905 年に台湾協会専門学校で刊行され、表紙には馬紹蘭、謝介石、杉房之助の合著と記載している。恐らく馬紹蘭、謝介石は中国語を編纂し、杉房之助は日本語訳を編集したと考えられる。馬紹蘭、謝介石は当時の台湾協会専門学校に所属する官話講師と台湾語講師である。つまり、著者の中に中国語の母語話者によって中国語の正確さを保障している。この教科書は総合的なものであり、目録を見ると、発音から翻訳まで様々な内容が含まれ、初級から上級まで対応するテキストとなっている。形式面から見ると、『註釋』は、307 頁があり、凡例、目次、本文の構成となっている。本文は十章に分け、各章には発音、会話、文法、翻訳などの内容構成になっている。末頁の発売所を見る限り、この教科書は日本のみならず、台湾でも販売されているようで、当時の台湾人にも使用していた官話教科書と推測できる。

(2) 『京話萃選』(1906) の概要

『京話萃選』(この以下は『京話』と略称する。) は、1906 年文求堂から刊行されたものであり、表紙に秋山昱禧編と記されている。教科書の刊行日付や秋山氏の年齢から見る限り、編集者としての秋山昱禧は東京外国语学校を卒業した後、この本を編集しただろうと推測する。本書の編纂体裁について例言から窺い知ることができ、また、教科書に収録されている五十編の文章はすべて当時の「京話日報」に掲載されている時事論説から選んだものである。中国語教師宮島大八は本書の編集に助言をしたようで、この教科書の学習対象者の語学レベルは明確に記載され、中国語学習者の言葉遣いをより洗練されたものにするため、編集されたもののように、つまり、中高級学習者向けの教科書であると推測する。

2. 『註釋日清語學金針』(1905) と『京話萃選』(1906) の受け身文型

筆者は『註釋』と『京話』の受け身文について整理してみたところ、『註釋』は 19 の受け身文があり、『京話』は 17 の受け身文がある。本稿は文型教育の視点からの考察である

ため、文型のマーカーを明確するために、研究対象は受け身を表すマーカーがある介詞（「被」、「叫/教」、「給」、等）を対象のみについて検討し、一般的な受事主語文は考察の対象から外すこととする。

これは、現代中国語受け身文の文型に関する先行研究を踏まえ、明治後期の受け身文文型を検討するために、4種類の受け身文文型を擬え、当时代中国語教師たちにとって、受け身文という文型はどう考えられていたのかを明らかにしようとするためである。

文型1 「主語+被/叫/給+動詞」

とてもシンプルな構造であるが、『註釋』と『京話』両方とも使われていなかった。

文型2 「主語+被/叫/給+動詞+その他」

つまり、その他は補語、目的語になるケースである。1文のみ。

(1) 因空氣變動、被逼入極冷的境界。[京 097-011]²⁾

例文(1)の動詞は一音節動詞であり、受け身マーカーの後ろは賓語ではなく、動詞と補語の形になっている。

文型3 「主語+被/叫/給+目的語+動詞」

構造面からみると、文型1と文型2より複雑になるが、6文があったが、当時の学習者にとってやや難しい文型と思われる。

(2) 被人騙。[日 110-002]³⁾

(3) 不但是多花錢、還要叫人笑話。[京 090-011]

文型3の動詞をみると、一音節動詞と二音節動詞が半分ずつ占めている。そして、述語の部分では、第三人称代名詞や不特定の指称となっており、受け身のマーカーは「被」と「叫」の両方が存在している。

文型4 「主語+被/叫/給+目的語+動詞+その他」

文型3に似たものであるが、一番複雑な文型と言える。

(4) 他被先生誇獎了、很喜歡着哪。[日 111-001]

(5) 立憲國沒有不強的、很有名的俄羅斯、尚且被日本國打敗。[京 004-011]

29文が見つかっている。動詞は一音節動詞が多く使用しており、動詞の後ろも完了を表すアスペクト助詞「了」と接続している形が多い。もう一つ注目なのは文型4の場合、複文も出現している。要するに、初級レベルの学習者にとって、難解な文型と考えられる。

二つの教科書を分析した結果は以下の一覧図の通りである。

表 2-1 『註釋日清語學金針』と『京話萃選』受け身文文型一覧

文型類別	文型 1	文型 2	文型 3	文型 4
文型構造	S+被+V	S+被+V+OB	S+被+O+V	S+被+O+V+OB
『註釋』	0	0	5	14
『京話』	0	1	1	15
合計	0	1	6	29
割合	0	2.8%	16.7%	80.5%

まず、構造的にシンプルな文型 1 は、実際に使用していなかった。目的語を省略した文型 2 の使用も極稀である。文型 3 は、よく使われる受け身文であるが、施事者はほぼ第三人称代名詞からなっている。一方、構造上最も複雑の文型 4 は使用頻度が高かった。量的な側面からこの現象は一つの仮説として、文型 4 は当時中国語受け身文の常用文型ではないだろうかと考えられる。

一方、教科書の受け身文に使われた動詞は一音節動詞が八割以上を占めるに対して、二音節動詞はわずか七個。これは呂叔湘などのちの研究結果と一致している。つまり、「被」の後に置く動詞は单音節動詞に限られ、二音節動詞は少ない特徴である。また、この時期の受け身マーカーは「被」が圧倒的に多いのに対して、「叫」としての受け身文は 2 文しかなかった。さらに、明治前期の『官話指南』(1882) の受け身文と比較してみると、文型 2 は数少くなり、文型 3 の割合は変わっていなかった。文型 1 は無くなったり、文型 4 は主流に変化した。そして、受け身のマーカーの範囲も三種類（「被」、「叫/教」、「給」）、から一種類（「被」）に減少した。

この時期中国で出版された新聞、雑誌などと比較した結果、図 3-2 を示した通りである。

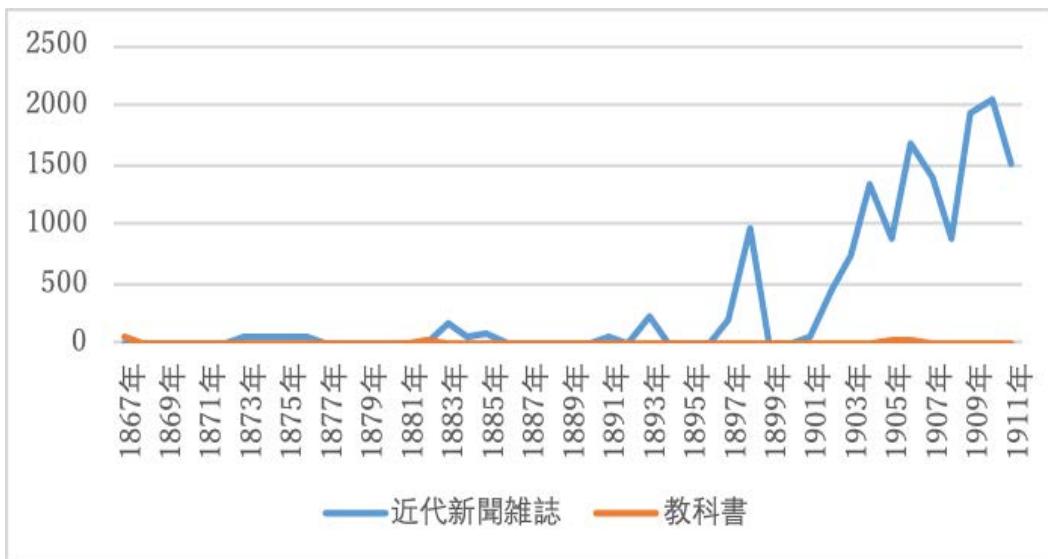


図 1 『中国近代新聞データベース』(1868-1911) における受け身文の使用頻度

図1を示したように、明治後期の中国新聞雑誌の中で受け身文の使用頻度は著しい増加したことに対して、同時期の中国語教科書の中で受け身文の使用頻度かなり低かった。つまり、当時の中国語教科書は中国社会の言語使用の実態を反映しておらず、当時は必ずしも受け身文は必須な学習内容ではなかったではないだろうか。

III. 『註釋日清語學金針』(1905) と『京話萃選』(1906) の受け身文型と表現機能

『註釋』と『京話』の受け身文を分析する際、文型構造はもちろん、文型構造を反映する表現文法についても論述しなければならない。周知のように、中国語の文型と欧米言語の文型と異なり、すなわち、中国語の文型は特定の表現機能が含まれている。その特徴から、中国語の文型は文法構造と表現機能の双方向から分析する必要がある。

一般的に、中国語は異なる文型を用い、様々な表現機能として現れる。しかし、中国語文型の表現機能に関する研究は、管見の限り、まだ始めたばかりのようである。例えば、劉月華（2001）により、「被」字句は主に受事者がある動作の影響を受けて変化が生み出されることを表す。その変化が受事者にとって不愉快などマイナスの状況が一般的である。しかし、王力（1980）によると、1919年以降、中国語は欧米文法の影響を受け、被動式の使用範囲が拡大され、すなわち、マイナスの状況から様々な場面でも使えるようになったのである。

先行研究によると、「被」という字の意味から現代中国語の受け身文は少なくとも四つの表現機能が含まれている。

(6) 一些只穿着短袖T恤衫的乘客在洛杉矶被10℃左右的气温冻得瑟瑟发抖。（人民日报海外版2002年05月25日）「不幸など望ましくない状況を表す機能」

(7) 1984年1月23日国务院发布说明已被1999年3月15日全国人大通过并公布。（人民日报2001年10月19日）「客観事実の強調を表し、中性的な意味を含む機能」

(8) 已三次印刷60万册，被100多家劳改单位选用。（人民日报1994年04月26日）「予想外の状況を表す機能」

(9) 我们回首百年，一定会被20世纪人类取得的伟大成就与进步感动。（人民日报2000年01月21日）「幸運を表す機能」

現代中国語の中におけるこの四つの表現機能の使用状況を調査するために、BCC コーパスの中で、「被」という字が受け身のマーカーとして、1000文の受け身文を抽出し、分析した結果（1000文のうち84文は受け身文ではない。合計916文がある。）は以下の通りである。

表 3-1BCC コーパスの中で受け身文の表現機能の分布状況

不幸	客観の強調	意外	幸運
248	606	51	11

表 3-1 を示したように、現代中国語の受け身文の表現機能の分布について、最も多いのは客観事実の強調を表す表現機能として、半分以上の割合に占めている。不幸な状況を表す表現機能は第二位であり、248 文がある。最も少いのは幸運という表現機能である。すなわち、明治後期の中国語受け身文の状況を考察することで、近代中国語の受け身文の表現機能の発達プロセスを明らかにすることができます。

『註釋』と『京話』の受け身文を分析した結果は表 3-2 の通りである。

表 3-2 『註釋日清語學金針』と『京話萃選』受け身文の表現文型の分布状況

表現機能	不幸	客観の強調	意外	幸運
『註釋日清語學金針』	14	5	0	0
『京話萃選』	12	5	0	0
合計	26	10	0	0

表 3-2 のように、明治後期の中国語受け身文の表現機能のうち、最も多いのは不幸な状況を表す表現機能であり、26 文がある。客観的事実の強調を表す表現機能は二位であるが、現代中国語の使用状況と逆の結果となっている。つまり、当時の受け身文の表現機能はまだ発達していないと考えられる。そして、幸運という機能は過去、現在ともに一番使用頻度の低い表現機能であることが明らかになった。さらに、明治前期の『官話指南』(1882) の受け身文の状況を比較し、前期に存在していない客観事実の強調を表す表現機能はすでに表っていた。すなわち、明治後期の中国語の受け身文の表現機能の範囲は拡大されていったとみることができる。

表 3-3 『註釋日清語學金針』と『京話萃選』受け身文の文型と表現文型の分布関係

表現機能と文型	不幸	客観の強調	意外	幸運
文型 1	0	0	0	0
文型 2	0	1	0	0
文型 3	5	1	0	0
文型 4	20	9	0	0

表 3-3 は、明治後期の中国語の受け身文の文型とその表現機能の関係を明らかにしたもの

のである。文型4は不幸と客觀強調の表現機能を持ち、文型2は客觀強調の表現機能しかない。明治前期の中国語の受け身文の文型とその表現機能の関係と比べると、文型と表現機能の関係が豊かになっている。

おわりに

『註釋』と『京話』における中国語の受け身文について考察し、その結果は以下のことが明らかになった。

まずは、『註釋』と『京話』は中国人と日本人が共同で編集された教科書であり、また、日本人独自で編纂した教科書も存在する。けれど、国籍を問わず、彼らは中国語の受け身文に対する認識は一致していた。つまり、必ずしも受け身文は必須な学習内容ではなかつたと思われたので、教科書の中で受け身文を取り上げた数が少なかつたと考えられる。そして、受け身文の特徴から分析すると、受け身文のマーカーの表記は明治前期と比べると、三種類から一種類に集中した。また、構造的に複雑な文型は逆に使用頻度が高く、複合文が少ない。単文は多く用いられ、また、受け身文は一定の順番で用いられた形跡がない。この点は、明治前期とほぼ同じ状況である。

最後に、表現文型の側面から考察すると、受け身文の表現機能は不幸から他の機能に拡張する途中段階とみることができ、変容のプロセスの最中として考える。

注

- 1) 王力 (1980) 『漢語史稿』北京、中華書局、405-410 頁。
- 2) [京 097-011] は『京話萃選』の第 97 頁、第 11 行である。
- 3) [日 110-002] は『註釋日清語學金針』の第 90 頁、第 11 行である。

参考文献

- 王力 (1955)、『中國語法理論』中華書局。
 王力 (1980)、『漢語史稿』中華書局。
 蔣紹愚 (2017)、『近代漢語研究概要（修訂本）』北京大学出版社。
 劉月華 (2001)、『実用現代漢語語法』商務印書館。
 六角恒広 (2001)、『中国語関係書目（増補版）1867-2000』不二出版。
 呂叔湘 (1980)、『現代漢語八百詞』商務印書館。
 呂叔湘 (1982)、『中國文法要略』商務印書館。
 王力 (1944)、『中國語法理論』中華書局。
 王力 (1980)、『漢語史稿』中華書局。
 荀恩東など (2016)、「大数据背景下 BCC 語料庫的研制」、『語料庫語言学』第 3 卷第 1 期、93-109 頁。

**The Passive Sentence in Mandarin Chinese Textbooks in late Meiji Period of Japan:
A case study on the ZHU SHI RI QING YU XUE JIN ZHEN (註釋日清語學金針)
and JING HUA CUI XUAN (京話萃選)**

Yang Xin

Abstract

During the 20 years from the late 1890s to the early 1910s, either Japan or China were undergoing radical changes. Under the influence of the Self-Strengthening Movement, China established a new type of educational system from Western, which is different from traditional type. In the same time, Japan also founded the modern educational system within the effect of the Meiji Restoration. During this period, the exchanges and trade between Japan and China became more frequently than before. Also the Chinese language education in Japan was changed obviously. Particularly, the educational conception from Western has influenced the compilation of Chinese textbooks at that time.

This paper focuses on the textbooks which written by Mandarin Chinese were published and used in Japan during the Sino-Japanese War and the Russo-Japanese War. We picked up ZHU SHI RI QING YU XUE JIN ZHEN (註釋日清語學金針) and JING HUA CUI XUAN (京話萃選) as main materials. With analyzing the passive sentences found in these textbooks, we try to figure out the character of these sentences from different aspects, such as sentence verbs, the syntax and the sentence pattern. Through the results of analyzing, we realized that how does the concept of the Chinese passive sentence was accepted and taught by Westerners, Japanese and Chinese. Compared with modern Chinese, it is evidently to observe the changes of passive sentence in the Meiji Period. In general, with studying the passive sentences in Chinese textbooks which were published and used in Meiji Period of Japan, we may recognize the Chinese passive sentence changing process during these decades.

Keywords : Sentence Pattern, Chinese Textbook, Passive Sentences

日本語の「ハズダ」と中国語の「应该」の中心的機能からの対照研究

朴 天弘（帝京大学）、宋 天鴻（関西外国語大学）

要旨

本稿では、「ハズダ」と似通っている機能を持つと指摘されている中国語の「应该(yinggai)」との対照研究を行い、以下のことが判明した。「ハズダ」の中心的な機能とは、話し手が何らかの疑問を抱くとき、その疑問を自ら解消するために自身が持っている「知識を確認」することである。それに対して、「应该」は、何らかの疑問を抱くときに話し手が持っている知識を使って推論を行う形式である。つまり、「ハズダ」は「知識の確認」が中心的な機能であり、推論過程を伴うか伴わないかはさほど問題にならない。しかし、「应该」は、あくまで話し手の未確認領域に対する推論が主な機能であり、推論過程を伴う場合に限って、「ハズダ」と置き換えられる。推論過程がないと思われる場合においては、「ハズダ」は現実と話し手が持つ知識との食い違いを強く意識する場合に用いられるのに対して、「应该」は推論に見せかけるという派生的な意味への拡張が見られる。

キーワード： ハズダ、应该、認識的モダリティ、推論、知識確認

はじめに

本稿では、話し手の知識の運用の面から日本語の「ハズダ」と中国語の「应该(yinggai)」の中心的な機能を考察する。従来の研究では、「应该」は「ハズダ」と似通っている機能を持つと指摘されている。しかし、筆者らの調査では、「ハズダ」と「应该」は、(1)のように共通的に使える場合もあれば、(2)のように「应该」が使えない場合もある。

(1) (Aは彼のスケジュールを知っている)

A: 彼は今家にいるかな。

B: a. 家にいる [ハズダ]。

b. [应该] 在家¹⁾。

(2) (Aは10分前にご飯を食べたが、また空腹を感じている)

A: a. 私、さっきご飯を食べた [ハズダ]。

b. ²⁾我刚才 [应该] 吃过饭了。

(1) では話し手は自分が持っている情報を根拠に「彼が家にいる」ことを推論していく、「ハズダ」と「应该」のどちらも用いられる。しかし、(2)では、「食事をした」ことは話し手にとって事実であり、「ハズダ」が使えるのに対して、「应该」は使えない。そこで本稿では、「ハズダ」と「应该」の両形式の中心的な機能は何かについて考察を行う。

1. 日本語の「ハズダ」の中心的な機能

日本語の「ハズダ」は、用法分類を中心に記述されてきたが、高橋(1975)が分類した<みこみ>と<さとり>の用法からは大きく離れてはいない。例えば、<さとり>の用法は<道理（篠崎 1981）>や<納得（田村 1995）>などと言い換えられたり、用言の種類やテンスなどによって<推測><予想><推察>などと細かく分類されたりしている。さらに命題内容の特徴から<予定><記憶（篠崎 1981、田村 1995、岡部 1998）><確認（松田 1995）><確認要求（田村 1995）>などと分類される研究も見受けられる。

- (3) a. (太郎が甘いものが好きなことを知っている。そこで太郎のプレゼントとしてお煎餅を買うべきだと言う友達に対して、ケーキを買うことを決めながら)
太郎はイチゴケーキを喜ぶ [ハズダ] 。
- b. (昔のことなので自信はないが) そのことなら、15年前のことだった [ハズダ] 。
- c. (この世の中には世界の果てがあるという話を聞いて) 地球は丸い [ハズダ] 。
- d. (彼女が怒った理由を聞いてから)
約束時間に1時間も遅れたら、彼女が怒る [ハズダ] よ。

(3a)の「ハズダ」は、何らかの根拠に基づいて「太郎はイチゴケーキを食べる」と推測していることを表す。(3b)の「ハズダ」は、話し手の不確かな記憶を表している。(3c)の「ハズダ」は、「地球が丸いこと」を知らない人がいたので、当該の内容を確かめたり、聞き手に確認を要求したりする意味である。(3d)の「ハズダ」は、彼女が怒った理由を知って納得する意味を表す。このような細分類は、「ハズダ」が文の中でいかに使われているかを把握するために必要な作業ではあるものの、その用法分類にはテンスや文脈など性質の異なる基準が混在し、統一的、かつ、明確的な判断基準が設けられていない。また、細かく用法を分類するだけで、「ハズダ」の本質を見えにくくする恐れがある。

朴(2018)では、「ハズダ」を知識確認形式として「ハズダ」の各用法を統一的に説明し、「『ハズダ』の本質的な機能とは、話し手が真だと思っている・または真であろうと予想する知識とズレが生じた場合、『ハズダ』を使い、そのズレから生じた疑問を払拭するために『知識の確認』を行うことである」(朴 2018:49)と説明している。朴(2018)で言う「知識」とは、情報といったもの、一般的に話し手が持っている一般知識、個人の個別の経験、または、長い間繰り返されることにより強化され蓄積されたものであり、五感による知覚

された情報は知識からは除外されるという。そして、「ハズダ」には推論を伴う「知識の確認」と推論を伴わない「知識の確認」、2つのタイプがあることを示した。前者の場合は、(3a)のように推論過程が認められる推論を伴う「知識の確認」として、未確認領域に対する事態を述べることが多く、一方、推論を伴わない「知識の確認」とは、(3b-d)のように当該の知識の断片を確認する場合であって、一連の推論過程が見られない場合である。そこで、「現実との食い違い」という文脈的条件をプロトタイプとして条件付けて、「知識の確認」の機能から「ハズダ」の使用に関する統一的な説明を試みた。本稿では、朴(2018)に倣って「ハズダ」の中心的機能を以下のように定義する。「ハズダ」の意味・機能とは、話し手が真だと思っている、または、真であろうと予想する内容と何らかの話し手の認識的なズレが存在する場合、それに起因する疑問を払拭するために、「知識の確認」を行うことである。ここでの「確認」とは、「ハズダ」の使用条件のもとで、「当該の関連のあるBESTとなる知識を引き出し、再び確かめる」という意味であり、単なる情報の確認ではない。なんらかの正当性を与えるため、または、認識的なズレがあるところに当該の関連のある知識を引き出し、再び確かめるということを、「知識の確認」と呼ぶ。

このように話し手の「知識確認」を行うのが「ハズダ」の中心的な機能であるとしたら、他の言語においてもこれと似通っている機能を持つ形式が存在すると予想できることから、本稿では、朴(2018)の「ハズダ」の定義に倣って、「ハズダ」と類似の用法を持つと言われている「应该」について考察する。

2. 中国語の「应该」の中心的な機能

中国語の「应该」は、日本語の「べきだ」と「ハズダ」に対応していて、認識的モダリティ(epistemic)の用法や義務的モダリティ(deontic)の用法を持つものとして研究されてきた(呂叔湘 1999、彭利貞 2005、王其莉 2016)③。

(4) a. 学习[应该]认真。

lit. 勉強は [真面目にする] **应该**。

b. 这是尼龙的, [应该] 比较结实。

lit. これはポリエステル製なので [比較的に丈夫だ] **应该**。

【呂叔湘 1999: 623-624、日本語訳は筆者による】

(4a)では、「应该」は義務的モダリティの用法として「道理上…でなければならない」意味を表す。(4b)では、「应该」は「状況が必ずそうだろうと推定すること」を表し、認識的モダリティの用法として使われている例である(呂叔湘 1999、彭利貞 2005など)。そして、王晓华(2005)、韓江雪(2016)、張国修(2018)などでは、認識的モダリティの用法として「应该」をさらに<推論><予定><記憶><GAP><確認要求>などの用法に分類し

ている。

(5) 最近怎样？要考试了[应该]很忙[吧]？

[最近はどうですか。もうすぐ試験だから、忙しいはずでしょう/はずですよね]

【例文と日本語訳は王其莉2016:163による】

(5)の「应该」は、<確認要求>の用法として分類されているが、この場合は、話し手の<確認要求>を表す「吧」が必要となることから、本稿では、<確認要求>の用法については、「应该」の用法から除外し、<推論><予定><記憶><GAP>の用法を説明できるような「应该」の中心的な機能を分析する。

(6) (H は Z から女性の X が男性用のシャワー室に入ったのを見たと聞いて、L に話す)

H: 她是不是觉得晚上没人无所谓啊。

lit. 彼女は、深夜だから人がいないし、大丈夫かなと思っていたかも。

L: Z 会看到[应该]是白天。

lit. Z さんが見たとなると、[昼間である] ^{应该}。

他都是白天洗或者晚上 6、7 点就洗了。所以[应该]不是大晚上。

lit. Z さんはいつも昼間か、夜の 6 時～7 時の間にシャワーを浴びるから[深夜ではない] ^{应该}。

【L との会話:2019/07/06】

(6) では、B は男性 Z の生活リズムから、X が男性用のシャワー室を使ったのは夜ではなく昼であると推論する状況である。では、次の例を見てほしい。

(7) (W が今回の日本旅行は東京なのかと尋ねられて)

W: 我和小伙伴去冲绳，[应该]不来东京。

lit. 友達と沖縄に行く。[東京には行かない] ^{应该}。【W との会話:2018/01/18】

(8) H: 23 号在品川见？

lit. 23 日に品川で会うのはどう？

Z: 手帳不在身边，有些不确定有没有我不记得的日程安排，但[应该]没有其他安排。

lit. 手帳は手元にないので、私が覚えていない日程があるかどうか確定できないが、[他の予定はない] ^{应该}。

【Z との会話:2019/07/30】

(7)は、話し手の今回の日本旅行に関する予定について話をしていて、(8)は、話し手(=Z)が自分のスケジュールの内容に関して記憶を確かめる意味であり、両者とも「推論」を表しているとは思えない。しかし、決まった「予定」であっても変更される可能性があり、

また、記憶というのも、時間が経つにつれ記憶の内容が薄れてしまう可能性があることから、「予定」や「記憶」は話し手の未確認領域に属するものとして捉えることが可能である。要するに、なぜ「应该」が用いられるかという問い合わせとして、本稿では、話し手が予定や記憶をあくまで未確認領域に属するものとして見せつけることによって「断定・責任回避の効果」などの語用論的な効果を狙っていると考える。

- (7') 「予定」 : 未確認領域 (予定) 应该 → 断定・責任回避の効果
 (8') 「記憶」 : 未確認領域 (記憶) 应该 → 断定・責任回避の効果

さらに、次の(9)のような例を見てみよう。

- (9) (財布が見つからなくて) 我[应该]放到包里了, 可怎么没有呀?
 lit. [鞄に入れた] 应该 けど、あれ? ない。
 【王其莉 2016:158 の(9)と(9')をもとに作ったものである】

(9)は、王其莉(2016)では<記憶>として、張国修(2018)では<GAP>の用法として分類されている。しかし、そもそも<GAP>とは記憶と現実との不一致から読み取られる意味にすぎない。そのため、現実との不一致から自分の知識(=記憶)を疑わしきもの、つまり、未確認領域に属するものとして捉えることができ、「断定回避」の意味として「应该」が使われていると考える。したがって、<GAP>と言われる用法も<予定>や<記憶>の場合と同じ分析ができると言える。

以上、本稿では、「应该」の中心的な機能を「知識を使った未確認領域に対する話し手の推論」を表す形式であると考える。「应该」の中心的な機能とは、話し手が真だと思っている、または、真であろうと予想する内容と話し手の何らかの認識的なズレが存在する場合、それに起因する疑問を払拭するために、未確認領域に対する知識を使った推論を行う形式である。そして、「予定」や「記憶」は話し手の未確認領域に属するものとして捉えることが可能であることから、<予定><記憶><GAP>などの用法は、「推論」から拡張される語用論的な意味(二次的な意味)のものであると考える。

3. 「ハズダ」と「应该」の対照 一置き換えを中心に

まずは、両形式が置き換えられる場合を見てみよう。次の例(10)と(11)は、(6)の「应该」のところを日本語の「ハズダ」に置き換えた例であるが、「Zさんが見たのは昼間である」「夜ではない」ことは、話し手にとって確認されていないこと、未確認領域に属することであり、知識を使った推論を表している。そして、「ハズダ」と「应该」は問題なく、置き換えられることが分かる。

- (10) a. Z 会看到[应该]是白天。
 b. Z さんが見たとなると、昼間である [ハズダ]。
- (11) a. 他都是白天洗或者晚上 6、7 点就洗了。所以[应该]不是大晚上。
 b. Z さんはいつも昼間か夜の 6 時～7 時の間にシャワーを浴びるから、深夜ではない [ハズダ]。

次の二次的な意味（記憶）の場合も置き換えることができる。

- (12) A: a. 23 号在品川见？
 b. 23 日に品川で会うのはどう？
- B: a. 手帳不在身边、有些不确定有没有我不记得的日程安排，但[应该]没有其他安排。
 b. 手帳は手元にないので、私が覚えていない日程があるかどうか確定できないが、
 他の予定はない[ハズダ]。
- 【例文(8)の再掲】

しかし、日本語の「ハズダ」と違って、<さとり>の場合に使えないことと同じく、次の例の場合も「ハズダ」を「应该」に置き換えることはできない。

- (13) a. (先日) ここに置いた [ハズダ]。 (なのに、今ここにない)。
 b. 我[应该]是放在这里的。
- (14) a. (10 秒前に) ここに置いた [ハズダ]。 (なのに、今ここにない)。
 b. *我[应该]是放在这里的。

一般的には「何かをここに置いた」から「その何かがこの場所に存在する」と予想される。(13a)と(14a)に示したように、「ハズダ」は「その何かがこの場所に存在する」という予想と「その何かがここに存在しない」という現実の間に生まれたギャップから、自分が「ここに置いたかな」と確認する場合に用いられる。「应该」は、(13)の「先日」のように「ここに置いた」ことに対して話し手が自分の記憶に少しでも間違いが存在する可能性があると考えられるときには使えるのに対して、(14)の「10 秒前に」のように話し手自身が、自分の行動について否定できない場合には用いられない。これに関連して、次の(15)からでも同じ説明ができる。

- (15) (10 分前にご飯を食べたが、また空腹を感じている)
 a. 私、さっきご飯を食べた [ハズダ]。
 b. *我刚才[应该]吃过饭了。
- 【例文(2)の再掲】

(15a)の「ハズダ」は、話し手がご飯を食べたばかりであるにもかかわらず、またご飯を食べたくなつた自分を不思議に思いながら、「さっき、ご飯を食べた」と確認する意味である。それに対して、(15b)に関しては、話し手が10分前にご飯を食べたことは、話し手自身にとつては明白なことであり、否定できないことである。そのため、「ご飯を食べた」という記憶を推論に見せかけることはできず、「应该」は用いられないものである⁴⁾。

おわりに

本稿では、「知識の運用」という角度から日本語の「ハズダ」と中国語の「应该」の意味機能を考察した。本稿の考察から、「ハズダ」の中心的な機能とは、話し手がなんらかの疑問を抱くとき、その疑問を自ら解消するために自身が持つてゐる「知識を確認」することだとすれば、「应该」は、何らかの疑問を抱くときに話し手が持つてゐる知識を使って推論を行う形式であることが言える。つまり、「ハズダ」は「知識の確認」が中心的な機能であり、推論過程を伴うか伴わないかは重要ではない。そして、推論過程を伴うような未確認領域が対象となる場合は、「应该」との共通点が見られ、それぞの派生的な意味用法も現れると考える。特に、「应该」は、予定や記憶、またはGAPなどを表すときは、推論に見せかけることによって出てくる語用論的な意味拡張が起きていると考える。このような形で中心的な機能を理解することで、個別的な研究から離れて言語類型論的な立場から、日中言語教育、そして、隣接する東アジア言語の研究において役に立つことを期待する。

注

- 1) 本稿で使う中国語の例文の一部は、筆者(「H」と記す)と友人(名前はイニシャルで記す)とのWechatメッセージの記録から抽出したものであり、「应该」に当たる例文は全て筆者の友人が書いたものである。例文の日本語訳は筆者がつけたものである。出典は【○との会話: ××××/××/××】で示す。出典がない場合は筆者の作例であるが、ネイティブチェックを受けているものである。そして、(6)のLは閩南方言を話す母語話者で、(7)のWは吳方言を話す母語話者である。そのため、(6)の「Z会看到应该是白天」の「会」、(7)の「应该不来东京」の「来」の使用に不自然だと感じる母語話者がいるようであるが、筆者らの調査によると、「应该」の使用は母語話者の出身地に影響されないので、(6)と(7)は普通話(Mandarin Chinese)の表現に変えずそのまま載せている。
- 2) 本稿では、非文であることを表すために「*」を使う。
- 3) (4a)の「应该」は義務的モダリティの用法であり、日本語では当為を表す「～しなければならない」などで訳されるが、日本語の「ハズダ」にはそのような用法はない。本稿は「ハズダ」と「应该」との対照研究を行うものであり、「应该」の義務的モダリティの用法を研究対象外とする。
- 4) (14b)や(15b)の例において、話し手が酔っ払っていたり認知症にかかっていたりして自分の

記憶を不確かなものとして捉えられる場合に限っては「应该」が使える。しかし、(14b)のように10秒前などの記憶は普段話し手にとってはっきり自覚している確かなものであることから、「应该」は使えない。筆者らが10人の中国語母語話者に尋ねた結果も同様であった。このことからも「应该」が話し手の未確認領域に属するものを表す形式であることの裏付けになると考えられる。

参考文献

- 王其莉 (2016)、『判断のモダリティに関する日中対照研究』 ひつじ書房。
- 岡部嘉幸 (1998)、「ハズダの用法について」(国語語研究論集編集委員会『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』汲古書院)、947-960頁。
- 篠崎一郎 (1981)、「「はず」の意味について」『日本語教育』44、43-56頁。
- 高橋太郎 (1975)、「「はずがない」と「はずじゃない」」『日本語学』289、79-81頁。
- 田村直子 (1995)、「ハズダの意味と用法」『日本語と日本文学』21、43-53頁。
- 朴天弘 (2018)、『現代日本語の「ハズダ」に関する考察—「知識確認形式」という観点から—』東京大学PhD論文。
- 韓江雪 (2016)、『汉语“应该”和与其对应的日语表现的对照研究』湖南大学硕士学位论文。
- 呂叔湘 (1999)、『现代汉语八百词』[增订本] 商务印书馆。
- 彭利贞 (2005)、『现代汉语情态研究』复旦大学博士学位论文。
- 王晓华 (2005)、『与汉语“应该”呈对应关系的日语语气』上海外国语大学硕士学位论文。
- 张国修 (2018)、『关于「はずだ」和“应该”对应关系的考察——从情态的角度出发』大连理工大学硕士学位论文。

The Primary Function of Japanese ‘hazuda’ and Chinese ‘yinggai’ from Contrastive Perspective

PARK, Chunhong, SONG, Tianhong,

Abstract

This paper aims to analyze the primary function of Japanese ‘hazuda’ and Chinese ‘yinggai’. These two forms seem to have a similar role as epistemic forms, such as inference or assumption. By comparing ‘yinggai’ with ‘hazuda’, we propose that the primary function of ‘hazuda’ is ‘chishiki-kakunin (the verification of knowledge)’. ‘chishiki-kakunin’ is for the speaker to verify his/her own knowledge that has already or is already established to remove doubts or the discrepancy in which some states (including possible world) do not coincide with the speaker’s one. However, ‘yinggai’ is the form that has some modal inference, which is related to information taken

from the non-current, distal situation. In other words, it does not matter whether or not having the process of inference in the case of ‘*hazuda*’. In contrast, the primary function of ‘*yinggai*’ is to infer the irrealis world, where a specific situation or action is not known to have happened at the moment the speaker is talking. And only in the case of that, ‘*hazuda*’ can be replaced by ‘*yinggai*’. And, when there is no inference process, we can say that the more the speaker is conscious of the discrepancy in his mind, the more accessible ‘*hazuda*’ can be used. On the other hand, ‘*yinggai*’ seems to have usage of some derived meaning from avoiding an assertion.

Keywords : *hazuda*, *yinggai*, epistemic modality, inference, *chishiki-kakunin* (the verification of knowledge)

問う力を育む日本語教育の試みとその存立基盤に関する一考察 —国際会計政策大学院（東北大学）での実践を事例として—

菅 陽子（東北大学）

要旨

本稿は、東北大学国際会計政策大学院（International Graduate School of Accounting Policy、以下、IGSAP と言う）の学生に対して行った問う力を育む日本語教育の実践を紹介し、その背景にある組織の教育理念、教育資源、基幹専門科目の教育実践の重要性を指摘した。また、報告者が中国の東北財経大学で担当した日本語授業を振り返り、IGSAP での日本語教育との違いについて考察した。その結果、教育理念、教育資源、試験・成績評価・授業評価アンケート等の位置づけや取り扱いに大きな違いがあることが認められた。問い合わせを育む教育をスムーズに実践するためには、第一に、修了後の長期的スパンで活躍できる人材を育成しようとする共通の教育目標が組織にあること、第二に、教師は、学生の学びと成長を第一にして、試験、成績評価を行えること、第三に、グループディスカッションが可能な教育環境が必要であることを結論として指摘することができる。社会の IT 化が確実に進む中、コンピュータが処理できない業務に対応する力、すなわち、正解のない課題に自ら仮説を立て、検証を繰り返し挑む力が必要とされる。このような問い合わせを育む教育を導入していない大学の教育のあり方全体を変えることは困難だと思われるが、例えば、問い合わせを育む大学に学生を留学させることは可能であり、そういう学生が、将来的に国際的なリーダーとしての役割を担い、国、社会を正しく導くことが期待される。

キーワード： 問う力、考える力、正解のない課題、教育理念、人材育成

I. 本稿の目的と背景

世界的に激動している社会の中で、高等研究教育機関には、いち早く国や社会の進むべき道を指し示し、その推進力の基盤となることが期待される。世界各国では、国策として高等研究教育機関が国や世界をスムーズに牽引していけるよう、教育制度やしくみ等の整備に取り組み始めている。2012年6月、文部科学省は、「大学改革実行プラン」を公表し、大学教育の質的転換として大学側に求める教育の一つに「『答えのない問題』を発見、最善解を導くために必要な専門的知識及び汎用的能力を鍛えること」を掲げた。2018年4月、日本私立大学連盟は、「未来を先導する私立大学の将来像」の中で、大学が育成すべき能

力の第一として「人間としてのあり方を常に問う主体的で洞察力に富んだ思考力」を挙げた。2018年11月には、中央教育審議会が「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン」と位置付けた報告書を文部科学大臣に答申し、「予測不可能な時代の到来を見据えた場合、専攻分野についての専門性を有するだけではなく、思考力、判断力、俯瞰力、表現力の基盤の上に、幅広い教養を身に付け、高い公共性・倫理性を保持しつつ、時代の変化に合わせて積極的に社会を支え、論理的思考力を持って社会を改善していく資質を有する人材」が多く誕生する必要性を指摘した。先導する教育モデルになることを期待されて設置された国際会計政策大学院（International Graduate School of Accounting Policy、以下、IGSAP と言う）では、基幹科目の授業で、哲学形成につながる、なぜと問い合わせながら知識を体系化させていく教育が行われてきた。このような教育体系のもと、日本語クラスにおいても、問う力を育む授業を実践した。本報告では、IGSAP の日本語クラスでの問う力を育む実践とそれを可能とする教育環境を紹介し、その意義を明らかにする。最後に、IGSAP の教育と対照しながら、報告者が勤務していた中国の東北財経大学・大学院（Dongbei University of Finance and Economics、以下、DUFE と言う）での教育実践・環境を振り返り、AI（Artificial Intelligence）、IOT（Internet of Things）によって仕事のあり方が変化していく中で、それらとうまく付き合いながら業務を進められる人材を養成するために、どのような教育が実践可能で、教育組織に何が求められるのかを考察する。

II. 先行研究

問う力を育む教育に関する研究は、初等中等教育の領域にしばしば見られる。このことの背景の一つには、2020年度から新しい学習指導要領に基づいた教育課程が始まることが挙げられる。そこでは、これから時代に求められる人間のあり方として、「社会の中で自ら問い合わせを立て、解決方法を探索して計画を実行し、問題を解決に導き新たな価値を創造していくとともに新たな問題の発見・解決につなげていくことのできること」と述べられている。新学習指導要領の指導に基づいた様々な実践報告がある。村山（2019）は、高等学校理科においてアクティブラーニング型授業を展開し、対話を通して生徒自らが問い合わせて学ぶ授業を実践し、効果的な方法を検討した。末松（2018）は、初等中等教育の理科、社会科、算数・数学を対象とし、問い合わせが持つ様々な意味と、問い合わせに焦点を当てた授業実践研究を整理し、実践研究における課題について考察した。他方、事例対象を大学にした報告においては、問い合わせることのあるべき姿勢として持つクリティカルシンキング、クリティカルリテラシーの育成に焦点をあてた教育が実践されている。例えば、日本語教育の領域においてでは、久保田（1996）が日本語教育の実践を通じて批判教育、批判的読み書き教育の観点を紹介し、熊谷・深井（2009）が学習者に共同で教科書を書きかえさせる活動を通じてクリティカルリテラシーを日本語教育に取り入れる可能性を報告した。近年では、小林（2014）のビジュアル・シンキング・ストラテジー¹⁾を応用してクリティカルシンキ

ング等の向上を目指した日本語教育の実践報告や、野口他（2019）の上級クラスのリレー作文に協働的なクリティカルシンキング活動を導入した実践報告等がある。2003年から設立が認められた専門職大学院においては、その歴史がまだ浅いこともあり、問う力やクリティカルシンキング等の育成に取り組んだ教育の実践報告は見られない。2019年4月からは、専門職大学、専門職短期大学、専門職学科の設置も認められ、新しい時代を担う国際的な専門家、リーダーを育成するための教育がますます注目されているところである。

III. 専門職大学院が目指すもの

法曹や公認会計士になるには、狭き門の資格試験に合格しなければならず、知識詰込み型の受験勉強に集中し、倫理等の必要な教育を受けずに専門家として世に出ている例が後を絶たない。21世紀に入り、科学技術の高度化、社会・経済・文化のグローバル化が世界中で進む中、同時に不正・不祥事、モラルハザードによる事故、事件が連日のように報道されるようになった。そういう社会的背景から、国際的に活躍でき、かつ上記のような事故、事件を起さない高度専門職業人養成へのニーズが高まり、2003年から各分野で専門職大学院が設立された（図1）。しかし、図1の通り、会計分野では、2009、2010年をピークにして、入学定員を下回る定員割れが原因で徐々に閉鎖されている。このように閉鎖の流れがある中で、2015年、IGSAPは、教育の新しいモデルを示すために設立された。

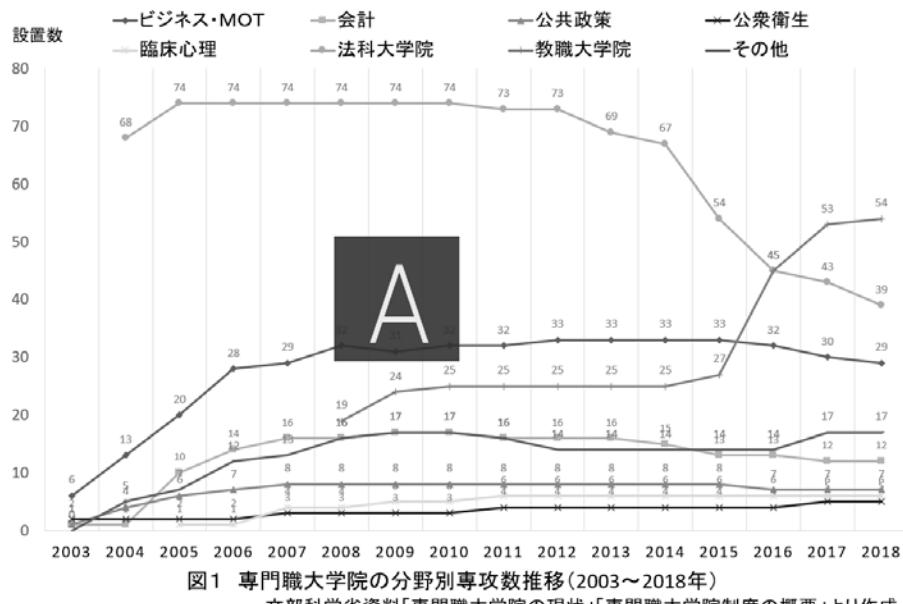


図1 専門職大学院の分野別専攻数推移（2003～2018年）
文部科学省資料「専門職大学院の現状」「専門職大学院制度の概要」より作成

1. IGSAP の目指しているもの

設立当初から IGSAP では「数年で出る成果よりも、学生が 10 年、20 年先に、世界、国を担う国際的な専門家、リーダーとなることを意識し、それに必要な哲学、思想を育む」ことが強調してきた。IGSAP 二大基幹科目である会計、政策科学は、IGSAP 設立時に柱となった教員 2 名が担当しており、彼らの講義は、教科書を使うことはなく、教員側から問

いかけをするスタイルの講義となっている。また学生が、問い合わせを発見し、答えを探究していく課題もある。この教員 2 名は、IGSAP が始まる前から海外の IGSAP 協定校を訪れ、こういった講義スタイルのサンプル講義を実施してきた。IGSAP 入学者対象の受験動機に関する自由記述式アンケートでは、サンプル講義を受講して日本でも同様の講義を受けてみたいと思ったという回答が最も多かった。

2. IGSAP の学生

IGSAP に入学する学生は、留学生がほとんどで、その留学生は一般プログラムとダブルディグリープログラムとに分かれている。IGSAP 入学には、日本語能力を問わないため、日本語を学んだことがない留学生が最も多いが、日本語を学ぼうとする意識は強く、例えば片親が日本人であることから日本語がすでに堪能である等の特別な理由がない限り、日本語クラスを受講する。学生は、修了後、1)国内外の監査法人においてアジア・アフリカ諸国担当の国際専門業務や統括責任業務に携わる公認会計士、2)アジア・アフリカ諸国において会計・財務・公共政策の立案・実施をする政府職員、3)国内外の会計事務所や企業の会計士、会計担当者、4)国内外の大学や研究機関における研究者等の道に進んでいる。

IV. 基幹専門科目の講義

会計、政策科学の講義では、毎回、問い合わせがある。会計では、例えば、なぜ勉強するのか、どうやって自分が自分であることを証明するのか等が授業との関係で問われる。政策科学では、例えば、中国が世界のリーダーになると思うか、またそう思うのはどうしてか等が授業との関係で問われる。担当教員は、自由な意見を尊重するが、学生の回答に大局的に見て明らかに間違いがあれば厳しく指摘し導いている。会計では 1 コマ 90 分のうち 30 分はグループディスカッションを行う。そこでは、例えば、上司に非倫理的な行動を命令された時にどうするか等、個々の学生の考えを引き出すテーマが出される。政策科学では、学期の 3 週間を使って、各学生が自分で問い合わせを作り報告する。教師が授業でよく問い合わせをしていることから、同様に学生が自分で問い合わせを立てる作業もスムーズで、報告テーマもグローバルな視野の問い合わせばかりである。例えば、政策科学で出された学生の問い合わせは、「全ての核兵器は排除されなければならないか。イエスかノーカ。それはなぜか。」「教育は戦争を阻止できるか。」等である。

V. 日本語教育に求められること

IGSAP の日本語教育への期待について、広く探索的な基礎データを集めるために、大学院の創立者で元運営責任者ある教員、大学院と関わりがある企業関係者に直接ヒアリングを行った²⁾（表 1）。その結果、実利的なことよりも、学生によく考えさせて、思想、哲学、価値観を形成するようにしてほしい等、長期的、理念的な意見が共通していた（表 1）。

表1 日本語教育に期待すること (IGSAPの主要関係者に対するヒアリング)

対象	IGSAPとの主な関わり	「IGSAPの日本語教育に期待すること」への回答
専任教員 (60代)	IGSAP創立者・元運営責任者、基幹専門科目の講義担当	留学生はせっかく日本に勉強しに来たのだから、よく勉強させることはもちろん、何のために勉強するのかをよく考えさせてほしい。思想、倫理、哲学を形成する一役を担ってほしい。ここは大学であるから、リテラシーの言語教育でも、知識教育100パーセントにすることなく、何パーセントかでもそうしてほしい。
金融機関所属 (50代)	学生のインターンシップ受け入れ担当	知識の詰め込みをするのではなく、自分の考えを持って行動ができるように導いてほしい。
IT・AI研究機関所属 (50代)	専門科目の特別講義担当	なぜという疑問を学生にいつも持たせ、自分の価値観を形成させるようにしてほしい。若者は本を読まなくなっているが、思想形成のために本をしっかり読ませるようにしてほしい。
監査法人所属 (50代)	専門科目の講義担当、IGSAPフェロー、学生の就職サポート	知識が豊富だが考えられない人は数年後に困るので考えられる人材を育ててほしい。就職して最初の3年は詰め込みの知識で乗り切れるが、4年目からは考えないと対応できない案件が多く発生し仕事ができなくなる。そういう人材は見捨てられることになることを理解しておいてほしい。

1. 授業内外での実践

IGSAP 内での日本語授業（科目名は Japanese Business Communication）の考慮すべき前提は、1) 学生のほとんどが日本語ゼロスタート、2) 授業時間が限定的（週1回 90 分）、3) ダブルディグリーの学生は、10か月～1年で母国に帰国、4) 学生は専門科目の勉強を優先しなければならない、5) 学生は学内で日本語に接する機会がほとんどない等で、これらを踏まえて、より現実的で実際にすぐ使えることを目指す「日本語+多様なコミュニケーション方法」を実践課題としてきた。例えば、実際の会話では、翻訳アプリ等の活用も推奨している。そういう指導方針に加え、なぜと問い合わせながら知識を体系化していく営みを加えるため、3つのアプローチを試みた（表2）。

表2 IGSAPの日本語教育で問い合わせを育むための3つのアプローチ

	具体的な方法
1) 自律学習を促す教育環境整備	<ul style="list-style-type: none"> ○同じクラス内で課題量と厳しさが選べる3つのコースの設置し、学生が選択する。 ○教室に学習計画表を設置し、各学生は、自分で目標を決めて計画を立てて学習をすすめる。（写真1） ○課題は、返却された後も自分が納得するまで何度も再提出してよく、試験も再チャレンジ可能とする。 ○自分が作った例文、作文をいつでも提出してよい。
2) 思考を促す問い合わせや活動	<ul style="list-style-type: none"> ○教科書の会話の続きや話者の気持ち、同じ状況で自分が登場人物になった場合の言動を考えてもらう。 ○授業時間外活動として、ディスカッションにつなげができるバーンガ等の教室活動を全クラス混合で行う。グループで気づきや解決方法などをディスカッションしてもらう。（写真2）
3) 自分を俯瞰できるテーマの選択	<ul style="list-style-type: none"> ○期末試験の課題の一つを「私の過去、現在、未来について」とする。 ○スピーチコンテストのテーマを、予選では「私と私の生活」、本選では「IGSAPにおける経験」「IGSAP修了後の夢」とする。



写真1 教室に設置した学習計画表

写真2 机を移動して行う全クラス混合の教室活動

2. 具体的な実践とその効果

2018年秋学期から、クラスを基礎、初級に加えて上級を設置し、基礎、初級クラスでは、

基本的に授業 1 コマで「みんなの日本語」1 課のペースで進め、課題量別にコース（龍、人、天使）を選択できるようにしている³⁾。毎回多くの課題がほしい学生は龍、2 週に一度、課題がほしい学生は人、課題が不要の学生は天使を選び、どのコースの学生も同じ期末試験を受ける。2018 年秋学期は、基礎、初級クラス 19 名中、龍 18 名（学期途中、人から龍へ 1 名変更）、天使 1 名、2019 年春学期は、基礎、初級クラス 12 名中、龍 10 名、人 2 名であった。龍の選択理由としては、学生はよく勉強すべきだ等が挙げられており、ただ単純に、厳しいコースを選ぶことを当然として捉えていることが分かった。天使、人を選んだ 2 名は、母国の大学院で既に 2 年勉強し、入学時点で論文も完成し就職もほぼ決まっていた。この 2 名は、自由に勉強したいことを選択理由として挙げ、作文を自主的に提出した。

日本語能力試験については、2018 年 4 月の時点で、基礎と初級クラス受講学生の 16 名中 14 名が受験を希望した。学生は、自分で受験級を決定し、学習計画を立てた。学習計画表を見ると、毎日約 40 単語の暗記、問題集を 3 章ずつマスターする等で、ハードな計画に見えたが、学生に試験用ノートを見せてもらうと、確実に計画をこなしていた。また、全員が受験級別の日本語学習アプリを活用していた。学生によれば、試験対策の勉強方法をよく分かっており、ゲーム感覚で取り組んでいるということであった。

授業では教科書を部分的にだけ使用している。例えば、問題の 1 番のみを使う等である。練習問題等に出てくる会話文は、その会話の続きをどう展開するか、登場人物の言動、気持ちについても考えてもらう等、学生が想像したことを発言したり創作練習をしたりすることに比較的時間を割いている。回答は、教室に設置した 4 面のホワイトボードに 2、3 人ずつ分かれて一斉に書いてもらい、その回答には教師も学生役となって同様に参加しつつ、学生の回答を考慮しながら新しい語彙や文法を導入する。授業は全体として、教科書とホワイトボードに大量に書きこまれた内容を高速で往復しながら進められる。期末試験は、質疑応答とプレゼンテーションで、全クラス参加の環境で行う。回答には自分が納得するまで挑戦してもよく、教師やクラスメートからその場でアドバイスをもらってもよい。実際には、どの学生も何度も挑戦し、自分に対しても他のクラスメートに対しても完璧を求めた。試験中、学生同士で教え合ったり確認をし合ったりすることで、お互いに知識や情報を拡大でき、かつクラスメートが分かるように教えることを通じて学習を一層定着させることにもつながった。また、自分を俯瞰して見て自由に発言することにつながる活動として、全クラス対象にバーンガ等の教室活動やスピーチコンテストを実施している。

授業やその他の教室活動で、各々のその人ならではの発言が尊重され、ディスカッションも活発に行われる中で、学生は問題や課題に対して自由な発想で取り組んでいった。例えば、教科書に出てくる「A:山田さんの電話番号を知っていますか。」という質問文に対して、「個人情報です。」、「山田さんに A さんの電話番号を教えたほうがいいです。」等の多様な応答を考えると同時に、「山田さんと A さんはどんな関係ですか。」、「A さんは怪しいです。知らないふりをします。」等の意見も出た。学生は、質問に対して答えが一つではない

ことに気づき、問題や例文に対して想像力を働かせて考え、発言することが多くなった。

VI. 中国の大学・大学院 DUFE での日本語教育を振り返って

報告者がDUFEで日本語授業を担当した際、「21世紀型スキル⁴⁾を育む授業」の導入に困難を覚えていた。その原因をIGSAPとの教育資源と対置して考えると、DUFEでの教育実践・環境を、試験の取り扱い、成績評価制度や授業方式、教育資源の利用について柔軟性が低かったことに気づく。例えば、DUFEでは、成績評価が点数制で公表され、1点の差で成績順位が大きく異なってくるため、教師も学生も点数に敏感であった。また、評価も一定のバランスが求められ、例えば、多くの学生に高い評価をつければ、試験問題の難易度を上げるように指導がある。教室の机、椅子、黒板は固定されているため、教室内移動がままならず、グループディスカッションには困難な環境であるが、それより以前に、学生が不安になるという理由でグループディスカッションを控えるようにという指導が入る。IGSAPでは、授業評価アンケートは事務的に実施されるだけで、教師も学生もこれは無意味であると認識している。他方、DUFEでは、授業評価アンケートが点数化され、教師はそれを非常に気にする傾向がある。またDUFEでは、スピーチコンテストに勝つことを第一目標とし、模範原稿が学生間で共有され、教師も学生も効率的に勝つ方法を考えなければならない。DUFEの会計の授業を見学させてもらうと、教科書を学生が声を出して読み、問題練習に取り組むという繰り返しであった。学生はそういった教育形式を高く評価し、教師もその教育方法に満足していた。近い将来は、AIが「記憶」、「データの論理的分析」、「単純作業の継続」作業を担当し、それ以外の業務を人間が担当する可能性がある。例えば、日本語専攻の学生の就職先の一つである、日本企業のアウトソーシングの業務もAIが対応できる部分が出てきている。組織全体として、知識を覚えこませることよりも考えることができる人を育む方向に進むべきで、どの教育分野でも、常識を疑って問い合わせを立て、創造的に考えられる人間ならではの強みを生かせる人材を育てていく教育への転換が求められる。

VII. 結論

本稿は、将来国際的な専門家やリーダーになることが期待されている IGSAP の学生に対して行った問う力を育む日本語教育の実践を対象とし、その背景として IGSAP の掲げる教育理念、教育資源、基幹専門科目の教育実践の重要性を指摘した。また、この教育実践の対極を成す DUFE における日本語授業を取り上げ、IGSAP における日本語教育との違いについて考察した。その結果、教育理念、教育資源、試験・成績評価・授業評価アンケート等の位置づけや取り扱いに大きな違いがあることが認められた。問い合わせを育む教育をスムーズに実践するためには、第一に、修了後の長期的スパンで活躍できる人材を育成しようとする共通の教育目標が組織にあること、第二に、教師は、学生の学びと成長を第一にして、試験、成績評価を行えること、第三に、グループディスカッションが可能な教育環境が必

要不可欠であることを結論として指摘することができる。社会のIT化が進むことにより修了生が従事する業務の専門化や複雑化が進む中、社会がコンピュータスキルを修了生に求めるのは自然の流れである。人間が担当する、コンピュータには処理できない業務については、自ら考える力が求められ、そうした業務には正解がないという認識が前提となる。正解のない課題に自ら仮説を立て、検証を繰り返し挑んでいく力、すなわち問い合わせの力が必要とされる。このような問う力を育む教育をまだ実践していない大学の教育のあり方全体を変えることは困難だと思われるが、将来的に可能な方法を模索することはできる。例えば、国際交流プログラムを通じて、問う力を育む大学に学生を積極的に留学させることはすぐにでもできる。時間はかかるが、そういった学生が、将来国際的なリーダーとしての役割を担い、国、社会を正しく導くことが期待される。

注

- 1) 美術鑑賞を通じて「観察力」「批判的思考力」「コミュニケーション力」を育成する教育。
- 2) 2017年8~11月に3~5分のヒアリングを実施。各回答は、筆者が要約したもの。
- 3) 筑波大学落合陽一氏が「先端技術とメディア表現」の授業で実践している、受講者の参加目的・やる気別のコース分けを参考にして2018年春から実施している。
- 4) 筆者は、2012年10月にイリノイ州日本語教師会ワークショップに参加し、そこでThe Partnership for 21st Century Skills (P21) が出している21st Century Skillsを学んだ。DUFEに戻り、日本語学科の教師対象勉強会で、21世紀型スキルの教育について説明し、「現実から離れていて想像することが難しい。」というコメントを受けた。

参考文献

- 久保田竜子(1996)、「日本語教育における批判教育、批判的読み書き教育」『世界の日本語教育』6、35-48頁。
- 熊谷由理・深井美由紀(2009)、「日本語学習における批判性・創造性の育成への試み—教科書きかえプロジェクト」『世界の日本語教育』19、177-197頁。
- 小林尚美(2014)、「ビジュアル・シンキング・ストラテジー(VTS)を日本語教育に応用した実践報告—クリティカル・シンキングとビジュアルリテラシーの向上を目指して」『東海大学紀要』4、117-132頁。
- 末松加奈(2018)、「授業における「問い合わせ」に着目した研究の動向と展望」『東京大学大学院教育学研究科紀要』58、345-349頁。
- 村山一将(2019)、「高等学校理科「科学と人間生活」におけるAL型授業の展開—「サイエンスコミュニケーション」と「探究活動」を重視した「問い合わせて学ぶ」授業を目指して」『日本私学教育研究所紀要』55、5-8頁。
- 野口潔・田辺和子・大須賀茂・岡田彩(2019)、「上級日本語クラスでのクリティカルシンキングを取り入れたリレー式創作文活動」『Lingua』29、135-143頁。

文部科学省(2012)、「大学改革実行プラン—社会の変革のエンジンとなる大学づくり」

文部科学省(2016)、「専門職大学院の現状」

文部科学省教育課程部会情報ワーキンググループ(2017)、「未来を見据えた初等中等教育改革」

日本私立大学連盟(2018)、「未来を先導する私立大学の将来像」

文部科学省(2019)、「専門職大学院制度の概要」

文部科学省初等中等教育局課程課(2019)、『新しい学習指導要領』

Japanese Language Education focusing on Deep Thinking and its Findings: Case Study of the Japanese Language Classes at International Graduate School of Accounting Policy, Tohoku University

SUGA, Yoko

Abstract

This paper discusses the important roles of educational philosophy, educational resources, and educational practices of courses focusing on deep thinking for students learning Japanese as a second language at International Graduate School of Accounting Policy (IGSAP), Tohoku University. Because I had the experience of taking Japanese classes at Dongbei University of Finance and Economics (DUFU), I could compare them with those at IGSAP. I found there were big differences between the two types of courses in educational philosophy, educational resources, recognition and management of examinations, grade evaluations, and class evaluations by students. My conclusions to realize deep thinking are as follows: (1) first, the organization should include the same educational goal in all courses under a long-term vision, (2) second, the teacher must conduct an examination and a score evaluation to assess students' learning and development, (3) third, classrooms should establish environments where students can feel free to engage in discussion. As society becomes more and more IT-oriented, students will be required to complete the tasks that cannot be processed by computers (that is, the ability to make hypotheses on issues having no single, correct answer, to find a solution, and to seek another solution in the future). Immediately changing all of the universities' education programs seems daunting. However, it is possible to send students to a university that has introduced such a program focusing on deep thinking. The student who has cultivated the ability of deep thinking is expected to play a role as an international leader in the future, and he/she will become a leader who can seek justice.

Keywords : deep thinking, deep learning, task with diversified answers, educational philosophy, nurturing of human resources

複言語話者が持つ日本語を「話す」ことに対するビリーフ —日本で日本語を学ぶ4名を対象としたケーススタディー

良永 朋実（九州大学）

要旨

日本語学習者の増加に伴い、学習者の言語的背景も多様化してきている。本研究では複言語を背景に持つ4名の日本語学習者に着目し、彼らの日本語学習ビリーフ、特に日本語を「話す」ことに対してどのようなビリーフを抱いているのかを明らかにすることを目的とする。

対象者はいずれも、①幼少期から母語以外の言語との接触頻度が高く、②学校教育でも複数の言語の学習機会に恵まれていた。③日常生活においても複言語使用の必要性があつたことや、④帰属意識による複言語の使い分け、⑤複言語使用による相互補完も示唆された。これらは複言語環境での経験によるものである。

日本語学習に対しては、①日本語学習への高い意欲、②日本語習得への大きな自信、③4技能のうち「話す」ことに対して最も自信を持っていることがわかつた。また、④自分自身の誤用に対して高い容認度を持っており、⑤正確性よりも実用性を重視していることも明らかになった。

日本語を「話す」ことに対して、①日本語母語話者教師から学びたいという強いビリーフを持つと共に、②教師としての経験や専門知識も重視している。その一方で、③非母語話者同士で行う練習にも積極的であり、自分とレベルが違う学習者との練習にも意味があると思っていることが言及された。しかしながら、④教師には全ての誤りを修正してほしいというビリーフを持っており、練習相手によって求めている役割が違うことが示唆された。

キーワード： 複言語話者、ビリーフ、話す、日本語学習、ケーススタディ

はじめに

グローバル化が進んでいる現在、人の空間的移動に伴い、個人の言語・文化的な移動も珍しくなってきている。日本国内の日本語学習者を見ると、仕事や留学等で来日する外国人の数が増加するとともに、彼らの出身国や母語、使用する言語などのバックグラウンドも多様化しており、日本語が第三言語以上であるという学習者や、日常的に複数の言語を使用している学習者も少なくない。海外の日本語学習者に目を向けてみても、そ

の多様化は言うまでもないだろう。

一般的に第一言語習得と第二言語習得は区別されているが、第二言語以上の言語習得は「第二言語習得」として扱われることが多い。しかし、田中他（2001）は、バイリンガルにおける第三言語獲得の過程は第二言語獲得の過程を単に拡張したものとは異なる可能性があるとしている。矢野葉子（2001）も、多言語使用社会シンガポールにおける日本語教育の研究のためには、まず、一般的な「外国語習得＝第二言語習得」という概念を捨てなければならず、バイリンガルの日本語習得はモノリンガルの日本語習得とは異なるということを認識することが必要だと述べている。また、日本語学習者が多い東南アジアの多くの国々が多言語使用社会であることから、このような研究の重要性の高さを主張し、それぞれの言語環境、言語教育など学習者の背景に合った教材、教授法の開発の重要性を述べている。

日本語を第3言語以上のものとして学習する学習者が増えていること、モノリンガルとバイリンガルの日本語習得は異なるということを考えると、彼らの日本語習得に対する意識やビリーフ、学習方法の違いなどが明らかになれば、複言語話者にとって有効な日本語教育方法が見えてくるかもしれない。また、複言語話者の多くは、複数の言語を話す環境にあるため、自身の習得言語の技能中でも特に「話す」ことに長けているようである。そこで本研究では、複言語を背景に持つ日本語学習者に焦点を当て、彼らが日本語学習、特に日本語を「話す」ことに対してどのようなビリーフを持っているのか、またそのビリーフがどのように形成されたのかを明らかにすることを目的とする。

I. 先行研究の概観

1. 複言語主義（plurilingualism）と複文化主義（pluriculturalism）

Council of Europe（欧州評議会）は“Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment（以下、CEFR）”において複言語・複文化主義について次のように説明している。複言語主義とは、個人の持つ言語にかかわるあらゆる知識と経験が相互に作用しあい、新しいコミュニケーション能力が育成されていくとする考え方であり、複文化主義とは、言語が文化の主要な側面であることを前提に、個人が接する多様な文化とそれらに対する知識や理解が統合されるとする考え方である（吉島他2004）。また、吉島他（2004）によると、個人が接した種々の文化は比較・対比され、活発に作用し合って、統合された豊かな複文化能力（pluricultural competence）を作り出すものであり、複言語能力（plurilingual competence）はその一部分として、他の要素や成分と相互に作用しあうとされている。

つまり、複言語・複文化主義は、個人が持つ言語・文化の能力に偏りがあることを前提としており、いくつかの言語と文化に関する能力が複合的に混成した状態を認めるものであ

る。その一方、福島（2008）によると「多言語主義」は社会レベルにおける言語の多様性を尊重する考え方であり、そこでは「人は民族、国家、言語によって分断され、原則的に2つのグループには属せない」。しかし、複言語主義では、言語使用者がコミュニケーションを円滑に進めるために、場面や相手によって自身が持つ言語や文化に関わる知識の一部を使用すること（例えば、言語使用の間での言語の切り替え、複数言語を使用し会話をすること）も肯定的に捉える。つまり、複言語・複文化主義とは、個人の言語能力の伸長や熟達度だけを重視するのではなく、個人が持つ複数の言語と文化についての経験や知識を、言語使用者自身が社会の中でどのように役立てることができるのか、という点に重きを置く考え方である。

2. 日本語学習者の言語学習ビリーフ

言語学習ビリーフは、「言語学習の様々な側面・次元について、学習者が抱く信念の総体(Horwitz1987)」である。また Horwitz(1987)は、学習者のビリーフの違いは学習者の教室活動へ姿勢や学習ストラテジーを使用する際の差につながるため、まずは学習者が持つビリーフを把握することが重要であると指摘している。さらに、学習者が持つビリーフと教師が持つビリーフが一致しない場合、教室活動への取り組み方や学習効果に影響を与え、習得を阻害する可能性もあると述べている。また、学習者一人ひとりが持つビリーフは同じではないものの、共通する背景や学習経験がある場合には、同じようなビリーフを構築すると考えられる。

ビリーフはメタ認知に属し、考えの中に「信じているもの」「こだわっているもの」として持っているものである。質問をされて初めて自覚しているものとして出てくる場合もあるが、多くの場合は表面には出てこない (Kato 他 2000)。また、Wenden (1987) の研究では、インタビュー調査の分析から、学習者は言語学習について必ず何かしらのビリーフを持っており、そのビリーフに従った行動（学習）をしているということが指摘されている。つまり、学習者は自らの内部に存在するビリーフに従って行動をし、学習ストラテジーを組み立てていくのである。したがって、学習者のビリーフを知ることは、学習者に適した学習ストラテジーの提案やシラバスを作成する上でも重要になると考えられる。

また、ビリーフが学習者のメタ認知的な支えであると考えると、それが変わること、あるいはそれを変えることによって、学習者のストラテジーやモチベーションも変化することが予想される。Hashimoto (1993) は、学習に悪影響を及ぼすビリーフは修正できる可能性があり、それが学習ストラテジーに影響を与えると述べている。ビリーフを変えることがすぐに学習成果に繋がるとは限らないが、学習に対するモチベーションが向上し、その結果として学習が進むことが予想される。些細なビリーフを変えることで、学習に効果が現れるという結果も報告されている (Dweck, 2006)。

ビリーフ研究の方法としては、Horwitz が 1980 年代に作った質問紙 BALLI (Beliefs

About Language Learning Inventory) を使用し、因子分析を用い統計的に分析をする研究が主流であったが、BALLI のみを使用する研究に対しては批判的な考え方もある。BALLI のような質問紙では、回答した時点でのビリーフしか拾えないこと、それらのビリーフがどのように形成されたのかといった詳細がわからないことなどがその理由である。

II. 調査の概要

1. 調査対象者

調査対象者は日本で日本語を学習している複言語を背景に持つ日本語学習者である。なお、本研究では、複言語および複言語話者と多言語および多言語話者を区別してとらえる。複言語複文化主義についての研究である姫野（2011）が定義した「程度に関わらず複数言語を知り、日常生活においてそれらを使用している人」を参考に、「母語及び日常使用言語を2つ以上持ち、第3言語以上として日本語を学習している者」を「複言語を背景に持つ日本語学習者」とする。今回はできるだけ調査対象者の条件を揃えるために、日本語学習歴や日本語レベルに加えて、彼らの使用言語（オランダ語、フランス語、英語）が共通している学習者を対象者として選定した。調査対象者については以下の表を参照されたい。なお、日本語レベルについては、CEFR のレベルを参考に調査対象者に自己評価してもらったものである。

表1 調査対象者についての情報

学習者	出身国	母語	使用言語	日本語学習歴	日本語レベル
A	ベルギー	オランダ語	オランダ語、フランス語、英語	2年	B1
B	フランス	フランス語	フランス語、オランダ語、英語	2年	B1
C	ドイツ	ドイツ語	ドイツ語、フランス語、オランダ語、英語	2年	B1
D	イギリス	英語	英語、オランダ語、フランス語	2年	B1

2. 調査方法・調査期間

調査は2018年から2019年にかけて実施し、まずはHorwitzのBALLI質問紙を用いた調査を行なった。その中から、インタビュー調査に協力してくれる学習者を募集し、後日個別に筆者と1対1で半構造化インタビューをおこなった。半構造化インタビューは日本語と英語を併用して行い、調査協力者1名につき約1時間から2時間であった。質問項目は、予め準備しておいたものに加え、適宜調査協力者の回答に応じて必要な項目を加えた。今回は、複言語話者が持つビリーフの詳細やその形成過程を明らかにすることを目的とするため、質問紙調査の結果は分析に含めず、調査協力者4名のインタビュー結果についてのみ分析を行う。インタビューの内容については、以下にまとめる。

【インタビュー内容】

- ・調査協力者の言語環境（母語、居住地域の言語、学校内言語等）
 - ・学習経験のある言語
 - ・話すことができる言語
 - ・日本語学習の動機
 - ・日本語学習に対するビリーフ
 - ・日本語を「話す」ことに対するビリーフ
- など、その他は対象者により異なる

III. 結果と考察

1. 複言語環境での経験

対象者はいずれも、居住地域の特性から①幼少期から母語以外の言語との接触頻度が高く、②学校教育でも複数の言語の学習機会に恵まれていた。①については、公用語を複数持つ国や国境付近などに居住、あるいは通学・通勤していたことが起因しており、その地域で生まれ育った学習者は学校教育においても複数の言語を学習している。しかし、単に学校で学習するだけにとどまらず、③日常生活においても複言語使用の必要性があったことや、④帰属意識による複言語の使い分けについても言及している。④については、家庭内言語と学校内言語、祖父母との意思疎通のための言語、所属するスポーツチームや活動サークルなどで使用する言語がそれぞれ異なっていることから、相手とつながるため、そのグループ内の一員となるために、その場に合わせて使用言語を変えているという。

自身が置かれていた環境が複言語環境だったため、周りにも複言語話者は多く、会話の中でお互いに⑤複言語使用による相互補完を行なっていたという発話もあった。例えば、学習者Aは友達とオランダ語で話しているときに、とっさに英語に切り替わってしまうことがしばしばあったという。これは、伝えたいことがオランダ語で即座に出てこない場合や、英語の方が的確に表現できるときなどに、意識的あるいは無意識的に行っていたそうである。学習者B、C、Dについても、話している中で時折他の言語が混ざることはよくあったと言及している。これは、自身が日常的に使用している言語の中にも語彙や使用範囲に差があり、それらを補完するためであると考えられる。これはまさに、個人の言語能力の伸長や熟達度だけを重視するのではなく、個人が持つ複数の言語と文化的知識を自身が社会の中でどのように役立てることができるのか、という点に重きを置く複言語主義の考え方である。つまり、学習者A、B、C、Dの4名には、CEFRで掲げられている複言語主義的な言語への意識、言語使用が培われていると言える。

2. 日本語学習に対するビリーフ

学習者4名とも、自身の母語や使用言語と日本語の間には大きな言語的距離があるものの、①日本語学習への高い意欲を持っている。これは、現在日本に住んでいるということも、日本語学習へのモチベーションに繋がっているだろう。さらに、②日本語習得への大きな自信、特に、③4技能のうち「話す」ことに対して大きな自信を持っていることがわかった。これは、これまで複数の言語を学習した経験があること、それらを習得した成功体験、そして日常的に複数の言語を使用している経験からくるものであると考えられる。また、日本語だけでなく外国語を使用する際に、④自分自身の誤用に対する高い容認度を持っていることもわかった。どの学習者も、誤用を気にすると話せなくなってしまうこと、誤用があっても伝えたいことが伝わればいいというように、⑤正確性よりも実用性を重視しているということも言及している。このように、日本語学習に対して4名に共通するビリーフが明らかになった。

3. 日本語を「話す」ことに対するビリーフ

それぞれ①日本語母語話者教師から学びたい、母語話者教師から学ぶことが上達への一番の近道である、という強いビリーフを持っている一方、ただ母語話者であればいいわけではなく、②教師としての経験や専門知識を持っていることも重視している。②に関しては、授業の際に教師としての責任と自信を持って教えてもらうことで、安心して勉強できるという声もあった。このように母語話者から学ぶことを重視している一方で、学習者同士での練習の際には、③非母語話者同士で行う練習にも積極的である。自分よりレベルが高い学習者との練習は語彙や表現を増やすために有益であるとし、自分よりレベルが低い学習者との練習は相手の間違いを指摘することで自分の謝りにも注意するようになる、といった意見があり、自分とレベルが違う学習者と練習することにも意味があると思ってい るようである。しかしながら、④教師には練習中の誤りは全て修正してほしいというビリーフを持っており、誰と練習するかによって、相手に求めている役割が違うこともわかる。

4. 複言語話者にとっての「外国語」とは

学習者Cのインタビューで面白い回答があったため、ここで共有したい。学習者Cはドイツ語を母語とし、ドイツ語の他にフランス語、オランダ語、英語を日常生活において使用している。しかしながら、これまでにイタリア語とロシア語も学習し習得した経験を持つが、これら2つの言語は「外国語」であるという。イタリア語とロシア語は学校での選択科目として学習し、学習を終える頃にはそれなりに話すことができたそうだが、学校の授業以外で使用する機会は全くなかったそうだ。つまり、学習者Cにとっては習得言語のうち日常的に使用する言語は自分の言語であり、使用しない言語は「外国語」なのだろう。もし言語環境が変わってある言語を使用しなくなった場合は、その言語も「外国語」

になることを示唆している。また、現在学習している日本語については「まだ完全に習得していないからわからない」と答えたが、日本を離れて話す機会がなくなったら「外国語」になってしまうだろうとしている。このように学習者 C には「外国語」の基準として、「その言語を日常的に使用する機会があるかどうか」という判断基準があるようである。

おわりに

今回のインタビュー調査から、学習者の複言語使用の背景および複言語学習の経験が、彼らのビリーフと関係があることがうかがえる。複言語環境に身を置いていたため、複言語を習得する必要性があったからこそ、様々な言語の学習機会にも恵まれたが、その学習機会が彼らの複言語習得の成功体験と自信・誤用への高い寛容性にもつながっているのではないかだろうか。また、彼らの母語や日常使用言語と、目標言語である日本語との間に大きな言語的距離があるにも関わらず、日本語習得への大きな自信を持っていることは、積極的に「話す」練習を行うことに繋がっていることが示唆された。今回の調査では明らかにすることことができなかったが、この大きな自信が習得促進につながるのではないかとも考えられるため、今後は彼らの日本語レベルとも照らし合わせた研究をして行きたいと考えている。また、複言語話者が身につけてきた言語について、「習得」したものであるのか、「学習」したものであるのか、といった区別による分析にも及ばなかったため、この点についても今後の課題としたい。

参考文献

- 岩崎典子 (2013)、「留学前後の日本語学習者の日本観・日本語観—複文化複言語使用者として」『比較日本学教育研究センター研究年報』第 9 号、175-182 頁。
- 欧阳憶耘 (1999)、「二言語併用話者の生活と学習活動における言語使用についての調査—中国語・英語併用のシンガポール初級学習者を中心に」『世界の日本語教育(日本語教育事情報告編)』第 5 号、123-136 頁、国際交流基金。
- 川上郁雄・尾関史・太田裕子 (2011)、「「移動する子どもたち」は大学で日本語をどのように学んでいるのか—複数言語環境で成長した留学生・大学生の日本語ライフストーリーをもとに」、『早稲田教育評論』第 25 卷、57-69 頁。
- 小池真理 (2002)、「質問紙の回答の不安定性を引き起こす要因—学習者ビリーフを調査する質問紙を使用して—」『北海道大学留学生センター紀要』6、37-52 頁。
- 鄭京姫 (2011)、「言語の境界を生きる—「母語」「母国語」「外国語」をめぐる言語意識から」『WEB 版リテラシーズ』9、31-40 頁、くろしお出版。
- 姫田麻利子 (訳) (2011)、「複言語複文化主義とは何か ダニエル・コスト、ダニエル・ムーア、ジェヌヴィエーヴ・ザラト」『大東文化大学紀要』49、251-268 頁。
- 細川英雄 (2010)、「相互文化性の研究指標を求めて—あとがきにかえて」細川英雄・西山教行 (編) 『複

- 言語・複文化主義とは何か—ヨーロッパの理念・状況から日本における受容・文脈化へ』、173-177頁、
くろしお出版。
- 矢野葉子（2001）、「多言語使用社会シンガポールにおける日本語教育についての一考察」
- 吉島茂（2007）、「ヨーロッパの外国語教育を支える考え方—複言語・複文化主義、行動主義、4つのSavoirs、
部分的能力、European Language Portfolio (Can do Statement)」『英語展望』114、49-54頁。
- Council of Europe (2001), Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching,
assessment., Cambridge: Cambridge University Press. (吉島茂・大橋理枝他（編・訳）(2004)、『外
国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』朝日出版社。)
- Horwitz, Elaine K. (1985), "Using Student Beliefs about Language Learning and Teaching in the
Foreign Language Methods Course." Foreign Language Annals, 18:4, pp. 333-340.
- Horwitz, Elaine K. (1987), "Surveying Student Beliefs about Language Learning." in Wenden, Anita
& J. Rubin eds., Learner Strategies in Language Learning. pp. 119-129. London: Prentice-Hall.
- Kato, K. & Yamaoka, D. (2000), Changes of a novice English teacher. Paper presented at 52th
中国四国教育学会自由研究
- Kramsch, C. (2006), "Metaphor and the subjective construction of beliefs," P. Kalaja &
A. M. E. Barcelos (eds.), Beliefs about SLA : New research approaches, Dordrecht, MA : Kluwer,
pp. 109-128.
- Wenden, A. (1987), "How to be a successful language learner : Insights and prescriptions from
L2 learners," A. L. Wenden & J. Rubin eds., Learner strategies in language learning, pp. 103-117.

Plurilinguals' Beliefs about "Speaking" Japanese: A Case Study of Four Japanese Learners in Japan

YOSHINAGA, Tomomi

Abstract

As the number of Japanese learners increases, the linguistic background of learners has also diversified. This study focuses on four Japanese learners with plural languages and the purpose of this study is to clarify what beliefs they have for learning Japanese, especially speaking Japanese.

All subjects had (1) high contact frequency with languages other than their native language since childhood, and (2) had many opportunities which they can learn multiple languages in their school education. In addition, it was suggested that (3) they need to use multiple languages in their daily lives, (4) they use different languages depending on their sense of belonging, and (5) they complement each language by using plural languages. These are based on their experiences in a plurilingual environment.

For learning Japanese, (1) plurilinguals are highly motivated to learn Japanese, (2) they are very confident in learning Japanese, and (3) they are the most confident in speaking among the four skills. They also found that they had high tolerance for their own misuse, and that they valued practicality over accuracy.

For "speaking" Japanese, they have a strong belief that (1) they want to learn from Japanese native language teachers, and (2) they believe that the teachers have experience and expertise as a teacher. On the other hand, it was mentioned that (3) they are also active in the practice between non-native speakers, and (4) that it is meaningful to practice with learners of different levels. However, plurilinguals believe that (5) all errors they make should be corrected by teachers. It was suggested that plurilinguals demand different roles depending on the training partner.

Keywords : plurilinguals, belief, speaking, Japanese learning, case study

蓋然性を表すモダリティ表現の中国語訳の傾向について —カモシレナイを中心に—

王 瀚瑩（大連理工大学大学院）、李 光赫（大連理工大学）

要旨

辞書では、カモシレナイは、“或许、很可能”“一定”“应该”など、ある事件が起こる確率という意味を表すとしている。あることを実現する可能性の確率という観点からすると、中国語の“一定”“应该”“或许”などの意味には大きな差異がある。

そこで、カモシレナイは一体何に翻訳すればいいだろうかということをはつきりするために、本稿では、「日中対訳コーパス」における100部の小説を対象に検索し、1167例を共起しやすいという言語現象によって分類し、函数検定（T、MI検定）とコレ спинデンスといった分析方法で、中国語訳パターンと日本語パターンとの対応関係を考察した。詳しい結果は以下である。

“大概、恐怕”は「カモシレ（ナイ／ナカッタ）」と「ト+カモシレ（ナイ／ナカッタ）」とともに訳される場合が多い。また、「ト+カモシレ（ナイ／ナカッタ）」は“可能”と“或许”に訳される傾向もある。「タラ+カモシレ（ナイ／ナカッタ）」は“可能”以外に、“也许”“其他”に訳される傾向も多い。「バ+カモシレ（ナイ／ナカッタ）」と「ナラ+カモシレ（ナイ／ナカッタ）」は“说不定”に訳される場合が多い。また、「バ+カモシレ（ナイ／ナカッタ）」は“可能”“一定”と訳される場合が多い。「ナラ+カモシレ（ナイ／ナカッタ）」は“说不定”以外に、“似乎”と“其他”に訳される場合が多い。

キーワード： 蓋然性、カモシレナイ、対訳傾向

はじめに

日本の映画や文学作品でカモシレナイという表現をよく見たり聞いたりする。辞書では、カモシレナイは、“或许、很可能”“一定”“应该”など、ある事件が起こる確率という意味を表すとしている。あることを実現する可能性の確率という観点からすると、中国語の“一定”“应该”“或许”などの意味には大きな差異がある。どうして一つの日本語表現が異なる可能性の確率を表す中国語の言葉に翻訳されるのだろうかという疑問を持っている。

なお、従来の研究では、カモシレナイは「認識のモダリティ」に属し、「蓋然性」を表すモダリティの代表的な表現と見なされる。以上を理解した上で、カモシレナイを中心に、

蓋然性を表すモダリティ表現の中国語訳傾向を考察していこうと思う。

I. 従来の研究

1. 日本語における蓋然性を表すモダリティに関する研究

仁田義雄（1991）では、蓋然性を表すモダリティというのは、単に話し手が事態に関する不確実性を表すだけではなく、話し手の思考や想像や推論に事態をある程度把握したが、この事態が成立しない可能性があり、ほかの事態の成立の可能性もあると指摘している。

日本語記述文法研究会（2003）では「蓋然性とは、事態を可能性や必然性があることとして把握するという認識的な意味である。可能性の認識を表す代表的な形式はカモシレナイである。」としている。

2. カモシレナイに関する先行研究

意味機能の観点から、川口さち子（2003）は、「カモシレナイの意味をこれらの表現として、相対的に蓋然性が低いということを表す」というようにとらえている。

仁田義雄（2000）では、カモシレナイは「可能性把握」、すなわち命題内容として描きとられる事態が、生起する可能性をもったものであることを示すと指摘している。

森山卓郎（2002）によると、「カモシレナイは命題が真であるかどうかという可能性を問題とする範囲で、当該可能性の存在に焦点を当てる形式で、その可能性が低いながらもあるということに着目する表現である」としている。

蓮沼昭子（2017）では、婉曲用法を「間接的表現/前置き」、「擬似的同意」に分け、さらに、カモシレナイの前置き用法を「話し手の認識に対する前置き」、「聞き手の認識に対する前置き」、「話し手の発言に対する前置き」の3用法に分けている。

なお、共起する副詞的表現という観点から、日本語記述文法研究会（2003）では、「非常によく共起する副詞として、『もしかすると／もしかしたら／もしかして／ひょっとすると／ひょっとしたら／ひょっとして』などがある。『あるいは／たぶん／おそらく』などの確信の度合いを表す副詞と共にすることもある。」としている。しかし、「もしか類／ひょっと類」と共起するカモシレナイは中国語訳として概ね“也许／说不定”に、「たぶん類／おそらく類」は概ね“也许／说不定”に決まっているため本稿ではカモシレナイが条件文ト・タラ・バ・ナラとの共起する場合の翻訳パターンを中心に考察しようとする。

II. カモシレナイの日本語パターンについての分類

「日中対訳コーパス」からカモシレナイの1167の例文を抽出して、カモシレナイの日本語パターンをI.「单用」、II.「バ+カモシレ（ナイ／ナカッタ）」、III.「タラ+カモシレ（ナイ／ナカッタ）」、IV.「ナラ+カモシレ（ナイ／ナカッタ）」、V.「ト+カモ

シレ（ナイ／ナカッタ）」に分類し、それぞれの特徴を簡潔にまとめて述べる。

1. 単用

「単用」というのは、副詞と共に起することがなく、文末にカモシレナイ／カモシレズ／カモシレマセン／カモシレナカッタで終わることである（例 1）。今回の研究で、合わせて 1016 の例文があった。

- (1) 国井は、室内で待っているようにといふ心づもりから、鍵をかけずにいったのかも
しない。／也许正因为国井打算让她来后先进屋等着，才没锁门的吧。

（森村誠一『日本アルプス殺人事件』）

2. バ+カモシレ（ナイ／ナカッタ）

「バ+カモシレ（ナイ／ナカッタ）」というのは、カモシレナイを用いる文で、前節にバが現れる文を指す（例 2）。即ち、条件を表すバと共に起する文で、合わせて 58 の例文があった。

- (2) 雨村がいなくなれば、ビジネスの上でもいろいろな利益があったのかもしない。
／雨村如果不在人世了，从营利角度看，松尾也是可以捞到好处的。

（森村誠一『腐蝕の構造』）

3. タラ+カモシレ（ナイ／ナカッタ）

「タラ+カモシレ（ナイ／ナカッタ）」というのは、カモシレナイがタラと共に起する文を指す（例 3）。全部で 14 の例文があった。

- (3) 「あなたのいった方法でうまくいくかもしない。でも下手をしたら、相手は死
なないかもしない。」／照你所说的方法，也许会成功。但如果有什么闪失，对
方可能不会死。

（東野圭吾『白夜行』）

4. ナラ+カモシレ（ナイ／ナカッタ）

「ナラ+カモシレ（ナイ／ナカッタ）」というのは、カモシレナイが条件を表す副詞のナラと共に起する場合もあった（例 4）。

- (4) どうせ話が聞けないのなら、ダメ元で怒らせてやるのも手かもしない。／反正谈
不出个名堂，无望之下惹其发怒说不定有效。

（貴志祐介『黒い家』）

5. ト+カモシレ（ナイ／ナカッタ）

「ト+カモシレナイ」という形式で、カモシレナイがトと共に起するというわけである（例 5）。

- (5) 涼子が事情を探り出すと、事態はさらに悪化するかもしない。／涼子一旦追根究

底，只恐怕事态会更加恶化。

（田中『薬師寺涼子の怪奇事件簿』4部）

III. 日本語の構文パターンの配布と対訳傾向

本文は「日中対訳コーパス」における100部の小説を対象に検索した。日本語のパターンに従い、推測程度の観点から分類された中国語の表現を踏まえ、訳文を整理し、合わせて八つに分類する。中国語に訳されるパターン：1 “一定”、2 “似乎”、3 “可能”、4 “或許”、5 “大概，恐怕”、6 “也许”、7 “说不定”、8 “其他”。

1. カモシレナイの対訳分布状況

本文の研究は、関数検定の方法に基づき、五つの日本語パターンと八つの中国語訳形式との関連度を考察するために、(5×8=) 40組の組合せに分類される。カモシレナイの対訳分布状況は以下の表1のようにまとめた。

表1 カモシレナイの対訳分布状況

	1 一定	2 似	3 可	4 或	5 大概， 恐怕	6 也	7 说不定	8 其他	合計
		乎	能	许	许	104			
I 単用	5	11	161	283	37	294	104	121	1016
II ば	1	--	11	13	--	16	9	8	58
III たら	--	--	3	2	--	6	--	3	14
IV なら	--	1	1	3	--	1	3	2	11
V と	--	--	2	3	1	1	--	1	8
合計	6	12	178	304	38	318	116	135	1107

2. カモシレナイの日本語パターンと中国語訳形式との関連度分析

その中で、対応関係がない11個の組み合わせを除き、（表1の中で「--」で表す部分）組み合わせの数は29個になる。この29個のデータを対象として、Tスコア、MIスコアで関数検定する。Tスコアの大きさによって、順に並べる。それをTスコア、MIスコアのスコア・ランキングで配列し、正数値部分だけを（19番目から負数値になるのでここでは18番目まで）取り出したのが次の表2になる。

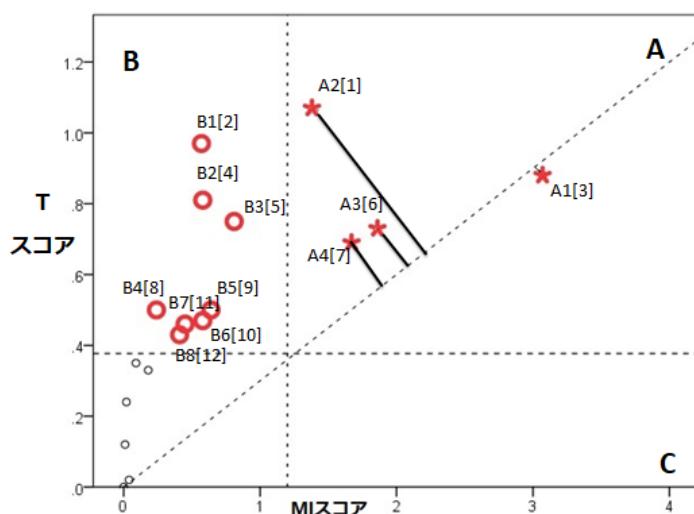
表2 カモシレナイのT・MIスコア

	中国語訳形式	共起頻度	T-スコア	MI-スコア
[1]	IV なら + 7 不定	3	1.07	1.38
[2]	II ば + 7 不定	9	0.97	0.57
[3]	IV なら + 2 似乎	1	0.88	3.07

[4]	IIIたら+6 也許	6	0.81	0.58
[5]	IIIたら+8 其他	3	0.75	0.81
[6]	Vと+5 大概, 恐怕	1	0.73	1.86
[7]	IIば+1 一定	1	0.69	1.67
[8]	IIば+3 可能	11	0.50	0.24
[9]	Vと+3 可能	2	0.50	0.64
[10]	IVなら+8 其他	2	0.47	0.58
[11]	Vと+4 或許	3	0.46	0.45
[12]	IIIたら+3 可能	3	0.43	0.41
[13]	I 单用+5 大概, 恐怕	37	0.35	0.09
[14]	IIば+8 其他	8	0.33	0.18
[15]	I 单用+4 或許	283	0.24	0.02
[16]	I 单用+6 也許	294	0.12	0.01
[17]	Vと+8 其他	1	0.02	0.04
[18]	I 单用+2 似乎	11	0.00	0.00

18組のTスコアとMIスコアの関係は表2の数値だけでは分かりづらいので散布図に変えて表すと、次の図1のようになる。つまり、図1はTスコア（縦軸）とMIスコア（横軸）の数値を対応させ、データを点でプロットしたものである。TスコアとMIスコアの分配、相関関係をもっと正確にはっきり把握できることを目的に、まず、対角線を引く。対角線の右上方向へ行くほど相関関係が強いことを示す。さらに、その上に縦横軸の平均値線を引く。

図1 カモシレナイのT・MIスコアの散布図



それぞれ平均値線の右上の A ブロックに入っているのは星印の [3、1、6、7] である（相互的関連度高い順）。高相関関係を表す A ブロックには入れなかつたが、T スコアが高い B ブロックに入っているのは丸印の [2、4、5、8、9、10、11、12] である。本論では A ブロックに入っている星印の [3、1、6、7] の日中対訳関係を⇒で表し、B ブロックに入っている [2、4、5、8、9、10、11、12] の日中対訳関係を→で表す（詳しい日中対訳関係は表 2 を参照すること）。

3. カモシレナイの関連度分析

図 1 のように、カモシレナイの日本語構文パターンの 5 種類とそれに対応する中国語訳形式がはっきり分かれている。

A ブロック：相互的対応関係

「II バ+カモシレナイ」は“似乎”と相互的関連度が高く、「IV ナラ+カモシレナイ」は“说不定”と相互的関連度が高い。また、「II バ+カモシレナイ」も“大概、恐怕”と相互的関連度が高く、「II バ+カモシレナイ」は“一定”と相互的関連度が高い。

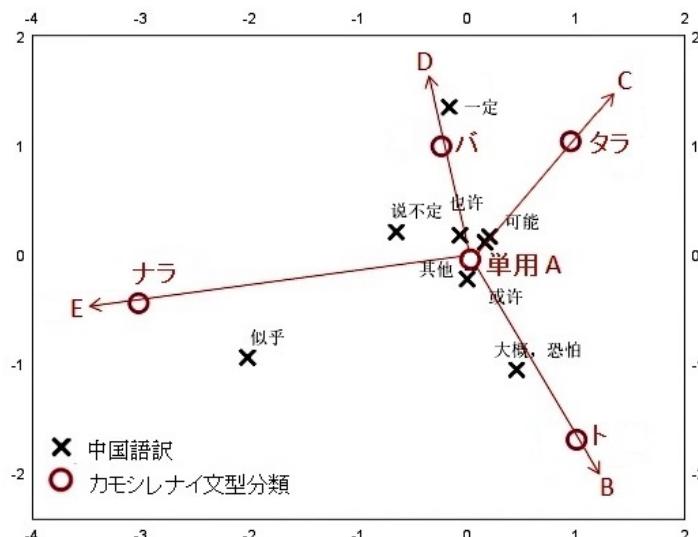
B ブロック：中国語訳傾向

「II バ+カモシレナイ」は“说不定”、“可能”に訳される可能性が高く、また、「V ト+カモシレナイ」は“可能”、“或许”に翻訳される可能性が高い。カモシレナイは“也許”に翻訳される傾向もあり、「III タラ+カモシレナイ」は“也许”、“可能”に翻訳される傾向もある。

4. コレスポンデンス分析

本稿では、コレスポンデンス分析で対訳関係を描くと次の図 2 のようになる、図 1 と同じく、はっきり A・B・C・D・E 五方向で分けることができる。

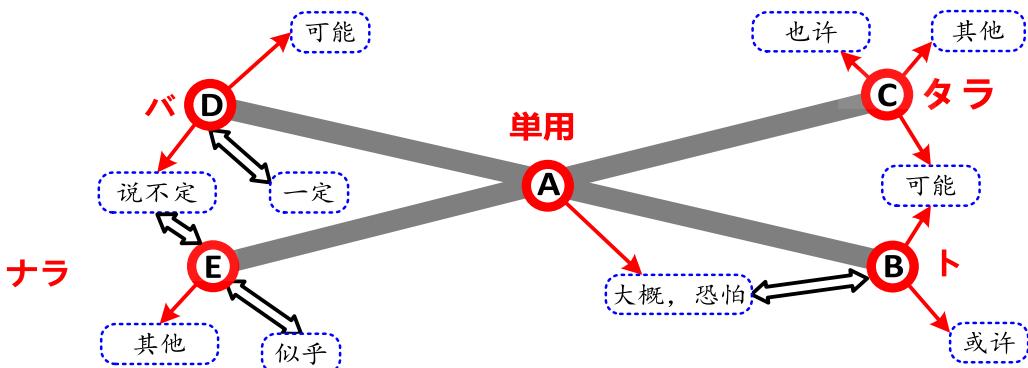
図 2 カモシレナイ日中対訳例コレスポンデンス分析図



真ん中の原点に位置する「A 単用」を中心とする、B 方向に“大概, 恐怕”“可能”と“或许”、C 方向に“也许”“可能”“其他”、D 方向に“说不定”“可能”“一定”、E 方向に“说不定”“似乎”“其他”とはつきり五分類できる。

以上の分析結果をもっと分かりやすく図で整理すると、次の図 3 になる。

図 3 コレスポンデンス分析で構文パターンと中国語訳形式の対応関係



おわりに

辞書はレイアウトのために、本稿のように詳しく分類することができなく、単なる典型的な翻訳表現だけを採用している。しかし、そういった典型的な翻訳表現が実際の翻訳で応用できるとは限らない。辞典には、その他のいろんな翻訳仕方が明記されていない。

そのゆえ、本稿では、先行研究を踏まえ、「日中対訳コーパス」から収集したデータに基づき、カモシレナイ文の 1167 例を研究対象とし、日本語の共起する表現の視点から分類した。また、両者の中国語訳普遍的特徴を詳しく考察した。

本研究では、関数検定の方法でカモシレナイの形式の中国語訳傾向を検討したが、特に関連度が高い表現を中心に、結果を以下の 5 点にまとめることができる。

“大概, 恐怕”は A と B とともに、訳される場合が多い。また、B は“可能”と“或许”に訳される傾向もある。C は“可能”以外に、“也许”“其他”に訳される傾向も多い。D と E は“说不定”に訳される場合が多い。また、D は“可能”“一定”と訳される場合が多い。E は“说不定”以外に、“似乎”と“其他”に訳される場合が多い。

参考文献

- 仁田義雄(1991)、「可能性・蓋然性を表わす擬似ムード」『国語と国文学』58(5)、88-102 頁。
- 川口さち子(2003)、「カモシレナイの「可能性明示」:「意味」「文脈」「機能」の記述」『聖学院大学論叢』15(2)、57-65 頁。
- 仁田義雄(2000)、『日本語の文法3・モダリティ』岩波書店。
- 日本語記述文法研究会(2003)、『現代日本語文法4 第8部・モダリティ』くろしお出版。

森山卓郎(2002)、「可能性とその周辺—「かねない」「あり得る」「可能性がある」等の迂言的表現とカモシレナイ(特集モダリティ・ムード・叙法)」『日本語学』21(2)、17-27頁。

蓮沼昭子(2017)、「「カモシレナイ」と「ヨウダ・ミタイダ」の婉曲用法」『日本語日本文学』27、1-26頁。

李光赫·邹善军 (2017)、「日本文学作品中ト条件句翻譯策略定量分析—兼与《日本語句型辞典》所記词条做比較」『東北亞外語研究』5(01)、73-80頁。

A Study of the Tendency of Chinese Translation of "Modality Expression Expressing the Probability": Focusing on "Kamosirenai"

WANG, Hanying LI, Guanghe

Abstract

According to the dictionary, *Kamosirenai* indicates the probability of a certain event occurring, such as “Possible”, “Constant”, “Maybe”. From the viewpoint of the probability of realizing a certain thing, there is a great difference in the meaning of “Constant”, “Maybe”, and so on.

So, in order to clarify what should be translated, this paper selects 1167 conditional clause from the Japanese-Chinese bilingual corpus. This paper examined the correspondence between the Chinese translation pattern and the Japanese pattern using analysis methods such as function tests (T and MI tests) and correspondence. Detailed results are as follows.

“Perhaps” is often translated together with “*Kamosire (nai / nakatta)*” and “*To + Kamosire (nai / nakatta)*”. In addition, “*To + Kamosire (nai / nakatta)*” tends to be translated into “Possible” and “May”. “*Tara + Kamosire (nai / nakatta)*” is often translated to “Maybe” or “Others” in addition to “Possible”. The terms “*Ba + Kamosire (nai / nakatta)*” and “*Nara + Kamosire (nai / nakatta)*” are often translated as “Might”. In addition, “*Ba + Kamosire (nai / nakatta)*” is often translated as “Possible” or “Constant”. “*Nara + Kamosire (nai / nakatta)*” is often translated into “Seem” and “Others” in addition to “Might”.

Keywords : Probability, *Kamosirenai*, Correspondence

与謝野晶子の女性解放思想の内核と意義

李 先瑞（浙江越秀外国语学院）

要旨

女性解放とは何かという問題に対して、人々はそれぞれ自分なりの解釈をしてきた。しかし、一般的の考えによれば、女性解放は、政治、経済、社会、文化、家族のあらゆる領域での性差による既成の役割分担と、社会的差別と、男性への従属と、それを支えている社会通念や人々の意識から、女性を解放することを指す。女性解放の思想は女性の自由と自立を目指して、以上の様々な束縛から女性を解放しようとする思想である。

周知のように、与謝野晶子の女性解放に関する評論は多岐に涉っている。その思想を把握しようとするには、最も困難なこともその思想の多様性だと思う。従って、晶子の女性解放思想の精神的実質を明らかにすることは氏の思想をよりよく理解することに役立つと考える。

晶子の女性解放思想を次の三つの精神的実質が貫通している。これが「人間性の重視」、「意志の自由の追求」、「内省の重視」といったものである。晶子の批判し、反対するものの中にも、宣揚し、追求するものの中にも、皆晶子が人間としての尊厳を尊重する思想や人間の意志の自由を追求し、内省を重んじる精神が見られると思う。そして、これらの思想や精神が、晶子の女性解放思想に内含されていて、互に絡み合い、融合し合っている。これによって晶子の思想の独特性と体系性が形成されていると思う。与謝野晶子の女性解放論は日本にとっても中国にとっても重要な意義がある。

キーワード：与謝野晶子、女性解放思想、内核、意義

はじめに

女性解放に関する見方は人によって違う。違う時代や違う国家の女性論者が当時当地の実際の状況に鑑みて、女性解放に対する要求も違う。従って、女性解放とは何かという問題に対して、人々はそれぞれ自分なりの解釈をしてきた。しかし、それでも、一般的の考えによれば、女性解放は、政治、経済、社会、文化、家族のあらゆる領域での性差による既成の役割分担と、社会的差別と、男性への従属と、それを支えている社会通念や人々の意識から、女性を解放することを指す。女性解放の思想は女性の自由と自立を目指して、以上の様々な束縛から女性を解放しようとする思想である。

与謝野晶子は詩歌を数多く発表したが、その詩歌は主に恋愛や反戦や日常生活を表現したものである。氏の女性解放思想は主にその評論に表れている。与謝野晶子の評論は女性の社会地位問題、婦女の教育問題、男女平等の問題、女子の貞操問題などに渉っている。その思想を把握しようとするには、最も困難なこともその思想の多様性だと思う。従って、晶子の女性解放思想の精神的実質を明らかにすることは氏の思想をよりよく理解することに役立つと考える。

本稿の考察によれば、次の三つの精神的実質が晶子の女性解放思想を貫通している。これが「人間性の重視」、「意志の自由への追求」、「内省の重視」といったものである。晶子の批判し、反対するものの中にも、宣揚し、追求するものの中にも、皆晶子が人間としての尊厳を尊重する思想や人間の意志の自由を追求し、内省を重んじる精神が見られると思う。そして、これらの思想や精神が、晶子の女性解放思想に内含されていて、互に絡み合い、融合し合っている。これによって晶子の思想の独特性と体系性が形成されていると思う。

与謝野晶子に関する先行研究はたくさんあるが、その女性解放思想に関する内容に限つて言えば、鹿野正直・香内信子編（1994）¹⁾の『与謝野晶子評論集』がある。この評論集は与謝野晶子の女性解放思想を中心としたものであり、与謝野晶子の女性解放思想を理解する上で一番重要な資料の一つである。与謝野晶子が中国女性解放運動との関わり及び中国の知識人の思想との比較や受容をめぐる研究といえば、阿莉塔（2002）²⁾の「周作人と与謝野晶子——両者の貞操論をめぐって」、劉軍（2004）³⁾の「『新青年』時代の周作人と日本：「貞操論」を中心に」、肖寧の論文（2002）⁴⁾「日本女作家与謝野晶子与近代中国女性运动」などがあげられる。

I. 人間性の重視

「人間性」とは、人間としての本性であり、「人間らしさ」ともいえる。広義的にいえば、人間としての「自覚」や「個性」や「人格」などの総称である。

すでに述べたように、晶子は「文化学院の設立について」という文章で女子教育の必要性について論述した時に、「人格の精錬が不足している」ということが個人と社会との如何なる問題に繋がり、「教育の改造」と「人間性の教育」を呼びかけ、人間性教育の不足の問題を提起した。晶子は女性解放思想に関する一切の問題の解決が女性ないし男性全体の人間性の養成によると考えている。

リップス氏の『倫理学の根本問題』⁵⁾から啓発を受け、晶子は「人間性」というものは人間の内面に平等に備っているものであり、これを円満に引出すためには教育と労働によらなければならないと考えるようになった。また、ロシアのミハイロブスキイ⁶⁾の労働人格説——「人格とは労働の発見である」⁷⁾という思想の影響により、晶子は労働が人格の形成や人間性の回復においての作用を非常に重視している。「そのためには、一般の人間に

高等教育を受けることの自由と、併せてあらゆる職業の中から、自己に適した職業を選んだ労働に就くことの自由とを享有せしめねばなりません。」⁸⁾そして、労働と教育の自由を保障し、自己を発展する権利を得るために、さらに、晶子は女性の参政権の獲得を提唱している。要するに、晶子によれば、女性が経済的に独立する職業女性となりたいにしても、家庭に入って愛と聰明とに富んだ新時代の妻となり母となりたいにしても、あるいは、学界に、政界に、社会改造運動に、男性と並んで活動する女性となりたいにしても、このような自分自身の意志による自我を発展する考えは尊重に値するのである。

この主張の中に、晶子が個人の尊厳を尊重する個人主義や普遍的人間性を認める人道主義的な精神が表れているように思う。晶子は人間性の重視を基に現実を見据え、女性を束縛した「良妻賢母主義」などを鼓吹する因習道徳や「男尊女卑」を宣伝する不合理な旧い等級制度などを鋭く批判した。例えば、女性の「女子の人間的進化」⁹⁾を妨害する良妻賢母主義の標準の一つ「女らしさ」に対して、晶子は「女らしさ」というものの存在及びその合理性を否定し、「女らしさ」という言葉から解放されることは、女子が機械性から人間性に目覚めることです。人形から人間に帰ることです。」¹⁰⁾といって、因習道徳から女性を解放することを主張している。「人間性の内容は愛と、優雅と、つましやかさとに限らず、創造力と、鑑賞力と、なおその他の重要な文化能力をも含んでいます。そうしてこの人間性は何人にも備っているのですが、これを出来るだけ円満に引出すものは教育と労働です。」¹¹⁾ここで、教育や労働を通じて普遍的な教養を身につけ、人間の尊厳を確立することを目指す晶子の立場が見られるように思う。当時の日本社会で、晶子のこの人間性中心の思想が女性の目覚めを促進することに大きな意義があるといえる。この思想が女性の人間としての自覚を喚起したと同時に、全社会の人間性の向上にも役立ったのであろう。

II. 意志の自由への追求

晶子の女性解放思想のもう一つのキーポイントは意志の自由を追求することだと思う。

周知のように、「自由」の定義は人によって様々であるが、中国の古代の文語には「自由」とは「自己に由り」、「外力に由らず」ということであり、自身の内の意志が重要視されているのである。しかし、欧州の多くの言語には、「自由」と「解放」とは同じ語根を持っていて、外在の拘束から脱する意味が強い。東方と西方の文化が激しく衝突した時代に身を置かれていた晶子はこの東西両方面の影響を受けていた。だから、晶子の言った自由は、前に述べたことから見れば、二つの中心的な意味を持っていると思う。一つは伝統的な外在の束縛に圧迫されない権利であり、言論・集会・結社・参政等の自由を含んでいる。もう一つは内在の定見や偏見や無智蒙昧などに拘束されない内心の自由自在な状態を指している。しかし、当時の女性の理性が欠しいという状況に対して、晶子は「自由は自己以外の勢力の圧迫から脱して独立することばかりを云うので無く、何よりも先ず自分

自身の意志が盲目的な感情の支配から脱して反対に其感情を或物は抑え、或物は助長しながら正しく調節して行くことを云うのです。」¹²⁾と述べ、意志の自由を強調したのである。

晶子の考えによると、外在の束縛から解放されても真の自由を得たとはいえない。たとえば、過去の女性は言論自由の権利を得たといつても、男性や道徳家や権威や世論などの外界の影響に妨げられなく、独立的に、自由な意志だけに由つて考える能力即ち「理性」を手に入れていなかったので、言論の自由も空論に過ぎないのである。「男子側から如何に多くの婦人問題を出されても、婦人自身に目を覚さねばこの問題の正しい解決は着かないのであろう。」¹³⁾そのため、もし女性自分の意志が常に無智蒙昧な感情に抑えられ、其自身の内に意志の自由を持っていないとすれば、自分以外の勢力の圧迫に対して解放を求めるよりも順序を誤つてることになる。従つて、一番重要なのが内在の意志の自由を得ることだと晶子は主張している。

確かに、物事の発展は内因と外因と共に協同しあつて作用する結果である。内因は発展の根拠であり、外因はその必要条件である。外因は内因を通じてその力を發揮するのである。従つて、晶子は「いやしくも在来の如き高等下女の位地に甘んぜざる限り、中流婦人が率先して自己の目を覚し、自己を改造して婦人問題の解決者たる新資格を作らねばならぬ。」¹⁴⁾といつて、女性に主体性を發揮しようと励ましている。確かに、女性が自主独立の真の自由の生活をほしいなら、まず理性の思想を鍛えて、自分の内に意志の独立を確立し、それから他者の束縛や圧迫から脱して、最後に心身の不自由を脱がれることができると思う。それら一連の努力をした後、女性が二重の不自由から解放し、現実と理想、靈と肉を統一することができると考えている。もし女性自身に束縛から解放する自覚や意志がなければ女性問題も解決にならない。ある意味では、女性解放史は女性が心身の自由を求める歴史である。

III. 内省の重視

同時代の欧米の女権主義者が法律や制度の面で女性の上に加えた束縛を解除する要求が強い。それと比べて、晶子が提唱した女性解放の主張は女性の内面に向けて、内省を重んじ、自我改造を主張する傾向が強いと考える。

晶子によれば、女性の解放問題には男性の専制からの解放と女性の自我改造という二つのテーマがあるが、日本の女性の場合については、晶子が強調したいのが後者である。晶子の意見では、日本人には元々思考や反省が欠けているが、特に女性の場合にはこの問題がさらに深刻である。「男子が教育ある婦人をして心私かに高等下女の觀をなすのは甚だしく不当の評価でない。一般男子の思想に比すれば婦人は何事をも考えていない、何らの立派な感想をも持っていないといつてよいのである。」¹⁵⁾下層の労役に服している女性にしろ、教育を受けた女性にしろ、自身の立場に対しては何らの思想をも持たないし、反省もないし、批判もないという状態にある。「山へ行っても、海岸へいっても、市街の各

工場へ覗いても、最も低額な報酬を受けつつ最も苦痛の多い労役に服しているのは婦人である。それにかかわらず男子より軽侮せられ従属者を以て冷遇されているのは、唯手足のみを器械的に働かさないからである。」¹⁶⁾ 晶子は女性の思想の欠乏を痛感し、もし女性が自我を束縛から徹底的に解放しようとするなら、自己の思想や置かれている立場や自身の依頼心理などの弱点に対して反省し、思想と感情と行為とを自分一身に統一しなければならないと、主張している。トルストイが言った通り、自我を改善するということが人生の最も優れた行為である。晶子もトルストイの精神を受け継いで、女性に対して自身の弱点を克服してより健全な人間になろうと励ましていたのである。

この内省を重視し、女性の自我改造を提唱する思想は、実際には女性を無反省や無批判の状態から徹底的な解放を求め、女性の主体性を確立することを目的とし、晶子の意志の自由を追求した証しでもあると思う。そして、晶子の自我発展を求める思想は、昔の知識人のように一旦社会改造の道で挫折したら世間を離れて自分の心身を修養することだけに気を配っていたこととは違い、晶子の強調した自我の改造や発展は個人を社会から脱させようとするのではない。女性が社会の現実的問題を自身の上に切実な根本問題として考察し、対応するという晶子の主張は、自我改造と社会改造との統合をめざしているので、鮮明な社会性を持っていると考えている。

IV. 与謝野晶子女性解放思想の意義

1. 日本に対する意義

周知のように、与謝野晶子は『青鞆』の創刊号で「そぞろごと」を発表し、女性の覚醒を呼び起こした。「山の動く日来る かく云へども人われを信ぜじ 山は姑く眠りしのみ その昔に於て 彼等皆火に燃えて動きしものを されど そは信ぜじともよし すべて眠りし女いまぞ目覚めて動くなる...」¹⁷⁾ この詩歌は女性の奮起を喚起し、日本の女性解放史上において大きな意義がある。

与謝野晶子は時代の先頭に立って、「オピニオン・リーダー」¹⁸⁾ の役割を充分に發揮し、女性の解放を求める多くの評論を書いた。その評論を振り返ると、氏の女性問題に対して提示した思想や主張などの多くは実際には今日の憲法が保障する基本的人権であることが分かる。たとえば、女性も男性と同様に教育権、職業選択権、財産権や思想・言論自由権及び幸福追求権などの基本的人権を享有するというのはそれである。しかし、百年前の無知蒙昧から目を開けて人間としての自覚を持ったばかりの女性にとっては、こういうことは彼女たちがたゆまなく求めていたことだといえる。晶子の評論の中における女性の恋愛、婚姻、生産育児、教育、職業、社会及びその他に対する独自の見識が近代日本ないし東アジアの女性たちにとって大きな啓蒙的な意義がある。特にその人間性の重視や女性の心身両面の独立を求める思想が今日の女性にとっても啓発があると思う。そのほかに、晶子

が他の女性論者と展開した論争の中で提起した諸問題はその後の女性論の課題となり、後世の人々に多くの思考と啓発を残した。

晶子は自分の社会活動や評論活動を通じて、大正期の女性に対して、女性は男性と平等に人間としての尊厳を持っていて、同様に幸福と自由な生活を営む権利を享有しているということを説いている。そのうえ、晶子は教育と労働を通じて、自己を改造し、人格を完全にし、束縛を打破し、自由と幸せな生活を追及しようといって、女性に啓発を与えた。そして、晶子は自身の思想を文化学院の教育実践に入れて、自由教育を理念とする男女共学を実現していたのである。今までたくさんの新思想を持つ新らしい女性が文化学院から出て社会に入り新思想を伝える種となって、さらに多くの女性の目覚めを促し、日本社会の進歩を促進するために貢献している。晶子のこの人間性の尊厳を尊重し、意志の自由を追求し、自我改造を提唱する態度と姿勢は、近代女性が自己の解放を求めるためには模範的役割を發揮しているといえる。

2. 中国に対する意義

与謝野晶子の思想、主張と社会実践活動は日本の思想近代化と女性運動にだけでなく、中国の女性解放運動にも大きく役立っていたのである。当時の中国社会は新旧時代の交代期にあり、新旧思想の衝撃を受けた女性達もその渦中に巻き込まれていった。中でも、与謝野晶子の「貞操」に関する思想はまるで「寝耳に水」のように、当時中国の旧来の因襲と陋習に囚われていたまだ未覚醒或いは覚醒したばかりの女性に巨大なショックを与え、中国女性の思想解放運動に新しい啓発をもたらしてきた。

1918年から1926年にかけて、与謝野晶子の女性解放問題に関する評論が留日学生や知識人などの翻訳と紹介によって、中国に伝わってきて、「五四」新文化運動前後の思想界の注目を集めていた。1918年に、周作人が晶子の評論「貞操は道徳以上に尊貴である」を「貞操論」と題して『新青年』の第4卷第5号に発表し、思想界で大きな反響を呼んだ。周作人が「貞操論・訳記」での記載によれば、「『新青年』は、この半年以来、ずっと広告を出し、「女子問題」についての投書を募ってきた。当初何篇かの応募があったが、この数ヶ月来、また静まってきた。」¹⁹⁾ 以上からも分かるように、当時の『新青年』は女性問題に関する討論を起こしたいと試していたが、女性解放の提唱者の多くは、ただ問題の発見及び批判に关心を持つのみで、問題の解決のための理論的指導や具体的な提案を出さなかったので、人々の关心を集めることはできなかったのである。そのため、女性問題に関する討論は長期間にわたって継続されることがなかったという点がある。しかし、「貞操論」の発表が思想界で強烈な討論欲を引き起こしていた。続いて、胡適は『新青年』の第5卷第1号に「貞操問題」という文章を発表した。その後、貞操問題をめぐって多くの知識人がこの討論に参加し、激しい論争になっていた。魯迅は中国の実情に合わせて貞操道徳に関する討論を女性の人間性を喪失させる「節烈觀」への問い合わせに導いた。「五四」

新文化運動の前夜において、晶子のこの「貞操は道徳でない」という観念をめぐって展開した大討論は、当時中国の人々に大きなショックを与えていた。その後、晶子の貞操問題の他に、男女平等問題、女性の教育問題、経済独立問題及び家庭問題などに関する評論が次々と中国へ紹介されてきて、当時の女性の性の解放及び思想の解放に対しては重要な役割を果たした。

おわりに

晶子は積極的に人間としての個性と自由を追求している。晶子は個人、家庭、社会と国家のどの場合にでも、民主と自由を発揚しなければならないと認めている。特に女性の幸福に関わる貞操や恋愛・結婚や職業選択などの面においては、女性の自由意志に任せて決断させ、そして、自由に選択する権利があると同時に、自由に選択できる能力をも持たせるべきだと主張している。そのために、晶子は女性に教育と労働を通じて自分自身の知恵と体を鍛え、理性を以て女性としての主体的な地位を守り、経済的独立と精神的独立を実現すると同時に、自我改造を完成しようと励ましている。こういう靈肉一致の独立と解放を求める認識は当時の多くの女性論者の論調を超えて、大正の思想界に大きなショックを与えていたといえる。

近代日本の女性解放史を見渡すと、晶子のように、女性の恋愛、婚姻、生産育児、教育、職業などの多くの面において独自の見識を示し、系統的な女性解放思想を形成した人は極めて少ない。晶子の晩年の評論には極端な国家主義の痕跡があらわれたが、その中年時期に女性評論家と社会教育家として女性の解放のために貢献したことは近代女性解放史で輝くにちがいない。そして、与謝野晶子のように、子育てと文筆活動との間にバランスを取り、自己充実、自我改造と自己表現とをそれ程完成した女性は今の時代でも少ないのであろう。特にその女性解放論を構成する諸課題は時代を超えて、今日の多くの女性問題と社会問題の解決にとっても啓発の意義がある。

注

- 1) 鹿野正直・香内信子編（1994）、『与謝野晶子評論集』岩波書店。
- 2) 阿莉塔（2002）、「周作人と与謝野晶子—両者の貞操論をめぐって」（『九州大学日本文学会』第1号）、131-149頁。
- 3) 劉軍（2004）、「『新青年』時代の周作人と日本—『貞操論』を中心に」（『人文学研究所報』37号）、33-53頁。
- 4) 肖宁（2002）、「日本女作家与謝野晶子与近代中国女性运动」（『日本研究』2002年第1期）、51-56頁。
- 5) Th. リップスの『倫理学の根本問題』は1899年に出版されたが、与謝野晶子が参照したのが1916年の阿部次郎に抄訳された岩波書店刊行の版である。

- 6) ニコライ・ミハイロフスキイ（1842年11月15日—1904年1月28日）は、ロシアの文学評論家、社会思想家、ナロードニキの理論家である。
- 7) 鹿野正直・香内信子編（1994）. 『与謝野晶子評論集』岩波書店、272頁。
- 8) 同上、339-340頁。
- 9) 同上、334頁。
- 10) 同上、344頁。
- 11) 同上、339頁。
- 12) 与謝野晶子（1993）：『与謝野晶子. 愛、理性及び勇気』講談社、129-130頁。
- 13) 同上、59頁。
- 14) 同13。
- 15) 鹿野正直・香内信子編（1994）. 『与謝野晶子評論集』岩波書店、58頁。
- 16) 同15)、57頁。
- 17) 福田清人・浜名弘子（1987）. 『与謝野晶子 人と作品』清水書院、180-181頁。
- 18) 渡辺澄子（1998）. 『日本近代女性文学論—闇を拓く』世界思想社、116頁。
- 19) 劉軍（2004）. 「『新青年』時代の周作人と日本—「貞操論」を中心に」（『人文学研究』所報）37号）、33-53頁。

参考文献

- 与謝野晶子（1993）. 『与謝野晶子. 愛、理性及び勇気』講談社。
- 鹿野正直・香内信子編（1994）. 『与謝野晶子評論集』岩波書店。
- 渡辺澄子（1998）. 『日本近代女性文学論—闇を拓く』世界思想社。
- ア莉塔（2002）. 「周作人と与謝野晶子—両者の貞操論をめぐって」（『九州大学日本文学会』第1号）、131-149頁。
- 福田清人・浜名弘子（1987）. 『与謝野晶子 人と作品』清水書院。

Akiko Yosano's inner core and the meaning of women's Liberation Thought

LI, Xianrui

Abstract

People have made their own interpretation of the issue of women's liberation. However, according to the general idea, the liberation of women is to liberate women from politics, economy, society, culture, sexism, social discrimination, social consciousness, and people's consciousness and in every area of the family subordination to men. The idea of women liberation is the idea of liberating women from the above various constraints aimed at women's freedom and independence.

As is well known, Akiko Yosano's criticism about women's liberation has been widely involved. And the most difficult thing is the diversity of thought to grasp the thought. Therefore, clarification of the spiritual substance of Akiko's Liberation of women's liberation is considered to be useful for better understanding the thought of Akiko.

The following three spiritual facts penetrate through Akiko's female liberation thought. This is "the importance of human nature", "pursuit of free will", and "importance of introspection". In Akiko's criticism and in the opposite, and in the pursuing and pursuing, it is thought that Akiko pursues the freedom to respect the dignity of man as well as the freedom of the will of man, and the spirit which respects introspection is seen. The thoughts and spirit are included in Akiko's female liberation thought, intertwined and fused together. It is thought that the uniqueness and systematics of Akiko's thoughts are formed. Akiko Yosano's theory of women liberation is important for Japan and China.

Keywords : Akiko Yosano, women's emancipation of mind, inner core, significance

玄相允の日本留学時代の創作活動について

池 孝民（商丘師範学院）

要旨

玄相允（1893－1950）は1919年の3・1独立運動民族代表の一人で、歴史家としても知られ、後に初代高麗大学総長も務めた人物である。玄相允の生涯において日本留学時代は彼の人生に大きな影響を与えていた。彼は朝鮮に帰国してから最期まで朝鮮の教育に力を注いでいた。日本留学期間中、彼が学んだ知識、交友関係は彼がのちに朝鮮に帰国して大いに彼に影響を与えていたことも事実である。また、彼が留学期間中、在日朝鮮人留学生の機関誌である『学之光』と『青春』雑誌での文筆活動などの考察も思想形成期の彼の一面を覗くことができる。

本稿では玄相允の日本留学生活の学習と交友、そして文筆活動での作品考察を試みる。

キーワード： 玄相允、近代文人、学之光、清流壁、日本留学

はじめに

玄相允（1893－1950）は1919年の3・1独立運動民族代表の一人で、歴史家として知られ後に初代高麗大学総長も務めた人物で、1893年6月14日に平安北道定州郡南面南陽洞908番地で生まれた。幼少時代、彼は「麗澤斎」という郷塾で在来式の漢学を習い、12歳の頃からは親戚の玄鎮菴から経書を習い始めた。そして1909年16歳の時、定州鳧湖育英小学校を修了して平壤の大成中学校に入学したものの、1911年の「百五人事件」で学校が廃校になるや、ソウルの普成中学校に転入して1913年に同校を卒業した。1914年4月早稻田高等予科文科入学、翌年7月修了、9月から文学部文学科の史学及社会学科に入学し、3年後にここを卒業している。2・8独立宣言に参加した多くの大学生は大学を辞して帰国あるいは中国へ亡命したが、玄相允は当時としては珍しく最短距離で卒業している。

玄相允のこの時期の文学についての研究は、1955年になって具滋均¹⁾によってようやく始められ、そして1970年代に入って金基鉉、李在銑らの研究²⁾によって、玄相允文学の近代性及び近代文学史上での地位については一応確定されるようになった。玄相允生涯においての文学創作活動はこの日本留学時期に限って行われていたので、思想形成期に受けた影響関係と作品性格の究明は玄相允研究において見過ごすことができない部分である。そこで、本稿では玄相允日本留学時代の代表的な創作作品一部の検討を通じて青年・玄相允

の思想形成過程を探って見ることにする。

I. 日本への留学

玄相允は1913年に普成中学校を卒業した後、1913年の冬日本に渡り1918年まで日本の留学生活を送った。それではまず、玄相允の日本へ留学の動機について見て見たい。玄相允は「東京留学生生活」（『青春』第2号、1914年11月）の中で、自分の日本留学の経緯を「私が早くからここ（東京—引用者註）に来る前にどうせ私も東京を一度見てみたいという考えが常にあったので、幸か不幸か昨年冬にどうにかこうにかここに来て自ら別の生活送って見ると（後略）」と、いつか自分も東京に留学することを当たり前のように考えていた。

日本への留学ブームは1910年頃に最高潮に達していたが、日韓合併とともに留学生の数が著しく減っていたが、後述するように、日本留学前の玄相允周辺の人間環境が日頃からいつか東京への留学を当たり前に考えさせたのはいうまでもないことであろう。

一方、玄相允の日本留学動機に関して先行研究の中では次のように記述している。

彼は百五人事件と大成中学閉鎖など日本人の横暴ぶりを目睹して日本人の抑圧から解放しようとすれば日本人を制圧できる学識がなければならないという堅い決心で1914年日本に渡って早稲田大学に入学（後略）。³⁾

上述の見解では玄相允の日本への留学動機は民族のために新学問を習得することとしている。もちろんこのことも否定はできないであろうが、彼が留学を決心したのは、彼のこのような志のほかに、周辺の環境の影響もあった。

六堂（=崔南善—引用者註）は1913年6月『赤いチョゴリ』を廃刊した後、東京に渡って住居を一つ確保（牛込区若松町）して玄相允と金與済をともに居住させた。⁴⁾

ここに見られるように、玄相允が1913年の冬に渡日する前に、崔南善が東京牛込区若松町で玄相允と金與済のためにすでに住居を確保していた。この玄相允と崔南善のつながりは、李光洙と崔麟を通じての関係であった。もっとも、同じ定州出身の李光洙を実際に玄相允が五山に訪ねたのは、李光洙がシベリアに行く前の1913年であった。

春園（=李光洙—引用者註）がシベリア旅行に出発する前、五山学校教師の時期、玄相允は春園に会いに行き、春園が彼の妻と住んでいた家の「斎直房」で、春園の妻が作ってくれた家鳩料理を食べて2日間とどまったことがあったことを玄相允の手紙が語っている。⁵⁾

しかし 1913 年当時の人間関係をみると、玄相允が卒業した普成中学校の校長は崔麟で、彼は李光洙とともに当時、崔南善の活動拠点であった新文館に頻繁に出入りしていたのである。このような経緯から玄相允の留学動機は本人の志のほかに、周辺の人間環境の影響が大きいにあったことが推測される。ちなみに、玄相允と最初、東京の牛込区若松町⁶⁾に崔南善が確保していた住居で同宿した金與済は、五山学校時代の李光洙が教えた学生であった。

玄相允の日本留学日常生活の様子については本人が「東京留学生生活」と題した隨筆の中で記録している。それによると、「朝七時四畳半の部屋で起床して大勢の中国人留学生とともに洗面台に向かい一日が始まる。味噌汁と沢庵二三枚で朝食をとって、八時頃に当日習う本二三冊と昼弁当を持って制服制帽の姿で学校に向かう。教室に入って、老博士たちの社会問題やら政治道徳やら芸術やら宗教やらの世界文明の説教を聞く。下宿に戻って夜八時から学校で学んだあれこれの本を読み、十分くらいの休息後ワーズワースの詩集とかエマソンの論文とかツルゲーネフの小説とかオイケン・ベルクソンの哲学などを取り出して人生の内的生活とか外的生活とかの論著と、生の要求がなければ自我の創造がなく、徹底的な生の覚悟がなければ徹底的な芸術がないという論調にうなずきながら深い思索に入ってしまう。日曜日になると友達とともににぎやかな上野・芝・日比谷等の公園を散策したり、留学生たちの親睦会に参加する」⁷⁾という毎日だった。

東京留学時期、玄相允は積極的に詩、論説、小説など様々なジャンルで作品を発表していた。金基鉉によると、玄相允の号をとった「小星の漫筆第五」には詩 11 編、小説 3 編、雑文類 9 編、計 23 編が載って、第五集は甲寅年(1914 年)1 月 6 日から同 12 月 20 日までの作品で東京留学時の作品草稿である。⁸⁾因みに、金與済が通っていた当時の文学科英文科では坪内雄藏(逍遙)が英文学を教えていた。⁹⁾玄相允は当時の文学科及史学科に在籍していたが、履修科目に「名著研究及作文(国史類、西洋史類)」と「英文学」があることから、彼らが日本と西欧の文芸思潮に接する機会が多かったことがうかがえる。

II. 『学之光』誌に発表された論説

『学之光』誌(1914. 4~1930. 4)は当時在日本朝鮮人留学生学友会の機関誌で、第 5 号で玄相允は該雑誌の印刷担当でもあった。¹⁰⁾彼は、この雑誌に「求める青年はだれだ」(第 3 号、1914 年 12 月)、「言葉を半島青年に寄せる」(第 4 号、1915 年 2 月)、「社会の批判と及標準」(第 5 号、1915 年 5 月)などを始めとして朝鮮社会への訴えと朝鮮青年たちの自覚を呼びかける多くの論説を発表していた。

「求める青年はだれだ」は、玄相允が『学之光』誌に発表した初めての論説で、日々変化する世界政局の中で民族競争のための青年をどこに求めるかを問うものであった。「求める青年はだれだ」を書いたのは 1914 年 11 月 5 日で、彼が早稲田大学に入学して間もない時期であった。低学年だった彼が朝鮮留学生界につけた注文は実に大胆であった。

当面の問題は何であるのか、目下の急務は何であるかを知らず、知識上の基礎は何もなく時代的な自覚はないのに恋愛文学はどうだ、演劇問題はどうだと言ひながら真摯な趣味と的確な観察も欠如した皮相的な芸術觀を誇張して、本業の法律工業は落第の成績なのに、内職の演劇見習、活動写真館出席が合格すればよしとする青年を、求めるべき青年と言えようか？¹¹⁾

いくら在日本朝鮮人留学生が先駆者としての使命感に溢れていたとしても、低学年とは思えないほどの先輩留学生を含む多くの留学生たちへの訴えの口調は実に大胆であった。玄相允のこの主張からすれば、玄相允自身はこの時期からすでに恋愛文学や演劇問題などは、先ず本業をきちんとこなした上での副次的な趣味でなければならないという考えがあったことがうかがえる。これはまた、彼の文学に対する態度にも直結するものもある。

一方、「言葉を半島青年に寄せる」は、世界大勢は弱肉強食の法則に支配され他人の同情を乞ったり無力さを嫌うのが現代生活の特徴であると説明しながら、自己の責任を他人にかぶせるなら朝鮮半島を担う者がなくなるので、将来自分たちが骨を埋める朝鮮半島のためにも奮發しなければならないと訴えていた。「諸君たちも半島青年であり、私も半島青年である。東西南北に分かれても、半島青年であることには変わりはなく、半島青年である以上は半島の繁栄のために頑張らなければならない」¹²⁾という訴えは、当時在日本朝鮮人留学生たちの普遍的な訴えでもあった。

次に、「社会の批判及び標準」の中では、現在朝鮮社会に批判力というものがあるかと問いかながら、社会を動かす最強の力が批判力で、その標準になる「真」に基準をおいて批判してみることを注文している。彼は、このような「批判力」が朝鮮社会にはなかったということで、同じく「自己表彰と文明」の中で朝鮮人たちは自分を低く評価するのが常で、自己を主張することを病気のように思う弊害があるが、自我を表現して自我を主張する、つまり自己表彰こそが文明の一部分で、文明の源泉であるから朝鮮人たちは大いに自己表彰の心構えを持たなければならないと述べている。儒教家庭で育ち、「詩経」「史略」「通鑑」などの教育を受けながら、謙遜、謙讓こそが美德であるという儒教の教えから脱皮して「自己主張」を強調するのに至ったのは、来日して見聞した日本社会の驚異的な発展像への反動からくるものであったであろう。

このような、反動がさらに「朝鮮人の三大欠点」（第8号、1916年？月）に連なったと考えられる。玄相允は朝鮮人の三大欠点として知識の不足、誠意の不足、切実な要求のなさを挙げながら、「この中の一つでも満たさなければ我らの理想は実現できないし、我らが行こうとする所に至れない」¹³⁾と朝鮮青年たちの奮闘を訴えた。もっとも、この論説の「知識の不足」の中で、朝鮮の青年が習得すべき知識については次のように述べている。

今日では朝鮮の人々は、知識があるといつても大きな知識がなければならないし、高い知識がなければならないし、深遠な知識がなければならない。普通学校で学んだ知識でも、測量講習所で学んだ知識でも、中学校で学んだ知識でも、三文小説で学んだ知識だけではいけない。¹⁴⁾

ここでも、小説などで習得したものは知識ではないという彼の考えが伺える。そして、彼はだらしない朝鮮青年たちに眞の知識の習得を訴えていた。『学之光』誌でのこのような主張は玄相允一人に限ったものではなく、無氣力な朝鮮社会、無知蒙昧な朝鮮民衆への啓蒙、訴えとともに批判、叱咤も含まれた論説は『学之光』誌に実に多く掲載されており、これもまた当時在東京朝鮮人留学生たちの雰囲気でもあった。

以上のように、『学之光』誌での玄相允の代表的な論説のほとんどは朝鮮社会のために朝鮮青年たちの覚醒と自覚を促したものであった。ただ、特筆すべきことは前述したように小説などの文学には懐疑的な態度をとっていた彼自身も小説作品を創作して発表したことがある。それでは、次に彼の小説作品を見てみよう。

III. 『学之光』誌に発表された小説

玄相允の『学之光』誌での小説は「清流壁」(第10号、1916年9月)一篇しかない。それも一段小さい活字で「小星」という自身の号で発表している。論説以外の小説・詩・雑文を発表する時、彼はほとんど本名「玄相允」ではなく号である「小星」を用いている。¹⁵⁾まるで、「玄相允」の本業は論説を書くことであって、小説・詩・雑文は「玄相允」の本業ではなく「小星」の本業であるかのようにはっきりと使い分けているのである。プロフィルが載らない当時の雑誌からすれば、ジャンルがはっきり分けられていた「玄相允」と「小星」は確かに別人のような錯覚さえも与えかねない。

「清流壁」(第10号、1916年9月)は、玉香(壳春屋・降仙館に売られる前の本名は金永恩)に一通の手紙が届き、その手紙を読むことから始まる。手紙の中には百円の為替一枚が入っていたが、手紙には「僕の妻よ!」から始まり、玉香に謝罪の意を表していた。

玉香は16歳の時、安岳邑の成道という男に嫁いで行くが、しばらくして義母が亡くなつてから夫の成道は堕落し始め、1年後、玉香は夫に捨てられ、止むを得ず実家に戻つたが、19歳の時、載寧郡主事として赴任して来た平壤の人・黃錫甫の妾になる。

玉香が黃錫甫の妾に入る時の心境を玄相允は次のように描いている。

実家にいつまでも面倒を見させることもできないし、また一方、人間の定め(運命)がそこまでひどいものかと思いながら、再び運を世に問う決心で、両親の勧める話を受け入れた結果、19歳の時、その当時載寧郡主事として赴任して来た平壤の人黃錫甫という人の妾になつた。¹⁶⁾

妾に入ることを定め(運命)の試しとして処理することは、玄相允独特のもので、これは『青春』誌に発表した「恨の一生」と「薄命」につながるもので、人間の再会と別れを含む多くは運命によるものであるという作者の考え方方がこれを支えていたと考えられる。

妾に入った玉香は、1年間は幸せな生活を送っていたが、黄錫甫の転任により、玉香の去就が再び問題になる。「黄主事の家系も所謂両班家系で青年期の畜妾は認められないことだけでなく、その人に本妻の嫉妬」¹⁷⁾で、仕方なく黄主事は玉香を平壌で有名な娼妓組合・降仙館に5年期間、身代金300円で売ってしまうのである。玉香も、最初は降仙館の娼妓生活を屈辱と思い、自殺まで図るのだが、次第にその生活に慣れてしまうことになった。

一方、6年間の堕落生活を送った末、全財産を失ってしまった李成道は良心の呵責で妻・玉香を捜しに出る。

以来6年間あらゆる悪事をして少なくない財産をすべてなくして、どういう考えがあったか一緒に住んでいた妾を追い出して、以前犯した罪を悔やみ、酒を断じ悪事からも身を引いて完全にいい人になった。しかし、まだ昼夜心からすまなく思い刺激されるのは自分の妻であった金永恩のことであった。¹⁸⁾

このように、李成道はすべての悪事から身を引いて完全に善人になっていたが、本妻の玉香のことで心を痛めていた。これは、当時在東京留学生たちの自由恋愛風潮の中で、自由恋愛 자체はよいことであるが、本妻を捨ててまで自由恋愛に走ることには反対であった玄相允のいわゆる「糟糠之妻、不下堂」(苦勞を共にした連れ合いを大切にという意)という考えがあったのであろう。そして、このような考えを抱いたのは、彼が来日前にすでに結婚した身であったことも一因であったであろう。

李成道は本妻の玉香を探し出し、娼妓組合・降仙館で彼女に会い、そして玉香の許しをえることができた。だが、すべての財産を失った李成道は娼妓組合・降仙館に玉香の身代金300円を払えず、玉香は結局自殺してしまう。

このような展開の中で作者は若干、強引な処理方法を用いている。つまり、李成道が6年間で全財産をなくしたように描いたのは、後半玉香の身代金300円を払えないことを展開するための伏線なのである。「どのような罪を犯しても人間は必ず良心の呵責に沈痛な痛みを避けられないのは、人間の靈的自然性」¹⁹⁾で、李成道もこの良心の呵責から突然「善人」に変身するのは、あまりにも不自然な展開である。

白鉄によると、新小説の矛盾点の一つは人為的な結末であるという。新小説の「勸善懲惡の構造性から出てくる結末がすべてハッピーエンドに終わるのも古代小説の結末と一致する古い要素の一つである」²⁰⁾という観点からすれば、玄相允が玉香を悲劇的な自殺の形で結末を処理したことは、確かに少なくとも新小説のハッピーエンド的な矛盾点を克服し

て、そこからの脱皮を図って近代小説的な処理方法を施した点は評価すべきである。

おわりに

本稿は、1910年代崔南善と李光洙とともに「文壇の革命児」とも絶賛されながらも彼らの手に隠されて朝鮮近代文学史上あまり照明を受けなかった玄相允の日本留学時創作の代表的な作品一部を考察してみた。玄相允は初期の出発は儒学的な雰囲気の家庭で旧韓末の啓蒙思想を受け継いだものの、1910年代の日本留学を経て朝鮮の伝統思想を批判、そして西洋思想に傾倒しながら実力養成を唱えた。文学的な才能を持ちながら、日本留学を終えて朝鮮に帰国してから彼は一切の文学活動を行わず、教育事業と儒学研究にまい進していった。日本留学時期のこのような創作活動及び作品は単に啓蒙の一つの「手段と武器」として使われたかどうかについては今後の課題として残しておきたい。

注

- 1) 具滋均、幾堂先生と新文学、高麗大学新報、1955年9月5日～11月21日
- 2) 金基鉉は「新文学初期の小説考」(高麗大学校語文論集12、1970年)で、玄相允作品の構成、背景、人物の検討を通じて、彼の文学は同時期活動していた崔南善・李光洙の作品に匹敵するもので、玄相允文学の近代性を高く評価している。また、李在銘は『韓国短篇小説研究』(一潮閣、1975年、p.16)の中で、「玄相允の作品は大部分が女性趣向的な要素を持って」おり、「作品内容は短篇小説という形式の中では到底受容できない生の総体性を圧縮的にして、時間短縮的な方法でもって無理に扱った」という弱点はあるものの、「逸話やその他の民話的な要素から、フィクションを志向している点から、近代的短篇小説の初期段階を形成させた文学的な意義を持っている」と評価している。
- 3) 조종환、「현상운의 생애와 사상」、경희대학교 대학원 석사논문、1984년、p.6
- 4) 金允植、『李光洙と彼の時代1』、奎出版社、1999、p.507
- 5) 同上、p.527
- 6) 『学之光』第5号、1915年5月、p.68に印刷人・玄相允の住所が「東京市牛込区若松町百四十七番地小澤方」となっている。
- 7) 小星、「東京留学生生活」、『青春』第2号、1914年11月
- 8) 金基鉉、「新文学初期の小説考」、1970年、語文論集12、p.115
- 9) 早稲田大学史編集所編、『早稲田大学百年史 第二巻』、昭和56年、p.402
- 10) 『学之光』、第5号、1915年5月、p.63
- 11) 玄相允、「求める青年は誰だ?」、『学之光』第3号、1914年12月、p.4
- 12) 玄相允、「言葉を半島青年に寄せる」、『学之光』第4号、1915年2月、p.15
- 13) 玄相允、「朝鮮人の三大欠点」、『学之光』第8号、1916年?月、p.15
- 14) 同上、p.12

- 15) 例外：『学之光』第15号の「朝鮮青年と覚醒の第一歩」と『青春』第11号の「東西文明の差異と及其将来」。しかし、この『学之光』第15号には玄相允は「朝鮮青年と覚醒の第一歩」と「李光洙君の〔我らの理想〕を読む」の2篇を書いている。そこで彼は同じ号であることから、両方とも論説ではあるが、自分なりの重みを計ってあえて分けたであろう。
- 16) 小星、「清流壁」、『学之光』第10号、1916年9月、p.54
- 17) 同上
- 18) 同上、p.55
- 19) 同上
- 20) 白鉄・李秉岐、『国文学全史』、新丘文化社、1993年(初版1952年)、p.256

参考文献

- 김윤식(1999)、『이광수와 그의 시대 1, 2』、翰出版社。
- 白鉄・李秉岐(1993)、『国文学全史』、新丘文化社。
- 大村益夫他(1998)、『近代朝鮮文学における日本との関連様相』、緑蔭書房。
- 白川豊(1995)、『植民地期朝鮮の作家と日本』、大学教育出版。
- 正宗白鳥(2013)、『文壇五十年』、中公文庫。
- 和田博文外(2017)、『「異郷」としての日本 東アジアの留学生がみた近代』、勉誠出版。
- 波田野節子(2013)、『韓国近代作家たちの日本留学』、白帝社。
- 任展慧(1994)、『日本における朝鮮人の文学の歴史』、法政大学出版部。
- 『学之光』第3号～第17号(1978)、太学社 影印本。

The studying abroad period in Japan of Hyon Sang Yun

CHI, Xiaomin

Abstract

Hyon Sang Yun (1893-1950) was one of the national representatives of the 3.1 independence movement in 1919, also known as a historian, who later served as president of the first Korea University, the first doctor after the establishment of the Republic of Korea. In the life of Hyon Sang Yun, Japan studying abroad had a great influence on his life. He was devoting his energies to the education of Korea until the end of his return to Korea. During the Japan study abroad, the knowledge he learned and his friendship are also true that he later returned to Korea and greatly influenced him. Moreover, the consideration of the literary activity such as “Hakutigung” and “youth” magazine which is an agency magazine of a Korean student in Japan can peep at his one side of the thought formation period.

In this paper, we try to study the Japan study life of Hyon Sang Yun, and consider the work in

literary activities.

Keywords : Hyon Sang Yun, literary activities , Hakutigyung, Cheungryubyeok, Japan studying abroad

坂口安吾『夜長姫と耳男』論 —呪いの仕組みを中心に—

陳 晓芝（立命館大学大学院生）

要旨

『夜長姫と耳男』は1952年6月に雑誌「新潮」に発表された坂口安吾の短編小説である。登場人物の耳男と夜長姫をめぐる物語が説話風に語られている。『夜長姫と耳男』は傑作として、安吾の芸術観、女性観、天皇制批判、人間性回復の呼びかけといった多様な方面から検討されてきた。本稿では、飛騨の地や飛騨の匠を手掛かりに坂口安吾における歴史学者・喜田貞吉への受け入れ方を明らかにしたうえ、憑物の筋の牛蒡種^{ゴンボダネ}の活かし方を切口に、『夜長姫と耳男』における呪いの仕組みを中心に検討する。そして視線の描写に注目して、耳男と姫に関する異なる視線の取り扱い方と蛇（血）の描写に照らし合わせながら、邪視^{イグルアイ}という民間信仰の視点から『夜長姫と耳男』における視線を分析する。最後、同年2月に発表した『安吾史譚』「その三「道鏡童子」」と見比べて、姫の非人間性の描写を分析し、作者の創作意図を明確にする。

キーワード： 喜田貞吉、牛蒡種、呪い、邪視、非人間性

はじめに

『夜長姫と耳男』は1952年6月に雑誌「新潮」に発表された坂口安吾の短編小説である。馬の顔付きと長い耳を持つ匠は耳男と呼ばれ、飛騨名匠の弟子である。師匠の代わりに長者の娘・夜長姫の護身仮を彫らせることがある。耳男は異なる事由で最初にバケモノの像を、その次に姫の笑顔を収める護身の像を彫刻した。疱瘡が流行した時、バケモノの像が「疫病よけのマジナイ」になり得て、それを機に耳男は名匠として知られ、姫も「生き神様」として信仰されるようになる。当初は姫に反抗心を示したにもかかわらず、その後には姫の意に従うようになる耳男は、最後に村人の死を呪う姫の企みを見極めて姫を殺してしまう。

説話風に語られる『夜長姫と耳男』は、しばしば同じ文体の『桜の森の満開の下』や『紫大納言』と枚挙され、坂口安吾の傑作として評価されてきた。飛騨の匠を取り扱うことに、作家の日本古代史や飛騨の地への興味・関心¹⁾が再確認できる。先行研究においては、『夜長姫と耳男』は安吾の芸術観や女性観からだけではなく、天皇制批判や人間性回復の呼び

かけといった方面からも検討されてきた。高桑法子(1997)は作品から「文学のふるさと」にある「絶対の孤独」の概念を捉えて、長田光展(1985)は耳男の自身の無意識の統合と自己実現までの過程を「芸術家の覚悟」としている。そして耳男と夜長姫の関係性に注目して、作家の女性観を検討している先行研究²⁾も少なくない。当時の社会的政治的背景に踏まえて、加藤達彦(2001)は「視線の対決」の描写を手掛かりに、「国民統御のシステム」が推進されつつあった日本における「人間」の回復が目指されたと論じて、鬼頭七美(2002)は『夜長姫と耳男』を戦後の天皇信仰の復活に対する安吾の危機感を体現した作品として、青木純一(2008)は坂口安吾の原子爆弾への関心を明らかにしたうえ、「破壊の女神」夜長姫には原子爆弾のイメージが仮託されたと指摘した。受容関係においては、美濃部重克(2005)は折口信夫の論文「水の女」、泉鏡花の「春昼」や「春昼後刻」や「由縁の女」などとの関係性を検討した。早川芳江(2015)は箕曲瀬長者伝説、『飛騨匠物語』、小鷹長者伝説、満之長者伝説からの影響を論考している。

夜長姫の死を「芸術化」した恋愛観³⁾として、そして人物関係を恋愛関係に偏って検討する方法⁴⁾、耳男の心理的な屈折から「芸術家の覚悟」⁵⁾を見るには、性急的に作品の読解を安吾の女性観や芸術感に還元する傾向を指摘しなければならない。そこで本稿では、飛騨の地や飛騨の匠に着目して、坂口安吾における歴史学者・喜田貞吉への受け入れ方を明らかにしたうえ、『夜長姫と耳男』における呪いの仕組みを中心に検討する。そして視線の描写に注目して、耳男と姫への異なる視線の取り扱い方と蛇(血)の描写に照らし合わせながら、『夜長姫と耳男』の邪視への受容とその独自性を明確にする。最後、同年2月に発表した「道鏡童子」と見比べて、姫の非人間性の描写を分析し、作者の創作意図を明確にする。

I. 坂口安吾の喜田貞吉受容と『夜長姫と耳男』における呪いの仕組み

喜田貞吉(1871~1939)は明治後、大正、昭和期の歴史学者であり、法隆寺再建論を主張し、考古学・民俗学の資料を駆使して、古代史研究に新機軸をひらいた人物である。1919年、日本学術普及会を組織し、雑誌「民族と歴史」を創刊した。「民族と歴史」の「本誌の綱領」の第一項に「本紙は日本民族の由来沿革を調査し、その社会組織上の諸現象を明らかにするを以て目的とす」、第二項に「本紙は特に過去における賤民の成立変遷の跡を詳らかにし、今もなお時に疎外せらるるの傾向を有する、同情すべき我が同胞解放の資料を供せんとし」⁶⁾と書かれてある。これは天皇制の正統性に疑問を抱き、日本民族の歴史を自ら見直す坂口安吾の姿勢⁷⁾と一致している。「道鏡童子」において、安吾は道鏡が天智の孫であるという喜田の説を踏まえ、高野天皇と道鏡の関係を問い合わせて直している⁸⁾。本作が発表された当時、作者は新聞紙で大いに「職業史家の無能」を批判した⁹⁾が、喜田貞吉の説を自ら援用していたのである。安吾の喜田への受容について、「道鏡童子」を執筆した安吾は喜田の「道鏡皇胤論」(「史林」1921.10)を参考していただけではなく、日鮮同祖論を共に

主張することから、古代史全体を考えるにあたって、安吾は喜田の学説を手掛かりにしていたと野村幸一郎（2005）¹⁰⁾が指摘している。しかし乍ら、安吾は喜田の民族観や古代史譚に惹かれ、喜田の仮説に拠って自らの歴史観を叙述したのみではなく、民俗者としての喜田とその研究にも目を向けていたのである。

喜田が主筆となり、「特殊部落研究号」を編集執筆する「民族と歴史 第8巻第1号」（憑物特集号）（1922.7）は坂口安吾の蔵書目録¹¹⁾にある雑誌である。喜田貞吉が飛騨の地に関心を示したことは、下述の江馬修¹²⁾の「故喜田博士と飛騨」（「ひだびと」第7年(8)(62)）の文章から確認できる。

実際、これまで中央の歴史学者で、喜田博士ぐらひ、飛騨に関心をしめしたものは無かつたと言つても差支へ無い。先生の有名な日高見の国の研究に含まれるヒダの国名考、憑物研究に於けるヒダのゴンボ種に関する考察、飛騨工の研究、その他飛騨に関して実に色々な多くの問題を取り扱はれてゐる。

喜田の「憑物研究に於けるヒダのゴンボ種に関する考察」と言えば、「憑き物系統に関する民族的研究 その一例として飛騨の牛蒡種」（「民族と歴史 第八巻第一号」（憑物特集号）1922.7）という文章が見られ、「飛騨工の研究」の場合では、「飛騨の工」（「ひだびと」第5年(1)(31)）が確認できる。飛騨考古土俗学会が刊行した「ひだびと」（1935.1-1944.5）を所蔵する坂口安吾は喜田の文章を読んだ可能性が十分に考えられる。「憑き物系統に関する民族的研究 その一例として飛騨の牛蒡種」で「飛騨の民は言語容貌既に他国に異なり」の記述が見られ、「飛騨の工」においても「飛騨の民は言語容貌既に他国に異なり、姓名を変ずと雖も、理疑ふべきなし」ことが重複されている。坂口安吾は「飛騨の顔」で「ヒダのタクミは一見して容貌も言葉も他国とちがっているから、どんなに名前を変え生国を偽っていても一目で知れる筈である」と記して、喜田と同様に逃亡したヒダのタクミの捜査や逮捕を命じた承和の官符にある記述を引用している。

飛騨の匠をめぐって安吾も喜田も、飛騨の匠は言語、容貌は他国に異なることと、個人として名匠の名を留まないことに注目している。しかしながら、安吾は匠の容貌を「コブの顔」として限定したのである。そして名を留まない点を「芸術家の為すべきこと」として、「作者の名が考えられないということは、芸術を生む母胎としてはこの上もない清浄な母胎でしょう」と述べている。しかし耳男の外貌と言えば、「大耳は下へ垂れがちなものが、この耳は上へ立ち、頭よりも高くのびている。兎の耳のようだ。しかし、顔相は、馬だな」や「本当に馬にそっくりだわ。黒い顔が赤くなつて、馬の色にそっくり」などが示したように、「コブの顔」ではなく、馬の顔である。鬼頭七美（2002）によると、安吾は江上波夫の騎馬民族征服王朝説に拠り、馬の顔に設定したのである。江上波夫は1935年内蒙古を横断踏査し遊牧民系騎馬集団の生活と文化に接しはじめ、1948年に「日本民族=文化

の源流と日本国家の形成』を、1967年に『騎馬民族国家』を発表し、どちらも東北アジア系騎馬民族の日本征服説を唱えた¹³⁾。しかし、耳男の形象は征服というイメージと反対して、最初に姫へ反抗心を抱いても後に服従するようになったのである。耳のことで姫に嘲笑されたため、姫の護身仮の代わりに呪いの込めたバケモノ像を彫ることを決意した。蛇血を吸い、その血を作りかけの像に滴らせ、三年にかけてバケモノの像を完成した。

バケモノの像は「耳の長い何ものかの顔であるが、モノノケだか、魔神だか、死神だか、鬼だか、怨霊だか」、耳男にも「得体が知れなかった」「怖ろしい物」である。村に疱瘡が流行した時、長者の邸から一人も病人がでなかつたから、バケモノの像が一躍村人に信心された。「耳男の造つたバケモノの像は、耳男が無数の蛇を裂き殺して逆吊りにして、生き血をあびながら咒いをこめて刻んだバケモノ」であり、ホーソー神を睨み返して、その怖ろしさにホーソー神も近づくことができないと風説される。いわば、バケモノの像は、「疫病よけのマジナイ」になり得たものとして村人に信心されたのである。それを機に耳男は名人としてもてはやされ、夜長姫は尊い神の化身であると大評判された。その後、別の病が流行し、姫は人に命じて、バケモノの像門前へすえさせた。姫は邸宅の高樓で、死者を森へすべてに行く人群れを見かけたり楽しんだりする。その後、耳男の真似をして蛇血をすり、また耳男に蛇血をばら撒かせ、蛇の死骸を樓の天井に吊るさせる。耳男は姫が村人たちの死を願つていていることに気づき、決意して姫を刺し殺した。

飛騨の吉城・大野・益田郡、美濃の加茂・恵那・郡上郡などの地に牛蒡種^{ゴンボダネ}というのがある。牛蒡種は憑物現象の一つであり、その家系のものの生靈が憑くとされている¹⁴⁾。喜田は「憑き物系統に関する民族的研究 その一例として飛騨の牛蒡種」においても、飛騨の牛蒡種は直ちに人間が人間に憑くこと、飛騨の牛蒡種とは人間が他の人間に憑いて災いを為すという信仰であると述べ続けた。夜長姫は村人の死を呪う振る舞いには、飛騨の牛蒡種と同様に、人間が他の人間に対して何らかの呪いを通して災いを為すという構図を有する。そして喜田は「或る人間に使役せられた或る靈物が、他の人間に憑いて災いを為すという信仰」を普通の物持筋としていた。バケモノの像が「疫病よけのマジナイ」になれたのは、こちらのポジションに相応するであろう。

「鬼神にしろ、生靈にしろ、また狐・狸・貉・猫・蛇の類にしろ、そう訳もなく人に取憑いて悪戯をする道理もない」のよう、喜田は憑物による呪いの恣意性を否定している。飛騨の牛蒡種について、歴史的な調査を行い、憑物への先住民への差別視線を暴露し批判する目的である。これに対して、「ヒメがしていることは人間が思いつくことではなかつた」が示したように、安吾は姫の呪いにある残酷さ・無惨さを強調して、姫の非人間性を取り扱っている。

Ⅱ. イヴルアイ 邪視という民俗信仰を手掛かりに姫の非人間性を考える

作品における視線の取り扱いは耳男と夜長姫に分けて考えなければならない。「珍しい人や物に出会ったときは目を放すな。オレの師匠がそう云っていた。そして、師匠はそのまた師匠にそう云われ、そのまた師匠のそのまた師匠のまた昔の大昔の大親の師匠の代から順々にそう云われてきたのだぞ。大蛇に足をかまれても、目を放すな」という、耳男には視線を制することは相手を制することである。「その人やその物とともに、ひと色の水のようにすきとおらなければならないのだ」のように、相手の存在自体を意識しないまで目を離してはいけないのである。先に目を放したら負けであると覚悟していたが、耳男は長い耳が注目されたとたんに混乱に陥ってしまう。なぜなら耳男には耳が否定されると彼の存在自体も丸ごと否定されてしまう認識がなされたからである。耳男の中途半端な覚悟に対して、姫の目は、他人に害を与える不幸をもたらしたりする気味の悪い目つきであり、悪魔の目である。姫は常に邸宅の高樓でバケモノのホコラへ拝みに来て死んでいく人を俯瞰して、さらに村の諸方に目を転じて飽かず見渡した。そして姫は「私の目に見える村の人々がみんなキリキリ舞いをして死んで欲しいわ。その次には私の目に見えない人たちも。畑の人も、野の人も、山の人も、森の人も、家の中の人も、みんな死んで欲しいわ」と言い出し、「目に見える村の人々」から「目に見えない人たち」まで、その死を呪っていたのである。姫はその願望を実現するために耳男の真似をして蛇（血）を求めたのである。南方熊楠（1919）¹⁵⁾は、「蛇の画もて、鬼や妖巫の邪視を禦ぎ、大効あると同時に、蛇自身の眼にも、強い邪視力があると信ずる民多し」、「飛騨の牛蒡種てふ家筋あり、その男女が悪意もて睨むと、人は申すに及ばず菜大根すら萎しほむ」と述べていて、蛇と邪視、飛騨の牛蒡種と邪視の組み合わせを論じていた。そして、柳田國男は「池袋の石打と飛騨の牛蒡種」（『郷土研究』第1巻6号1913）の中で、飛騨の牛蒡種という家筋の人たちがもつ邪視の力について報告している¹⁶⁾。上述したように、民俗学界において、飛騨の地には〈飛騨の牛蒡種－女－邪視の力〉という構図がなされていたのである。邪視とは、この目に凝視されたものは、人であろうと物であろうと災いがふりかかるという信仰で、現在でも世界中に広く見出される。安吾は、南方熊楠や柳田國男の邪視に関する書物を接した記録が見当たらないが、当時飛騨の地を踏査した時、こうした飛騨だけの民俗のことも耳に入ったことも充分に考えられよう。耳男の対視への執念や、姫の呪いを込めた視線や、そして呪いをかけるため蛇（血）を求める耳男ないし姫の姿勢から邪視という信仰を想起させる。姫における村人の死を俯瞰する描写や、「目に見える村の人々」から「目に見えない人たち」まで呪いをかけて遠眺する描写から安吾の独自性が見られる。

おわりに

夜長姫は死んでいく村人を見詰めて、耳男に「耳男よ。ごらん！あそこに、ほら！キリキリ舞いをはじめた人がいてよ。ほら、キリキリと舞っていてよ。お日さまがまぶしいように。お日さまに酔ったよう」と話して、「お日さまが、うらやましい。日本中の野でも里でも町でも、こんな風に死ぬ人をみんな見ていらっしゃるのね」のように、再三にお日さまが羨ましい心情を吐き出した。黄金をしぶった露で産湯をつかったから姫のからだは生れながらにかがやいて黄金の匂いがして、後に尊い神が姫の生き身に宿っておられるとされ、尊い神の化身であると言われていた。坂口安吾は同年2月に発表した「道鏡童子」のなかでも「生き神様」を描いている。高野天皇はそれである。安吾は高野天皇を「威風高き女性」として、その威風は「女性そのもので、人間そのものである」と評価している。高野天皇は太陽の子・聖武天皇と太陽の娘・光明皇后の長女と生れ、「二人の全能の光と勢いの全てを継ぐ唯一の神の子として育てられた宿命の女神」である。坂口安吾は「生きた神様」の高野天皇をおのずから神格の位置におかれながら、人間の足跡のみとどめていて、その威風に可憐さがこもっている」としている。「本当に正しいものを愛することのみしか知らなかつた珍しい人間」の高野天皇に反して、「ヒメがしていることは人間が思いつくこと」ではなく、「ヒメの生涯に、この先なにを思いつき、なにを行うか、それはとても人間どもの思量しうることではない」が示しているように姫は非人間的な存在である。安吾は「本当に正しいものを愛することのみしか知らなかつた珍しい人間の魂の物」を「人間的」と定義している。「道鏡童子」において「正しいものを愛する」という表現以外に、「行い正しい高徳者」や、「一個の正しい人間の魂」や、「正しい位置におかれた心」や、そして正しい史料などが示したように「正しい」という言葉は繰り返し使用されている。「好きなものは兜うか殺すか争うかしなければならないのよ。お前のミロクがダメなのもそのせいだし、お前のバケモノがすばらしいのもそのためなのよ」というのは姫の最後の言葉である。耳男は復讐の念のもと、手段を尽してバケモノの像を彫ったのは、飛騨の匠・芸術家として正しい道を取ったことで、すなわち外見が否定された代りに飛騨の匠の身だけを以て対抗したことは正しかったことである。その反対に、後に耳男は姫に殺されたのではないかを念じるようになり、姫の意のままに行動してしまう。その時に耳男は一個の人間としての独立性を失っただけではなく、匠として芸術家として一番大事な反逆的な態度を棄ててしまったのである。こうした『夜長姫と耳男』における「人間的」であるかどうかをめぐる判断の論理が当時歴史的な探偵作業に打ち込んだ作者が重視した反逆の精神をも反映したのである。

注

- 1) 坂口安吾は1951年当時『文藝春秋』(3月～12月)で『安吾新日本地理』を連載しており、中部の巻の執筆のため、同年7月に飛騨・高山へ取材旅行に出かけた。後に「飛騨の顔」(『別

- 冊文藝春秋』第23号)、「安吾の新日本地理 飛驒・高山の抹殺—中部の巻」(『文藝春秋』第29巻第12号)を発表した。
- 2) 角田旅人(1985)「『夜長姫と耳男』曼荼羅」『坂口安吾研究講座第2巻』三弥井書店、奥野健男(1972)『坂口安吾』文芸春秋、浅子逸男(1993)「『夜長姫と耳男』—古代のまぼろし」『国文学解釈と鑑賞』58(2)、142-146頁。
 - 3) 奥野健男(1972)
 - 4) 石川正人(2000)「夜長姫と耳男論」『成蹊国文』33、66-74頁。
 - 5) 奥野健男(1972)
 - 6) 喜田貞吉著、礒川全次編(2008)『先住民と差別』、河出書房新社。
 - 7) 安吾は(1952)「飛驒・高山の抹殺—中部の巻」で飛驒王朝説を提出した。
 - 8) 坂口安吾(1952)「道鏡童子」「オール読物」第7巻第2号。
 - 9) 坂口安吾(1952)「時評的書評「職業史家の無能」」「『読売新聞』6月23日、4頁。
 - 10) 野村は、安吾の歴史認識に喜田の影響があるとしたが、「喜田の学説は、万世一系の理論を朝鮮民族にまで拡大した皇国史觀の変容」として、それに反対して、安吾は皇国史觀との親和性を切斷していたと結論付けた。野村幸一郎(2005)「古代朝鮮と日本—坂口安吾の日鮮同祖論」『国文学解釈と教材の研究』50(13)、17-25頁。
 - 11) 「この「民族と歴史」は安吾がその歴史觀を形成する上で大いに参考とした歴史学者喜田貞吉が主筆を務めており、喜田自身の論文が多数掲載されている。箕曲瀬長者伝説は井上頼寿「箕曲瀬の長者」(『民族と歴史』1922.1)によって伊勢国朝熊村周辺に伝わる伝説として紹介されている。」早川芳江(2014)
 - 12) 江馬修は小説家。岐阜県生まれ。関東大震災後社会主義へ接近、ナップ系の一員として活躍。プロレタリア運動崩壊後故郷高山へ帰り、明治維新期飛驒に起こった農民一揆を描いた著者のライフワーク『山の民』(1938~40)を完成した。大塚博『日本大百科全書(ニッポン大百科)』<https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=1001000033086> 20191015 最終閲覧
 - 13) 江上波夫(1979)『騎馬民族国家:日本古代史へのアプローチ』、中央公論社。
 - 14) 野村暢清『国史大辞典』<https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=30010zz197600> 20191015 最終閲覧
 - 15) 南方熊楠(1994)「蛇に関する民俗と伝説」『十二支考』(上)〔全2冊〕、岩波文庫。
 - 16) 清水芳見(1984)「邪視研究の動向」『民俗学研究』48(1)、91-100頁。

参考文献

- 高桑法子(1997)『幻想のオイフォリー—泉鏡花を起点として』、小沢出版。
- 長田光展(1985)「坂口安吾『夜長姫と耳男』—姫と耳男の深層—」『人文研紀要』第4号、1-35頁。
- 加藤達彦(2001)「視線の対決—坂口安吾「夜長姫と耳男」論」「文芸研究」152、64-78頁。
- 鬼頭七美(2002)「生き神信仰を越えて—「夜長姫と耳男」論」『昭和文学研究』44、64-77頁。

- 青木純一 (2008) 「太宰治/坂口安吾をいま読むための作品ガイド」『ユリイカ』40 (10)、193-206 頁。
- 美濃部重克 (2005) 「幻の国飛驒--「夜長姫と耳男」(特集:歴史家・坂口安吾--世界システムとアジア)」
『国文学解釈と教材の研究』50(13)、26 - 33 頁。
- 早川芳江 (2014) 「夜長姫と耳男」論--発想の源泉としての長者伝説と『飛驒匠物語』』『日本文学文化』
13、110 - 121 頁。
- 石川正人 (2000) 「夜長姫と耳男論」『成蹊国文』33、66-74 頁。

本文を含めて坂口安吾の著作物の決定稿はすべて『坂口安吾全集』(筑摩書房、1998. 5~2012. 12) とし、引用はこれに拠った。

On Anglo Sakaguchi's " Yonagahime and Mimio ": **Centered on the Description of the Curse in the Text**

CHEN, Xiaozhi

Abstract

"Yonagahime and Mimio" is a short story published by Anglo Sakaguchi in the magazine "Shin cyo" in June 1952. The novel revolves around the characters Mimio and Yonagahime with narrative tone. As one of Sakaguchi 's representative works, the "Yonagahime and Mimio" is discussed in terms of the author's artistic view, female view, criticism of the Emperor system and the theme of calling for the return of human nature. This paper will take the region of Hidanochi and Hidanotakumi(the craftsman in Hida) mentioned in the works as the starting point, and on the basis of clarifying what influence the historian Sadakichi Kita has brought to Sakaguchi focusing on the application of possession by evil spirits called Gonbo dane, to discuss the description methods and characteristics of curses in the story. In addition, I will also pay attention to the way of dealing with the eyes of Mimio and Yonagahime, then analyze the description of the eyes from the perspective of the folk belief of Evil eye with reference to the meaning of the snake (snake blood). In the end, comparing with the historical article "Dokyo Doshi" published in February of the same year to study the inhuman description of Yonagahime, and clarify the writer's intention of creation.

Keywords : Sadakichi Kita, Gonbo dane, the curse, Evil eye, inhumanity

近代中日庭園の交響 —後藤朝太郎と重森三玲—

周 堂波（武漢理工大学）

要旨

本論は、重森三玲が主催した『林泉』に掲載された後藤朝太郎に関する部分の内容を抜き出し、主に庭園の構築要素と考えられている太湖石という要素から、後藤と重森両氏の経緯を辿ってみた。重森は中国庭園の岩組には全く興味を抱いていないが、それは重森が後藤と違った視覚から中国庭園を見ていたため、中国庭園の岩組について理解できず、納得できなかつたためである。重森なりの庭石世界観は後藤のそれとは平行線を辿つたものであった。文字的な世界あるいは文学的世界からでなければなかなか中国庭園を理解することはできないとする後藤の世界観と異なり、重森は日本らしき庭園構築の姿を軸としていたのである。一方、後藤は中国庭園の庭石（岩組）に懸命に焦点をあて、それを披露することで重森の趣味を満足させようとする意欲が伺える。中国庭園の庭石も「幽玄味」があり、雲に例えられる等と後藤はその深みを説明しているものの、漢文の素養が浅い重森にとってはなかなか理解しがたいものであった。しかし、造園史において、日本庭園に多大な影響を与えた中国庭園がどういうものであったのかを知りたかった重森の探求心というものは浮かび上がってきた。後藤の論説と写真を見たことで、日本庭園とは何なのかといったものが、重森にとって、よりはっきりと描き出せるようになったのである。

キーワード： 近代、中日庭園、後藤朝太郎、重森三玲、岩組

はじめに

先行研究において、後藤朝太郎は中国社会風俗の専門家として描かれてきたものの、近代中国庭園の先駆者としての姿は殆ど認識されていない。ここではそれを浮き彫りにさせながら、以下の点を考察していく。後藤と周りの人々との関係はいかがであったのか。例えば、京都を中心とする日本伝統文化を研究していた西川一草亭のほか、近代日本庭園の研究では重鎮と考えられる重森三玲と何らかの関係を築いていたのか。そうであれば、どのような関係であり、互いにどのような影響を与え合ったのか等といった一連の疑問を解いていくことが本論の出発点である。それには、重森を中心として作られた庭園研究の専門誌『林泉』から見ていかなければならない。

I. 重森三玲と『林泉』

近代の庭園を研究するのであれば、昭和時代に活躍した造園家の重森三玲を無視するわけにはいかない。以下、『日本人名大辞典』から引用する。重森は「大正・昭和時代の作庭家、生け花研究家である。明治 29（1896）年 8 月 20 日生まれ、全国の著名な庭園を実測調査し、『日本庭園史図鑑』を著す。東福寺方丈庭園など百数十の庭園をつくる。前衛生け花を提言し、また創作的茶道を実践した。昭和 50（1975）年 3 月 12 日死去。78 歳。岡山県出身。日本美術学校卒。本名は計夫。著作に『日本花道美術全集』、『日本茶道史』など」¹⁾とある。

昭和 7 年 6 月、重森らを中心として歴史ある日本庭園の研究団体—京都林泉協会が創設される。三年後に発刊され始める雑誌『林泉』は、協会誌として昭和 10 年（1935 年）1 月・1 号～昭和 19 年（1944 年）5 月まで、年に 10 号の頻度で合計 113 号を刊行している。A5 判雑誌タイプである。

II. 重森三玲と後藤朝太郎

まず、『林泉』に載せられている後藤の言説を見てみよう。

表 1：『林泉』に掲載された後藤朝太郎の言説及び写真

	題目	號数	頁
①	支那庭園の幽玄味（上）	第十號（1935）	pp. 287-296
②	支那庭園の幽玄味（下）	第十一號（1936）	pp. 317-320
③	支那文瀾閣庭園・太湖石組（口繪）	第五十五號（満支庭園特輯）（1939）	口繪
④	支那頤和園・太湖石組（口繪）	第五十五號（満支庭園特輯）（1939）	口繪
⑤	支那庭の氣分	第五十五號（満支庭園特輯）（1939）	pp. 156-164

表 1 を見ると、雑誌『林泉』において後藤は主に、1935 年の第十号に「支那庭園の幽玄味（上）」、1936 年の第十一号に「支那庭園の幽玄味（下）」、そして 1939 年の第五十五号に「支那庭園の氣分」と三つの論説しか発表していない。1939 年の第五十五号（満支庭園特輯）には、後藤の解説付写真が 2 枚掲載されている。その写真を見てみよう。



写真 1



写真 2

写真1は中国西湖の文瀾閣庭園内の面貌、写真2は北京頤和園の一角である。面白いのは1934年、後藤自身が書いた彼の中国庭園に関する代表作とも言える『満支風景庭園図鑑』(以下『満支』と略称)にも上記2枚の写真が掲載されていることである。では、1934年と1939年とではどのような違いがあるのか。次の表を見てみよう。

表2. 『満支風景庭園図鑑』と『林泉』の写真解説対照

『満支』	1934年	第六十四図：西湖文瀾閣の庭園 その飛亭石組みの古式なる点に含蓄多きを見る。	第百五十五図：北平離宮萬寿山内園に見る石組みの壯觀 大理石の拱橋 長廊もさるものながら全国に設計せられた岩組の手法は驚くべきものがある。
『林泉』	1939年	口絵 26：浙江杭州西湖孤山文瀾閣庭園内太湖石組 清乾隆の四庫全書を秘蔵せる文瀾閣は、飛亭石組など見るべきもの多く、殊に岩組の奇々怪々三潭印月蓮池に聳えるそれと好一対をなせるものである。	口絵 27：河北北京萬寿山頤和園内太湖石組み 清末西太后が北洋艦隊建造費を園内林泉建築に振り当てたりと称せられる千重石組みの一部分である。

表2を見ると、同じ写真であるにも関わらず、1939年『林泉』に刊行されたものでは明らかに「太湖石」を突出させようとする意欲が窺える。これは重森の趣味に合わせて書かれたものであると考えられる。では、重森は中国の太湖石に対し、どのような認識を持っていたのであろうか。それを明確にするため、『林泉』第五十五号(1939年7月号)満支庭園特輯に記載された「支那庭園と日本庭園」というインタビューを見る。ここから多少の情報が浮かび上がりてくるはずである。この会話は、重森と、日本庭園専門家であるアメリカ人ロレン・カック (LORAIN E. KUCK) 女史との対話である。内容のあらすじは、天龍寺庭園の作庭者が日本人ではなく中国人なのではないかと半信半疑で重森がカックに確認し、その後、平安時代までの日本庭園には中国からの影響が見られるが、鎌倉以降は違う道を歩んできたのだという点などで認識の一一致を見るものである。その対話の一部を抜粋する。

カック：龍安寺について、私も室町説に賛成です。あれも支那の庭園が源流となっていると思います。

重 森：昨年十一月の文芸春秋に瀧井孝作氏の記事²⁾がありました。獅子林園の庭は全く龍安寺と同様だと記されていますが、そうしたものへの影響でしょうか。

カック：あれは全く違います。全然考えられません。

重 森：私も岡大路氏の写真で拝見しますと、実は全然異なっています。あれは室町末から桃山式のところがあると。

カック：その通りです。

重 森：明以後の支那庭園の写真で、石組を拝見しますと、例の太湖石で、雲根といった様なものが考えられますが、写実的にはあの様な見方もありますでせう。併し、同じ一つの風景を見ても、あの様は（な、重森の筆誤りか印刷のミスか：筆者注）見方をして、而もそれを太湖石で表現しているのは、支那庭園としても堕落だと私は思ひますが。

結論から言えば、重森は太湖石にまったく興味を持っていない。それどころか、それが庭園風景を壊したり庭園を堕落させる存在だとすら思っている。では、後藤はどのように太湖石を見ていたのか。稿者の統計によると、後藤は蘇州の滄浪亭、留園に注目し、獅子林には触れていない。しかし、岩組に対する論説は多くある。その一説を見てみよう。

それはなるべく夏の空に窺われる雲の様に、入道雲の恰好に拝えあげる。そしてそれを雲集させることにとても苦心する。曰く、自分の家の庭の岩はあの空に現れている夏雲の根だ、雲根なのだといって誇りとする。それを石だとは言わないのである。ところが夏の入道雲を見るとあの通りたくさん重なっている。もしあの夏雲の中に落ち込んだとしたらどの位深いか判らぬという感じで、庭の岩組みの中に洞窟などが作られる。³⁾

後藤は中国文学が得意なのか、中国での旅行中に中国人から聞いたのか、あるいは中国人が書いた遊記類の文書から知ったのか等は不明であるが、中国の思想文化から太湖石を考察していたのは明白である。中国人の立場から見ればすぐに納得できるが、中国へ一度も行ったことのない重森の日本式審美観から見れば、彼の脳裏における庭石の思想、景観とはまったく逆のものであったことが窺える。また、「明以後の支那庭園の写真で、石組を拝見しますと、例の太湖石で、雲根といった様なものが考えられますが、写実的にはあの様な見方もあるでしょう」という部分でも、後藤の役割が際立っている。それは、「明以降の支那庭園の写真」と「雲根」にある。この特輯の写真に戻って考察してみる。写真の解説で後藤がわざわざ「清乾隆」、「清末西太后」といった時代を強調しているところから見ても、重森が参照した明以降の支那庭園の写真は後藤の写真であったと考えられる。会話の中で岡大路という人物に触れているが、この人はもともと南満州工業専門学校で建築関連の授業を担当し、1938年『支那宮苑園林史考』等を著した人物である。これまでの中国近代庭園に関する研究はほとんど彼から出発したものと認められていたが、しかし、この岡大路は上記の著書において次のよ

うに後藤の業績を評価している。

然るに一方昭和9年に至って後藤朝太郎氏著の満支風景図鑑は視察し尽くした所を現在の状況に重きを置き、何等の粉飾をも施すことなくそのまま率直に説き、(中略)筆者が書き続けてきたものとは別様の意味において一読の必要を進める。⁴⁾

岡は後藤の近代中国庭園における一次資料を認め、同時に中国庭園の研究における貢献についても好評価を与えている。高い評価を与えたのは岡のみに拘らず、近代日本造園の鼻祖とも言われる本多静六も以下のように後藤を評している。

よく世界における支那風景庭園の研究者また鑑賞家にかかる盛沢山の珍資料を提供せられていること、漢民族四億の住民が古来如何に大陸風景の感化をうけて来たかまた支那庭園の神秘的な方面がいかにその民族性と緊密な結びつきを有しているかを諄々として隨所に説破せること。⁵⁾

後藤の実地調査により、中国の風景庭園の研究家達や鑑賞家達は、豊富で貴重な資料を目の当たりにできたとある。ここでいう貴重とは、中国の広大な地域における各種庭園に関する写真を指していると考えられる。実は、岡は上記の著書の中で中国庭園史について多く述べているものの、近代の庭園の実情や写真⁶⁾に関してはあまり触れていない。写真数から見れば、後藤の四分の一にも及ばない。

そういうわけで、重森が参照した写真はほとんど後藤からのものであったとの推論が成立する。もう一つは、重森が太湖石に「雲根」という言い方を用いている点で、これも後藤からの影響である可能性が高いと言える。それは、『支那宮苑園林史考』を全覽してもこうした言い方が一つも出てこないためである。したがって、重森は岡ではなく、後藤からより多くの中国庭園に関する情報を得たと見るべきであろう。特に、明以降の太湖石、つまり近代の中国庭園の様子が日本と違うところは、後藤によって恰も鏡のように重森らの目前に映し出されたのである。

中国の庭園に幽玄があるかどうかはしばらく置いておくが、表1のよう、後藤は『林泉』の十号と十一号において、連続して中国庭園の幽玄味を巡る言論を出している。後藤の言う中国庭園の幽玄味とは一体何なのであろうか。

支那は文字の国であるから、その人の想像力でもって、その聯句なり古人の名句なりを縦横自在に想起して、その脳裏にいくらでも林泉の幽趣を描写し得る。……支那の名園、

王者の庭といった世界的の勝地もこの文字の美と又その文字の幽玄味のあるが為めの、その真価を十分に表現し得ている。⁷⁾

いわゆる中国庭園の幽玄味とは、後藤から見れば文字の幽玄味のことなのである。ここで注意すべきは「幽玄」ではなく、幽玄味という言葉が使われた点にある。両者は異なっており、なぜ後藤がこれまで使わなかった「幽玄味」という言葉を、1935年に入つてから堂々たる様態で中国庭園の「幽玄味」だと強調したのか。そこには、日本国内の庭園界における新たな動きが関わっていると考えられる。1935年になると、「日本らしさ」ブームが極めて盛んな時期を迎える。後藤はそのような雰囲気を感じ、日本庭園協会の理事かつ東京高等造園学校の中国庭園講師として、この幽玄な雰囲気に包まれる中、中国庭園を観察しながら無意識に投射してそのような表現を用いたのではなかろうか。中国では宋代以降、「幽玄」という文化は書物文献の中にのみ留まり、日常生活ではほとんど消えてしまっていることは周知の通りである。後藤が著した「幽玄味」とは、この意味において、むしろもう一つの鏡を立て、近代中国の庭園と日本との違いを映し出そうとしていたのではなかろうか。幽玄味だけではなく、後藤は「さび」についても論じている。

支那の幽玄味は、時代の鑄によって最も特色づけられている。時代のたつた庭であればその廃退したものは、廃退したなりに、幽玄な趣を見せている。……その庭園に相当渋みの加わり、時代のさびもつきぢやんとしている。危樓曲閣半天に開くという風情のうちに、えもえも云われぬ古色蒼然たる幽趣が味われる所以である。また空院落花深きところに古い時代の鑄が懐かしく窺われる所以である。⁸⁾

後藤が中国庭園の「幽玄」を中国式の「さび」と同様に扱っていることは、上の引用文からも窺える。「鑄」と漢字を使うことで、日本の「さび」と区別をしているのは、まったく同じものとするにはためらいがあったせいかもしれない。「鑄」の内容も、「廃退」、「古色蒼然」などと関連付けられており、日本の路地や茶室などを通じて漂っている「さび」とは全く異なるものである。

おわりに

本論は、重森三玲が主催した『林泉』に掲載された後藤朝太郎に関する部分の内容を抜き出し、主に庭園の構築要素と考えられている太湖石という要素から、後藤と重森両氏の経緯を辿ってみた。後藤が重森と実際に会ったことがあるかどうかは、手元の資料からは残念ながら判別できない。とは言え、重森が主催する雑誌『林泉』に後藤の中国庭園に関する論説と写真が載せられたことから見ても、重森は後藤の論説に興味を持っていたと見

るべきであろう。結局のところ、重森は中国庭園の岩組には全く興味を抱いていない。それは重森が後藤と違った視覚から中国庭園を見ていたため、中国庭園の岩組について理解できず、納得できなかつたためであると言えよう。強いて言えば、重森なりの庭石世界観は後藤のそれとは平行線を辿つたものであった。文字的な世界あるいは文学的世界からでなければなかなか中国庭園を理解することはできないとする後藤の世界観と異なり、日本らしき庭園構築の姿を軸としていたのではなかろうか。一方、後藤は中国庭園の庭石（岩組）に懸命に焦点をあて、それを披露することで重森の趣味を満足させようとする意欲が伺える。中国庭園の庭石も「幽玄味」があり、雲に例えられる等と後藤はその深みを説明しているものの、漢文の素養が浅い重森にとってはなかなか理解しがたいものであったのかもしれない。しかし、造園史において、日本庭園に多大な影響を与えた中国庭園がどういうものであったのかを知りたかった重森の探求心というものは浮かび上がってきた。後藤の論説と写真を見たことで、日本庭園とは何なのかといったものが、重森にとって、よりはつきりと描き出せるようになったのかもしれない。

注

- 1) 上田正昭・西澤潤一など (2003) 『日本人名大辞典』講談社、906 頁。
- 2) 瀧井孝作 (1938) 「上海より盧州まで」『文芸春秋』、192 頁。 「茲より近所の獅子林園といふ所まで歩く。堂廊を巡らせる園園にて、宋末元初の時代に倪雲林の創設の庭と言ひ伝う。内庭に獅子の遊べるさまの石庭あり。京都龍安寺の石庭に石の配置など殆んど彷彿する。龍安寺の石庭は相阿弥の創作であるが、蘇州の茲にその藍本ありと思はる。茲の庭園は一部分は佳きところあるが、その石人筈峰などは愚なる趣味なりと思う。」
- 3) 後藤朝太郎 (1938) 「支那太湖石行脚」『庭園』(1938 年 5 号)、30 頁。
- 4) 岡大路 (1938) 『支那宮苑園林史考』、337 頁。
- 5) 後藤朝太郎 (1934) 『満支風景庭園図鑑』、3 頁。
- 6) 岡大路 (1938) 『支那宮苑園林史考』「自分としては蘇杭の地と北京地方を僅かに一両度窺つただけで実測的の調査を遂げたようなものは一つもなく、この点は甚だ物足りないのである。」
- 7) 後藤朝太郎 (1935) 「支那の幽玄味（上）」『林泉』第十号。
- 8) 後藤朝太郎 (1935) 「支那の幽玄味（下）」『林泉』第十一号。

参考文献

- 上田正昭・西澤潤一など (2003) 『日本人名大辞典』講談社、906 頁。
- 瀧井孝作 (1938)、「上海より盧州まで」『文芸春秋』、192 頁。
- 後藤朝太郎 (1938)、「支那太湖石行脚」『庭園』(1938 年 5 号)、30 頁。
- 岡大路 (1938) 『支那宮苑園林史考』、337 頁。

後藤朝太郎（1934）、『満支風景庭園図鑑』、3頁。

後藤朝太郎（1935）、「支那の幽玄味（上）」『林泉』第十号。

後藤朝太郎（1935）、「支那の幽玄味（下）」『林泉』第十一号。

Symphony of modern Chinese garden and Japanese garden: Asataro Goto and Mirei Shigemori

ZHOU, Tangbo

Abstract

This paper extracts the contents of Asataro Goto, published in “Rin Sen” , sponsored by Shigemori Mirei , and traces the history of Goto and Shigemori from the element of Taihu stone, which is considered to be mainly a construction element of gardens. I tried. Shigemori had no interest in the Chinese garden rock group at all, but because Shigemori looked at the Chinese garden from a different perspective than Goto, he could not understand or understand the Chinese garden rock group. Shigemori's view of the world of garden stones was parallel to Goto's. Unlike Goto's view of the Chinese garden, which made it difficult to understand Chinese gardens from a literary or literary world, Shigemori was centered on a Japanese-style garden construction. Goto, on the other hand, focuses hard on the garden stones (Iwagumi) in the Chinese garden and shows his willingness to satisfy Shigemori's hobbies by demonstrating it. Although Goto explains the depth of the garden stones in Chinese gardens as having a “Yugen taste” , which can be compared to clouds, it was difficult for Shigemori who has little knowledge of Chinese writing to understand. However, in the history of landscaping, Shigemori's quest to find out what the Chinese garden, which had greatly influenced the Japanese garden, emerged. By seeing Goto's editorials and photographs, Shigemori was able to more clearly describe what a Japanese garden was.

Keywords : Modern, Chinese and Japanese garden, Asaro Goto, Mirei Shigemori, Iwagumi

清末新政時期における河南の教育と日本語

金 斑実（商丘師範学院）

要旨

本研究では清末新政時期の河南の近代教育の台頭とそれに密接に関係ある日本語教育の生成と発展について追究したものである。清末新政時期の河南の教育改革、1903年以降河南省に於ける留学生の派遣、河南に招聘された日本教習の三宅喜代太と飯河道雄等のキーワードに沿って調べることによって以下の結論が得られた。清末新政時期、政府の教育改革によって河南に於いても小・中・高級学堂の設立及び日本留学と日本教習の招聘など様々な教育の近代化が進められた。その中で河南本土での日本語教育は日本教習である三宅喜代太によって始められ、日本留学の拡大によって発展できた。また、留日学生の帰国及び各学堂で教鞭をとることによって全域に拡大したに違いない。

キーワード： 清末新政時期、河南、日本教習、留学生、日本語教育

はじめに

日本と中国とは海を隔てているが、政治的にも経済的にも切り離せない隣国であり、歴史的に大きな関わり合いがあった。近年来、中国では経済発展の加速化により日本語を専門とする人材の需要も増加しており、日本語は今や英語の次に誇る外国語になっている。1994年の統計では86の大学で日本語専攻が設置され、2010年には日本語専攻を設置している大学が419校に達していた。高等教育の大衆化の流れにより、地方政府が管理する地方大学での日本語教育機関は雨後の筈のように増えている中、2010年だけで26校も日本語専攻が設置された。2015年12月末では、日本語専攻が設立されている大学の数は503校にのぼり、外国語関係の学科では英語の922校に次ぎ、学科規模のランキングでは全国第十二位になっている。また、日本国際交流基金が2013年7月に公表した2012年度の調査データによれば、中国の日本語学習者の人数は1,046,490人であり、世界一の学習者数を有しているという。こうした調査データから総合すれば、日本語学科はもはや「小語種」ではなく「大語種」になり、日本語の人気度の高さが伺える。因みに、2018年度大学試験で日本語専攻を募集する大学は505校であった。河南省に於いても24の大学と2つの高等学校で日本語を専攻或いは外国語として日本語を教えている¹⁾。

このように、全国はもちろん河南省に於いても日本語教育が盛んに行われる中で、果たして河南における日本語教育はいつから始まり、発展してきたか、その契機は何であったかについては不明のままである。その紐解きが本研究の出発点になっている。先行研究²⁾としては、李剛、趙艷花、孫倩等の研究がある。そこでは主に留日学生と学生による刊行物及び河南の社会に与えた影響について言及している。また、郭精宇、阿部洋³⁾等の研究では、日本教習（招聘日本人教師）について触れており、日中両国の教育の繋がりを研究するのに掛け替えのないものである。しかし、両方とも日本留学と日本教習の研究であり、日本語教育の歴史の視点からの研究が足りない。本研究では以上の先行研究を踏まえて清末新政時期の河南の近代教育の台頭とそれに密接に関係ある日本語教育の生成と発展について追究していきたい。

日本語教育史研究は過去の歴史の事実が研究対象であるだけでなく、歴史事実の経緯、今日に対する意義と未来に対する影響も述べなければならない。また、本研究は文献研究であるため、歴史的事実の客観性、実証性、正確性を求める為にはより多く資料の利用が望ましい。また、できるだけ豊富な資料を活用して比較・対照しながら追究していくことにした。

I. 清末新政時期の河南の教育改革

清国はその末期に於いて、1898（光緒24）年の戊戌変法から、1901年の光緒新政の開始、そして1906年の預備立憲の開始と、矢継ぎ早に大胆な改革の実行を宣言した。清国がこのように改革を急いだ理由は、1901年義和団戦争後に負わされた賠償金支払いの必要性や、日露戦争による排外気運の醸成にともなって、国威を率先して回復しなければ統治者としての正統性を失いかねない状況が発生していたことなどが挙げられる。清末新政は、改革的社会勢力を取り込みつつ、中央集権的な政治体制を構築するという作業を進めた改革とみることができるが、これがまさに清国の生死を賭けた難事業であった。その中に教育改革も含まれる。20世紀初頭、西洋文明の流入により形成された「新学」思想と改革派の圧力により、清国は1300年も続いた科挙制度を廃止し、「新教育制度」を実施しなければならなくなつた。それは、1894～1895年の日清戦争での敗北と日露戦争における日本の勝利が背景となっていた。学校教育のめざましい発展こそが、日本の急速な国家発展の基礎となっているとの認識が清国に生まれたのである。これにより、1903年11月、清国は「奏定学堂章程」を公布した。これは中国教育史上、初めて全国規模に実行された系統的で完備した学制である。また、1905年8月には学部を創設した。小学の教科目は修身、読経講経、中国文学、算術、歴史、地理、格致、体操、図画、手工など、中学の教科目は修身、読経講経、中国文学、外国語、歴史、地理、算術、博物、物理と化学、法制と理財、体操、図画などである。

この流れの中で、河南巡撫錫良は省内各府、州、県に学制に沿って学堂を設置するよう

命令を発した。これによって河南の教育は新しい段階に入り、各レベル各種類の新式学堂は素早く発展できた。統計によると 1908 年に河南各地の中学堂は 23 箇所、高等小学堂 150 箇所、初等小学堂 1964 箇所であった。中学堂は 5 年制で、12 の教科目、その中に外国語も含まれていた。近代科学知識を教授する一方で読経講経など封建的な教科目を教授したのも確かである。また、高等学堂である河南大学堂は 1902 年に設立され、1903 年に高等学堂に改称し、普通科と専門学の他に、二つの外国語を習得することを要求した。初級師範学堂は 11 箇所で、その中、初級師範完全科が 3 箇所、初級師範簡易科が 8 箇所であった。

以上のように、清末新政時期の教育改革によって河南に於いても各種学堂が設立された。中学堂では一つの外国語を高等学堂では二つに外国語の習得が要求されていた。

II. 日本留学

19 世紀末から 20 世紀初頭に至る一時期、他国の目には羨ましいほどの教育文化面での日本と清国の密月の時代があった。清国人による本格的且つ組織的な日本語の学習は日清戦争以降に始まったものである。日清戦争の結果、老大国たる清帝国は新興の日本という「東夷の小国」に打ち破れ、全国民が驚愕し、以後「強敵を以て師と為す」⁴⁾という発想の元に、日本を通じて欧米の科学的知識を導入する手段として日本語を学ぶ重要性を認識したのである。1896 年清国は日本に向けて第一陣の官費留学生 13 名を送った。そしてそれ以後、私費生を含めて日本に留学する留学生が年々増加した。20 世紀初頭には年に 1 万人を超える清国の留学生が留日し、「日本留学極盛時代」となった。初期の日本留学者は殆ど各省派遣の官費留学生で、唐宝鍔、金邦平、曹汝霖、陸宗輿、胡宗瀛、蔡鍔などがいた。彼等は何れも帰国後は勿論、在日期間中からはなばなしの活動を行い、中国社会文化の発展に貢献した。

河南省は最初青年の留学を勧めなかった。その理由として青年の革命思想の影響を受けることによって地方および清朝の統治を脅かすことを恐れたこと、河南は内陸に位置し、外国資本主義の影響が小さく、情報に疎く、気風がよくないことである。しかし、1903 年以降河南省も留学生を派遣し始めた。1904 年「日本に留学生しているものは全省ただ十九人で、大半は他省から派遣し、私費生も朝の星のように少ない」⁵⁾、1905 年日本に留学している官私費生は二十名にも及ばず他省（湖北・湖南・四川は既に 300 名を超えていた）に比べれば差が大きい。1906 年「河南武備学堂の廃止に伴い、その中から 50 名を選んで日本に赴き、振武、成城の二つの学校に入って軍事を学び…」で、1907 年公費生 60 人、1908 年 92 人であった⁶⁾。

1906 年の調査によると、河南省官費留学生の中で、普通科 50 人、速成師範科 18 人、警察科 7 人、農科 1 人であった。これら留学生が学習した内容は清末新政期の改革と密接な関係があり、社会現実の需要と留学生の先進的な知識を以て国を救うという重任を担っていたと思われる。

教育近代化の流れの中で、1905年に河南の進歩的な教育家である李時燦が河南学務公所の議長になり、特に日本留学を積極的に進めていた。先述の河南武備学堂の学生50名が東京に着いたところで、孫文が面会した⁷⁾。その後、中国同盟会の河南出身の嘗紹文の紹介で3名の留学生が同盟会組織に入り、河南分会を設立した。1907年に『河南』（月刊、東京に於いて第9号まで出版された）という雑誌を刊行し、開封で「大河書社」を設立し、革命の書籍と『河南』雑誌の発行を担当した。ここで言及すべきは、魯迅の日本留学期の思想結晶としての論文は、主にこの『河南』に掲載された。その五篇は、「人の歴史」（『河南』第1号、1907年12月）、「魔羅詩力説」（『河南』第2・3号、1908年2・3月）、「科学史教篇」（『河南』第5号、1908年6月）、「文化偏至論」（『河南』第7号、1908年8月）、「破惡聲論」（『河南』第8号、1908年12月）である。

李時燦は河南優級学堂の総弁を兼任し、続けての教育改革を主張し、また『学務管見十六条』を制定し、新学を教授し、理科・博物・算術・外国語・格致などの科目的増設を提唱した。彼は、「師範学堂は各堂の始まりであり、最も重要である」と師範学堂の改革を特別に重視していた。1905年から1908年まで河南に各レベルの師範学校を116か所、その中で師範学堂2か所、初級師範学堂11か所、師範講習所103か所が設立された。彼はまた日本、米国と英国の学者を招き、直接外国語で理科などを教授させると同時に教材も外国の原本を使わせ、外国語習得を促進させた。また、多額の予算を投じて帰国留学生を学堂の教師として招くが、その数は教師の人数の三分の一に達した。河南高等学校は1911年に法政大学出身の比太昌が監督を、中央大学出身の王印川が教務長を担当していた。

実際、留学生達は帰国後社会の近代化、特に河南教育の近代化に大きな力を發揮した。つまり、最初は学生を日本に留学生させる方法で日本語と近代的科学技術を習得させていたが、後には帰国帰国留日学生による各種学堂での教育は先進的な科学技術を教えるとともに、日本語教育の発展にも貢献したに違いない。

III. 日本教習

1895年の甲午戦争の敗北により、恭親王、李鴻章らが推進した洋務運動の失敗が宣告され、人々は政治、教育の改革を経て勃興した「東夷の小国」日本に目を向けるようになった。1897年3月、嘗て朝廷に「請推広学校摺」を上奏し、京師大学堂の創設を提案した刑部左侍郎李端の建議により、1862年設立の京師、1864年設立の広州に同文館における東文館の増設は、清国での本格的な日本語教育の始まりを意味している。それより一年後、「東文学堂」と言われる様々な日本語学校が時代の需要に応じて続々と出現した。後にまた「欽定学堂章程」や「奏定学堂章程」等の新学校制度の公布によって大勢の日本教習が中国に押し寄せ、彼等の手によって中国本土における日本語教育が一気に盛況を呈することになる。20世紀初頭には多くの日本人が学務顧問或は教師として中国に招かれ、各分野で活躍した。彼等は「日本人教習」或は「日本教習」と呼ばれ、一時は数百人を超える規模であ

った。教習の中には服部宇之吉、渡辺龍聖、吉野作造、藤田豊八、松本亀次郎、川島浪速、長谷川辰之助（二葉亭四迷）、戸野美知恵などのように、その後各方面で活動した人物も少なくない。当時このように多数の日本人教習が招かれたのは、清国が「日本モデル」の教育の近代化を志し、その事業を補佐する人材を日本に求めたことに由来する。当時、河南省に派遣された人として、

表1 河南に派遣された日本人教習

地域	学校	教師名	備考
河南	河南大学堂	氏家謙曹	当時理学士、後早稲田大学教授
開封	河南優級師範学堂	三宅喜代太 飯河道雄	通訳、北京東文学社出身 東京高等師範学校

出典：汪向榮著(1991)『清国のお雇い日本人』朝日新聞社、125頁。

が挙げられる。全国に於ける日本教習の人数は次の通りである。

表2 清国全土に派遣された日本人教習

年度	人数	年度	人数
1903	148	1912	159
1904	234	1913	177
1909	549	1918	430

出典：汪向榮著(1991)『清国のお雇い日本人』朝日新聞社、126頁。

しかし、数多くの留日学生と日本人教習の渡中も減少傾向が見え始めるが、その理由は、辛亥革命が近づき、情勢が不安定にあったことに加え、欧米の教育勢力が伸長したこと、清国側による教習の自給体制が整備され始めたことが考えられる。ここで河南に招聘されていた三宅喜代太と飯河道雄について触れておこう。

岡山県尋常師範学校を卒業した三宅喜代太は1904年に北京に来ており、中島裁之の北京東文学社で教習としていた。ここでの東文学社というのは学校であり、東文と言うのは日本語の事を指しているが、北京東文学社は日本人が設立した学校の中の最高レベルの学校であった。尤も東文学社と言っても日本語のみを教える学校ではなく、工業・博物・数学・理化・農業・音楽・手工・体操遊戯・法政経済・教育・哲学・地理歴史・医学・商業・警務・普通学・電話事務・監獄事務・兵科・保母・手芸・図画・造花・織物そのほかという非常に多岐に亘っていた⁸⁾。総教習・中島裁之は西本願寺の文学寮出身者で吳汝綸⁹⁾の門下生で、一時帰国したものの、1901年に再び北京で吳汝綸に会い、北京に学校をつくる事を相談した上で開学したのが北京東文学社であった。学生は280余名にも達したので、一人

では教授が出来なくなり、一方、日本人で中国語研究の傍ら教授する事を希望する者があったので、原口新吉以下6名を入社させて教場の分担教授が行われた。「東文学社の目的一つは、青雲の志を抱いて中国に渡って来た日本の人々に、中国の正しい姿とともに中国語を教えることであった。もう一つの目的は、中国人に対して逆に日本を知らしめることであった。」¹⁰⁾ ということであった。三宅喜代太もその日本人の中の一人で、1904年から北京東文学社で教鞭を取った一年後の1905年10月に河南学堂に来て教えており、北京東文学社と同じように日本語だけではなく、理科も教えていた。

1909年当時、中国に招かれた外国人教習の総数356人の中、日本教習は311名であったので84パーセント以上を占めていた¹¹⁾。先述のように、その多数の日本教習の担当科目は、日本語、工業・博物など多岐に亘っており、日本教習が教授する際、日本語を用いる事が多かったので、その通訳には日本から帰った留学生がその勞を取ったと言う¹²⁾。つまり、日本教習や日本留学生出身者が重用されていたことが推察できよう。

三宅喜代太は、1910年に河南を離れていくが、それまで河南における日本語教育の第一人者であることが確認できよう。当時河南では新学を行うと同時に日本留学を非常に重視していた。河南に招聘されて同年に河南省では120名の留学生を日本に派遣する計画を立てており、また1906年3月清国学部が公布した『通行各省選送遊學限制弁法』規定では「高等学校以上及び専門学校に入学したい者は中学校以上の卒業生でその国の言語に合格しなければならない」としている。そのため、日本に留学する場合は日本語を必ず学ばないといけないことになった。また、河南高等学堂は日本留学予定の学生に対して言語の啓蒙を行ったことから三宅が担当したと思われる。

飯河道雄は福島県士族で1906年3月に東京高等師範学校官費専修科を卒業したが、日本いとて数学は西洋教育の重点科目でもあった¹³⁾。1906年11月に河南優級師範学堂の教習に招聘され、彼の理科数学のしっかりした基礎が買われ、実際は理科と数学を教えていた。当時河南優級師範学堂では、主に数学、理科、博物と史地を教えていたが、その中で、理科と数学は学堂における西洋学の一番大事な教科であった。飯河はそれだけではなく、日本の近代美術も紹介し、実際は図画も教えており、それは河南における美術教育の始まりであった。また個人的に河南布政使袁大化の息子に日本語も教えていたという。教育面における彼の卓越な成績が認められ、河南教育当局は学部に彼に勲章を授与することを申し入れた。結果は「光緒三十二年に学堂に招聘され、理科兼数学等の科目を教授した。四年間多くの学生を育て、業績が甚だしく、三等賞を与え、激励する」と提学使である孔祥霖が言った。これは河南省で唯一賞をもらった外国教習である。また、先述したように河南学務公所の李時燦の師範学堂の教育改革による外国人教師及び日本留学生の招聘から日本語による学問教育は日本語教育の発展にも貢献したに違いない。

日本人教習について以下の史料もある。

表3 河南省の日本人教習

名前	職	給料	期間
飯河道雄	教習	銀 150 両	1906. 11-1913. 1
氏家謙曹	教習	銀 300 元	1909. 8-1912. 8
小松崎武司	教習	銀 150 両	1910. 11-1911. 1

出典：崔淑芬著(1997)『近代中国における師範教育の展開』アジア文化総合研究所出版会、141頁

既述した飯河道雄の他に、「新編理科書」を編纂した氏家謙曹について 1909 年 2 月 27 日日付の内閣史料「氏家謙曹第二高等学校教授ニ任官ノ件」のから、第二高等学校から再び派遣されたのではないかと思われる。小松崎武司については手がかりが見つかっていない。また、1908（明治 41）年に高山アイという女子教習が湖南省東華美女学堂から河南省東開封（給料 50 元）に派遣されたとの記録がある¹⁴⁾ ものの詳細については不明である。

清末新政時期の教育改革は中国近代教育史上重要な啓蒙的意義を持っている。その中で日本教習は「中国に来て各種の学校で講習を担当して中国の新教育を建設し、近代的な学校教育の基礎を築いた」¹⁵⁾と同様に、ここで取り上げた河南の日本教習である三宅喜代太にしても飯河道雄にしても河南の教育の発展に多大な役割を果たしたに違いない。その中でも三宅喜代太による教育は河南における日本語教育のスタートであることが確認できよう。

おわりに

本稿では、清末新政時期における河南教育の近代化とその中で行われた日本語教育について論じた。清末新政時期、政府の教育改革によって河南に於いても小・中・高級学堂の設立及び日本留学と日本教習の招聘など様々な教育の近代化が進められた。その中で河南での日本語教育は日本教習である三宅喜代太によって始められ、日本留学の拡大によって発展できた。また、留日学生の帰国及び各学堂で教鞭をとることによって全域に拡大した。河南における日本語教育の発生発展について触れたものの、史料の限界により詳細には追究できなかったことに関しては今後の課題とさせていただきたい。

注

- 1) <https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/index.html>国際交流基金『海外の日本語教育の現状（日本語教育機関調査）』による。2018年8月14日にアクセス。
- 2) 李剛(2015. 10)、「清末豫籍留日学生と河南師範教育の近代化」『天中学刊』第 30 卷第 5 期；趙艷花(2012. 8)、「清末河南留日学生の刊行物『河南』と辛亥革命」『蘭台世界』22 期；孫倩(2014. 3)、「清末留日学生の思想と行動—雑誌『河南』を例として—」『ソシオサイエンス』Vol. 20。

- 3) 郭精宇(2014)、「清末河南の日本教習」『牡丹江教育学院学報』第8期；阿部洋・蔭山雅博・稻葉繼雄(1982)、「東アジアの近代化に果たした日本人の役割-お雇い日本人教習と中国・韓国-」『日本比較教育学研究紀要』8号。
- 4) 康有為著、姜義華他編(1998)『康有為全集』4、中国大学出版社、104頁。
- 5) 張一麟著(1947)『心太平室集』第七卷、上海書店、10頁。
- 6) 中国政治協商會議河南省委員会文史資料研究委員会(1991)『河南文史資料』第37輯、上海教育出版社、142頁。
- 7) 司恒斌(2011)「論同盟会河南第一人嘗紹文」『鄭州航航空工業管理学院学報』50頁。
- 8) 房兆楹輯(1962)『清末民初洋学学生題名録初輯』中央研究院近代史研究所、61頁。
- 9) 吳汝綸(1840-1903)清末の碩学であった。1865(同治4)年の進士で、内閣中書に入り、曾国藩に認められてその幕僚となり、のち李鴻章にも信任された。李鴻章のすすめで蓮池書院にて講じ、1902(光緒28)年には、管学大臣張百熙の推薦で京師大学堂総教習となり、視察のため来日した。帰国後郷里に小学堂を建て、翌年没した。著書に『深州風土記』(20卷)、『東遊叢録』(4卷)などがある。
- 10) 三島海雲著(1965)『初恋五十年』ダイヤモンド社、98頁。
- 11) 汪向榮(2014)『日本教習』商務印書館、143頁。
- 12) 松本亀次郎著(1931)『中華五十日泳記：附・中華留学生教育小史・中華教育視察紀要』東西書房、26-27頁。
- 13) 郭精宇(2015)『河道雄在華文化活動研究』吉林大学修士論文、5頁。
- 14) 加藤恭子(2015)「20世紀初頭における日本人女子教員の中国派遣」『ジェンダー研究』第18号、82頁。
- 15) 汪向榮(2014)『日本教習』商務印書館、143頁。

参考文献

- 阿部洋(1990)、『中国の近代教育と明治日本』福村出版。
- 崔淑芬(1997)、『近代中国における師範教育の展開—清末から1948年までを中心として』アジア文化総合研究所出版会。
- 劉建雲(2005)、『中国人の日本語学習史-清末の東文学堂』学術出版。

Education and Japanese in Henan Province during the late Qing dynasty

JIN, Tingshi

Abstract

This paper explored the rise of modern education in Henan province during the late Qing dynasty and the establishment and development of Japanese education, which is closely related to it. Then I got the following conclusions according to the educational reform in Henan province during the late Qing dynasty, dispatching of international students from Henan province in 1903 and the investigations based on keywords such as Kiyota Miyake and Michio Iikawa, two Japanese instructors that were invited into Henan province. Because the educational reform in Henan province during the late Qing dynasty, various educational modernizations were promoted in Henan province, such as the establishment of primary schools, junior high schools and senior high schools, studying in Japan and inviting Japanese instructors to Henan province. Among them, Japanese language education in Henan province, developed with the expanding of Chinese student numbers in Japan, was started by Kiyota Miyake, a Japanese instructor. In addition, Japanese language education in Henan province has been expanded to the whole area by returning students from Japan and teaching Japanese in school.

Keywords : During the late Qing dynasty, Henan, Japanese training, international students, Japanese language education

日本語能力試験の公式問題集の分析 —初級レベルの語彙、漢字を中心に—

飯嶋 美知子（北海道情報大学）

要旨

日本語能力試験は2010年度より現行の内容と形式に改定されたが、その出題基準や過去の試験問題は公開されていないため、出題範囲に不明確な点が少なくない。日本語能力試験と同形式の問題で構成されている公式問題集の、初級レベルにあたるN5とN4を対象として、その中で使用されている語彙と漢字について、調査と分析を行った。

従来の日本語能力試験の出題基準と比較すると、語彙については、従来の日本語能力試験の出題基準の該当級より上の級や級外の単語が出されており、N5では食べ物や飲み物に関する語彙、N4では生活の中での身近な語彙やIT関係の語彙を中心としたカタカナ語が多かった。よって、初級前半では食べ物や飲み物に関する語彙、初級後半では生活の中での身近な語彙やIT関係の語彙を中心としたカタカナ語を、重点的に学んでいけばよいと考える。「聴解」「読解」の出題分野では、個々の単語の意味がわかっていることが前提とされた合成語が複数見られたことから、単語を学ぶ際には、その意味と読み方を十分に把握しておくようにすれば、それらが日本語能力試験で合成語の構成要素として出てきても、対応できると思われる。漢字については、従来の日本語能力試験の出題基準の該当級より上の級の漢字の出題があり、「読解」の出題分野ではルビがないものも出ていたため、単語は漢字表記とともに学習し、少なくとも読めるようにしておく必要があると考える。

キーワード：日本語能力試験、初級、語彙、漢字、出題基準

はじめに

日本語能力試験は、日本語が非母語である学習者の日本語能力を客観的に測定、認定するための言語テストで、2010年度よりその内容や形式が改定されている。改定前の日本語能力試験（以下、旧試験）では、出題基準や、過去に実施された試験が問題集として刊行されていた。出題基準をまとめた書籍はすでに絶版となっているが、オンラインシステム「日本語読解学習支援システム リーディング チュウ太」（以下、「リーディング チュウ太」）等で、語彙、漢字、文型のレベルについて、旧試験の何級にあたるかを調べることができる。しかし、現行の試験では、過去に実施された試験やその出題基準は公開されて

いないため¹⁾、出題範囲に不明確な点が少なくない。

押尾、秋元ほか（2008）及び押尾、秋元（2008）では、日本語能力試験の実施機関によって作成された語彙表（以下、新語彙表）や漢字表（以下、新漢字表）に言及し²⁾、新語彙表にある語彙の一部を掲載してはいるものの、どの語彙や漢字がどのレベルにあたるかという詳細な内容までは明らかにしていない。安藤（2009a）及び安藤（2009b）では、現行の日本語能力試験の各出題分野の問題の傾向と対策について詳述してはいるが、その中で使用されている語彙や漢字の詳細な内容にまでは触れていない。

日本語能力試験対策の学習は、日本語のレベルが上級の学習者は自主的に進めることができ、かつ、教材や問題集は比較的充実しているといえるが、初級レベルのものはまだ不十分のようである。そこで、日本語能力試験と同形式の問題で構成されている日本語能力試験の公式問題集（以下、「問題集」）のうち、初級レベルにあたるN5とN4の「問題集」について、その中で使用されている語彙と漢字を調査、分析し、傾向を探ることにした。

I. 調査対象と調査結果

1. 調査対象

調査対象と本稿におけるその略称は、以下の通りである。

国際交流基金（2012）、『日本語能力試験 公式問題集 N5』凡人社：『公式 N5(1)』

国際交流基金（2012）、『日本語能力試験 公式問題集 N4』凡人社：『公式 N4(1)』

国際交流基金（2018）、『日本語能力試験 公式問題集 第二集 N5』凡人社：『公式 N5(2)』

国際交流基金（2018）、『日本語能力試験 公式問題集 第二集 N4』凡人社：『公式 N4(2)』

上記において、各問題、選択肢、問題の指示文、例題に使用されている語彙、漢字につき、旧試験の基準（以下、旧基準）と比較してどのような相違があるのか、特に、該当級でその級よりも上のもの（以下、上の級）や、旧基準になかったもの（以下、級外）にどのようなものがあるのかに重点を置いて調査した³⁾。聴解問題のスクリプトも調査対象としたが、受験者は試験ではスクリプトを見る機会がないため、その中の語彙のみを調査対象とし、漢字は調査対象外とした。

2. 調査結果

全般の傾向としては、旧基準と重なる部分が多かった。これは、初級レベルに使用される語彙、漢字は自ずと限定されることと、押尾、秋元ほか（2008）の73頁にあるように、新語彙表を作成する際、旧基準も参考にしていたことがその背景にあると思われる。

だが、語彙については、上の級や級外のものも多く使用されていた。特に、食べ物、飲み物に関する語彙やカタカナ語にその傾向が強く見られた。また、上の級や級外の語彙の使用も含め、合成語が積極的に使用されているという特徴も見られた。

漢字については、旧試験では1つの単語で語彙と漢字のレベルが異なり、漢字のレベル

が語彙のレベルより上であれば、その単語が初めて出てくる級（以下、初出レベル）ではひらがなで表記されていたが、「問題集」では、単語の初出レベルに合わせ、漢字が語彙のレベルより上の級であっても、漢字表記されていることが判明した。以下、それぞれの詳細について見ていく。

(1) 食べ物、飲み物に関する語彙

以下は、「問題集」に出ていた食べ物、飲み物に関する語彙の、上の級または級外の語彙である。『公式 N5(1)』『公式 N5(2)』の両方、あるいは『公式 N4(1)』『公式 N4(2)』の両方に出ていたものは冒頭に記し、下線を引いた。各単語の後ろの（ ）の中の数字は旧基準の級で、「／」の後ろはその単語がどの出題分野に出ていたかを示している（以下、次節以降の（2）（3）も同様）。

① 『公式 N5(1)』に出ていた上の級または級外の単語

ラーメン（級外／文法）、すし（表外⁴⁾／文法）、おにぎり（級外／聴解）、とうふ（級外／読解）

② 『公式 N5(2)』に出ていた上の級または級外の単語

ラーメン（級外／聴解）、すし（表外／聴解）、おにぎり（級外／聴解）、スパゲティ（級外／聴解）、ピザ（級外／聴解）、なつとう（級外／文法、読解）、りんご（表外／文法、聴解）、いちご（級外／文法）、バナナ（表外／読解、聴解）、みかん（表外／聴解）、チョコレート（表外／聴解）、クッキー（級外／聴解）

③ 『公式 N4(1)』に出ていた上の級または級外の語

チーズ（2／聴解）、すいか（級外／文法）

④ 『公式 N4(2)』に出ていた上の級または級外の単語

チーズ（2／聴解）、りんご（表外／文法）、バナナ（表外／聴解）、クッキー（級外／聴解）、キャンディー（級外／聴解）

「問題集」の N5 と N4 を比較すると、食べ物、飲み物に関する上の級や級外の語彙は、N5 すなわち初級前半でより多く見られた。特徴的だったのは、表外の語彙が N5 の「問題集」で積極的に使用されていたことである。「リーディング チュウ太」では表外の語彙は N4 としているが、新語彙表では N4 ではなく下の級の N5 に入っていることが示唆される。

(2) カタカナ語

以下は、「問題集」に出ていた上の級または級外のカタカナ語である。カタカナ語は外来語とほぼ同義であると考え、ローマ字の単語もカタカナ語に含んでいる。

① 『公式 N5(1)』に出ていた上の級または級外の単語

エアコン（級外／語彙）、ビル（3／語彙）、DVD（級外／読解）、トイレットペーパー（級外／読解）、ティッシュペーパー（3／読解）

②『公式 N5(2)』に出ていた上の級または級外の単語

エアコン（級外／語彙）、ビル（3／聴解）、DVD（級外／聴解）、テキスト（3／読解）

③『公式 N4(1)』に出ていた上の級または級外の単語

チケット（級外／聴解）、コンビニ（級外／語彙）、メール（2／読解）、レシート（級外／語彙）、ソファー（2／文法）、タオル（2／聴解）、ボール（2／読解）、CD（級外／聴解）、ピアニスト（級外／聴解）、アイディア（2／語彙）、ルール（2／語彙、読解）、オフィス（2／読解）

④『公式 N4(2)』に出ていた上の級または級外の単語

チケット（級外／聴解）、コンビニ（級外／語彙）、Eメール（2／読解）、オープ（2／聴解）、サービス（2／聴解）、ロボット（級外／語彙）、ホームページ（級外／聴解）、デート（2／語彙）、リボン（1／聴解）、ネックレス（級外／聴解）、Tシャツ（2／聴解）、センチ（2／語彙）

「問題集」のN5とN4を比べると、N4すなわち初級後半でより多くの上の級または級外のカタカナ語が使われていた。級外のカタカナ語も多く見られるのは、新語彙表作成時にカタカナ語のデータベースが複数採用されていたことが背景にあると考えられる⁵⁾。

カタカナ語の内容について見てみると、N5では級外の「エアコン」「トイレットペーパー」、3級の「ティッシュペーパー」「テキスト」、N4では級外の「コンビニ」「チケット」など、生活の中での身近な語彙が出されている。また、N4では、現代の生活において使用頻度が高まったと思われる、級外の「ホームページ」「ロボット」、2級の「メール（Eメール）」など、IT関係の語彙が多くなっている。また、出題分野では、特に「聴解」で上の級や級外のカタカナ語が多く使用されていたのも特徴的であった。

（3）合成語

「問題集」のN5、N4ともに、全体的に合成語が多く見られた。『公式 N5(2)』の「ピザ屋（ピザ：級外、屋：4／聴解）」、『公式 N4(2)』の「音楽会（音楽：4、会：3／読解）」のように、造語成分「～屋」「～会」を含む合成語が多くかった。また、「聴解」「読解」の出題分野では、『公式 N5(1)』の「旅行会社（旅行：4、会社：4／聴解）」、『公式 N4(1)』の「紹介文（紹介：3、文：2／読解）」、『公式 N4(2)』の「工場見学（工場：3、見学：2／読解）」「利用時間（利用：3、時間：4／聴解）」のように、個々の単語の意味がわかつていることが前提とされた合成語が多く見られた。

表1は新語彙表にある情報である。押尾、秋元ほか(2008)の84頁に「問題作成時に必要な補足的な情報を記載する備考欄を設けることとした」とあり、見出し語の「備考欄」に、その単語が造語成分であることなどの情報が示されている。「問題集」に合成語が多く出ている背景には、新語彙表に含まれる、これらの情報があるものと考えられる。

表1 新語彙表ver. III (一部)⁶⁾

見出し語	標準的な表記	品詞	語種	初出レベル	漢字レベル	備考
うまい	うまい	イ形容詞	和	N4		絵がうまい
うまい	うまい	イ形容詞	和	N3		うまい酒
かえる	変える	動II	和	N4	N3	
フード～～フード	フード	名	外	N3		造語成分

押尾、秋元(2008)の48頁の表より抜粋

(4) 「問題集」の漢字

N5の「問題集」の2冊とともに、「文法」「読解」の出題分野では、語彙のレベルが4級で漢字のレベルが3級の単語は、漢字表記にされ、ルビがふられていた。「売る」「帰る」などの基本的な動詞に加え、『公式N5(2)』では「寒い」「楽しい」などのイ形容詞も漢字表記にされており、全般的に漢字表記にされる語彙が増えていた。

さらにN4の「問題集」では、「相談」「案内」などの動作性名詞、「受付」「予定」など、2字以上の漢字で表記されるのが一般的な語彙は、語彙のレベルが3級で漢字のレベルが2級でも、ひらがなではなく漢字で表記されていた。

押尾、秋元(2008)の45頁に「原則として、語の初出レベルとその語に使うことのできる漢字を同じレベルとする」とあり、この原則に従っているものだと言える。

II. 「問題集」での上の級または級外の語彙、及び上の級の漢字の使用数

本章では、「文字」「語彙」「読解」の出題分野において、「問題集」で上の級または級外の語彙や上の級の漢字がどの程度使用されていたのか、具体的な数字を見ていく⁷⁾。

1. N5の「問題集」での使用数

「文字」の出題分野では、「漢字読み」の問題⁸⁾で、『公式N5(2)』の12問中1問に3級の漢字の出題があり、「表記」の問題で、『公式N5(1)』の8問中1問に3級の漢字の出題があった。「語彙」の分野では、「文脈規定」の問題で、『公式N5(2)』の10問中、1間に級外、1間に3級の語彙の出題があった。「言い換え類義」の問題では、『公式N5(1)』で5問中2問、『公式N5(2)』で5問中3間に3級の語彙の出題があった。

表2は、「読解」の出題分野での上の級または級外の語彙と、上の級の漢字の使用数である。「読解」の出題分野全体では、『公式N5(1)』で上の級と級外の語彙が5つ(2級2つ、級外3つ)、上の級の漢字が15(3級13、2級2つ)、『公式N5(2)』で上の級と級外の語彙が7つ(3級4つ、2級1つ、級外2つ)、上の級の漢字が15(3級14、2級1つ)使われていた。大問の3問中、「内容理解(中文)」では他の2問と比べ、上の級の漢字が『公式N5(1)』で6つ、『公式N5(2)』で5つと、最も多かった。

表2 N5「読解」の出題分野での上の級と級外の語彙及び上の級の漢字の使用数

大問	小問 数	小問 番号	『公式 N5(1)』				『公式 N5(2)』					
			語彙			漢字		語彙				
			3級	2級	級外	3級	2級	3級	2級	級外		
内容理解(短文)	3	1	0	0	1	0	2	0	0	1	4	0
		2	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0
		3	0	1	0	4	0	1	1	0	0	1
内容理解(中文)	1	なし	0	0	0	6	0	2	0	0	5	0
情報検索	1	なし	0	1	2	3	0	1	0	1	3	0
合計			0	2	3	13	2	4	1	2	14	1

2. N4の「問題集」での使用数

「文字」の出題分野では、「漢字読み」の問題において、『公式 N4(1)』で9問中4問、『公式 N4(2)』で9問中2問に2級の漢字の出題があった。「表記」の問題においては、『公式 N4(1)』で6問中3問、『公式 N4(2)』で6問中1問に2級の漢字の出題があった。『語彙』の出題分野では、「文脈規定」の問題において、『公式 N4(1)』で9問中2問、『公式 N4(2)』で10問中4問に2級の語彙の出題があった。「用法」の問題では、『公式 N4(1)』『公式 N4(2)』とともに、5問中2問に2級の語彙の出題があった。

表3 N4「読解」の出題分野での上の級と級外の語彙及び上の級の漢字の使用数

大問	小問 数	小問 番号	『公式 N4(1)』				『公式 N4(2)』			
			語彙		漢字		語彙		漢字	
			2級	級外	2級	1級	2級	級外	2級	1級
内容理解(短文)	4	1	1	0	5	0	0	2	6	0
		2	1	1	5	0	1	0	2	0
		3	3	0	4	0	2	2	3	0
		4	3	2	5	0	0	1	8	0
内容理解(中文)	1	なし	2	1	19	0	2	0	22	2
情報検索	1	なし	4	4	5	0	3	4	11	1
合計			14	8	43	0	8	9	52	3

表3は、「読解」の出題分野での上の級または級外の語彙と、上の級の漢字の使用数である。「読解」の出題分野全体では、『公式 N4(1)』で上の級と級外の語彙が22(2級14、級外8つ)、上の級の漢字が43(全て2級)、『公式 N4(2)』で上の級と級外の語彙が17

(2級8つ、級外9つ)、上の級の漢字が55(2級52、1級3つ)使用されていた。大問の3問中、「内容理解(中文)」では他の2問と比べ、上の級の漢字が『公式N4(1)』で19、『公式N4(2)』で24と、最も多かった。「読解」の出題分野では、上の級の漢字には基本的にルビがふられているが、『公式N4(2)』の「内容理解(短文)」には、上の級の漢字にも全くルビがふられていない問題もあった。

III. 対応とまとめ

以上のことから、N5、N4、いずれの「問題集」にも、「文字」「語彙」の出題分野において、上の級の漢字や、上の級や級外の語彙の出題が一定数あることが判明した。また、「読解」の出題分野では、文章が長くなるにつれ、上の級の漢字の使用が多くなることもわかった。旧基準にのみ沿った学習では、これらの問題に対応できることになる。

Iで述べた通り、上の級や級外の語彙には、食べ物や飲み物に関する語彙や、生活の中での身近な語彙やIT関係の語彙を中心としたカタカナ語が多かった。N5の「問題集」に食べ物や飲み物に関する語彙、N4の「問題集」にカタカナ語が多かったことから、初級前半では食べ物や飲み物に関する語彙、初級後半では生活の中での身近な語彙やIT関係の語彙を中心としたカタカナ語を、重点的に学んでいくとよいと思われる。

「聴解」「読解」の出題分野では、個々の単語の意味がわかっていることが前提とされた合成語が複数見られたことから、単語を学ぶ際には、その意味と読み方を十分に把握しておくようにすれば、それらが日本語能力試験で合成語の構成要素として出てきても、対応が可能であろう。

漢字に関しては、上の級の漢字の出題があり、「読解」の出題分野ではルビがないものも出ていたため、単語は漢字表記とともに学習し、少なくとも読めるようにしておく必要があると考える。

おわりに

本稿では、上の級や級外の語彙及び上の級の漢字が、「問題集」で実際にどう出題されていたかについて十分触れることができなかつたため、この点を今後の課題としたい。

注

- 1) 出題基準が公開されていない理由として、国際交流基金(2012)の83頁に「日本語学習の最終目標は、語彙や漢字、文法項目を暗記するだけではなく、それらをコミュニケーションの手段として実際に利用できるようになることだと考えています」とある。
- 2) 新語彙表や新漢字表は、日本語能力試験の実施機関である国際交流基金及び日本国際教育支援協会の「日本語能力試験改善に関する検討会」の分科会の、「出題基準分科会漢字表・語彙表部会」によって作成されている。その詳細は、押尾、秋元ほか(2008)の71頁を参照。

- 3) 旧試験の4級はN5、3級はN4のレベルにほぼ相当する。N5の「問題集」に3級の語彙が使用されていた場合、上の級の語彙が使用されていた、ということになる。
- 4) 国際交流基金（1994）の35頁には、旧基準の3、4級の語彙表の留意事項が記されている。その（3）に「食べ物（果物、野菜、料理等）・飲み物の名称、スポーツ名、動植物名等は語彙表には挙げていないが、このことは、これらの名称が試験に出されないことを意味するものではない」とあり、食べ物等の具体的な名称が複数記載されている。本稿では、そこに記載されている単語を「表外」と称す。
- 5) 新語彙表の作成時に使用されたデータベースには「外来語」という項目がある。使用されたデータベースの詳細は、押尾、秋元（2008）の40頁を参照。
- 6) 新語彙表は、その一部が公表されているもののうちで最新のものの名称が「ver. III」とされており、表名は引用元の通りに記している。詳細は、押尾、秋元（2008）の48頁を参照。
- 7) 「文法」「聴解」の出題分野は調査対象外とした。「文法」の出題分野では上の級の漢字に全てルビがあり解答への影響は少ないと考えられるため、また、「聴解」の出題分野については本研究で漢字を調査対象から外しているためである。
- 8) 日本語能力試験の問題の構成とその詳細は、国際交流基金（2012）の79-80頁を参照。

参考文献

- 安藤栄里子（2009a）、「新しい「日本語能力試験」に備える 全体像と、言語知識（文字・語彙・文法）編」『月刊日本語』第22巻第11号、32-37頁。
- 安藤栄里子（2009b）、「新しい「日本語能力試験」に備える 読解・聴解編と、まとめ」『月刊日本語』第22巻第12号、32-37頁。
- 押尾和美、秋元美晴、武田明子、阿部洋子、高梨美穂、柳澤好昭、岩元隆一、石毛順子（2008）、「新しい日本語能力試験のための語彙表作成に向けて」『国際交流基金日本語教育紀要』第4号、71-86頁。
- 押尾和美、秋元美晴（2008）、「新しい日本語能力試験のための語彙表・漢字表作成中間報告—新語彙表 ver. IIIの完成まで（特集 語彙の研究と教育）」『日本語学』27(10)、36-49頁。
- 国際交流基金（1994）、「日本語能力試験 出題基準〔改訂版〕」凡人社。
- 国際交流基金（2012）、「日本語能力試験 公式問題集 N5」凡人社。
- 「日本語読解学習支援システム リーディング チュウ太」、<http://language.tiu.ac.jp/>。

Analysis of official workbooks of the Japanese-Language Proficiency Test: Focusing mainly on vocabulary and kanji at beginners level

IIJIMA, Michiko

Abstract

The Japanese Language Proficiency Test (JLPT) was revised in 2010, but neither the question criteria nor past exam questions have been made public, making the range of questions unclear. The author mined and analyzed vocabulary and *kanji* appearing in official elementary N4 and N5 level JLPT workbooks.

The newer, revised tests have been found to include several vocabulary items which were either from previous higher level tests, or were new. The easiest level, N5, includes a lot of food and drink-related vocabulary, and level N4 involves many *katakana* for everyday life words and IT vocabulary. As such, in the initial stages (N5), the learner should mainly study vocabulary about food and beverages, and in the second half of the beginners level (N4), learners would be advised to focus on studying *katakana* for everyday life and IT words. In the listening and reading sections, there are several compound words, made from single words which the learner is expected to understand. Thus, to improve comprehension and reading, when learners study words, it would be beneficial for them to learn both their meanings and alternate pronunciations, enabling them to answer compound word questions in the JLPT. Similarly, *kanji* previously used in higher level exams (prior to revision) has appeared in the revised JLPT. Furthermore, in the reading section, some words and/or questions do not have *furigana* attached. Therefore, learners should aim to be able to read elementary *kanji* without *furigana*.

Keywords: Japanese-Language Proficiency Test/(JLPT), beginners level, vocabulary, *kanji*, question criteria

中国語を母語とする日本語学習者の 発音習得に関する個人要因について

末延 麻子（九州大学大学院生）

要旨

第二言語を学習する際、学習者によって習得に差が生じる。特に発音習得においてはその差が顕著に現れ、母語話者のような発音を習得する学習者もいれば、母語の訛りが残っている学習者もいる。このような学習者の発音習得を左右するのは、様々な「要因」の違いではないだろうか。この様々な要因は多岐に渡るものであり、それぞれの個人要因や関係について詳しく分析する必要があると考える。また、個人要因と発音習得度の関係を明らかにすることで、より多角的に学習者の分析を行うことができる。

個人要因についてはアンケート調査により調査を行い、発音習得度については日本語の音声タスクを用いて調査を行なった。アンケート調査はウェブアンケートの形式を用い、質問項目は合わせて48項目である。発音習得度の調査においては、中国語を母語とする日本語学習者が困難とする日本語の発音を含んだ音声タスクを学習者が読み上げ、録音したものを日本語母語話者が評価するものである。日本語母語話者の評価によって発音習得度を点数化し、最終的にアンケート調査の結果と合わせて分析を行なった。

キーワード： 中国語を母語とする日本語学習者、発音習得、学習者分析

はじめに

外国語を学習する際、学習者によってその発音の習得には差が出ると言われている。第二言語習得において、高い言語能力を習得した学習者を「学習成功者」としてその特徴を研究した研究もある（竹内, 2003など）。その中でも、発音能力に注目して行われた学習成功者に関する研究、特に日本語学習者を対象とした研究の中に、戸田（2006）がある。戸田（2006）によると、いわゆる臨界期を過ぎてから学習を始めた学習者の中にも、ネイティブルベルの発音習得を成し遂げた学習者がおり、その学習者には共通点があると述べている。この他にも多くの研究が行われており、発音習得度が高い学習者のストラテジーや学習動機に注目したもの（小河原, 1997; 吳ら, 2016）や、学習者の母語別に日本語の発音習得の研究を行ったもの（戸田, 1999; スィリポンパイブーン, 2008; 谷部ら, 2010; 劉, 2010）などがある。戸田（2006）の発音習得度が高い学習者の共通点や先行研究から

も分かるように、学習者の発音習得度には多くの要因が関わっていると考えられる。

本研究は、その多くの要因を「発音習得度の個人差に影響を与える要因」と捉え、その「要因」と発音習得度の関係について明らかにすることで、より多角的に学習者の分析を行おうとするものである。

個人差に影響を与える要因といえば、「言語適性 (language aptitude)」、「学習開始年齢」、「母語」、「目標言語が話される国での滞在期間」、「性格」、「学習動機」、「学習環境」、「学習ストラテジー」、「使用する教材」、「教師」など、様々なものがある。

言語適性は、「第二言語を学習するのにどれだけ適した学習者であるか」という生来の素質」と定義され、発音能力の適性に関しては、「学習者が第二言語の新しい音を識別し、それを記憶できる能力」(Caroll, 1965) とされている。しかし、この言語適性は生まれ持つたものであり、自分の力で変えることが難しいものである。学習開始年齢や母語にも同様のことが言えるだろう。そこで、本研究では、「学習開始年齢」、「言語適性」、「性格」は調査の対象とはせず、「母語」は統一して中国語とする。

I. 研究課題および目的

本研究は、発音習得度の個人差に影響を与える要因（以下、「個人要因」）と発音習得度関係を明らかにすることで、より多角的に学習者の分析を行おうとするものである。上述したように個人要因には自分の力では変えられないものもあり、本研究はそれらの要因は含めない。本研究で対象とする個人要因は以下の通りである。

- ① 日本滞在期間
- ② 学習時間（今までどのくらいの期間日本語を学習したか）
- ③ 使用方言
- ④ 学習機関（今までどこで学習したか）
- ⑤ 日本語レベル（日本語能力試験基準）
- ⑥ 発音に関する考え方
- ⑦ 発音学習ストラテジー（使用教材や使用方法も含む）

II. 調査概要

本研究では、アンケート調査・音声タスク調査の二つの調査を行なった。上述した①～⑦の要因については google フォームを用いたアンケートを行って調査を行い、発音習得度については、学習者の音声を録音しそれを日本語母語話者が評価することで測った。

1. アンケート調査

アンケート調査は、3つの部分から構成されており、対象者はすべて中国語母語話者であるため質問はすべて中国語で提示した。まず、一つ目の部分である上述した要因①～⑤

についての質問項目は、性別・年齢、出身地域（中国国内）および中国語を話す際に使用する方言、日本滞在歴、日本語を学んだ教育機関、学習年数、日本語レベル（日本語能力試験基準）についてである。

二つ目の部分は、要因⑥「発音に対する考え方」についての質問項目で、全9項目である。それぞれの項目について「どのくらい同意するか」を5段階（全く同意しない1～強く同意する5）で答えるものである。以下にいくつか例を示す。

- 1) 没有老师教发音也会好。（先生はいなくても発音は上達する）
- 2) 我说日语的时候，发音发得很好。（日本語を話す時、上手に発音できている）
- 3) 我觉得像日本人一样发音很重要。（母語話者のように話すことは重要だ）
- 4) 就算发音不好只要能沟通就可以了。（発音が悪くても通じれば良い）

三つ目の部分は、要因⑦「発音学習ストラテジー」に関する質問項目で、全24項目である。使用教材とそれらの使用方法について聞いた質問項目が8問、それ以外の16問については、「どのくらいするか」を5段階（全くしない1～いつもする5）で答えるものである。以下に例を示す。

- 1) 想起来的时候，会一个人进行发音练习。（気付いた時に、一人で発音の練習をする）
- 2) 会用日语，自问自答，和自己说话练习。（日本語で独り言を言ったり自問自答する）
- 3) 会录自己的发音，来进行发音练习。（自分の発音を録音して、それを聞いて練習する）
- 4) 看着日本人的口型模仿。（日本人の口元を見て発音を真似する）

2. 音声タスク

(1) 音声タスク内容

音声タスクは、単語、文、会話の3つの部分から成る。それぞれ先行研究で指摘された中国語母語話者にとって難しい日本語の発音を含め作成した。以下に音声タスクの詳細を示す。

【単語】

ポット	ボート
ボンド	ボード
退学（たいがく）	大学（だいがく）
過程（かてい）	勝手（かって）
見慣れる（みなれる）	乱れる（みだれる）
見られる（みられる）	急ブレーキ（きゅう）
中央改札（ちゅうおうかいさつ）	元首相（もとしゅしょう）

【文】以下の文を、（ ）の指示通り読んでください。

1. またですか。（非難）
2. まだですよね。（相手の言葉に相づちを打つ）
3. 天気のいい日は、電気をつけないでください。（指示なし）
4. 段ボールにガムテープを貼ってくれませんか。（依頼）
5. いい会社じゃない。（「意外といい会社だ」と驚く）
6. アメリカへは飛行機で行きますか。（質問）
7. 煙突（えんとつ）からサンタクロースが出てきた。（指示なし）
8. ゆうことようこは、ベッドに座ってトランペットを吹いています。（指示なし）

【会話】以下の会話を読んでください。

- A：何か飲みますか？
B：はい、飲みます。
A：何が飲みたいですか？
B：ビールが飲みたいです。
A：ビールを飲みながら、何を食べましょうか…
B：そうですね。ピーナッツはどうですか。

（2）調査手順

(1)に示した音声タスクを、以下の表1に示す10名の調査対象者に読んでもらった。調査対象者には、録音する前に音声タスクが書かれた紙を渡し、一度目を通してもらった。別に練習の時間などは設けず、目を通し終わってからすぐに録音を行った。単語、文、会話の順に録音したものを、単語は1単語ずつ、文と会話は1文ずつに区切り、評価に使用するデータを作成した。

（3）評価方法

評価は、それぞれについて「上手か」を5段階評価（下手1～上手5）してもらった。文については、一文についての評価に加え（ ）内の指示通り読めているかどうかについても5段階評価を行なってもらった。評価を行う際には、(2)で作成したデータに日本語母語話者が同じタスクを読んだデータを加え、1単語、1文ずつランダムに並べ替えたものを使用した。日本語母語話者が読んだデータを加えたのは、評価者の評価が信頼性のあるものであるかどうか、一定の基準とするためである。

3. 調査協力者

(1) 学習者

調査協力者について以下の表 1 に示す。滞在歴の「Y」は「年」、「M」は「～ヵ月」を意味するものである。いずれの学習機関に関しても「NA」と表記している学習者 D、E についてだが、2名とも日本に来てから独学で日本語を勉強したということである。

(表 1 調査協力者概要)

	性別	年齢	出身地	方言	滞在歴	レベル	学習時間	学習機関(中)	学習機関(日)
A	女	22	河南省 駐馬店市	西北方言	3M (N3 程度)	NA (N3 程度)	3Y 2M	S 大学	K 語学学校
B	男	28	上海市	吳語	2M	NA (N3~N2)	5M	M 語学学校	K 語学学校
C	女	21	黒竜江省	華北東北 方言	3M	NA (N3 程度)	3Y 2M	B 大学	K 語学学校
D	男	31	吉林省 吉林市	華北東北 方言	4Y 11M	N2	2Y	NA	NA
E	女	30	遼寧省 沈陽市	北東北方 言	3Y	N3	2Y 6M	NA	NA
F	男	23	貴州省	西南方言	4M	N1	5Y	N 大学	K 語学学校
G	女	23	山西	晋方言	1Y 3M	N1	3Y 10M	N 大学	K 語学学校
H	女	22	広東省 広州市	粵語	5M	N1	4Y	K 大学	K 語学学校
I	男	29	福建省 南平市	普通話	2Y	N1	3Y	S 語学学校	NA
J	女	22	広東省 河源市	客家語	1Y	N1	3Y 10M	K 大学	K 語学学校

(2) 評価者

音声タスクの評価者は日本語母語話者 1 名で、20 代後半の男性、出身は茨城県である。日本語教授経験はなく、日常的に外国人留学生と接する機会はあるが会話はすべて英語で行なっているため、彼らの日本語を聞くことは少ない。

今回の評価者は「日本語教授経験のない日本語母語話者」であること、「日本語学習者(留

学生) の日本語を聞く機会があまりない」という 2 点を基準にして選定した。日本語の発音を評価する際には、評価者の出身地なども考慮すべきであるので、今後の調査では評価者の数を増やし、より信頼性のある評価となるように努めたい。

III. 結果

(1) 音声タスクの評価結果

音声タスクの評価結果を表 2 に示す。網かけ部分は、平均点より高い点数だったことを表している。学習者 B、F、G、J の 4 名が全体的に点数が高かった。

(表 2 音声タスクの評価結果)

	単語(70)	文(40)	会話(30)	合計(140)
A	36	22	16	74
B	60	23	25	108
C	30	15	11	56
D	35	10	11	56
E	39	16	20	75
F	46	30	21	97
G	47	27	24	98
H	39	22	24	85
I	39	19	18	76
J	61	28	27	116
平均	45.5	22.9	20.6	84.1

(2) 要因①「日本滞在歴」と音声タスクの評価結果

上述した音声タスクの評価結果とアンケート調査の結果と合わせて分析を行う。まず、要因①「日本滞在歴」についてだが、2ヶ月の滞在でも高評価を得ている学習者 B がいる一方、4年の滞在でもあまり良い評価を受けていない学習者 D も存在することから、日本滞在歴は発音習得度とはあまり深い関係がない可能性が示唆された。

(3) 要因②「学習時間」と音声タスクの評価結果

学習者 B は、5ヶ月という短い学習期間で良い評価を得ているが、全体の点数にはばらつきがある。データ数が少ないため、現段階で学習時間と発音習得度の関係ははつきりせず、今後データ数を増やしたのち検討する必要がある。

(4) 要因④「学習した教育機関」と音声タスクの評価結果

本研究の対象者の中で、中国国内、日本国内ともに教育機関で日本語の学習を行なったことのない学習者が2名存在した（学習者D、E）。何らかの教育機関で日本語を学習したことのある学習者と比較して、大きな差があったとは言えないが、2名とも評価点の平均には届いていない。関係があると断言はできないが、何らかの教育機関で学習を行なった方が発音習得には効果的である可能性がある。

(5) 要因⑤「日本語レベル」と音声タスクの評価結果

N3を取得している学習者EとN1を取得している学習者H、Iの評価点にはあまり差がない。学習者A、B、Cに関しては推定レベルだが、日本語レベルと発音習得度の間には深い関係がない可能性があると言える。

(6) 要因⑥「発音に対する考え方」と音声タスクの評価結果

要因⑥「発音に対する考え方」と評価結果は、Excel関数の相関係数を用いて分析を行なった。「発音が悪いと、日本人と親しくなりにくい」（ $r=0.22$ ）、「発音が悪いと、日本の社会の一員として受け入れられにくい」（ $r=0.38$ ）の2つの項目で正の弱い相関関係が認められた。また、「発音が悪くても通じれば良い」（ $r=-0.49$ ）という項目では負の相関関係が認められた。このアンケートでは、同意の程度を「全く同意しない」を1とし、「強く同意する」を5として5段階で答えるものであるので、「発音が悪くても通じれば良い」という項目に関して評価点が高い学習者は「通じれば良い」とは思っていない傾向にある、ということが言える。また、評価点が高い学習者は、「発音が悪いと日本人との関係が良くなりにくい」と考えていることが分かった。

(7) 要因⑦「発音学習ストラテジー」と音声タスクの評価結果

要因⑦「発音学習ストラテジー」についても、要因⑥と同様に分析を行なった。「アクセントが分からなかつたら、辞書などで調べる」（ $r=-0.44$ ）に負の相関関係が認められた。また、「自分の発音に納得するまで、変化させながら修正する」（ $r=-0.34$ ）、「一音一音注意深く発音する」（ $r=-0.35$ ）、「下手だ、間違えたと思ったら言い直す」（ $r=-0.31$ ）、「母語と日本語の発音の相違点を比較する」（ $r=-0.39$ ）の項目に弱い負の相関関係が認められた。評価点があまり高くない学習者は、自分の発音に自身がなく、正しい発音が分からぬことが多いが、より間違えが少なくなるように努力していることが分かる。

また、どんな教材を使用し、それをどのように使用するか、という質問項目については、最も評価点が高かった学習者Jのみが、日本語の教科書・発音教材・ニュース・ドラマや映画を「聞いて書き取る」というストラテジーを使用していた。つまり、「聞いて書き取る」、いわゆるディクテーションを使用した学習方法は、発音能力を高める可能性が高い。

おわりに

本研究では、発音習得度の個人差に影響を与える要因と発音習得度関係について、アンケート調査と音声タスク評価を通して分析を行なった。今回の分析の結果から、「学習年数」、「学習した教育機関」の二つの要因は発音習得度と関係がある可能性が示唆された。また、聞いて書き取る学習方法が発音能力の向上に効果がある可能性があることがわかった。要因③「使用方言」については、被験者が少なく、また方言にはらつきがあったことから分析ができなかった。これについては、今後の課題としたい。

参考文献

- 小河原義朗(1997)、「外国人日本語学習者の発音学習における自己評価」『教育心理学研究』45巻(4号)、72-82頁。
- 吳麗楠・磯村一弘・波多野博顕・金村久美・松田真希子(2016)、「JFL環境下での発音学習ストラテジー使用と発音習得-中国の大学で学ぶ日本語学習者を対象に-」『音声研究』20巻(1号)、6-15頁。
- スィリボンパイブーン・ユバカー(2008)、「日本語アクセントの学習における自己モニターの有効性-タタイ語母語話者に対するアンケートの分析から-」『音声研究』12巻(2号)、17-29頁。
- 竹内理(2003)、『より良い外国語学習方法を求めて』松柏社
- 谷部弘子・西沼行博・林明子(2010)、「中国人日本語学習者にみる発話末韻律の知覚：イントネーションとリズムの聴取実験」『東京学芸大学紀要』61巻(2号)、279-288頁。
- 戸田貴子(1999)、「日本語学習者による外来語使用の実態とアクセント習得に関する考察-英語・中国語・韓国語話者の会話データに基づいて-」『文藝言語研究』36巻、86-111頁。
- 戸田貴子(2006)、「『発音の達人』とはどのような学習者か」『第二言語における発音習得プロセスの実証的研究』科学的研究費補助金研究成果報告書（課題番号 16520357）、19-68頁。
- 劉佳琦(2010)、「中国語母語話者（北京・上海出身者）による複合動詞の東京語アクセントの習得」『早稲田日本語教育学』第8号、15-28頁。
- Carroll, J. B., & Sapon, S. (1959), "Modern Language Aptitude Test : Form A" NY: Psychological Corporation.

Factors that affect Japanese pronunciation by Chinese Learners

SUENOBU, Mako

Abstract

When we learn the second language, there are many proficiency differences between learners. Some learners can speak L2 like native speakers, others still have the accent from their mother language. It is assumed that the differences of various factors affect the acquisition of L2 pronunciation skills. This study focused on a relationship between the various factors and pronunciation skills to analyze learners from several points. 10 Chinese learners of Japanese are required to complete questionnaire concerning the factors, and record tasks of Japanese pronunciations.

Keywords : Chinse Japanese leaners, Japanese pronunciation, Phonetic learning strategies

コーパスに見られる感謝表現の日中対照分析 —ストラテジーと機能を中心に—

張 琦（九州大学大学院生）

要旨

言語や文化によって感謝の言語行為には異なるものと共通のものがある。本研究の主要な目的はコーパスにおける感謝表現のストラテジーと機能を中心に、発話理論の枠組みを用いて談話データを検討することによって、日中の感謝言語行為はどのようなものなのかを捉え、その共通点と相違点を明らかにすることにある。さらにその分析結果に踏まえ、中国語母語話者向けの日本語教育に示唆を与えたいと思う。

結果として、まずは「責め」というストラテジー以外、日本語・中国語における感謝ストラテジーの種類が非常に似ていることから、中国人日本語学習者が日本語の感謝表現を習得する困難点は、感謝表現そのものが異なることに起因していないと言えよう。次に感謝表現の機能に関して、中国語は感謝表現が「依頼」の機能を果たすことがあるが、日本語にはそれはない。これ以外の感謝表現の機能はほぼ共通している。

キーワード： 日本語、中国語、感謝表現、ストラテジー、機能

はじめに

感謝の言語行為はさまざまな社会で普遍的に行われる。しかし、どのような言語行為が感謝を表現できるかは、それぞれの言語や文化によって異なるものと共通のものがある。特に日本語の感謝場面における詫び表現の使用に違和感を覚える中国人は少なくない。中国人学習者を対象とする実態調査では、感謝を表す「詫び」ストラテジーの使用頻度が日本人に比べて非常に少ないことが分かった（孫 2007）。この結果は果たして両言語の違いによるものなのか、他に何らかの原因があるのか、日中対照研究が必要である。

I. 用語の定義

多くの先行研究は感謝表現の定義について論じているが、中田（1989）の説は感謝表現を最も網羅している。中田は発話行為理論の観点から、日本語の感謝の適切性条件を「1. 命題内容条件：P は y による過去の行為。 2. 準備条件：(a) x は y の行為が自分にプラスであると信じている (b) x は y の行為が y にマイナスであると信じている。 3. 誠実条件：

(a) x は y の行為に恩を感じている (b) x は y へのマイナスを遺憾に感じている。 4. 本質条件 : y の行為に対する x の (a) および (b) の気持ちの表出」 (pp. 198-199) とまとめた。また、中国語も似たように分類されている (易 2014)。適切性条件を満たしていれば感謝の機能を果たしているので、本稿での感謝表現の定義もこれに従い、感謝の適切性条件を満たしているものを感謝表現とする。

II. 先行研究

日本語の感謝表現について、多くの先行研究は「慣用表現」に焦点を当てている (小川 1995, 熊取谷 1988, 中田 1989, 三宅 1994 等)。それに対し、熊取谷 (1994), 中田 (1989), 赤堀 (1995) は発話行為理論の枠組みと関連づけて日本語の感謝表現を総合的に見ていた。赤堀 (1995) は日本語母語話者のアンケート調査の結果をもとに、日本語の感謝ストラテジーを「1. 感謝行為に関する言及 2. 心的態度の表明 3. 感謝の対象物事への言及 4. 負担に関する言及 5. 利益に関する言及 6. 返恩の申し出 7. プラス評価 8. 相手 (またはそのウチの人物) が授益者であることの明示」 (pp. 53-54) という 8 つに分類した。

一方、中国語を対象とした多くの先行研究は内省的な方法、あるいは文学作品やテレビドラマの脚本から感謝ストラテジーの分類を検討した (李 2004, 李 2005, 王 2015, 錢 2018 等)。その中で最も代表的なのは李 (2004) の分類である。「直接感謝、間接感謝 : ①相手の負担への言及 ②謝罪 ③プラス評価 ④お返しの約束 ⑤相手が授益者であることの表明 ⑥相手を責める ⑦気持ちの表出¹⁾」 (pp. 94-95)。

日本語も中国語も感謝表現について量的な分析が多数で、質的対照分析が少ない。また感謝表現の日中対照研究への総合的なアプローチを行っているものはわずかである。

III. 研究目的

本研究の主たる目的はコーパスにおける感謝表現のストラテジーと機能を中心に、発話理論の枠組みを用いて談話データを検討することによって、日中の感謝言語行為はどのようなものなのかを捉え、その共通点と相違点を明らかにすることにある。さらにその分析結果に踏まえ、中国語母語話者向けの日本語教育に示唆を与えたいたと思う。

IV. 研究方法

スペンサー=オーティー (2004) がポライトネスの観点から従来の発話行為の分析方法を 3 つにまとめている : ①主要な意味的構成要素を調べる。②直接性/間接性という観点から分析する。③格上げ表現/格下げ表現を考察する。本稿は感謝表現において最も違いが出やすい部分に焦点を当てるため、①②の方法を用い日中の感謝表現ストラテジーの異同を見ていく。

日本語の談話データを『名大会話コーパス』から取り出した。中国語に大規模の自然談

話コーパスがないため、今回は『北京大学CCL現代中国語コーパス』、『台湾中央研究院中国語均衡コーパス』から会話の部分だけ扱い、分析を行う。コーパスの詳細を表1に示す。

表1 データの詳細

言語	名称	内容	規模
日本語	名大会話コーパス	日本語母語話者同士の雑談を文字化したもの	129会話
中国語	北京大学CCL現代中国語コーパス	会話部分：北京語調査資料、対談/テレビインタビューを文字化したもの	記述なし
中国語	台湾中央研究院中国語均衡コーパス	会話部分： 中国語母語話者同士の談話を文字化したもの	10.57万字

V. 結果・考察

1. 日中感謝ストラテジーの共通点・相違点：意味的構成要素

山梨（1991）は発話行為を「何らかの言語表現を発する行為である」（p. 14）と定義している。発話行為には、それと結びつく発話行為ストラテジーもしくは構成要素がある。赤堀（1995）の日本語の分類、李（2004）の中国語の分類とコーパス調査をもとに、意味的構成要素のから日本語と中国語の感謝ストラテジーを再分類する。表2に示す。それぞれの用例はコーパスから取り出したものである。

表2 日本語と中国語における感謝ストラテジーの意味的構成要素

意味的構成要素		日本語	中国語
主要的	中核行為	ありがとうございます。	谢谢你哦。
付加的	気持ちの表明	うわー、うれしい。	那我太开心啦，有人这样夸奖我。
	プラス評価	ごちそうさま。おいしかったわ。	这个糖醋鱼，真是又看又好吃，是怎么做的？
	詫び	すいません。	真过意不去。
	返済/お返しの約束	今度晩御飯おごるわ ²⁾ 。	你的提案不错，有偿！今天晚上请你吃饭。
	相手の負担に関する言及	お手数おかげして。	一路辛苦了。
	相手の不可欠性に関する言及	おかげさまで。	多亏他们一直支持我，我才能走到今天。
	自分の利益に関する言及	今日はほんとうにこれ助かった。	我觉得这个对我帮助挺大的。
	責め	×	你来就来吧，买什么东西啊。

スペンサー=オーティー（2004）は「これらの構成要素の具体的な内容は発話行為の種類によって異なってくるが、通例、その一連の発話の持つ主要な発語内の効力を伝える中核行

があり、それに先行もしくは後続して（あるいは前後両方に）付加的構成要素が（必須というわけではないが）現れることがある」(p. 24) と述べている。例 1 の感謝発話をみると、中核行為「ありがとう」とそれに先行する付加的構成要素「役に立つ」、それぞれの組み合わせによる使用が考えられる。

例 1	
F057	あっ、なんかすごい <u>役に立つ</u> わ。 <u>ありがとう</u> 。 自分の利益に関する言及 + 中核行為 (『名大会話コーパス』データ 79)

また表 2 から日本語と中国語における感謝ストラテジーの意味的構成要素がほぼ似ていることが分かった。一方、中国人日本語学習者はレベルと学習環境に関わらず、感謝場面における「詫び」ストラテジーの使用は日本語母語話者より非常に少ない（孫 2007）。

次にそれぞれ母語話者同士の会話で「詫び」ストラテジーがどのように使用されるかを見ていく。

例 2	F: 女性 M: 年下の男性
F1	我听文亮说，你要到中国来，三天以前我就把房间给你预备好了，等一下我带你去看看。（中国に来ると聞いたから三日前に部屋を用意しといたよ。後で案内するね）
M2	我一来就麻烦您，真不好意思。 (来たばかりなのに、ご迷惑をおかけしてすみません)
F3	哪里，哪里。（そんなことないよ）

(『中央研究院中国語均衡コーパス』)

例 3	F116: 女性 40 代後半 F128: 女性 20 代前半
F116	こんばんは。
F128	こんばんは。お邪魔しております。
F116	いえ、勝手にどうぞ。
F128	すいません。 謝罪

(『名大会話コーパス』データ 005)

例 2, 例 3 で見たように、「詫び」で謝意を表すストラテジー自体は中国語にも存在する。利益を受けことに対し、「詫び」ストラテジーを使い恐縮の念を表す。この点は日本語も中国語も共通している。しかし、例えば「ハンカチを落としたのを教えてくれた」のように未知の人が何かをやってくれたとき、日本語で感謝を表す「すみません」が使用されることがある（斎賀 1966, 小野 2000）。それに対し、錢（2018）の指摘のように中国語で「詫

び」ストラテジーはよく目上の人々に使用され、未知の人に対してあまり使わない。中国語に「詫び」ストラテジーがないという訳ではなく、相手との関係による使い分けという点で日本語と中国語に違いが見られると考えられる。

また表2に示したように、意味的構成要素から見ると、中国語で付加的構成要素「責め」を感謝ストラテジーとして使えることが分かった。以下の例は夫婦間の会話である。夫がプレゼントを買ってきていた。それに対し妻がこう言う。

(1) “这东西这么贵, 你买它干什么?”

(『家有儿女』)

(こんな高いもん、買ってどうする)

形式上は疑問文で、内容は夫が買ってきたものを強く否定しているため、文脈から切り離してみれば、無礼な表現である。しかし親しい者同士の感謝場面でそのストラテジーが使用されると、不快どころか感謝する側もされる側もうれしい気分になる。そのストラテジーの使用傾向について李(2004)は「親しいほど、社会的距離が近いほど、使用頻度が高くなる」(p. 95)と述べている。

一方、日本語の感謝表現には「責め」というストラテジーは先行研究で指摘されておらず、今回のコーパス調査でも見つからなかった。中国語母語話者同士の会話で「責め」というストラテジーはどのように現れるか例4を用いて詳しく見ていく。

例4 ³⁾	M:母 D:娘
M1	芳, 你回来了, 走了这么久也不给家捎个信。 (芳、やっと帰ってきてくれたね、なんの連絡もなく)
D2	生意太忙了, 这不是回来吗? 妈, 你看我给你买了什么。 (仕事が忙しすぎてさ、ほら、お母さんこれあげる)
M3	花那个钱干什么? 妈老了, 也不趁穿这个, <u>多少钱?</u> 授益行為を責める + 相手の負担に関する言及 (これ買ってどうする? 私年とったし似合わないよ。いくら?)
D4	不贵, 一百八十块钱。(そんなに高くないよ、180元)
M5	那么贵, 妈一辈子也没穿过这么贵的衣服。 <u>以后别再乱花钱了, 你挣钱也不容易。</u> 相手の授益行為を否定 + 相手の負担に関する言及 (こんな高い服着たことない! もう買わないで、仕事大変だし)
D6	别那样说, 你辛苦了一辈子也该享受一下了。 (そんなこと言わないで、いろいろ苦労したのに。たまに贅沢したら)

(李:2008)

娘がプレゼントをくれたことに対し、母が「花那个钱干什么?」と娘を責めた口調で授益行為を強く否定した。それから「妈老了, 也不趁穿这个」と責めた理由を述べ値段を聞くことで、娘にかけた負担を配慮する姿勢を見せた。娘はそれを感謝だと察し自分の授益

行為を否定した。その後、「以后別再乱花钱了, 你挣钱也不容易」母が再度負担に言及し、謝意を表した。一方、日本語は感謝への返答として、相手の授益行為を強く責めるという表現より、「買わなくても/買わなくてもいいのに」と相手の負担へ配慮を示すような表現のほうが自然だと考える。

2. 日中感謝ストラテジーの共通点・相違点：直接性・間接性

山梨（1991）は遂行動詞の定義について、発話の力を明示的に特徴づける動詞であると説明している。直接発話行為は遂行動詞を含んでおり、比較的容易に発話の含意を推論できるが、間接発話行為は遂行動詞を含んでいないため、会話の状況を判断しながら多面的な推論をしなければならない（内田 2003）。

表2から分かるように、日中ともに直接・間接ストラテジーが使用される。間接ストラテジーに「気持ちの表明、プラス評価、謝罪、返済/お返しの約束、相手の負担に関する言及、相手の不可欠性に関する言及、自分の利益に関する言及、責め」が挙げられる。日本語と異なり、中国語の間接感謝ストラテジーとして「責め」も使用される。

また、ある場面において、どのレベルの直接性がどれだけ頻繁に用いられるかは、参加者間の関係（支配力、親密さなど）、利益の大小、負担の軽重、文化によって異なる可能性があると考えられる。

VII. 日中の感謝表現の機能

コーパス調査の結果から、日本語と中国語の感謝表現の機能を対人関係調整機能と意味機能に分類する。表3に示す。

表3 日本語と中国語の感謝表現の機能

感謝表現の機能	日本語	中国語
対人関係調整機能 (対人関係の不均衡を修復)	1. 気持ちの表出 2. プラス評価 3. 詫び 4. 返済/お返しの約束 5. 相手の負担に関する言及 6. 相手の不可欠性に関する言及 7. 自分の利益に関する言及	1. 気持ちの表出 2. プラス評価 3. 詫び 4. 返済/お返しの約束 5. 相手の負担に関する言及 6. 相手の不可欠性に関する言及 7. 自分の利益に関する言及
意味機能	1. 感謝 2. 皮肉 3. 断り(断り行為の後置)	1. 感謝 2. 皮肉 3. 断り (断り行為の後置) 4. 依頼

表3に示したように、感謝の意味機能には日中の間に違いが見られた。中国語は依頼に

感謝表現が使われることがある。谷口（2009）は「先にお礼を言っておきますと相手に告げる場合がある。これは相手に対して前もって感謝しておくことによって、相手に断りにくくさせたり、行為を確実に行わせる意図があるという事である」(p. 112)と述べている。以下の例6を見てみよう。

例 6	A : 主任 B : 暖暖
A1	我明天去若是能说通, 那自然好, 要是说不通, 你可不要抱怨我, 这毕竟是事关法的事呀! (明日説得してみるね、うまくいくかは知らないけど。法律問題と関わるから)
B2	那当然, <u>先谢谢你了</u> , 主任。 (もちろんです、お先にお礼を言っておきます、主任)

(『北京大学CCL現代中国語コーパス』)

暖暖さんが感謝表現を使い主任に頼み事をした。主任が頼み事を引き受けたと想定したため、先に「先谢谢你了」とお礼の言葉を言ったわけである。少し頼み事を相手に押し付けるような感じがある。

例 7	
郭	我知道, 而且还有许多部门的许多人要为你们这事儿丢掉职位, <u>所以恳请二位协助</u> , 以便使我不包括在内。 <u>先谢谢了</u> 。(お二人にお願いします、私を巻き込まないでください。お先にお礼を言っておきます)

(『北京大学CCL現代中国語コーパス』)

感謝表現は単独で依頼機能を果たすこともできるし、例7のように前の依頼行為「所以恳请二位协助（お二人にお願いします）」に添えることもある。

おわりに

本研究は日本語と中国語を対象に、コーパスにおける感謝表現のストラテジーと機能を見てきた。まずは「責め」というストラテジー以外、日本語・中国語における感謝ストラテジーの種類が非常に似ていることから、中国人日本語学習者が日本語の感謝表現を習得する困難点は、感謝表現そのものが異なることに起因していないと言えよう。

次に感謝表現の機能に関して、中国語は感謝表現が「依頼」の機能を果たすことがあるが、日本語にはそれはない。これ以外の感謝表現の機能はほぼ共通している。しかし特に日本語の場合、対人関係が感謝表現の使用に大きな影響を与えると考えられる。今回はコーパスの限界もあり、考察しなかったため、今後の課題としたい。

注

- 1) 筆者訳

- 2) 日本語の例がコーパスに見られなかつたので、赤堀（1995）の先行研究の例を借用する。
- 3) 例4の出典は李（2008）。

参考文献

- 赤堀由紀子（1995）、「日本語母語話者の感謝表現—ストラテジーの種類とその使い分けを中心に」『待兼山論叢』29、49–63頁。
- 内田恵（2002）、「発話行為理論の考え方について」『静岡大学教育学部研究報告』34, 255–264頁。
- 孫守峰（2007）、「感謝場面に使用される詫び表現の習得—在中と在日中国人学習者の詫び表現の使用率とパターン」『日本語・日本文化研究』17, 165–174頁。
- 谷口龍子（2009）「詫びおよび感謝表現の日中対照分析—談話構造から見た機能とポライトネス」国際基督教大学大学院 博士論文
- 中田智子（1989）、「発話行為としての陳謝と感謝—日英比較」『日本語教育』68, 191–203頁。
- ヘレン・スペンサー＝オーティー（2004）、「異文化理解の語用論—理論と実践」（田中典子他、1952）研究社。
- 山梨正明（1991）、「発話行為」大修館。
- 李丽娜（2004）、「汉语“感谢”言语行为研究」『湖北社会学科』、93–95頁。
- 李占喜（2008）、「中西方表达感谢的跨文化差异的语用分析」『洛阳理工学院学报』23, 20–24頁。
- 钱莹妮（2018）、「汉语致谢探究」『唐山文学』247, 81–82頁。
- 易欣（2014）、「汉语感谢言语行为的研究」『文学语言学研究』34, 33–34頁。

A Comparative Study of Gratitude Expressions between Japanese and Chinese in the Corpus: Focused on Strategies and Functions

ZHANG, Qi

Abstract

There are different and common linguistic acts of gratitude expressions depending on the language and culture. The main purpose of this study is to focus on strategies and functions of gratitude expressions in the corpus. The purpose is to clarify the common points and differences. Furthermore, based on the analysis results, I would like to give suggestions to Japanese language education for native Chinese speakers.

As a result, first of all, besides the “blame” strategy, the types of gratitude strategies in Japanese and Chinese are very similar. It can be said that the learning difficulty is not due to the difference in expression itself. Next, with regard to the function of gratitude expressions, in Chinese, gratitude expressions sometimes serve the function of “request”, but not in Japanese. Other

gratitude expressions have almost the same functions.

Keywords : Japanese, Chinese, gratitude expressions, strategies, functions

コーパスの用例からみる日中同形二字漢語「人気」と“人气”的使用現状

李 雄傑（延辺大学）

要旨

同じ漢字文化圏に属する中国と日本は漢字の使用において相互に影響しあってきたこと也有って、両言語の間には多数の同形語が見られる。異なる言語環境で使用されてきたので、その意味や使用においてお互いにつながりを持っているものの、かなりの異同が見られる。そもそも「人気」という言葉は中国語にその語源があるが、近代日本語において中国語とは異なる意味を持つようになり、現代日本語ではさらにその用例が増えている。その日本語の影響を受け、現代中国語にも同じ意味の用例が多数見られる。本稿ではコーパス用例の分析を通して、日中同形二字漢語「人気」の使用現状を考察し、日中両言語における「人気」の意味と語構成について比較分析を行うことによって、相互影響を考察し、日本語または中国語の基礎教育に資することを目的とする。その結果、意味では類似点と相互影響を確認し、語構成の分析を通して相違点を確認することができた。中国語の現代語では日本語に由来する意味の用例が著しく、日本語と中国語の特定の意味での語構成がマイナスイメージを呈するなどの相違点が見られる。

キーワード： 人気、語構成、使用現状、日中比較

はじめに

中国と日本は千年以上の長きにわたっていろいろな交流が続けられてきた。その一例として中日における漢字の使用を挙げることができる。日中同形二字漢語の使用をめぐって「同形異義語」と「同形類義語」に分けて論じる研究や、日本語に由来する中国語に関する研究などが多数見られる。ところが、その全体を眺めてみた場合、その語源と意味に関する研究が多数を占めているのみでなく、単に意味分類と語源を探る研究を通じた言語変遷の研究に止まっている論文が多い。そこで本論では日中同形二字漢語の相互影響と現代語における使用現状に注目し、中国語を語源としながら日本語では新しい意味が持たされ、中国に逆輸入されて現代中国語で頻繁に使用されている「人気」という二字漢語を例として、コーパスのデータを拠り所に日中両言語での使用状況を比較考察することにする。日本語の「人気」は中国語の“人气”¹⁾に相応し、漢字の書き方に若干差があるものの、

学者によって日中同形語として認められ、同形二字漢語の関連研究で議論されてきている。しかし、その研究は意味分析や相互影響の関連研究がほとんどで、現代語のコーパスを利した研究論文や使用現状に関する研究は少ない。

拙論では、中国語のコーパスは『北京大学中国語言研究中心』の資料を参考し、日本語のコーパスは『少納言』の資料を参考にして、それぞれ 500 の用例を抽出し、その意味と語構成分類を通してその使用現状を分析し、日中両言語の相互影響についても考察を行う。

I. 先行研究

日中における二字漢語に関する研究は数多く、その中には「人気」に関する研究も見られる。李金蓮(2006)は『新潮文庫明治の文豪』『新潮文庫大正の文豪』『新潮文庫の 100 冊』の CD-ROM 版の用例 226 例を収集し、「人気」の読み方とその意味を分析して、「漢語『人気』が日本語の言語システムの要素として、本システムの中で他の要素と融合し、相互制約しながら、その意味と使用において変化が起り、言葉は変化していくもので、新しい意味の生成と古い意味の消滅は当然のことであり、言葉の意味事項の使用頻度も変化しつつある。²⁾」と述べた。楊金萍(2001)は語彙史の面で分析し、「人気」は中国語の“人气”を語源とし、日本では鎌倉時期ごろに語構成と品詞で変化が起って、中国語とは異なる意味で使われるようになり、現代中国語での“人气”は日本語の「世間の評判・受け。世間に受け入れられる程度。」の意味を受け入れて生じた新しい言葉であると主張した。方璐(2011)では『人民日報』での“人气”的使用状況を分析し、中国語の“人气”的意味分類を行って、「世間一般の人々に好まれ、もてはやされること。」の意味で使われる中国語の“人气”と日本語の「人気」の組み合わせを“人气+…”と“…+人气”に分類して述べた。³⁾

「人気」に関する先行研究は、語彙史とコーパスデータの分析に基づく日中比較研究が見られるものの、現代日本語で作られた「世間一般の人々に好まれ、もてはやされること。」の意味に焦点が当てられている。本論では意味全般と語構成に注目して、現代語での日中における「人気」の使用状況を分析する。

II. 日中両言語における「人気」の意味

1. 日本語「人気」の意味

日本語の「人気」は漢語として「ひとけ」、「ひとげ」、「じんき」、「にんき」という四つの読み仮名を持つ。現代日本語では「ひとげ」という読み仮名はなくなり、『大辞林』(1988)では以下のように解釈している。

ひとけ【人気】①人のいる様子。人のけはい。ひとつけ。「一のない夜道」②人間らしいこと。→ひとげなし

じんき【人気】①世上の気受け。にんき。「当時の一に向くものはできねえ／社会百面相

魯庵」②その地方一帯の人々の気風。「一のよい土地」③人の気配。「見物衆も群集したる当座にて、一・人音などのみにて／拾玉得花」

にんき【人気】①世間の評判・受け。世間に受け入れられる程度。「一のある選手」「一が上がる」「一が出る」②人間の生氣。また、人々の気配。じんき。「冬は一を以て風を防ぎ／浮・風流曲三味線」③その地方の気風。じんき。「態々一も知らない東京まで稼ぎに行かなくっても／緑蓑談南翠」

『広辞苑』(2008)の解釈も参考したところ、現代日本語では「ひとけ」「じんき」も使用されているが、「にんき」の使用頻度が高いと思われ、日本語のコーパス用例の「人気」の意味は「①世間の評判・受け。世間に受け入れられる程度。にんき。②人のいる様子。人の気配。ひとけ。じんき。③その他」に分けられることが分かった。

2. 中国語“人気”的意味

中国語の“人気”は古代から使われ、現代ではその意味が広まり、日本語の意味も受け入れて幅広く使用されている。『汉语大词典』(2012)ではその意味を下記のように解釈している。

- ①人的意气、气质、感情等。(訳：人の気風、気質、感情等。)⁴⁾
- ②人体的气味或人的气息。(訳：人の匂い或は人の気配。)
- ③人的心情或情绪。(訳：人の心或は気持ち。)

①の意味の例文として、「且德厚信矼，未达人氣，名闻不争，未达人心。(《庄子》)」という『莊子』の文を引用している。中国では古くから“人気”という語を使っていたことが分かる。

中国語の“人気”は『人民日报』で1994年に初めて「世間一般の人々に好まれ、もてはやされること。」と言う意味で使用され、2000年以降に幅広く使われるようになり、日本の『朝日新聞』では同じ意味の言葉が1945年に使用された。⁵⁾

『现代汉语词典(第6版)』(2012)の意味解釈も参考にし、中国語コーパス用例の“人気”的意味は「①話題の人物や商品が世間に受け入れられる程度。②人々が持っている自信。(相場や株等の市場用語) ③人の気配。大勢の人が集まって形成された雰囲気。④人の気持ち、意志、品格等の精神状態や道徳観念。」に分けられることが分かった。

3. 意味比較

日本語の「人気」は読み仮名の相違によって意味が異なり、中国語の“人気”は読み方は一つなのに日本語より意味は多岐にわたる。日本語の「世間の評判・受け。世間に受け

入れられる程度。にんき。」の意味は中国語の「話題の人物や商品が世間に受け入れられる程度。」の意味と一致し、日本語の「人のいる様子。人の気配。ひとけ。じんき。」と中国語の「人の気配。大勢の人が集まって形成された雰囲気。」という意味も似ている。それに對して、現代で新しく使われるようになった中国語の「人々が持っている自信。（相場や株等の市場用語）」の意味は日本語には見られないし、中国語の「人の気持ち、意志、品格等の精神状態や道徳観念。」という意味も日本語には見つからない。

III. コーパス用例の意味分類

日本語の「人気」のコーパス用例 500 例を集め、意味によって分類し、結果をまとめたのが表 1 である。

表 1 日本語の「人気」のコーパス用例の意味分類

意味	用例数	割合
①世間の評判・受け。世間に受け入れられる程度。にんき。	470	94%
②人のいる様子。人の気配。ひとけ。じんき。	11	2. 2%
③その他。	9	1. 8%

表 1 から分かるように①の意味で使用された用例が最も多い。中には「1 番人気」、「人気薄馬」、「4 人気 14 着」のような競馬関連語もあったが、意味としては①と同じであると理解し①に分類した。②の意味で使用された語は 3% 未満で非常に少ない。③は「商人気質」のような「人気」という言葉で使用されていない用例であることを考えると、現代日本語の「人気」は①の意味で頻繁に使われていることが分かる。

中国の“人气”的用例 500 例を、意味によって分類し、結果をまとめたのが表 2 である。

表 2 中国語の“人气”的用例の意味分類

意味	用例数	割合
①話題の人物や商品が世間に受け入れられる程度。	171	34. 2%
②人々が持っている自信。（相場や株等の市場用語）	146	29. 2%
③人の気配。大勢の人が集まって形成された雰囲気。	152	30. 4%
④人の気持ち、意志、品格等の精神状態や道徳観念。	31	6. 2%

表 2 から分かるように、中国語の“人气”も①の用例が最も多い。中国語の①は日本語の①と同じ意味で、日本語から逆輸入して中国語で新しい意味として使用される語であるが、使用頻度が高いことが分かる。②の意味も株や相場で使用されるようになった新しい

意味で、その用例も30%近くと相当な数である。③と④が中国語の“人气”の固有の意味に理解されるが、二種の用例を合わせて40%未満である。中国語固有の意味で使われる用例は新しい意味の用例より割合が少なく、中国語の“人气”も使用状況が変化していることが分かる。

日本語の「①世間の評判・受け。世間に受け入れられる程度。にんき。」の意味の用例が94%と大部分を占めているのに比べて、中国語の同じ意味での「①話題の人物や商品が世間に受け入れられる程度。」は35%未満と日本語よりは遥かに少ない。中国語では固有の意味での「③人の気配。大勢の人が集まって形成された雰囲気。」と「④人の気持ち、意志、品格等の精神状態や道徳観念。」の用例は40%未満と半分もならないことから、中国語の“人气”は現代の新しい意味で頻繁に使われる事が分かり、中国語では③の意味の用例が30%以上であるのに対して、日本語では同じ意味の②の用例が2.2%と非常に少ない。中国語の“人气”を語源とする日本語の「人気」は固有の意味よりは現代の新しい意味での用例が多数を占め、中国語では日本語に由来する意味の用例が相当見られるが日本語のほどではない。中国語の②は日本語に由来しない新しい意味での用例で、①の用例よりは少ないが相当の比例を占めている。

IV. コーパス用例で分類した語構成

日本語の「人気」と中国語の“人气”は名詞として使われ、他の語との組み合わせは制限を受ける。日本語と中国語での語構成は意味別にそれぞれの特徴を呈していた。

先ず、日本語で「②人のいる様子。人の気配。ひつけ。じんき。」という意味で使われる場合、「人気のない」「人気のたえた」と「すごい人気」という構成の用例しかなく、マイナスのイメージを与える用例がほとんどである。「①世間の評判・受け。世間に受け入れられる程度。にんき。」という意味の用例では多様な構成が現れる。

表3 日本語の「人気」の語構成

分類	用例
「人気の+名詞」	フロマージュ、ブルー、ゼミ、デーツスポット、スポット、ケーキ、ブランド物、アーティスト、ソース、メニュー、コンビ、ダンサー、クルージング、ローライダー、バロメーター、メニュー、チワワ、キャラクター、スタイル、おかげ、こと、場所、深夜バス、鉄道、雑誌、指針、お菓子、お店、映画、色つき、すそ野、ヨン様、秘密、宿、絵柄、企業、もと
「人気が+動詞／形容詞」	ある、ない、高い、集まる、つく、出る、広がる、急増する、定着する、集中する、落ちる、衰える
三字（漢語）	大人気、人気者、人気店、人気男、人気作、人気曲、人気街、人気運、人気性、人気度、人気順、人気種、人気面、人気賞、超人気、不人気

四字（漢語）	人気劇画、人気番組、人気作品、人気商品、人気横綱、人気女優、人気芸人、人気選手、人気力士、人気講師、人気舞台、人気演目、人気雑誌、人気料理、人気投票、人気絶頂、人気傾向、人気低迷、人気上昇、人気集中
「人気+外来語」	人気ランキング、人気ブランド、人気モデル、人気サイド、人気メニューベスト、人気ランキング、人気アトラクション、人気ロックバンド、人気アーバンディフェンス、人気タレント、人気デザイナー、人気ルアー、人気ビーチ、人気キャラ、人気キャスター、人気メーカー、人気マンガ、人気ナンバー、人気レスラー、人気フレーバー、人気キャスト、人気アニメ、人気ヒョンジアバレル、人気スター、人気ポイント、人気アトラクション、人気チェーンランキング、人気アングラー、人気アイテム

「人気の十名詞」では後部に外来語も和語も付き、「人気が+動詞／形容詞」の中では「人気がある」が圧倒的に多く、「人気が高い」と「人気がない」がそれに次ぐ。両社は助詞がつく日本語の語構成の特徴であるが、助詞は「の」と「が」に限られることが分かる。助詞のない三字と四字の語構成をまとめると、三字語では「大人気」が最も多く、「人気者」がそれに次ぎ、同じ構成として「超人気、不人気」もあった。四字語の構成では「人気番組、人気商品、人気芸人」のような名詞との結合が多数で、「人気絶頂、人気低迷、人気上昇」等の形容詞や動詞との組み合わせもあった。また、「人気+外来語」の構成が多く、「人気ブランド、人気モデル、人気サイド、人気アイテム」などの職業とネット関連用語との組み合わせが著しかった。外来語との組み合わせや三字語と四字語が多いのが日本語の「人気」の語構成の特徴である。

中国語の“人气”は異なる意味でも同じ語構成を持つ場合が多く、各意味分類で現れる語構成をまとめたのが以下の表4である。

表4 中国語の“人气”的語構成

意味分類	三字語構成	四字語構成（「人気+（形容詞／動詞）」）	四字語構成（「（形容詞／動詞）+人気」）
①話題の人物や商品が世間に受け入れられる程度。	人气旺； 有人气； 无人气； 招人气； 聚人气。	人气旺盛；人气火爆；人气上升； 人气暴涨；人气蹿升；人气激升； 人气急升；人气陡升；人气骤升； 人气陡增；人气不衰；人气重归； 人气消散。	聚集人气；凝聚人气；聚笼人气； 聚拢人气；旺盛人气；需要人气； 提升人气；抬升人气；创造人气； 招揽人气；吸引人气；增加人气。
②人々が持っている自信。	人气足； 人气旺；	人气旺盛；人气鼎沸；人气鼎盛； 人气兴盛；人气回升；人气急升；	集聚人气；逐聚人气；凝聚人气； 聚敛人气；制造人气；调动人气；

(相場や株等の市場用語)	观人气。	人气上升；人气聚集；人气聚散； 人气衰竭；人气下降；人气衰退； 人气涣散；人气清淡；人气四散； 人气溃散；人气低迷；人气退潮。	提升人气；带动人气；降低人气； 鼓舞人气；激发人气；刺激人气； 维持人气；挫伤人气。
③人の気配。大勢の人が集まって形成された雰囲気。	人气足； 人气旺； 有人气； 聚人气。	人气鼎沸；人气聚集；人气积聚； 人气上扬；人气高涨；人气剧增； 人气聚增；人气旺增；人气不足； 人气低落；人气激活。	积聚人气；带来人气；增加人气； 凝聚人气；特拢人气；聚拢人气； 感受人气。
④人の気持ち、意志、品格等の精神状態や道徳観念。	人气好； 人气高； 人气旺； 有人气； 通人气； 高人气。	人气冲天；人气兴旺。	提升人气；需要人气；缺乏人气。

表3から分かるように“人气旺”は全ての意味で共通に使われ、“人气好”と“通人气”的場合は④の意味でしか使われていない。表4の四字語構成では①、③、④ではマイナスイメージの構成が少なく、②の意味でマイナスイメージが半分以上であることが分かる。表5の四字語構成ではマイナスイメージの語が遙かに少ない。また、“人气指数”は①の意味で使用され、“人气指标”は②の意味で使われる等の特徴も呈している。

三字語と四字語のような簡潔な語構成が多く、①の意味でマイナスイメージの構成がすくないのは日中両言語の類似点である。「人気の十名詞」と「人気が+動詞／形容詞」の助詞がつく語構成と「人気+外来語」の語構成は日本語の特徴で、日本語で「②人のいる様子。人の気配。ひとけ。じんき。」の用例がマイナスイメージの構成が多数であるのに対して、中国語では「②人々が持っている自信。（相場や株等の市場用語）」の意味でマイナスイメージの構成が多かった。

おわりに

日本語の「人気」は中国語の“人气”に相応し、漢字の書き方に差があるものの、同形二字漢語として認められ、中国では関連研究も行われていた。「人気」は中国語に由来し、日本語で使用される中で新しい意味が持たされ、その意味が中国に逆輸入されて現代中国語では頻繁に使われている。筆者は現代日本語の「人気」と現代中国語の“人气”がどのように使用されているかに注目し、コーパス資料の用例を分析し、「人気」の意味分類と語構成を通して使用状況を考察した。

日本語の「人気」は「①世間の評判・受け。世間に受け入れられる程度。にんき。」が現

代語で頻繁に登場するのに比べて、他の用例が少ないことが分かった。中国語の“人气”は「①話題の人物や商品が世間に受け入れられる程度。②人々が持っている自信。(相場や株等の市場用語) ③人の気配。大勢の人が集まって形成された雰囲気。④人の気持ち、意志、品格等の精神状態や道徳観念。」に分類して考察した。その結果、現代中国語で③と④の中国語固有の意味で使用される語が半分にもならなく、日本語と同じ意味での①と②の用法が著しいことが分かった。

また、株や相場を表す日本語の「人気」は中国語でも使用されていたものの、日本語の競馬用語としての「人気」は社会体制の相違もあって中国語では用例が見つからなかった。

語構成の分析では、日本語の①の意味の用語も、中国語の①と②の用語も組み合わせの多様性が見られ、意味分類によって構成とイメージが変わることが分かった。日本語で②の「ひとけ」がマイナスイメージの構成が多数であるのに対して、中国語では②の意味でマイナスイメージの構成が多かった。

中日文化交流が深まることによって、言語の交流と相互影響が増えるのは当然のことである。ネットワークと経済の発展に伴って言語の相互影響も加速化する。中国と日本は共に漢字を使用するだけに言語の相互影響は無視できないものだ。今後も日中両言語における同形二字漢語の比較考察を続けていきたい。

注

- 1) 中国語の“人气”は日本語の「人気」と区別して表記した。
- 2) 李金莲 (2006) 「日语中汉字词“人气”的意义和用法考察」『当代语言学 (第8卷)』。
- 3) 方璐 (2011) 「关于中日两国的汉语词汇“人气”的考察——以在中国的使用状况为中心」『日源新词研究』、236-237 頁。
- 4) 訳文は筆者が訳したものである。以下同。
- 5) 方璐 (2011) 「关于中日两国的汉语词汇“人气”的考察——以在中国的使用状况为中心」『日源新词研究』、123 頁。

参考文献

- 松村明 (1988)、『大辞林 (第二版)』三省堂。
- 罗竹风 (2012)、『汉语大词典』汉语大词典出版社。
- 中国社会科学院语言研究所词典编辑室 (2012)、『现代汉语词典 (第6版)』商务印书馆。
- 李金莲 (2006)、「日语中汉字词“人气”的意义和用法考察」『当代语言学 (第8卷)』、213-220 頁。
- 杨金萍 (2001)、「汉日语“人气”的词汇史比较」『浙江外国语学院学报』、12-17 頁。
- 方璐 (2011)、「关于中日两国的汉语词汇“人气”的考察——以在中国的使用状况为中心」『日源新词研究』、118-127 頁。

北京大学中国语言研究中心语料库[CP]

http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus/index.jsp?dir=xiandai (2017年4月1日閲覧)

KOTONOHA 「現代日本語書き言葉均衡コーパス」 少納言[CP]

<http://chunagon.ninjal.ac.jp/> (2017年4月1日閲覧)

Study on the Usage Status of Japanese and Chinese Homographs “*Ninki*” and “*Renqi*” through Corpus Examples

LI, Xiongjie

Abstract

Being in the same cultural circle of Chinese characters, the interaction between Japan and China in using Chinese characters is obvious, and therefore there exist many homographs. Because the language environments are different, in spite of the interactions in regard to the meanings and usage, there are many differences. The etymology of “renqi” is Chinese, but when it is used in modern Japanese, there appear the meanings that are different from those of Chinese, and more and more use cases happen in modern Japanese. At the same time “renqi” in Chinese is inversely influenced by Japanese usages to become more and more popular. This essay makes use of the corpus examples to study the Chinese and Japanese homographs “ninki” and “renqi” to give a thorough comparative analysis of their meanings and word compositions, to probe their interactions, which could make a constructive contribution to the basic education of Japanese and Chinese. Specifically, the similarities and interactions in their meanings are analyzed and their differences in word compositions are elucidated. There are many modern Chinese words that originate from Japanese and the negative senses connoted by the Japanese and Chinese word compositions are different.

Keywords : Popularity, word composition, usage status, comparison between Japanese and Chinese

学会役員

＜顧問＞

山泉進（明治大学名誉教授・学長補佐）
李漢燮（高麗大学・名誉教授）

＜会長・理事＞

安達義弘（日韓言語文化交流センター・副代表）

＜副会長・理事＞

李東哲（新羅大学・教育専担）
権寧俊（新潟県立大学・教授）
崔光准（新羅大学・教授）
海村惟一（福岡国際大学名誉教授）

＜常任理事＞

李東軍（蘇州大学・教授）
金龍哲（神奈川県立保健福祉大学・教授）
岩野卓司（明治大学・教授）
杉村泰（名古屋大学・教授）

＜事務局長・理事＞

安勇花（延辯大学・副教授）

＜一般理事＞

阿莉塔（浙江大学・副教授）
白曉光（西安外国语大学・副教授）
崔肅京（富士大学・教授）
宮脇弘幸（大連外国语大学・客員教授）
金光林（新潟産業大学・教授）
金斑実（商丘師範学院・講師）
李鋼哲（北陸大学・教授）
李光赫（大連理工大学・副教授）
李慶国（追手門学院大学・教授）
名嶋義直（琉球大学・教授）
娜荷芽（内蒙古大学・副教授）
任星（厦门大学・副教授）
施暉（蘇州大学・教授）
矢野謙一（熊本学園大学・教授）
王宗傑（越秀外国语学院・教授）
徐瑛（浙江越秀外国语学院・副教授）
鄭亨奎（日本大学・教授）
植田晃次（大阪大学・准教授）
朴銀姪（魯東大学・教授）

学会動向

◆ 「第二回東アジア日本学研究国際シンポジウム」開催

2019年9月20日（金）～22日（日）、本学会主催の「第二回東アジア日本学国際シンポジウム」が「日中韓における日本語教育の現状と展望」をメインテーマに韓国・釜山にある新羅大学で開催されました。参加者は75名、発表者は基調講演者を含めて65名（複数発表者を含む）でした。基調講演は名古屋大学の杉村泰教授、ソウル女子大学の趙大夏教授、新羅大学の李東哲専担教員がそれぞれ「日本語の文法を見るための二つの指標—許容

度と選択率一」、「韓国における日本語教育の現状と課題」、「改革開放以降の中国高等教育における日本語教育の歩みと問題点」というテーマで基調講演を行いました。また、シンポジウムには2018年度本学会と学術交流協定を締結した韓国日語日文学会の許永恩会長をはじめ、9名が駆けつけてくださいました。なお、新羅大学からは会場の無料提供とともに80万ウォンをシンポジウムの費用として助成していただきました。合わせて感謝の意を表したいと思います。

◆学会誌『東アジア日本語研究』第2号と第3号の発行

本学会の学会誌『東アジア日本学研究』は予定通り、第2号は2019年9月20日付け、第3号は2020年3月20日付けで出版されました。第2号には11篇の論文、第3号には19篇の論文と4篇の研究ノートが掲載されました。杉村泰学会誌編集長をはじめとする編集委員全員と査読者全員に感謝致します。

◆学会第二期会長の選挙と決定

本学会第二期会長は、第一期安達義弘会長の任期満了（2020年3月31日）に伴い、事前に会員全員にメールで会長候補を募りました。その結果安達義弘会長の再任が決まり、2019年9月21日の総会で満場一致で通過しました。第二期の会長任期は2020年4月1日から2022年3月31日です。

◆「韓国日語日文学会2019年冬季学術国際大会」への参加

「韓国日語日文学会」の要請を受け、2019年12月19日ソウルにある韓国サイバー外国语大学で開催された「韓国日語日文学会2019年冬季学術国際大会」に本学会から李東哲副会長をはじめ、9名が参加し、8名が論文を発表しました。2020年12月19日開催予定の「韓国日語日文学会2020年冬季学術国際大会」は、本学会との共催が検討中です。今後、ますますの交流拡大が望ましいと思います。

◆「第三回東アジア日本学研究国際シンポジウム」開催予定

本学会の「第三回東アジア日本学研究国際シンポジウム」は10月25日（日）、日本大学で開催予定となっています。大勢の方々のご参加とご発表を期待します。

東アジア日本学研究学会副会長

李東哲

東アジア日本学研究学会会則

＜名称＞

第1条 本会は、東アジア日本学研究学会(The Society of Japanese Studies in East Asia)と称する。

＜目的＞

第2条 本会は、東アジア地域における日本学の学際的研究をとおして、また、それぞれの研究者が研究成果を発表し交換し合うことをとおして、学問の進歩及び当該地域の平和的発展に寄与することを目的とする。

＜事業＞

第3条 本会は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

1. 東アジア地域における日本学を中心とした学際的研究・調査
2. 学会、研究会、講演会及びシンポジウムの開催
(学会における共通言語は、原則として日本語とする)
3. 機関誌及び図書等の刊行
4. 内外の学術団体、研究者との連絡及び学術上の交流
5. その他本会の目的を達成するために必要と認められる事業

＜会員＞

第4条 本会の会員は、個人会員、賛助会員とする。

1. 個人会員は、東アジア地域の研究に关心を持ち、かつ本会の目的に賛同する個人
2. 賛助会員は、本会の目的に賛同し、本会の事業に協力する法人・団体または個人

第5条 本会には、名誉会員および顧問をおくことができる。名誉会員および顧問は、理事会が推薦し、会員総会の承認を受ける。

＜入会・退会＞

第6条 本会に入会を希望する者は、理事会に申請し、その承認を得るものとする。

ただし、大学院生は、指導教員の推薦を得ることとする。

第7条 本会を退会しようとする者は、退会を事務局に通告すれば退会することができる。

会費を2年間滞納した者は、理事会において承認のうえ、退会とみなす。

＜会費＞

第8条 会員の会費は、次のように定める。

一般会員 5,000 円

学生 3,000 円

賛助会員 50,000（1口） 円

＜役員＞

第9条 本会に次の役員をおく。

1. 会長 1名
2. 副会長 若干名
3. 理事 30名以内（理事のうち若干名を常任理事とする）
4. 事務局長 1名
5. 会計監事 2名
6. その他理事会が必要と認めた役員

第10条 役員の任期は、就任から2年とする。ただし、再任は妨げない。

＜役員の職務＞

第11条 本会の役員の職務は次のとおりとする。

1. 会長は、本会を代表し、会務を統括する。
2. 副会長は、会長を補佐し、会長に不都合が生じた時はこれを代理する。
3. 理事は、理事会を組織し、会務を審議執行する。理事会の議事は、出席者の過半数により決定する。
4. 事務局長は、会長の指示に基づいて、事務を執り行う。
5. 会計監事は、会計を監査する。

＜役員の選出＞

第12条 役員の選出は次のとおりとする。

1. 会長は、会員総会において選出する。
2. 副会長・理事は会長が任命する。
3. 会計監事は、会員総会において選出する。
4. その他の役員は、理事会が委嘱する。

＜学会誌編集委員会＞

第13条 本会は、理事会のもとに学会誌編集委員会をおく。

1. 学会誌編集委員会は、学会誌の出版計画を立案し、これを理事会に提案する。
2. 委員は、個人会員の中から理事会が推薦し、会長が任命する。
3. 委員の任期は、就任から2年とする。ただし、再任は妨げない。

4. 学会誌編集委員会に委員長を置き、委員の中から互選する。
5. 委員長は、学会誌編集委員会の事務を掌理する。

＜会員総会＞

第14条 本会は、毎年1回会員総会を開催する。

第15条 会員総会では、次の事項を審議決定する。

1. 事業報告及び決算
2. 事業計画及び予算
3. 会長及び会計監事の選出
4. 会則の変更
5. その他の必要な事項

第16条 臨時会員総会は、理事会が必要と認めたとき、または会員の2分の1以上の要望があるときに開催する。

第17条 会員総会の議決は、出席会員の過半数をもって決する。

＜会計＞

第18条 本会の運営は、会費及びその他の収入で賄う。

1. 本会の会計年度は、毎年4月1日に始まり、3月31日に終わる。
2. 本会の決算は、会計監事の監査を受けなければならない。

＜雑則＞

第19条 本会の所在地は、帝京大学文学部・安達義弘研究室（〒192-0395 東京都八王子市大塚359）とする。

＜付則＞

1. 本会の設立は、2018年9月1日とする。
2. 本会則は、2018年9月1日から実施する。
3. 本会の運営に必要な事項は理事会が定める。

『東アジア日本学研究』投稿要領

- 1) 『東アジア日本学研究』は、東アジアにおける日本学研究に関する論文・研究ノート・書評などにより構成される。
- 2) 1年に2号（春季号・秋季号）の刊行を原則とする。
 - ・春季号はシンポジウムの論文集とする。毎号シンポジウム終了後3週間以内を目安にその都度締め切りを設ける。
 - ・秋季号はシンポジウムの発表以外の内容も含む学術論文集とする。投稿期間は毎号3月1日から4月1日までとする。

（例：2020年度分の春季号は翌2021年春、秋季号は翌2021年秋に発行予定）
- 3) 『東アジア日本学研究』に投稿できるのは、東アジア日本学研究学会の会員および編集委員会が依頼した者とする。ただし春季号にはシンポジウムで発表した非会員にも投稿資格を認める。
- 4) 投稿者が会員の場合、投稿する当該年度までの会費を投稿前に全て納入しなければならない。
- 5) 投稿者が大学院に在籍中の場合は、指導教員による承諾書（100～300字程度。様式は任意）を提出しなければならない。ただし、編集委員会が投稿を依頼した者については、これを適用しない。
- 6) 投稿原稿は未発表のものでなければならない。投稿者は投稿原稿の不採用が決定される前に当該原稿を他の場所で公刊してはならない。
- 7) 本誌の春季号と秋季号は両方同時に投稿することができる。ただし、両者の内容は異なるものとすること。また、春季号も秋季号も一回の投稿期間に投稿できるのは一篇のみとする。
- 8) 『東アジア日本学研究』に掲載された全ての原稿の著作権は東アジア日本学研究学会に帰属する。
- 9) 原著者が『東アジア日本学研究』に掲載された文章の全部または大部にわたって複製利用しようとする場合には、事前に編集委員長に申請しなければならない。編集委員会は特段の不都合がない限りはこれを受理し、複製利用を許可する。
- 10) 『東アジア日本学研究』に掲載された全ての原稿は、東アジア日本学研究学会のホームページにおいてPDFファイルにて公開する。（学会ホームページの作成は検討中）
- 11) 投稿者は、東アジア日本学研究学会ホームページに掲載の「執筆要領」の内容を踏まえ、これに準拠した完成原稿と論文要旨（300～600字程度）を提出する。論文要旨は、日本文タイトル・英文タイトル・電話番号・メールアドレスとともに、下記の所定の様式で提出すること。
- 12) 完成原稿と論文要旨は、E-mailの添付ファイルとして送付する。ファイル形式は原則

として MS-Word とする。採用が決定された原稿の提出方法は編集委員会から再度通知する。

- 13) 投稿された原稿は、査読者による審査結果をもとに、編集委員会が採否を決定する。
- 14) 採用された場合、投稿者は英文要旨を提出する。英文要旨は、提出前に必ずネイティブ・チェックを受ける。
- 15) 執筆者は、別刷り（抜刷）の作成を依頼することが出来る。これに必要な費用は執筆者の自己負担とする。
- 16) 原稿の投稿先および問い合わせ先は次のとおりとする。

東アジア日本学研究学会事務局 E-mail: eaja2017@163.com

(2019年9月20日改定)

論文要旨		
氏名		
所属・職位		
メールアドレス		
電話番号		
論文タイトル		
英文タイトル		
種類（該当を残す）	春季号 / 秋季号	論文・研究ノート・書評
分野（該当を残す）	1. 語学・言語教育 2. 文学 3. 文化 4. 歴史	
該当番号を記入	5. 哲学・思想 6. 経済 7. 政治 8. その他	
<論文要旨> (300~600字程度)		

『東アジア日本学研究』執筆要領

1) 利用言語

原稿は日本語を使用し、横書きで作成する。

2) 原稿枚数

原稿の枚数は40字×35行を1枚と換算して、春季号論文は5～7枚（注・図表・参考文献を含む）、秋季号論文は10～15枚（注・図表・参考文献を含む）とする。

3) 見出し番号の表記

本文内の各節章の見出しに付ける番号はI、II、III…とし、その下の款項には1.、2.、3.…を用いる。さらにその下の項には(1)、(2)、(3)…を用いる。最初に「はじめに」、最後に「おわりに」を置いててもよい（番号は付けない）。

4) 句読点の表記

句読点は全角の「、」「。」を用いる。

5) 括弧の表記

括弧は原則として全角とする（欧語表記および注記を示す記号に用いる片括弧を除く）。

6) 数字の表記

数字は、熟語など特別な場合を除き半角のアラビア数字を用いる。4桁表記以上となる場合は、コンマ(,)を用いる。また、「兆、億、万」などの漢数字を用いてもよい。

7) 年号の表記

年号は原則として西暦を用いる。必要に応じて、西暦の後に元号などを丸括弧に入れて併用してもよい。

8) 度量衡の単位は、原則として記号（m kgなど）を用いる。

9) 図や表には番号とタイトルを記入する。

10) 注は以下のように該当部分の右肩に入れ、論文末にまとめて並べる。

～と考える¹⁾。

11) 参考文献の表記

本文と注記で用いた全ての文献を「参考文献」として本文の最後に一括して表示する。

参考文献の表記は以下のとおりとする。

（日中韓語の書籍）編著者名（発行年）、『書名—副題』出版社。

（日中韓語の雑誌論文）著者名（発行年）、「論文名—副題」『雑誌名』巻数(号数)、○-○頁。

（日中韓語の書籍中の論文）著者名（発行年）、「論文名—副題」（編著者名『書名—副題』出版社）、○-○頁。

（日中韓訳書）編著者名（発行年）、『書名——副題』（訳者名、原著は○年発行）出版社。

（欧文の書籍）編著者名（発行年）、書名：副題、発行地：出版社。

（欧文の雑誌論文）著者名（発行年）、“論文名：副題,” 雑誌名、巻数(号数), pp. ○-○.

（欧文の書籍中の論文）著者名（発行年）、“論文名：副題,” 編著者名 ed., 書名：副題、発行地：出版社, pp. ○-○.

○-○.

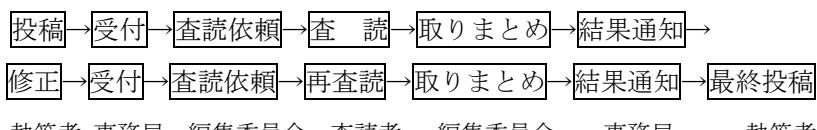
『東アジア日本学研究』査読要領

【査読スケジュール】

- ・投稿締切日
 - (春季号) シンポジウム終了後3週間以内とする。
 - (秋季号) 每号4月1日(北京時間24:00)とする。
- ・投稿先: 東アジア日本学研究学会事務局 E-mail: eaja2017@163.com
- ・査読の流れ

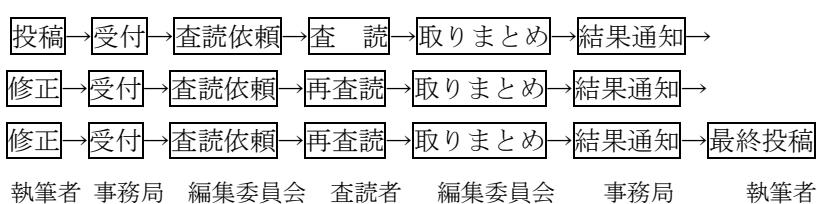
(春季号) 査読は2回までとする。

(2回目の総合評価が「再査読」の場合は結果的に「不採用」となる。)



(秋季号) 査読は3回までとする。

(3回目の総合評価が「再査読」の場合は結果的に「不採用」となる。)



【査読者の構成】

- 1) 論文1編について2名の査読者が査読する。
- 2) 査読者は編集委員会によって原則として会員の中から選任する。会員の中に適任者がいない場合は外部審査員を依頼することができる。審査料は全て無料とする。
- 3) 春季号の場合は、自己の投稿論文でなければ査読可能とする。秋季号の場合は、投稿者は当該号の査読は行わないこととする。

【査読】

- 4) 査読は投稿者・査読者間、査読者間ともに匿名で行うこととする。
- 5) 判定は、「採用」「条件採用」「再投稿」「不採用」の4段階とする。
 - ・「採用」は誤植程度の修正しか必要でない場合とする。
 - ・「条件採用」は査読者から指摘された問題が1週間程度で修正でき、当該号での採用が見込める場合とする。
 - ・「再投稿」は査読者から指摘された問題が1ヶ月で修正でき、当該号での採用が見込める場合とする。

- ・「不採用」は当該号での採用のレベルに達していない場合とする。
- 6) 査読者は所定の「査読票」に査読結果とコメントを記入する。
- 7) 論文の中に投稿者が特定される情報が書かれていることが査読の過程で明らかになった場合でも、原則として査読を継続する。但し、投稿者と査読者が指導教員と指導生の関係、同じ機関に属する等の場合には、査読者の交代を行う。
- 8) 査読にあたり二重投稿等の疑義等が生じた場合、投稿者宛てコメントには記載せず、編集委員会宛てコメントに記載する。

【査読結果のとりまとめ】

- 9) 査読者は「査読票」を編集委員長に送付する。
- 10) 編集委員会では、以下の総合判定ガイドラインに基づいて採否を決める。基本的にこれを順守するが、このガイドラインに従わない方がよいと判断される場合には、編集委員会で審議する。
<総合判定ガイドライン>
(◎採用、○条件採用、△再投稿、×不採用)
採用 : ◎◎ (6点)
条件採用 : ◎○ (5点)、○○、◎△ (4点)
再投稿 : ◎×、○△ (3点)、○×、△△ (2点)、△× (1点)
不採用 : ×× (0点)
- 11) 総合判定の確定後、編集委員長は結果を事務局に送付する。
- 12) 事務局は、総合判定結果と査読者のコメントを投稿者に送付する。

【再投稿・最終投稿】

- 13) 「採用」の場合は、微修正の確認を編集委員会で行う。
- 14) 「条件採用」と「再投稿」の場合は、初回の2名の査読者で再度査読する。
- 15) 春季号の査読は2回まで、秋季号の査読は3回までとし、査読結果に基づいて編集委員会で最終判定を行う。
- 16) 編集委員会は最終判定結果を事務局に送付し、それを事務局から投稿者に送付する。

【その他】

- 17) 「不採用」に関する投稿者からの反論には原則として応じない。
- 18) 校正は字句等の修正のみ認める。問題が生じた場合には編集委員長が確認する。

編集後記

編集委員長 杉村泰（名古屋大学教授）

本号には26本の投稿がありました。各論文とも2名の査読者による審査が行われ、採用23本、辞退3本という結果となりました。また、第二回シンポジウムの基調講演の内容を寄稿論文として掲載しました。今後も皆様のご投稿をお待ちしています。

編集委員 加藤三保子（豊橋技術科学大学教授）

本誌は号を重ねるごとに内容が充実してきたように思います。様々な視点からの日本語・日本語教育・日本文化等の研究、また、他の言語・文化との比較研究等、今回も査読をしながら大いに刺激をもらいました。今後もオリジナリティに富んだ論文の投稿を期待します。

編集委員 吉川佳英子（愛知工業大学教授）

今年も意欲的な論文を読ませていただき、たいへん勉強になりました。今後もより多くの論文が寄せられることを期待しています。多様な分野からのアプローチが印象的な論文集ですが、これが刺激的な「知的交流の場」となることを楽しみにしています。

編集委員 李鋼哲（北陸大学教授）

会員の投稿論文を読みながら、日本とアジアの繋がりの深さを益々感じるようになります。この繋がりをさらに発展していく上で、本学会および学会誌の役割の重要性も増していくものと思われます。皆様の学問レベルをさらに高め、本学会を正真正銘の日本学研究のパイオニアに育てていくことを心より念願します。

学会誌担当副会長 海村惟一（福岡国際大学名誉教授）

『東アジア日本学研究』第三号が遂に世に問うこととなります。これは、偏に会員の皆様のご奮闘と杉村先生を始めとする委員会の皆様のご尽力によるものであり、感に堪えません。会員の皆様の更なる堅実な素晴らしい論考や前人未到の研究成果が生まれるよう心から期待しています。

〔本号の査読者〕（50音順・査読時点）

安達義弘（日韓言語文化交流センター副代表）、海村惟一（福岡国際大学名誉教授）、加藤恵梨（大手前大学講師）、加藤三保子（豊橋技術科学大学教授）、関承（大連外国語大学講師）、施暉（蘇州大学教授）、菅陽子（東北大学講師）、張善実（上海師範大学講師）、陳秀茵（日本経済大学講師）、中川良雄（京都外国語大学教授）、任星（廈門大学副教授）、白曉光（西安外国語大学副教授）、橋本恵子（福岡工業大学短期大学部准教授）、宮崎聖子（福岡女子大学教授）、吉川佳英子（愛知工業大学教授）、李光赫（大連理工大学副教授）、李鋼哲（北陸大学教授）、李成愛（山東科技大学講師）、李東軍（蘇州大学教授）、李東哲（新羅大学教育専担）

後書き

日本でも中国でも韓国においても、新型コロナウィルスの広がりが社会の各分野に深刻な打撃を与えつつあります。このような事態に陥ったとき、私たちは、研究者としてただ傍観することしかできないのでしょうか。研究者として何ができるのか、何をしなければならないのか、そう問うたとき、研究者としてどう応えるべきなのでしょうか。

文系の研究者が、治療の現場で何か役立つことができるとは思えませんが、現在各国・各地で生じたこと、あるいは現場で体験されたことに関して、多様な視点から記録に残すことはできるかもしれません。それは、グローバル化の進展の中で今後も起こる可能性がある社会的混乱を安定化させるための参考になるのではないのでしょうか。

そのような観点にたった学会活動はありえるのか、それは、今後の私の課題としたいと考えているところです。

東アジア日本学研究学会
会長 安達義弘

東アジア日本学研究 第3号 Japanese Studies in East Asia No.3

2020年3月20日発行
東アジア日本学研究学会
The Society of Japanese Studies in East Asia

学会事務局 E-mail: eaja2017@163.com
ホームページ <https://www.east-asia.info/>
ISSN 2434-513X
